魔法少女リリカルなのは 新たなる冥王

屑鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　新たなる冥王

【Ｎコード】
Ｎ９９８８Ｉ

【作者名】
屑鉄

【あらすじ】
親に捨てられても尚、必死に生きる少年、四季　紅牙。そんな彼に訪れたのは…救いの神では無く滅びの存在、冥王であった

どうも、初投稿となります屑鉄です。
今回はなのはＡ's　ｓで書かせていただくことになりました

最初に断らせていただきますが、オリキャラが出てきます。しかも欠点もありますが、（元ネタの都合で）俺ＴＵＥＥＥＥ！！が多々あります。ついでに結構残虐？なシーンも入る予定なんで、苦手な方は引き返してくださるようお願いします

第一章　覚醒、ゼオライマー（前書き）

投稿に何時間かけてんだ…ｏｒｚ

第一章　覚醒、ゼオライマー

その少年の身体は傷だらけだった。

夜逃げした両親により、身寄りの無い少年、四季　斗牙は新聞配達による小銭と、商店街の人達の厚意によって何とか生活していた

しかし、少年が生きる為に貰った物は不定期にやってくる親により理不尽奪われ、さらに殴られ蹴られ傷ついていく

しかし、少年は恨む事すら無く奪い、借金取りから逃げる両親の無事を祈り続ける…

そんな優しく、ある意味で破綻した少年、斗牙に新たな出会いが訪れる…

足が不自由ながらも健気に生きる少女、八神はやてと彼女を守る守護騎士達…

彼女達との出会い、そして魔法との出会いが少年をどう変えるのか…

魔法少女リリカルなのは　冥王覚醒…始まります

第1話　冥王の名　四季紅牙（前書き）

連投します

第1話　冥王の名　　四季紅牙

「…よし、後五軒」

夜明け前の空の下、少年は新聞配達に勤しんでいた

「…もう6月なのに、まだ朝は冷えるな…」

そして少年は薄着で出てきた事を若干後悔しながら、サドルを目一杯まで下げた自転車を漕ぎ始める

この少年、よく見ると顔立ちも幼く普通は新聞配達をするような年齢ではない…が

少年の名は四季　紅牙。今年で9才を迎えるはずなのだが、彼は小学校に通っていない

それどころか彼は日々を生きる為に働いていた

彼の両親の仕事は金貸しで、人柄もお世辞にもいいとは言えなかったその仕事も順調と言えず、に組の金に手を出して夜逃げする事になり、紅牙は捨てられた

「…全部終わりました」

「いつも悪いねー。はいよ、【小遣い】だ」

「…ありがとうございます」

流石に近所の者も不憫に思ったのだが、紅牙は断固として家から動かず、金も受け取らなかった

それで新聞屋が出した妥協案がこれである。仕事の手伝いをする代わりに【小遣い】を渡す…これでようやく少年は納得してくれた

「今日は何作ろうか…」

そして少年は本来、同い年の子供達が目覚める時間に眠りにつく。
ボロボロの布団に潜りこんで…

「…寝過ぎた」

夕刊のシフトは休みだったから目覚ましは用意してなかったのだが、目覚めると日が傾き始めていた

「…買いに、行かないと…」

この家には冷蔵庫は無い。それどころか、テレビもエアコンも無かった。そんなものはとっくに両親が金に換えてしまったので、食材の保存が効かないので買いだめができないのである

「…お腹、減ったなぁ…」

そして紅牙は商店街へと買い物に向かう。そして少年は後の人生を決定づける出会いを迎えることになる

「ちょ…返して！」

「返してほしかったら捕まえて見ろよー！！」

「キャハハハハハ」

商店街の近く、公園にて車イスの少女は三人の少年達から図書館で借りた本を奪われていた

「何でこんなことするんよ…」

「早く来いよ、どっかに捨てちゃうぞー？」

子供は時に残酷である。特に、自分達と違うもの…足の動かない少女、それもかなり可愛らしい顔立ちの女の子は、少年特有の好きな子苛めと相まって少年達にとって格好の遊び道具となっていた

車イスの少女、八神はやても必死に追いかけるが、車イスのハンデと相手が三人である事から絶望的であるが、諦めるわけにはいかない

「おーいノロマー、早く来ないと捨てちゃうぞー！」

「あかん…捨てん、といて…」

鍛えているわけでもないはやてはすぐに息を切らしてしまう。動けなくなっているはやてを尻目に少年達は公園の入口へと向かってしまう

「（あかん…あの子達に追いつかれへん、どうしよ！折角新しく入った本やのに…）」

図書館で新しく入った本を借りることができ、先程まで上機嫌だったはやての気分はどんどん落ち込んでいく

そして、終わりの無い嫌がらせに耐えきれず、はやての目に涙が浮かび始めた時、二人は出会うことになる

第1話　冥王の名　　四季紅牙（後書き）

今回はこの駄文を見ていただき、真にありがとうございます

投稿の仕方も手探りで文章も稚拙ですが、少しずつでも改善できるよう頑張ります

さて、冥王計画ゼオライマーがネタにありますが、出番はもう少し後になります

さっさと冥王を出したいのですが、先になのはキャラに会わせる事にしました。感想いただけると馬鹿が勘違いしてやる気出すかもしれないので、感想をお待ちしておりますｍ（＿＿）ｍ

第2話　夜天の主　八神はやて（前書き）

取り敢えず、デバイス手に入れるまでは一気に書きたい…けど、自分でわかるくらいに駆け足になってしまうｏｒｚ

第2話　夜天の主　八神はやて

はやてを見ながら公園を出ようと走っていた少年は何かにぶつかった

「痛っ！」

「おい、大丈夫か？」

「いってー…おい！誰なんだ…」

少年達は最後まで言葉を言えなかった

「……」

ぶつかった相手…紅牙は自分達と同年代であろう事がわかったが、その姿は頭一つほど大きい。現に走っていた少年が出会い頭にぶつかっても、あちらは少し体勢を崩した程度である。不意打ちで無ければ、まともにぶつかっても全く揺るがない事くらいは少年達にもわかった

だが、それ以上に少年達が不気味に感じたのはその顔立ちである。紅牙には表情が無いのだ。なまじ顔立ちが整っている上に逆光を浴びているだけに、少年達には非常に気味の悪い存在に見えてしまう

対して紅牙は冷静に周囲の状況を把握しようとしていた。すると向こうから息も絶え絶えな車イスの少女がゆっくりとこちらに向かっている
怪訝に思い、目の前にいる尻餅をついた少年を見下ろすとその傍には真新しい本があった

「（…そういう事か）」

紅牙は少年に一歩足を踏み出し手を伸ばす

「…ひっ！」

紅牙に殴られると思った少年は咄嗟に顔を庇い目を閉じるが、一向に衝撃も痛みも来なかった

「…あれ？」

しばらくして目を開けると、目の前には誰もいなくなっていた

はやては呆然としていた。
自分から本を奪った少年がぶつかった大柄な少年は無言のまま本を

拾い、軽くはたいて埃をはらってからこちらに向かって歩いてきた

「何邪魔してんだよ！」

「返しやがれ！」

自分達の事を棚にあげて残った二人の少年が大柄な少年に飛びかかろうとしている

「（…あかん、今から声出しても間に合わへん！！）」

だが大柄な少年は僅かに立ち止まると、背後から飛び掛かってきた少年達が大柄な少年を『すり抜けた』

「…え？」

涙が浮かんでいた目をこすり、もう一度見る。大柄な少年は身体を半身にしている。

実際には半身にして片方をかわし、もう片方を空いていた右手で受け流しただけなのだが、ギリギリでかわすという予想外の反応にバランスを崩した二人の少年はそのまま転んでしまう

その二人を一瞥してから少年は再びはやての方へ向かって来る。その間も少年は全く表情を変えずに歩いてくる為、はやても少し引いてしまう

「…この本、君の？」

優しげな声に驚いて、少年の顔をよく見ると、少年は穏やかな雰囲気をまとっている。単に表情に乏しいだけなのかもしれない…はやてはそう判断した

「うん、うちのや」

「…よかった。本当にこっちの子達のだったら、どうしようかと思ってた」

僅かに少年の表情が緩み、少女、はやてに本を渡す

「ホントに困っててん。ありがとうな」

「…別に、そんなお礼言われるような事をしていない／／／」

笑顔でお礼を言う少女を見て、少年は少し顔を赤くして目線を反らす

「何で邪魔しやがるんだよ！」

空気を読まずにまた文句をつけてくる少年達。確かに気に入らないんだろう。折角の遊び道具を奪われたのに等しいのだから

「…こんな嫌がらせをして何になる。この子が困っている」

再び無表情になった紅牙は近くまで来た少年達を見下ろす。頭一つ分高いので、どうしてもこうなってしまう

「そんな事いいんだよ、お前は…邪魔するなぁ！」

殴りかかってきた少年の拳を今度は左手で受け止める。今度は避けるわけにはいかない、避ければ車イスの少女に当たってしまうからだ

「こいつぅ！」

横からこちらを狙った前蹴りも右手で足を掴む。これも避ければ背後の少女に当たるからだ

「今だっ！」

チャンスと判断した三人目は紅牙の横を抜け、はやてから再び本を奪おうとする

「…！」

咄嗟に本を抱いて庇おうとするが、少年の手のほうが早い。再び本を奪われるかと思った時、少年の身体がガクンと止まり、逆方向へ吹っ飛んだ

「え？」

目の前の少年二人も固まっていた。三人目がはやてを狙った瞬間に彼の目つきが変わり、彼らを離す勢いのまま振り返り三人目の少年のシャツの首根っこを掴み、背後へ力任せに投げたのである。急に変わった対応に少年達が驚いていると

「…俺に来る分には構わない…」

紅牙は一歩踏み出す。それを見て少年も後ずさる

「…だけど、他の子を巻き込むのなら…黙ってやられるわけにはいかない」

「「「ひっ！」」」

紅牙がやる気になったと判断した少年達は一目散に逃げ出す。勝ち目が無いと判断したんだろう

少年達が見えなくなると、紅牙は溜め息と共に呟く

「…よかった」

「え、なんで？」

はやては疑問に思った。確かに彼女はケンカに関してはわからないが、この少年が負ける訳が無い、それくらいはわかった。なのに彼は安堵しているそれを思わず口に出してしまったのだが…

「…だってあの子達を傷つけずにすんだし」

「……」

はやては再び呆然としていた。この大柄の少年は彼らの事も案じていたのである。これには彼女も呆れるしかなかった

「何で、殴りかかられてんで！何でそんな風に考えられるん？」

「…だって、殴られたら痛いよ。自分がされたら嫌な事、人にしたくない」

この少年はお人好し過ぎる。はやては溜め息をつく…そして少年の右手から血が流れているのに気付く

「右手、ケガしてるやん！」

「…あ、ホントだ」

さっき、蹴りを掴んだ時に靴に掠めたからだろうか、右手の手のひらに斜めに切り傷ができていた

「…ほっとけば治るかな…」

この程度の傷、慣れている紅牙は全く動じずに呟くが

「あかん、化膿するかもしれんやんか。早く洗って消毒するで！」

と紅牙を強引に近くの水場に連行し、手を洗わせる

「…じゃあこれで…」

「まだや、消毒してへんやろ」

逃げようとするが、ぴしゃりと一言で封じられる

「家、近いんか？」

「商店街抜けた先のアパート」

「ならうちのが近いか。じゃあ行くで」

と、半ば強引に連れていかれる。逃げようと思えば何時でも逃げられたが…

「……」

はやてが泣きそうになるので諦めた。思えばここで彼らの上下関係は確定したと言っていいだろう

「着いたで！」

そこは紅牙が新聞を配達している家の一つだった。確か名前は…

「そや、自己紹介まだやったな。うちははやて、八神はやてや！」

「…僕は、四季紅牙」

「じゃあこー君で。うちは名前で呼んでな、よろしく、こー君」

「…よろしく、やが「名前で呼んでぇな」…よろしく、はやて」

「よし、じゃあ行こか！」

そして二人は家の中へ入っていく…

これが後に夜天の主となる八神はやてと、冥王となる四季紅牙の出会いであった

第2話　夜天の主　八神はやて（後書き）

取り敢えず、はやてとのエンカウント。時間軸は6月初頭、ヴォルケンリッター遭遇の2、3日前です

本当はもっと穏やかに遭遇させたかったのですが、紅牙の行動範囲が極端に狭いのでこんな形になってしまいました。コイツ、自宅と近所の商店街周辺しか出歩かないし…

商店街はアニメで見た記憶無いんで、オリ設定です。図書館も商店街も駅の近くにあるし、これなら遭遇できるかな?という作者のあがきでもあります

次回でようやく冥王様が出てきます。ちょいとキャラ違いますが、すぐに真っ黒になるのでご安心（?）ください

第3話　冥王　木原マサキ（前書き）

ついに冥王様登場！

第3話　冥王　木原マサキ

「…はやて、か…」

あの後、用事があるからとあれこれと世話を焼こうとするはやてから逃げ出し、商店街に向かい買い物をしたのだが…

「おっ、【こー君】じゃないか。今日は鯵が安いよ！」

「今日はめでたいからリンゴオマケだよ、【こー君】！」

「あんな可愛い子引っ掻けるたぁ、中々やるじゃねぇか【こー君】」

「……／／／」

紅牙は噂というものの恐ろしさを、この日知った

「（…まだ公園での事から一時間くらいしか経ってないはずなのに…）」

行く先々でからかわれ、顔を赤くして逃げ出してしまう。暫くはこのネタで弄られ続けるだろう

そして夕食は鯵を焼いて食べると、さっさと寝る事にする。ボロい

が、炊飯器が残っていた事を和食の度に天と両親に感謝する
そして朝刊の配達に備えて寝る支度をしていた紅牙は、押し入れから妙な光が漏れている見つける

「（…隣の壁に穴でも空いたのか？）」

怪訝に思った紅牙が押し入れの襖を開けると…

そこには淡く輝く、絶大な魔力を放つ拳大の珠があった

『ククク…貴様が新たなる適格者か？』

…今回の依り代はガキか、まぁ仕方ない。今の世で次元世界を巡ってコイツしかいなかった…依り代が現れたのは百年振りだ。逃がすわけにはいかない

「…君は、誰？」

『おっと自己紹介が遅れたな、俺の名はマサキ。かつて冥王と呼ば

れた者だ』

「…僕は、紅牙。四季紅牙」

『紅牙か。お前は我が力を継ぐ者として選ばれた。高栄に思うがいい』

「…選ばれた？」

『ああそうだ。お前にはこれから絶大な力が手に入る。それで望むモノ全てを手に入れるがいいさ』

「…何故？」

若干警戒しているか。確かここは管理外世界…魔法を見たことが無いなら仕方あるまい…

『俺はデバイス…言うなれば魔法使いの杖さ。俺を使いこなせる者を探す、そして使える者に力を与える。それだけの存在だからさ』

無論、代償は貰うがな…

「…何故、僕なの？」

『それは貴様に魔力を扱う資質…リンカーコアと、俺を使いこなす、冥王としての資質の両方があったからさ』

「…それで、僕は何をすればいいの？」

『俺は杖だと言っただろう？使い道は貴様が決めろ…で、どうする？俺と契約するのか？』

まぁ、軽く冗談半分に言ってみた。嫌だと言っても最後には無理矢理にでも寄生はさせて貰うがな…

「…いいよ」

『ほう？悩まずに決めたな。いきなり契約に踏み切った？貴様にはそれだけの理由…望みはあるのか？』

意外だった。警戒心が強いかと思いきや、あっさりとできてしまった。だから聞いてしまった

「…なら僕の望みは、まずその望みを見つける事だから」

『ククク…望みを探す為に俺と契約か。面白い！今までの連中はこの魔力に食い付き、欲望のままに契約していたがお前のようなヤツは初めてだ！！』

実に面白い、このガキ…精々楽しませて貰うとしよう。冥王になるまで…な

『ならこのデバイス…冥王の鎧、ゼオライマーを手に取れ、そして望め、力を…貴様の望む全てを手に入れるだけの力をな！』

「…わかった」

そして言われるがままに紅牙はゼオライマーを手に取ってしまう。
そして、新たなる冥王が生まれる事になる

第3話　冥王　木原マサキ（後書き）

今回はマサキを出しましたが、マサトは出す予定はありません。奴等は登場ですが、管理局やヴォルケンリッターと戦う事になりそうです…でも連中、軒並みＡＡＡはありそうで困るｗ

もうちょい書いたら、紅牙の設定も出したほうがいいのかな？とも思ったり

意見、感想お待ちしております

第４話　冥王再誕（前書き）

これにて用意してた分は終了。さて、もう一回なのはＡ's見る作業に入るか…

第４話　冥王再誕

「……！！」

光る珠…ゼオライマーと言うらしい、そのデバイスに触れると部屋中が閃光に染まる

「（…何が起き）」

刹那

光の珠は紅牙の胸の辺りに半ばめり込んでいた。身体を抉られる痛みを覚悟したが、痛みは一向にやってこない

「…あれ？痛くない」

『当たり前だ、今のは単にデバイスが貴様のリンカーコアと同期しただけだ』

紅牙の内側から声が聞こえるが、紅牙は特に驚かない

「…やっぱり中に入ったんだ」

『あまり驚かないようだな』

「…知らない事過ぎて、かえって驚けない」

『フン、つまらん』

持ち主の身体に寄生するデバイス…管理局の魔導士がいたら目をむいて驚いたであろう光景だが、これが初体験である紅牙には気付くことも無かった

『（本当に痛みを感じていない。つまり…拒否反応が全く無い、だと？…なっ！初期設定段階で次元連結システムがオールグリーン！？コイツは一体…）』

「…どうしたの、マサキ？慌てているみたいだけど…」

『…貴様の非常識な適正値に呆れているだけだ』

「…そう」

『（かつての俺を遥かに上回っている。これなら…ククク、今から楽しみだ）』

紅牙は手足を確認して、呟く

「…どこが変わったの？」

『そうだな、動作確認といこうか…ゼオライマー、起動しろ！！』

マサキの言葉と共に紅牙の身体が光に包まれる。そして光が収まった時、その場には白い甲冑のようなバリアジャケットを装着した紅牙がいた

胸と両手の甲の部分には黄色い宝玉がはめ込まれており、不気味に輝いている。肩や膝や背部にに大きな角のようなパーツもあり、妙に威圧感がある。マサキが説明をしてくれているが、専門用語が多く、半分も理解できなかった。そして彼がこの姿に関して漏らした不満は…

「…ごつくて、動きにくそう」

流石にこれにはマサキも苦笑するしか無く、

『そこは慣れるしかなかろう…さて、まずは試運転に…』

「…あ、もう仕事に行かなきゃ」

マサキの説明を聞いていると、随分時間が経っており、朝刊の配達に行かねばならない時間になっていた

「…マサキ、このままじゃ仕事に行けない」

『…全く、興醒めだ。元の姿をイメージしろ。それでゼオライマーは待機状態になる』

「…ん」

何時もの自分をイメージすると、光とともに甲冑が消えて、元に戻る。すると、右手に小さなキーホルダーがあった

『ゼオライマーが待機状態になったのだ。本体は貴様のリンカーコアと同期したままだが、身体への負担が大きすぎるから貴様の身体に馴染むまでは二つに分断しておく』

『（ついに現れた依り代だ。安全だけは確保しておかねばな）』

「…ん、わかった」

疑う事無く頷き、紅牙は支度を始める

『では俺はしばし眠る。貴様の生がある限り、冥王の力は貴様のものだ。好きに使うがいい…』

それだけ言ってマサキは眠ってしまった

「…あ、早く行かなきゃ…遅刻する…」

そして紅牙は仕事に向かう。この一件により、冥王となった紅牙は闇の書を巡る物語に深く関わっていく事になる…

第４話　冥王再誕（後書き）

これにて第一章、紅牙がゼオライマーを手に入れる所までが終了しました

次の第二章辺りからヴォルケンズは登場予定。管理局組は何時出てこれるのやら…

『全く、駄文を垂れ流す事すらできんのか、このクズが』

…中々酷い事言いますな、冥王様

『リリカルなのはと銘をうっておいて、登場したのははやてのみ。しかも出番も少ないとは…他の作家の迷惑だし、死ぬか？』

死なすな。仕方ないだろ…はやてだってまだ誕生日前なんだからな

「…それと、聞きたい事があるんだけど」

うおっ、いきなり背後に立つなよ！

「…ごめんなさい。質問なんだけど…ゼオライマーってインテリジ

エンスデバイス？」

いや、違う。ＳｔＳでキャロやお嬢が使ってたブースト系とのハイブリッド型

「…チート？」

冥王計画ゼオライマー見たことあるか、スパロボＭＸかＪ辺りやってたらわかりますが、アレを一部にデメリット付けて強化してます

「…それ、どうしようも無くない？僕にもレアスキルあるって聞いたんだけど」

ああ、あるよ。まぁデメリット多いけど、対フェイトやシグナム用にはこれ以上ないってくらいに凶悪だね

『少しは自重したらどうだ？ゴミクズ』

うるせー。なのはキャラに死人出さないように必死なんだよ、こっちはよ

『…フン、まあいい。それに冥王計画をしようにも、俺がこんな事

になっているのはどういう事だ？』

そりゃ追々明らかになるだろ。ついでに貴様にも恥ずかしい過去を付けてやるｗ

『いいだろう…塵一つ残さず消ｔ』

申し訳ございませんでした（土下座

「…マサキ、グダグダになってる」

『そうだな。このくだらん茶番もそろそろ終わらせるか』

「（カンペ見ながら）…次回予告。気を失ったはやてを看病するヴォルケンリッター達。そんな彼女達を襲う遠き過去からの刺客。はやてを庇いながら戦い、劣勢になる騎士達の戦いに割って入ったのは…第二章　冥府の王、その名は天。…お楽しみに」

あぁー！予告取られたー！！（フェードアウト

一万ＨＩＴ記念　幕間？（前書き）

一万まで到達しました。恐縮しながらも執筆を頑張ろうと思います

一万ＨＩＴ記念　幕間？

既に一万超え…だと…

『作者…』

わかってる。なのは人気に乗っかってるだけなのもちゃんと理解してるさ

「…ゼオライマーで興味わいた人もいると思うよ。後…」

ん、どうした紅牙

『調子に乗るのもウザいが、自虐も大概にしとけ、と言いたいんじゃないか？』

「（コクコク）」

まだ、ここの機能を使いきれてないからなぁ…ぼちぼちメール投稿とか、読ませてもらってる所のお気に入り登録かも使ってみるかな？

『そういや、感想待っている…とか書いてて貴様、他所に感想書い

たのか？』

書こうとして、自分のボキャブラリーの無さに絶望した！！…まぁ慣れもあるだろうから、試験終われればやってみるかな

『「…はぁ…』」

と、愚痴で終わらす訳にはいかない！一万だし何かやりたいんだが…手持ちにネタが…

「…僕らの紹介、したら？」

おお、そうだねぇ紅牙。ちょいとありきたりだけど、軽く設定の公開でもしてみようか。本編でのネタバレは…出したら不味いのだけ、伏せるか

名前：四季　紅牙

性別：男性

誕生日：１０月１０日

身長：１４２ｃｍ

『おい、かなり身長高く無いか？』

そうだよ？まぁ身長はともかく、そこまでがっしりした体格はしてないよ。まだ子供だし、何より…あの生活環境だしねぇ…

髪：ぼさぼさの真っ黒の髪。後にはやて達によって弄られることに…

瞳の色：黒

「…よかった。厨二要素無くて。髪は後半が少し心配だけど…」

何気に酷いね、紅牙

魔導士系基礎能力

リンカーコア：ＳＳ
魔力資質：Ｓ－
身体能力：Ｂ（Ｓ）
空間把握能力：ＳＳ
状況判断能力：ＡＡ
魔力生成力：ＳＳＳ（暫定）

『身体能力と状況判断能力以外は見事に反則級か』

冥王の適格者ならリンカーコア周りは鬼畜性能だし、魔力生成力に至っては次元連結システムがあるんだぜ？監理局の機械で測れるわけが無いだろう

『当然だな（ちょっと誇らしげ）』

戦闘・魔法特性技能

陸戦技能：ＡＡ（Ｓ＋）
空戦技能：Ａ（Ｓ）
補助技能：Ｄ
戦闘技能：Ａ（Ｓ）
近距離戦闘技能：ＡＡ（Ｓ＋）
中距離戦闘技能：ＳＳ
遠距離戦闘技能：ＳＳＳ（暫定）
単体戦闘技能：Ｓ＋
広域戦闘技能：ＳＳＳ－
総合攻撃技能：ＳＳ＋
総合防御技能：Ｓ－
総合評価：ＳＳ＋

こういう細かい分類って携帯でＷｉｋｉ見ても確認取れなかったので、ミラクルルーカスさんの刹那の項を参考にさせてもらいました。ありがとうございました

後、これは言うなればＡ'ｓシナリオ終盤の能力で、ガンダムの性能を引き出しきれてない序盤のアムロ同様に、数値通りの力は現在は使えません。まともにやりあえば、戦闘経験と相性のの差で能力値の割りに、シグナムでも普通にガチンコで戦えるできるくらいです

『しかし、数値だけ見れば自重の欠片も無い能力値だな』

仕方ないだろ。ゼオライマーの性能に紅牙のレアスキルが重なると、ああなってしまう

「…どんな、能力なの？」

こんな感じ

稀少技能：冥王、聖人

前者はまんまゼオライマーの適格者って稀少技能。後者は、とある魔術の禁書目録の神裂とかアックアが分類されるアレ。ちょいと違うのは、彼にはここぞと言う時の運はあるが、家庭環境等からわかるように普段は散々である。その代わり、素の身体強度が大幅に上

がっている

「…一部についていた括弧は、これのことか」

『しかし、名前までそのままか。どうにかならなかったのか？』

まぁ色々考えて、むしろこれが一番しっくりきたからね

『理由があるならばいいが…それにしても、何故陸戦と空戦が低くて、戦闘技能になると能力値にSが並ぶのだ？』

それはな…ゼオライマーの武装と性能考えてみ？

「…基本的に立ち止まって砲撃。さらに重装甲とバリアに加え、空間移動で敵陣に突撃、そしてど真ん中でメイオウ攻撃。はっきり言って、戦略兵器状態…」

これがゼオライマーの最大の長所であり欠点。単独で監理局の艦隊と張り合えそうなバ火力な代わりに、あまりに高威力、高範囲過ぎて運用に困る。聖人も余りに身体能力が上がり過ぎて、最終的には身体が耐えきれなくなる

『後は俺やゼオライマーだが…』

いや、そろそろ長くなってきたから今回はここまで！

『何？貴様、次をやる機会があると思っているのか？』

…それは…がんばっ！！（脱兎

『ククク…この冥王から逃げられると思っているのか？ゼオライマー、狩りの時間だ！』（転移

「…もう終わるのに…作者に踊らされちゃって、マサキ、可哀想。では皆さん、また会いましょう」

第二章　冥府の王、その名は天（前書き）

相変わらず短いです。今回は特に…ｏｒｚ

第二章　冥府の王、その名は天

海鳴市郊外のとある港にて

「この反応は、まさか……【天】だと！？」

一人の魔導士は驚愕するが、すぐに浮かべ

「だが反応は短時間か…ならば、まだ本格的に目覚めていないのか？」

その答えに行き着き、さらに笑みを深める

「ならば他の八卦を呼ぶまでもないこの…耐爬と！」

男の身体が光に包まれ、背中に一対の翼のついた全身鎧のような姿になる

「【風】のランスターが、【天】のゼオライマーと…あの冥王マサキを討ち滅ぼしてみせよう！！」

その男、耐爬を中心に竜巻が発生し、コンテナや漁船が巻き上げられていく

竜巻は一分も経たずに消えてしまうが、周囲には瓦礫しか残らない

そして、その惨劇を引き起こした姿も無くなっていた…

「港で竜巻発生かー、そんなんあったんか…でも怪我人もおらんかったのは良かったなぁ」

ニュースを見終わったはやてはテレビを切って、時計を見た

午前9時

「明日、誕生日か…」

また、一人ぼっちの誕生日か…と少し寂しい気持ちになる。そして一人の少年の姿が頭をよぎる

「今日、会えたら誘ってみようかな…でもあつかましい、って思われたらどないしよ…でも、あの子なら…」

暫く悩んでいたが、すぐに限界が訪れる

「あーっ！！もうええ、ダメ元でいったろうやんか！」

半ば自棄になりながらも、図書館に行く用意をする

「（あの子も学校行ってるんやろうし…放課後の時間に商店街の近くで待ってみようかな）」

そしてはやては時間を珍しく、時間を潰す為に図書館に向かう

八神はやて…闇の書との出会いまで、後１５時間

第二章　冥府の王、その名は天（後書き）

どうも、今回は短すぎて泣けてきます。でも、ここで切るしか無かったんだ…次のとくっつけてもいい様な気もしたけど、既に後の祭りという

今回、某執務官志望のツンデレ娘と同じ名のキャラが出てきましたが、奴は冥王計画ゼオライマーに出てくる敵、八卦衆の一員です。

八卦衆をそのままに、マサキみたいに既存キャラに憑依させようかと思いましたが、ＳｔＳ原作ルートがフルボッコになりかねないので、一旦保留にしました。だって例が

【風】ティーダ・ランスター
【火】アリサ・バニングス【水】月村すずか
【月】ゼストの旦那
【地】ルーの母親（名前度忘れしたｏｒｚ）
【山】クイント・ナカジマ
【雷】プレシア・テスタロッサ

この面子が酷い死に方します。助けるにしても、アリサとすずかコンビが限界。心も身体もズタズタにされてから惨殺される…念のため、Ｒ１５にしてるからやってもいいけど、仮にＳｔＳまで続けたらスカリエッティ以上にラスボスになりかねないという（【月】と【地】は依り代の残骸から人造魔導士として再生って形にすればいいし）…

アリサ、すずかコンビを助ける前提ならやってもそこまでシナリオ歪まないし、ＳｔＳの事件を８年前から闇の書と同じ時系列に弄ればそう歪まない。

一応、憑依ネタはまだ使えないことも無いので、超修羅場フラグを立ててみたい方の為にアンケートをしてみます。ただでさえ好き嫌い別れるのに、見てくれてる方の意向に沿わないルート行っても仕方ないし

取り敢えず１２／２１の２４時までで、通常ルートかＳｔＳラスボスルートで募集してみます。ご意見、お待ちしております

第2話　エンカウント（紅牙側から見た場合（前書き）

今回は何時もより少し長めに…どっちに分岐しても大丈夫なギリギリまで書いてみました

では、どうぞ！

第2話　エンカウント（紅牙側から見た場合

午後3時

「うん、ぼちぼち学校も終わるはずや」

はやては読みかけの本をしまい、何冊か本を借りて図書館を出た。
それから一直線に公園に辿り着く

「…まだ早かったみたいやけど入れ違いよりは、マシかな？」

暫くすると、小学生達の姿が見えてくる。流石に本を読むわけにはいかず、小学生の姿を見る

「（そういや、こー君の制服姿…楽しみやなぁ。あんまり似合わないかもしれんけど…）」

紅牙が白い制服に身を包んでいる姿を想像する

「（…以外と似合うかも…でも、やっぱりこー君には…）」

はやては色々妄想しながら時を過ごす…が

「うがー、遅いわぁー！！」

既に二時間近くの時が過ぎていた

午後４時

「…よっ、と」

紅牙は自転車を停めて夕刊を入れる。ちなみにこの家…八神家が最後である

「…今日は、留守みたい」

『ほう、何故わかる？』

「…何ていうか…気配？そういうのが、無い」

紅牙は淡々と語る

『全く…お前は色々規格外だな』

僅かな間であるが、紅牙には驚かされてばかりである

「…はやてと話せるかもって思ったのに…残念」

呟きながら紅牙は仕事に戻る

そして、帰宅してから夕食の買い出しに向かう途中にて

「うがー、遅いわぁー!!」

キレた狸に襲われた

「…何で怒ってるの?」

「何でででもや!」

「…理不尽」

『（やめておけ。今のコイツには何を言っても無駄だ…）』

「…むう」

怒り狂うはやてを抑えるのに時間が無情にも過ぎていく

「ふう、久々に怒鳴ったらすっきりしたわー。」

「……」

色々言いたいことがあったが、嫌な予感がしたので黙る事にした。
懸命な判断である

『（本能的な部分に優れているのか？スペックが良いのは構わないのだが…読めぬ…）』

「…はやて、何か用があったんじゃないの？」

「え？…何でわかったん？」

「…だって、待ってたんでしょ？」

「あ、そうか。ならわかるわな。なら話は早いわ！」

と言うが、何故かはやては口ごもってしまう

「えと…あの…明日、うちに遊びに来んか？…」

はやて本人にも聞き取るのが困難な程で、すぐに言い直そうとしたが

「…明日は、１日休みだからいいよ。…何時行けばいい？」

「明日うちに…って、聞こえたんか！今のが！？」

「…うん、人より耳が良いんだ。後は唇の動きでわからない？」

「（耳がええとか、そんなレベルか？何か反則な気がする…）」

「…どうかした？」

「なんでもない。…それやったら、昼過ぎに来てくれへんか？…後、門限は何時？」

子供ならではの質問をするが、紅牙は返答に少し困る

「（…明後日は夕刊だけだから、問題無いか）」

そして、そのまま返答する

「…明後日の昼まで何も無いから、別に時間は気にしなくてもいい」

「そっか。なら泊まるか？」

「…家族の人、困らない？確かに余り家にいないようだけど…」

「うちは一人で暮らしてるから問題ナシや！」

敢えて元気良く言う。紅牙に気を遣わせまいとする気遣いだが

「…そうか、なら僕と一緒だね」

少年は僅かに笑みを浮かべる。哀しい笑みを

「（…っ！アカン、話変えな！）…よし、じゃあこー君！明日は楽しむでぇ！！」

「…うん、わかったよ。はやて」

「よし…こー君、今空いてる？」

「…今から、買い物行く所だった」

「じゃあうちで晩飯食うで、一緒に買い物や！！」

そして二人で買い物へと向かう

余談であるが

「おうおう、今日は一緒に買い物か。どれだけ進展したんだい？」

「コラッ、茶化すんじゃないよ！…まぁ【こー君】も男の子だったんだねぇ」

「こんな可愛い子連れて…幸せ者～」

「お嬢ちゃん、この子はいい男になるからキープするならしっかり掴んでおくんだよ！」

「「……／／／」」

二人して茶化されまくり、商店街を出るまで顔が赤いままであったとさ

午後7時

「…美味しい」

「そうか、良かったわー。多目に作ったからじゃんじゃん食べてなー」

紅牙ははやての料理に軽いカルチャーショックを受けたが、すぐに意識を取り戻すと凄まじいまでの速度で食べ始めた

そして30分後

「…ふう」

「……んなアホな…」

はやてが作りすぎた夕食は全て紅牙の胃袋に収まってしまった

「（大人四人分近く作ってもうたから、どないしよ…って思ってたら全部食うとか…男の子はやっぱ違うなぁー）」

「（…はやてが作ってくれたのに…残すの勿体ない）」

『（それで限界突破直前まで食ったのか…呆れて言葉も無い）』

三者三様の考えを浮かべながら食後の時間をまったりと過ごす。そして、紅牙はカレンダーに目が入る

「…ん？明日の日付にチェックがついてる」

「あ、あかん見ちゃ…」

「…誕生日」

「……ぁぅ」

それを見て紅牙は全てに合点がいった

「…誕生日、誰もいなかったら寂しいよね」

「…うん」

何故かはやては正直に答えてしまう。やはり寂しかったのかもしれない

「こー君は、経験あるの？」

「…去年の誕生日の日に、僕は捨てられたから」

「……っ！」

はやては絶句する

「…仕事が上手くいかなかったみたいで、僕は何時もと同じく散々殴られた。それから荷物とお金をもって、家を出ていった…それか…」

「もうええ…もうええから…」

はやてはソファーに座る紅牙に抱きつく。そしてそのまま声をあげて泣き出してしまう。紅牙はそれを見て、少しだけ…優しげな笑みを浮かべてはやての頭を撫でる

「…はやては、優しいね」

「…違うっ、こー君が辛くても泣けへんから…」

「…それは…」

…泣きわめいたら、五月蝿い、とさらに殴られ、蹴られるから…

流石にそれは言葉にできなかった。これ以上、はやての泣き顔を見たくなかった。だから紅牙はこう言った

「…ありがとう、はやて」

30分後

「ごめんな。見苦しいとこ見せてしもうたわ」

「…気にしないで、むしろお礼を言いたいくらいだから」

暫くして、本日は帰宅する事になった。理由は簡単、照れくさいのもあるが、着替えが無いのである

「…また明日、来るから」

「……うん！また明日やで、寝坊はあかんからなぁー！！」

「…善処、する」

こうして紅牙は家に帰っていった…そしてその途中にて

『紅牙、あの家に魔力反応…それも中々強いのがあったぞ』

「…え？」

慌てて来た道を戻ろうとする紅牙を牽制する

『安心しろ。あの念入りな結界といい、奴等とは違うようだし直接あの女に害を与える様なモノでは無い』

「…なら、明日はやての家に行った時に調べるか…眠い…」

明日、はやて宅にて探し物が決定する。そして

「（はやては何が欲しいんだろう？）」

そして夜は更けて行く…

「こー君、あんな辛い思いしてたんやな…それやのに、無神経なこ
としてもーた」

はやては自分の行動を酷く後悔した。だが…

「でも、来るってこー君は言ってくれた。やから…」

ならば、はやてにできる事は最早一つ

「絶対にこー君にも楽しんでもらう…まだ、こー君の笑った顔見て
へんし」

彼は表情に乏しいせいか笑う時も、僅かに微笑むだけ。だからこそ、
彼には笑って欲しい

「明日は絶対にこー君を笑わしたるで、覚悟しときや！！」

そして、はやては布団に潜り込みながら、眠りにつく。明日に希望
と目標を抱きながら…

八神はやて、闇の書を目覚めさせるまで、後一時間

第2話　エンカウント（紅牙側から見た場合（後書き）

取り敢えずヴォルケンリッターが出てくる直前まで書きました。さて、今回ははやての扱いです

ぶっちゃけ、どっちのルートでも重要キャラになります。紅牙にとっての初めての友達ですし、その分シナリオに絡みます

後、原作と違い紅牙と二人で誕生日を迎えることができ、少し救いがあります。その為、明日に備えて寝てしまいました。おかげでヴォルケンズは次話で涙目な事になりますw

取り敢えず、前回のアンケートは現在はラスボスルート2です。そんなに悪役になるコイツ等が見たいのか、アンタ達は！状態ですwまぁ確かにそれも楽しみなんですが…

２４時まで受け付けておりますので、ラスボスルート固定にトドメを刺したい方も、いやここは綺麗に行こうじゃないか、と言う方も遠慮無く投下してください。作者が泣いて喜びます

なんで試験中って執筆はかどるんだろうね…（遠い目

第3話　雲の騎士達と現れた【風】（前書き）

ラスボスルートが確定しました。さて、どうやって殺すか…

第3話　雲の騎士達と現れた【風】

「ここは…」

『ようやく意識を取り戻したか、契約者よ』

青年は月明かりの下で目を覚ました。何故か自分は立っており、ビルの屋上から大地を見下ろしている

「私は…っ！！」

慌てて自分の身体を見下ろす

中肉中背の身体、触り慣れた髪と顔の感触…

そして屋上の扉のガラスに反射して見える自分の顔を見て確信する

私は、ティーダ・ランスターであると

「私は…任務の途中で…」

そう、死んだはずなのだ。自分の力を証明する間も無く…

『貴公の無念、この胸に響いた。だから死なせるには惜しいと思ったのだ』

再び内側から響くように声が聞こえる

『そう言えば名乗ってなかったな、失礼した。我が名は耐爬、遠き昔の戦士だ』

「私の名はティーダだ。で、貴方はどこから話しているんだ?」

声はしても姿は無い。さらにこれは念話よりも肉声に近い…しかも、身体の内側からくる感じだ。どこかおかしい

『…ふむ、ティーダ殿。貴公が自身に起こった事を覚えているか?』

「ああ、あれは致命傷だった。だからおかしいと思っている」

自身の身体には…今は濃紺のスーツでほとんどわからないが、身体を動かしてみてわかったが、傷は支障が無いレベルにまで回復している

「あり得ない…」

『それを可能にするのが、我ら八卦衆と…八卦のデバイスだ』

「八卦？」

知らない言葉に困惑するが…

『今、八卦のデバイスが体内にあることで貴方は生かされている。そして私と繋がっている…それが全てですな』

「つまり、私に何かを要求するわけか…しかし、私には力も無ければ金も…、…っ！！」

ティーダに残された唯一の宝、それに行き当たり戦慄するが

『何を言うか、確かに貴公は私のデバイスに適性はあったが…私は貴公の妹君への【愛】に応えたのだ。それ以上に理由は無い！』

「…愛？」

『うむ、いかにも！！』

どうやら大真面目らしい

『まぁ、代価代わりに仕事を一つこなしてくれれば、これから貴公に与える力と共に自由を約束しよう』

そしてやはり代価はあったようだ

「……で、その甦りそうな冥王をブッ倒す為に、お前を含めた八卦衆も目覚めたのか」

中のデバイスとは別にある存在…話によると冥王と戦った戦士である耐爬は、自身が使ったデバイスを俺に使って蘇生させてくれた代わりに、冥王を倒す手伝いをしてくれとの事らしい

「しっかし、俺はただのしがない三流執務官だぞ？そんな俺に冥王と戦うなんてことできるわけが無い」

『いや、あるさ…貴公にはわかるはずだ。貴公の魔力が膨れ上がっているのが』

「そんなわけあるかよ…っ!!これは一体…」

ティーダは信じられなかった。自身に溢れる魔力が

「下手したらＡＡＡランクに届きそうな魔力だなおい…」

『それでも休眠している。確かに【風】である我がデバイスは、他の八卦に出力こそ劣るが、機動力では八卦最高だ。そんじょそこらの魔導士では逆立ちしても勝てぬよ』

「へぇ…そいつはいい」

これならば、今度こそランスターの弾丸は全てを貫く事を証明できるかもしれない

『では、行こうかティーダよ』

「おう…って言いたいがここは屋上だぞ?飛ぶにしても、デバイスはどこにあるんだよ」

『貴公の体内にあるから、念じるだけでバリアジャケットが現れるはずだ』

「そうか。なら…ってうわっ!!」

ティーダが光に包まるとそこにあったのは白に僅かに赤を用いた翼の生えた全身鎧

『これが我がデバイス…【風】のランスターだ』

「ランスター？…ハハッ俺の名字と同じ名か、こいつはいい」

『フッ、これも縁ということだな』

身体が軽い。本当に風になれそうだ

『だが冥王も目覚めたばかりとはいえ、強敵だ。油断するなよ』

「ああっ！」

ティア…暫く帰れないけど、いい子で待っててくれよ…

ティーダは夜の町に飛び立つ

「…で、その冥王はどこにいるんだ？」

『ここは管理外世界だからな。大きな魔力が動けば、そいつはを確認しにいけばいい。ただそれだけだ』

「って管理外世界かよ！！じゃあ慎重に…っていきなりかよ！」

慌ててどこかに身を隠そうとするが、強大な魔力の波動を感知した

『ティーダッ！！』

「わかってるよ、今から行くさ！」

認識阻害の魔法を自身にかけてから、一直線に向かう。途中、音速の壁を突破しかけるが

『周囲の建築物を破壊し、死体の山を作りたいのか？』

と聞かれ、慌てて減速したりもしながら

余談であるが、どこぞの白い悪魔が耐爬に確認されなかったのは、単に耐爬が探索範囲を既に絞り込んでいたのと、高町家周辺と耐爬の位置が紅牙を挟んで対角線上にいた為である

一方、ヴォルケンリッター達は…困惑していた

「「「「……」」」」

闇の書から呼び出されたのは良いのだが…彼女達の主は…

「…ｚｚｚ」

寝ていた。これ以上無いってくらいにぐっすりと

「（おい、寝ちまってるんだがどーするよ？）」

「（仕方あるまい、主はやては休まれておられる。ならば起きるまで待つしかなかろう）」

「（でも、こんな小さな子が主で、しかも私達を寝ながら召喚するなんて…将来が楽しみですね）」

「（まぁ、色々な意味で例外なのは確かだがな）」

仕方ないので念話をしているが、主が熟睡している以上、待つしか無いのも事実である。ヴィータ辺りは既に一度癇癪を起こして、は

やてを起こそうとしたが

「ｚｚｚ♪」

よほど夢見がいいのか、蕩けるような寝顔を浮かべる彼女を見てしまい、起こすに起こせなくなり今に至る

しかし、その平穏の時間もすぐに破られることになる

「「「「……っ！！」」」」

隠そうともしない強大な魔力、それが一直線に、凄まじい速度で迫ってくる

「…っ、何や！凄い胸騒ぎが…あれ？」

それに反応したのかはやてが目を覚ます。すると見知らぬ四人が立っていた

「え？え？」

「主はやて、説明は後でさせていただきます…シャマル！」

「わかったわ、クラールヴィント！！」

シグナムは近くにあったはやての上着を掴み、はやてをいわゆるお姫様抱っこする。それに併せてシャマルの魔法陣が展開される

そして部屋が光に包まれると、そこには誰もいなくなっていた

「転移？しまった、逃げられたか…」

『なら残留した魔力から転移先を探すだけだ。行こうではないか、ティーダよ！』

「ああ、わかったよ。耐爬」

「ふーん。つまり、みんなはうちを守る騎士としてこの本から呼ばれたんか」

海鳴市の外れにある自然公園。そのベンチに腰かけながらはやてはシグナム達…ヴォルケンリッターの話を聞いていた

「驚かれないんですか？私達は管理外世界ではあり得ない存在なのに…」

「あるもんはあるんやし、こんな可愛らしいんやったら別に構わへんやん」

ヴィータを抱き締めながらはやては笑う。当のヴィータは困惑していて硬直している。しかし、表情だけ見ると満更でも無いように思える

「理解力のある主で幸運だ…」

その後もシグナム達は説明をするが、蒐集に関してははやての意思で拒否されてしまった

「何でだよ、闇の書を完成させたらはやての足だって…」

「ヴィータ、うちはよそ様にご迷惑をかけてまで、身体の自由は欲しく無いんよ…でも気にしてくれてありがとうな。」

「私は、別に…／／／」

ヴィータは顔を真っ赤にして俯いている

「わかりました、では我々は主はやてに仕え、お守りいたします。しかし、蒐集に関しては一切行わない。この剣にかけて、誓いましょう」

そしてシグナムが、他のヴォルケンリッター達もはやてにを誓う。
闇の書の最後の主になる、八神はやてに

「…っ！…魔力？はやての家の方角だ…」

闇の書の起動に反応したのは耐爬だけでは無かった

『これは…何らかのロストロギアか？あの小娘の家なのは確かだな』

「…なら急がないと。ゼオライマー…」

『まぁ待て』

支度をして、ゼオライマーを呼ぼうとした紅牙をマサキは制止する

『今、耐爬…【風】もあちらに向かったようだ。迂濶にゼオライマーを使うと向こうに感づかれるぞ?』

マサキの言葉の意味を少し考え、合点がいった

「…なるほど」

【風】がこちらを見つければまず戦いになるとマサキから聞いた
さらにお互いはやての家に向かっている
今のままでは勝つのは厳しい上に、はやてまで巻き込んでしまう。
それはまずい

「…マサキ、耐爬って人は一般人とか気にする人?」

『ヤツは腐っても武人、魔力があろうと、戦えない…障害者の小娘を一方的に殺しはせんさ。…あちらが抵抗すればわからんがな』

はやてなら罵声を浴びせるくらいはやりそうだ。やはり不安になった紅牙は

「…取り敢えず、急ぐか」

ゼオライマーで飛ぶより、下を走ることを選んだ。しかし凄まじい速度である…これなら敵に捕まりにくく、逃げられやすいと考えたのであったが…

「…はやて、無事でいて…」

そして紅牙は夜の町を駆け抜ける

第3話　雲の騎士達と現れた【風】（後書き）

どうも、今回は生け贄1号こと耐爬君とティーダ君の登場です。特にティーダのキャラに困ってたのですが、考えるのに疲れて普通の兄ちゃんにしました

ティアナ相手にだけ普通で、他はアヒャるのもいいかなとか思いましたが、八卦衆って割りと普通な神経の方々なんで、あんまり酷くできない。ティアナ絡みのお話が本気で救いようが無くなりますしｗｗｗ

今回初登場のヴォルケンリッター達にははやての寝顔とご対面していただきました。もうすぐバトルに入りますが…A'sキャラがフルボッコにされます。本編シナリオ中盤までは、はやて以外がマジ不遇に…見せ場は…作ってあげたいけど、スペースがががｒｚ

第４話　八卦の力（前書き）

戦闘描写、短い上に難しい…これは課題ですねぇ（汗

第４話　八卦の力

紅牙は夜の町を駆け抜ける。その速度は人間を超えていた…だが

『（何の強化も無しに、塀や屋根を足場にして駆け抜け、その高さから着地してノータイムで走り出す…貴様本当に人間か？）』

移動中なので念話を使って素朴な疑問をあげてみた

「（……多分）」

『（ふむ…）』

気になったので再度解析をかけると、身体のあちこちで膨大な力が産み出され、身体の力を異常なまでに引き上げている

『（これは…貴様、聖人だったのか）』

「（…聖人？何それ）」

『（簡単に言うなら、物凄い人間に身体の一部が似ているから、普通の人間より遥かに凄まじい力を使える人間の総称だ…貴様のは中でもかなり強力な部類に入るがな）』

「（…ふーん、そうなんだ）」

『（反応が薄いな。これは確かに魔法とは関係が薄いが、強力なレアスキルだぞ？）』

マサキは呆れるが、紅牙の反応は相変わらず薄い

「（…だって生まれつきなのに、今さらって感じだし…それに…、いや、何でもない）」

両親に捨てられたのは、この力も原因の一つだから…

それに、この力をはやての前で使いたくなかった。しかし、今はそんな事言っていられない

「（…はやてに嫌われるのは、辛いな）」

この力を人前で使えば、間違いなく疎まれる。両親の対応を見れば一目瞭然であるが…

「（…でも、はやてだけは守るから。だってはやては…）」

四季紅牙にとっての初めての友達で、初めて守りたいと思った存在なのだから

八神家に到着後、すぐに二階に飛び移るが、部屋はもぬけの殻だった

『転移魔法を使ったようだ。【風】め…ご丁寧に道標まで用意してくれている』

マサキは宿敵であるあの男の顔を思いだし、怒りのこもった声で言葉を続ける

『ここを転移すれば、すぐに連中に追い付ける…が、間違いなく【風】と遭遇するぞ?』

「…構わない。はやてを助けなきゃ」

本気で、あの少女の安全を確保する事しか考えていない。マサキは半ば呆れながら

『ならば跳ぶぞ。意識を集中しろ、紅牙』

「…ん、わかった」

はやての部屋が一瞬光に包まれる。直後、暗闇が訪れる
紅牙の姿はどこにも無かった

一方、はやて達の前には翼の生えた全身鎧のような格好をした男と対峙していた

「（なんやろ？特撮っちゅーよりはロボットみたいな格好やなぁ）」

等と考えていると、あちら側から威圧するような声で

「私は、時空管理局執務官ティーダ・ランスターである。そちらに聞かせてもらいたいことがいくつかある。ただちに武装を解除し、こちらの指示に従ってもらいたい」

殆んど降伏勧告に近いが、はやて達には…

「え？みんな何か悪い事した？」

「いえ、何もしていないのですが…」

「さっき転移の魔法使っちゃいましたから…」

「ってか守護騎士システムも引っ掛かるんじゃねーか？」

「……」

と完全にティーダそっちのけで話が進んでいく

「ここは大人しく従ったほうがええんか？」

「…悩みますね。少なくとも、我々は主はやての指示に従いますが…」

「私は嫌だからな！はやてと一緒にいられなくなるじゃねーかっ！！」

「ヴィータ、落ち着け」

「…んじゃ、逃げよっか。うちも皆と離れたくないし」

「抵抗の意思あり、と見ていいか？」

ティーダは二挺の拳銃型のデバイスをいつの間にか構えている

「ならば…少々痛い目を見てもらおうか！」

言うが早いか、銃口から光が漏れる

「いかん！」

咄嗟にザフィーラが前に出て防御魔法を展開するが…

「なっ！！」

回転する魔力弾は容易く障壁を突破し、はやて達の注意に着弾して爆発した

「（……あれ、今のって古代ベルカ式の防御魔法だよな？えらくあっさり抜けたなー…って！）」

ティーダは今になって、見慣れぬデバイスを普通に使いこなしているのに驚いた

『貴公の意識が戻らぬ間、手慣れたはずの貴公のデバイスをランスターと同化させてこちらから直接撃てるようにした。連射性は劣るが、単発なら以前の砲撃を軽く上回る』

「あっちゃー、なら向こうには悪い事をしたな」

『安心しろ、ベルカの騎士がそんな程度で死にはしない』

直後、小型の鉄球が４つ、煙の中から飛んでくる。上空に逃れると、そこには金髪の女性が少女を抱き抱え、他の三人が各々の武器を構えていた

『隙が無い。中々の使い手だな…よしティーダ殿、八卦の武装を解放する！』

「な、何を…ぐぁっ！！」

突如、頭に情報が流れ込んでいく。そして痛みが通り過ぎると、八卦の使い方…【風】の力がよく理解できた

「これでさっさと仕留めた方が早いか…っておおっ！！」

頭を抱えた一瞬で、剣を持ったポニーテールの女性が一気に距離を詰めてくる

「【剣の騎士】シグナム、参る！」

「来なくていいって…ボーン・フーン！」

ランスターを中心に横向きの竜巻のような風が蛇のようにうねり、
シグナムへと向かってくる

「ぐっ！！」

防御魔法ごと巻き込まれたシグナムは容赦無く地面に叩きつけられる

「シグナム！」

はやてが思わず声をあげるが

「主はやて、お気遣いは嬉しく思いますが…この程度、全く問題になりません」

笑顔ではやてに言葉を返し、すぐに険しい顔に戻りティーダを睨み付ける

「（で、どうなんだ？）」

「（あの風が邪魔だ。それに…発動に魔法陣が無かった。つまり予備動作が見えないが…あの威力なら防御に徹すればダメージは大したことは無い。暫くは敵の情報を集めつつ、様子を見るぞ！）」

「「「了解っ！」」」

ここで彼女達は戦術ミスを犯す。それはティーダの力をこれ以上は無い、と低く見てしまったことにある

「下手に長引いて、冥王とかち合っても面倒だ。一気に決めるぞ、耐爬！」

『応っ！』

直後、ランスターの胸部の宝玉が光を放つ。そしてその全面に浮かび上がる文字は…【風】の一文字

「『デェェッド・ロォン・フゥゥウンッ！！』」

ランスターより竜巻が放たれる。そしてシグナム達の直線上には…シャマルに抱えられたはやての姿があった

「しまった、ヴィータ！ザフィーラ！」

「任せな、シグナム！」

「主には、傷一つ付けさせんっ！」

結果的に敵の最大の一撃を守護騎士達は真っ向から受ける事になる。
そして彼女達はその身を以て知る…八卦の力を

「『おおおおおおっ！！」』

はやて達を飲み込んだ風は大竜巻となり、はやて達を防御障壁ごと
上空へと持ち上げ…壁をヤスリの如く削り始めた

「な、何だよこれっ！？」

魔法の風と物理的なカマイタチと衝撃波…それらが次々と押し寄せ、
防御魔法を破壊していっているのである

「こ、このままじゃ…」

「ご安心を…主はやて、貴方だけは、何があっても、守り抜きます
故…」

シグナムが息を切らしながらはやてに答える。が、時間の問題なのは火を見るより明らかだ

「（何で誕生日の日にこんな目にあわなあかんねん…ホントやったらぐっすり寝て、朝からパーティーの準備して…）」

すると、はやての頭の中にあの少年の姿がよぎる。そして思わず口に出てしまう

「こー君…助けてっ！！」

「（…ん、わかった）」

直後、はやての眼下の地表近くと上空で大爆発が起き、爆風で竜巻

は消し飛ばされた

「うわっとっと」

爆風でバランスを崩すが、ヴィータはすぐにバランスを取り戻し、
防御魔法を解除、皆で地上に一旦降りる

「今のは…新手か？」

守護騎士達が周囲を警戒する中、緊張の糸が切れたはやては泣き出
してしまう

「大丈夫だってはやて、今すぐアイツブッ倒してくるからさ！」

「…っく、違うよ。これは嬉しいねん…なぁ、こー君？」

「「「「こー君？」」」」

守護騎士達が首を傾げる一方

「何だよ、今の爆発…明らかに竜巻が狙われてたぞ？」

『気を付けろ、来るぞ…冥王が』

「…ん、はやて、助けに来た」

閃光と共にはやてとティーダの間に降り立つは幼い少年

「…貴方達は…誰？」

少年ははやての周囲にいるシグナム達に疑問に感じ問いただす

「我等は主はやてを守る守護騎士ヴォルケンリッター、【剣の騎士】シグナムだ」

助けられた身である以上、名乗るのが礼儀だろう…そう判断したシグナムに他も続く

「…【鉄槌の騎士】ヴィータ」

「【湖の騎士】シャマルと申します」

「【盾の守護獣】ザフィーラだ。そして、貴公の名は？」

そして紅牙も答える

「…僕の名前は紅牙、四季紅牙…そして」

少し、誇らしげに少年は宣言した

「…僕は、【冥王】と呼ばれる存在らしい」

第４話　八卦の力（後書き）

ティーダのターン、早くも終了のお知らせです。そしてヴォルケンズ…ごめんね、マジで今回出番無いんだ…ってかＡ'ｓシナリオまでは多分紅牙とはやてのターンが続くと思われます

原因は今回見ていただいたらわかるように、火力では最弱の【風】でもヴォルケンズの防御を上回ります。確かにはやてを守りながらの戦いですが、普通にやるとかなり苦しい戦いになりますね。コイツは高起動型にしちゃったし…

ラストの紅牙登場はちょいと主人公なんだし、カッコよくさせて見ましたw誇らしげなのは、はやてを守れたからです

次回、冥王のターンです。マサキ、使うまでも無く倒せそうなのが困るな…w

第5話　過ぎた力の代償（前書き）

年内にA'ｓ本編入れるか不安になってきました…

第5話　過ぎた力の代償

僕達が会話を続けていると、その会話を遮るように銃声が響いた。
よく見ると足元に穴が空いている

「さて、【冥王】がこんな子供だったとは驚いたが、私と来てもらおうか？」

ティーダは慢心していた。古代ベルカの騎士達を圧倒する八卦の力に酔っていた。だからこそ、気付かなかった

目の前の少年の気配が変わった事に

「…何故、はやて達を巻き込んだの？」

「執務官として同行願った所、拒否されたからさ。だから実力行使に移らざるを得なかった」

「…あの竜巻、魔法を使えないはやてが巻き込まれたら…いや、あの人達だって怪我じゃすまなかった。分かってて使ったの？」

「それがどうした？話を聞かないなら、力づくで従わせるしか無いだろう？」

「…そう」

紅牙は無表情でティーダに向き直る。その目には僅かに感情が宿っていた

久々に放つ感情である、怒りが

「どうやら彼も痛い目にあわねばわからんようだ。耐爬、いくぞ！」

『ああ！行こうか、ティーダ殿！！』

ティーダは二挺の銃を構える

「な！貴様、武器を持たぬ子供に銃を向けるのかっ！」

「貴様等はわかっていないようだな…コイツが一体どんな化物であるかをな！」

耐爬の知識が流れ込んでいるティーダにはわかる…【冥王】がどれだけ危険で、この場で殺さなければならないかを

「ならば、今ここで死ぬがいい…【冥王】っ！！」

銃に貯めていた、ありったけの魔力弾を弾幕の如く撃ち込む。先程の一撃と同等以上の魔力弾を全弾撃ちこまれた紅牙は土埃で見えなくなる

「そんな…こー君…」

はやては呆然と紅牙がいた場所を見続ける

「大丈夫だよ、はやて。アイツ一発も食らってないみたいだ」

「だが、魔力の大きな動きは無かった…どうやって防いだ？」

やがて土煙がはれると、無傷の紅牙が現れる。その右手に握られたキーホルダーには、膨大な魔力が集束しており、紅牙の足元には無数の穴が空いていた

「まさか…あれで全弾弾いたのか？」

確かに実弾にこそ劣るが、それでも普通の魔力弾とは桁違いの速度である。それを片手で全弾叩き落とすとなると…最早人間の動きではない

「…ぐっ」

『それ見たことか。生身で無茶をするからこうなる』

紅牙の右腕…魔力を集束させていた手首までは無傷だったが、肩までは酷い傷である。音速を超えた為に衝撃波で右腕が刃物で幾重にも切り裂かれたように血を流している

「こー君、何で受けたん?それだけ動けるなら避けたって…」

「そうか…我々の盾となったのか」

「え?どういう事なん、ザフィーラ?」

「今、我々は敵と紅牙の直線上にいます。ですから紅牙が避ければ流れ弾が主の身に当たる危険があります」

「何でそこまで…」

すると、紅牙がはやてに言葉を返す

「…僕は、はやてを助けに来た。元は僕の用事に巻き込んだんだし…だから、ちゃんとはやては守る」

顔を真っ赤にして俯いてしまったはやてを見て首を傾げながら、紅牙は呆然としていたティーダに向き直る

「…今のは…はやて達も狙ったね？」

「…確かに流れ弾であちらの足も止めようとは思ったが…二兎追うのは良くなったかな？」

『（ティーダ殿！）』

「（少し汚いが仕方ない。あっちを狙いながら削ろう。真っ向勝負は不利だ）」

耐爬の記憶から断片的に入った知識では【冥王】は砲戦型だ。撃ち合いでは不利になる以上、あちらを利用して可能な限り削り、可能ならば気絶させてから【冥王】を封印すればいい

ティーダはそう作戦を立てていたが、誤算があった。今までの紅牙は、決して自分が痛い目にあおうと相手に反撃したりはしない、その性質を知っていれば、ひたすら紅牙を狙えば良いと判っていただろう

だが、ティーダはあろうことかはやてを狙ってしまった。一度はやて巻き込んだ竜巻を紅牙が敢えて見過ごしたにも関わらず

「…僕は、僕自身にならば何をされても怒らない。怒りって感情がいまいちわからなかったんだ…今までは」

「…？」

紅牙の独白にティーダは首を傾げる

「…でも、あなたは…いやアンタは、はやてを巻き込んだ…僕の、友達を…」

紅牙の周囲に風…いや、紅牙から漏れ出した魔力が周囲を渦巻き、紅牙を中心としたつむじ風を形成する

「な、何だこれは…っ！」

『歴代の【冥王】の比では無い…貴様、一体何者だ！！』

「…僕の名は紅牙、四季紅牙。僕は…アンタ達を、許さない」

紅牙は血塗れの右手をティーダ達に構える

「…滅びの力よ、冥王の鎧よ、その力を示せ…ゼオライマー、セットアップ！」

直後、紅牙の身体が禍々しいまでの光に包まれる。そして現れたのは胸と両手…そしてまるで単眼のように顔に宝玉を付けた、白い鎧をまとった紅牙であった

『（ハハハハハッ、二回目の使用で、貴様の怒りに呼応しただけでこの魔力か。随分と相性がいいようだな、紅牙っ！！）』

「（…マサキ、制御を手伝って。はやて達を巻き込みたくないから）」

『（これだけの力を見せたのだ…いいだろう、今回は存分にやるがいい！）』

マサキも興味がわいた。この新たなる【冥王】がどれだけの力を振るえるのかを

「（…行くよ、マサキ）」

『（ああ、行こうか、紅牙よっ！）』

ゼオライマー…紅牙は膨大な魔力を周囲に撒き散らすと身体を僅かに沈ませる

『ティーダ、こちらも行くぞ！』

「あ、ああ…」

自分はとんでも無い戦いの引き金を引いたのか？とティーダは気付いたが、既にそれは遅い事を知る

よく見るとゼオライマーが、右手をこちらに向けている

『ティーダ、回避だっ！！』

「…っ！」

咄嗟に上空に一気に飛び上がると、ティーダの足元を魔力の光が突き抜ける。その衝撃波でティーダはさらに吹き飛ばされるが、直ぐに体勢を立て直す

「…嘘だろ、おい…」

ヴィータは目の前の砲撃を見て唖然としていた

「あれでは、最早戦艦の主砲と変わらんぞ…」

シグナムも呆気に取られている

永きに渡って戦い続けた守護騎士だが、今のような一撃をただの魔導士が放ったのなら、見たことが無いわけでは無い。ミッド式のSランクに匹敵する一撃ではあるが、それ以上に驚いたのが溜めや詠唱といった予備動作が無かった。つまり…

「あれが、牽制だとでも言うのか…」

「おい、何だよあれはっ!?」

『ゼオライマーの基本武装だ。奴から見れば、お前の銃撃と変わらんのだろうな』

「常識はずれも大概にしてくれよ…まぁ、あの外見から見て、明らかに砲台型なのは救いってとこか」

単眼のような宝玉をこちらに向け、【冥王】はさらに砲撃を続ける…が、高速で飛び回る【風】を捉えることはできない

「…マサキ、空に足場、作れる?」

『そんな事しなくても飛べばよかろう?』

「…できる?」

『…できんことは無い。…成程、確かに走れるかのほうが重要だな、貴様の場合は』

マサキは苦笑しながらも続ける

『ならば存分に空を駆け、獲物を狩るがいい…紅牙よ！』

「…わかった」

刹那、紅牙の身体がブレ、消える

「なっ！？」

ティーダが同様し、周囲を見回す瞬間、背筋が凍る

ドゴォッ！！

ランスターの背中の中央、翼の付け根に、音速を遥かに超えた回し蹴りが叩き込まれる

「がはぁっ！！」

その運動エネルギーを正中線に、かつ下向きに叩き込まれたティーダは自分が見ていた方向…紅牙がいた位置の地面に叩きつけられる

「…まずは一発」

そしてティーダがいた位置には…紅牙が表情が見えぬゼオライマーの姿のまま見下ろしていた

「なんやねん、アレ…あの外見であっちより速いとか、もう詐欺やん…」

呆気に取られっぱなしのはやてと、彼が敵で無い事に心底安心するヴォルケンリッターの面々達、そして…

「…ふざけるなぁーっ!!」

周囲の地面を吹き飛ばしながら飛び上がるランスター。だが、様子が少しおかしい

「何で俺がこんな目に…俺はさっさとコイツを殺してティアと…ティア…ティア…」

『いかん、ティーダ殿!力に飲まれるな!!』

焦る耐爬と明らかに様子のおかしいティーダ。紅牙も流石に様子を見ていると、ランスターの形状が歪になっていく

『無様だな、耐爬よ！そのような出来損ないを使った貴様の失策だな？』

『黙れっ！…くっ、このままでは…』

『貴様はそのままランスターと同化しているがいい、ククク…』

「…マサキ、どういう事なの？」

状況がわからなくなってきたので、紅牙はマサキに聞いてみた

『あちらは素体に死体を使ったようだ。元々拒否反応は薄かったようだが、生前の最後の感情に…どうやらティアとか言うらしいが…それと力に引き込まれて狂っていっているのさ』

そうする間にも、ティーダは狂っていく…

「待っててね…ティア。すぐに戻るから…それから二人で…」

変形に耐えきれず、ランスターの顔の部分が一部割れる。そこには狂った笑みを浮かべるティーダの顔があった

第5話　過ぎた力の代償（後書き）

ティーダに死亡フラグが立ちました。やっぱ過ぎた力には代償が無いとねぇ

ちなみに紅牙のレアスキル、聖人も今回は弱点が露呈しました。その気に音速だって突破できるけど、多少頑丈でも所詮は生身、愚地克美みたいに破裂はしませんでしたが、衝撃波で自爆します

ゼオライマーの欠点は…こちらの原作を知ってる方はわかるでしょうがアレです。今回は敵が弱すぎる？ので問題無いですが、次回からは盛大に発揮されるでしょう

次回で第二章も終わります。何時本編に入れるのやら…ではまた皆さん、次話で会いましょう！！

第6話　終焉…そして始まる、新たなる日々（前書き）

取り敢えず、最後は駆け足っぽいけど第二章終了です！！

第6話　終焉…そして始まる、新たなる日々

「ティア……待っててね。邪魔する奴は…これから、みーんないなくなるから…」

首だけをぐりん、と９０度横に向け、ティーダは狂った笑みをさらに深める。その先には…はやてがいた

「…っ！」

咄嗟に転移で、はやてと目が合う前に移動する紅牙。だが、

「俺とティアの…邪魔を、するなァーーッ！！」

非殺傷設定も何も無い、ただの銃撃を乱射する。先程までティアと呼んでいたはやてに対しての配慮なぞ到底無い

『本格的に力に喰われたな』

「…喰われた？」

攻撃自体は（紅牙から見て）大したことが無いので、適当にあしら

いながら聞く

『八卦は、通常のデバイスより森羅万象の力…つまり、周囲の自然の力を強く取り込み、使用する』

はやてとヴォルケンリッター達が後退したのを確認し、一旦上空へ飛ぶ

『だが、通常のデバイスはそれを魔力として取り込むが、八卦は違う』

「ハハハハハッ！！」

銃弾を撒き散らしながら、周囲を飛び回るティーダ

『自然のエネルギーそのものを取り込み、魔力との相乗効果によって遥かに威力を高める…ようは自然の中にある【気】と魔力を混合燃料のように使用するのさ』

ゼオライマーはさらに、次元連結システムの力を足した三乗効果になっているがな、と心の中でだけ呟く

『だが、勿論欠点がある。それが…アレだ』

ティーダに対する侮蔑を隠さずマサキは続ける

『自然の力をそのまま取り込む以上、自身の心をしっかりと持たねば、弱い心だとあちら側へ引き摺られる。奴は一度死んだ身を再構成したから、余計に引かれやすくなっていたようだがな…』

マサキは小さく笑って話を終える

「…もう、あの人は助からないの？」

『ククク…あのまま狂った状態で遺族に返すか？二重の苦しみを背負わせる事になるぞ？』

「…はやてを見て、ティアって呼んでた。まだ子供なのかな？」

『さあな。だが…どちらにしても、もう殺すか。いい加減、飽きた』

ティーダは魔力を収束させている。どうやらあちらも決着を着ける気のようだ

「コカカカカカカカカカッ！！」

紅牙の周囲を風が渦巻き、大竜巻となる

『もう人語も介さぬか…紅牙』

「…わかった、マサキ」

竜巻の中心に障壁を張りながらも遥か上空へと飛ばされるゼオライマー、それにありったけの魔力で刃を作り、突撃するランスター。一見、身動きの取れないゼオライマーにランスターがトドメを刺そうとしている。そう見えてしまう

「アカン、こー君が…こー君が…」

「このままでは…だが、何故奴は落ち着いている?」

その時、ゼオライマーの四つの宝玉が輝きを増した。

「…風が強い。思うように動けない」

『ククク…確かに【風】ではこうするしか無いか』

マサキは落ち着きながら続ける

『なら紅牙、見せてやるがいい…たかが【風】では、【天】まで届かんことをなぁっ！！』

ゼオライマーの宝玉の輝きが増し、理不尽なまでの魔力が、気が、ゼオライマーに収束していく

「…ランスターは破壊していいの？」

『構わん。仮に消し飛べばロックが解除されるから、次元連結システムで【風】のパーツは再構成できる。今までもそうだった』

「…そう」

紅牙はティーダを見る。狂った笑みを絶やさず突っ込んでくる男の姿を

「…恨むな、なんて言わない」

紅牙は静かに告げる

「…貴方にも帰りを待つ家族がいる…でも、貴方をそのまま帰す訳

にはいかない。そして何より…」

拳を握り締め、ゼオライマーの両手の甲の部分にある宝玉を胸の宝玉に近づける。輝きがさらに増す

「…僕ははやてを守る。はやてを守る為には、貴方を、野放しにはできない。だからここで倒す！」

そしてゼオライマーの前面に浮かぶ一つの文字

【天】

それは最強の八卦であり、冥府の王…【冥王】と呼ばれたゼオライマーのもう一つの呼び名…そして、ゼオライマーの武装で唯一【天】の名を使う【冥王】の一撃

『ククク…耐爬よ、ランスターよ！塵一つ残さず、消滅するがいいっ！！』

マサキの咆哮と共に、ゼオライマーの両手の宝玉と宝玉がガチンッという音と共にかち合わされた。刹那、ゼオライマーに蓄積されていた圧倒的な力が解放される

ゼオライマーの、メイオウ攻撃が発動した

「何なん、あれ…」

はやては震える。それは最早生物の本能とすら言えるだろう、だからはやてには落ち度は無いのかもしれない

たとえそれが…はやてを守る為の一撃だとしても

上空に飛ばされ、ゼオライマーの姿が見えなくなったら膨大な魔力が空を覆い尽くし、世界が光に染まる

「ぐっ！」

シグナム達も目が眩み、何が起こったかわからない。そして光は３０秒も経たずに消える。徐々に視力が回復してくるが、その前にゴバァッ！と言う謎の音が発生し、咄嗟に防御障壁を張るが何も起こらない。怪訝に思い、空を見上げると、見上げた五人はそのまま硬直した

空にあった雲が…推定直径数ｋｍに渡って消えていた

「雲が、消し飛んでやがる…」

呆然とするヴィータ

「いや、違う。雲どころじゃない」

冷静に状況を判断しようとするザフィーラ

「だったら何が…」

困惑するシャマル

「まさか…いや、ならばさっきの音も納得できる」

意味を理解し、戦慄するシグナム

「なぁ…何が、どうなったん？」

状況が全く掴めないはやて

「主はやて…実に信じがたい話なのですが…」

「？」

「あの空間に存在していた全て…大気に至るまでの全ての物質が、消滅しました…」

「！！…じゃあ…こー君は…」

「あんな一撃の爆心地にいたんだ…欠片すら、残ってたら奇跡だよ」

「…そんな…嘘や…」

「主…」

「こー君が死ぬわけないやん…こー君は…こー君は…」

目が虚ろになりうわ言を呟き始めるはやてを見て、守護騎士達の表情はさらに暗くなる

「何もできなかった…見ず知らずのはやての友達に任せて、死ぬのを黙って見ていることしかできなかったのかよ！何が守護騎士だっ！！何が…」

余りの悔しさに座り込み、地面を殴り付けるヴィータ。だが、他の守護騎士達も同じだった。主を守れず、見ず知らずの主の友人の戦いを見守り、その命を散らすまで、何もできなかったのだ

重苦しい空気に包まれる中、突如巨大な魔力が現れる

「「「「…っ！」」」」

咄嗟に武器を構えるが、明らかに士気が低い。それでも、主だけは守らねばならない…守護騎士達が決死の覚悟を決めると

「…勝手に、殺さないで欲しい」

「え？」

その声に、はやての目に光が戻る

「…僕は、はやてを守るって約束した。だから…勝手にいなくなったりは、しない」

閃光と共に紅牙ははやての前に降り立つ

「こー君…」

はやての目に涙がたまり、こぼれ落ちていく

「馬鹿な…あんな規模の消滅をどうやって…」

「…あれは、メイオウ攻撃は僕を中心として、周囲の全てを消し飛ばす攻撃。だから僕は攻撃範囲外」

「「「「……」」」」

最早言葉も無い守護騎士達。そんな彼女達をおいて紅牙は変身を解除する

『（威力は不十分だが、メイオウ攻撃まで使えるなら問題ない。他の八卦も順当に相手ができるだろう…これから退屈せずに済みそうだ…ククク）』

「（…僕は、色々疲れたよ）」

『（仕方あるまい。いきなりの実戦でメイオウ攻撃まで使っているのだ。今日はゆっくり休むことだな）』

「（…そうだね…はやてを送って、すぐに寝なきゃ…）」

元の姿に戻った紅牙は、シャマルに抱かれたはやての前に立つ。疲労困憊で、右手のシャツこそボロボロだが、傷は既に無く無傷の姿で

「…はやて、無事で、よかった」

「…う…、…う、…」

「…う?どこか痛いの、はやて?」

怪訝に思いはやての顔を見ようと近づいたが、本能が警鐘を鳴らす。だが疲労困憊の紅牙に逃げる余裕は無かった

「こー君の…アホーーッ!!」

シャマルに抱かれた姿勢から器用にも紅牙に抱き付くようにタックルをぶちかます。不意をつかれたシャマルの手から離れ、さらに不意をつかれた紅牙は後ろに倒れる。さらに後頭部を強かに打つ事に

なる
そのまま紅牙の腹の辺りに乗っかる形になり、マウントポジションを確保したはやては、さらに紅牙に詰め寄る

「心配したやんかっ！いくらこー君強いゆーても、何であんな無茶ばっかやるねん！」

紅牙の胸ぐらを掴み揺さぶる。頭がガクガクと揺れる

「それに最後のアレなんやねん！ホントにこー君が死んじゃったって…思ったんやからな！！ホンマに…怖かったんやから…」

はやての怒声は次第に嗚咽に変わっていく

「やから守ってくれるのは嬉しいけど…ってあれ、こー君？」

そして紅牙の反応が無い事に気が付き、紅牙を見ると

紅牙は目を回していた

「主よ…さっきの一撃で意識を失っていたようです」

言いにくそうにザフィーラが言うと、はやては顔を真っ赤にして

「それならはよ言うてーな、恥ずかしいわー…／／／」

と俯いてしまうが、紅牙を見て冷静さを取り戻す

「とりあえず、皆のその格好のまま病院には行かれへんから、一旦こー君を連れて家に戻ろっか」

「わかりました、主はやて」

こうして、八神はやてと四季紅牙…そして闇の書と守護騎士達を加えた生活が、始まった

そしてそれは、闇の書と冥王の物語が交差した瞬間でもあった

第6話　終焉…そして始まる、新たなる日々（後書き）

第二章、終わりました。そしてティーダ乙。どんどん噛ませになっていってごめんね。最期のデッド・ロン・フーンはちょいと3巻の一方通行っぽく（ここ重要w）日本語が不自由になりましたが、まぁいいよね…噛ませだしｗｗｗ

そして、その噛ませ相手にメイオウ攻撃…何かオーバーキルもいいとこですが、通常射撃だとランスターのせいで焼け残りそうなんで、遺恨を残さない為にも、こんがりと消し飛ばす事にしましたｗやっぱゼオライマーの止めといえばこれだしね。今回、執筆中はメイオウ攻撃終了までひたすら脳内で覚醒、ゼオライマー（スパロボやってる方はわかるよね？）が流れっぱなしでしたよ

以前に後書きで書きましたが、紅牙…これでもシグナムと戦えば負けます。理由は簡単。シグナムの攻撃は防げるし、かわせるけど…紅牙が一切直撃コースの攻撃をしないことが原因です。それで怒るシグナムの攻撃をいなして…と見事に五分の戦いになります結果はシグナムがへばるか、紅牙が折れるか…どっちにしろ、シグナムには根に持たれそうですねｗ

次回は幕間を書きます…そして、暫く短編書いてからA's本編に入ろうと思います。フェイト出したいのに、本編入らなきゃ使えなかったの忘れてたよコンチクショウｏｒｚ

では、次は幕間で会いましょう！！

五万ＨＩＴ記念　幕間（前書き）

まだ、半月経ってないのか…もう随分前から書いてる気がしますね

五万ＨＩＴ記念　幕間

さて、第二章も終わり着々と本編とクロスする準備は整ってきたぜ！

「…そういえば、この幕間…先に書こうか迷ったんだよね？」

ああ、前々回の投稿後に５万ＨＩＴに到達してな。少し焦ったよ…第３章の前に日常編やる予定だったから、そこでやるって考えだったし

『つまり、現在６万に到達したのは想定外、と？』

うん、ホント感謝だね…でもマサキの設定は出さないからな

『…ほう、余程命がいらんと見える』

だからゼオライマー出すなって。こんな楽屋裏でもメイオウ攻撃はやめてくれ、話が進まん。理由もあるし

「…何なの？」

簡単な事さ。お前等がなのはＡ’ｓを見てたとしよう…そこでお前

達は第二話まで見た。そこで、第三者に闇の書とリインフォースの設定バラされたらどうする？

『消す』

「……微妙」

それが理由。八卦が全滅する頃にはバラすさ

『投げるなよ』

努力はする。…で、今回はゼオライマーと八卦ロボの解説だな。ゼオライマーとか、知らない人から見れば何このチートって感じだろうし

「…知っててもチートだと思うよ」

デバイス名：【天】のゼオライマー
分類：特殊系ブーストデバイス

「…ブースト系ってキャロやルーテシアが使ってたタイプか」

『最も、ゼオライマーを筆頭に八卦の大半は補助を自身にのみ使用する事を特化しているから、厳密にはブースト系でも無い。あくまで一番近いだけだ』

管制ＡＩ：木原マサキ

『…これはどういう事だ？』

耐爬もそうだったけど、最初の八卦の使用者がそのままデバイスのＡＩになってます。インテリジェントデバイスより高性能だけど、その分言うこと聞かない

「…人から貰ったポケモン？」

『紅牙、貴様…地味に人の心を抉るな…』

コイツがサカキ様がくれるグリーンバッジで言うこと聞いてくれるか怪しいよなぁ…

使用魔法：八卦

デバイスには用意されてないので、現在ミッド式もベルカ式も使えません。これから紅牙が覚えるしか無い。それと…

特性：使用者の最も得意とする武器を作り出すことができる。または八卦の能力を使えるように改造する

これは本編でティーダが地味に使ってた

「…ヴォルケンズの防御をあっさり抜けたよね」

そんな感じに凶悪武器を作れるが、紅牙はまだ無い。ある程度その武器に慣れてなきゃいかんし

混合変換：八卦のデバイスのみが使える特殊な魔力変換技術。作中でも説明したように、周囲と自身の【気】を取り込み、混合燃料の如く使うことで、通常の魔導士と一線を画した力を使うことができる

『俺が作った技術だ。ティーダ程度でもヴォルケンズと戦えるようになる』

じゃあ強い奴に八卦持たせたら洒落にならなくないか？

『所詮は雑魚…【天】は揺るがんよ』

ホントにお前、慢心王みたいだよな…そして、ゼオライマー最大のチート特性だ

次元連結システム：他の次元や平行世界から、ほぼ無限にエネルギーを汲み出すことができ、さらには自分が塵一つ残さず消えてもすぐに再構成されてしまう、チートの結晶。平行世界のゼオライマーを全部潰すか、次元連結システムで関与できる世界全てを崩壊でもさせなきゃ、破壊は不可能と見ていい

「…最後の方、ぞんざい」

まだ続きがあるぞ

…ゼオライマーを使用するにはこれを使える資質が無ければ論外であり、ゼオライマーのバ火力を支える大事なものである
欠点も一応存在し、当然ながらその膨大なエネルギーの受け皿は人間なので、稼働させまくると紅牙のスタミナがガリガリ削られていく。当然ながら最終的には生命力を削ることになる

『欠点をつけたのか』

当たり前、当然ながら、原作よりは弱体化だ。まず、消し炭からの

復帰はＦａｔｅの【全て遠き理想郷（アヴァロン）】よろしく、身体の一部を他所に逃がさなきゃ駄目。そこまでしたら、闇の書より悪質になるし

「…既に遥かに悪質じゃ…」

紅牙、お願いだから混ぜっ返さないでください

「…ん、わかった」

ありがと、次は武装…ってか魔装と呼ぶべきかな？

エネルギー放出：ティーダ戦で使用した砲撃。単にエネルギーに指向性を持たせてからブッ放してるだけで、一切制御はされていない

メイオウ攻撃：【天】の名を冠する必殺技。ＯＶＡでは最終話で要塞一つ潰す為に、タクラマカン砂漠を地図から消した、効果範囲内全ての物質を原子以下まで分解してしまう一撃

こっちでも全く自重しておらず、人型サイズでアルカンシェルを鼻で笑うかのような攻撃力を搭載している

『アースラ、立場無いな』

戦艦どころか、艦隊並の戦闘力にしてるからな仕方ない

「…これ、はやてやヴォルケンリッターが見たらどう思うかな？」

まぁ短編の後書きとか辺りで一回呼んでみるつもり。後、会話挟みながら設定書いてるせいで見にくいって意見あれば、別に設定集みたいなのを作る予定。多分、ティーダとかはこっちになる

「…扱い、段々酷くなるね」

当初はティアナと短時間だけ念話するって話も作ろうかと思ったが、ＳｔＳちゃんと全部見てないから、ちびティアナ書くのめんどくさくなったし、間違いなく紅牙とティーダ絡みのロイスがタイタスになるので却下した

『最後のだけ見たら、自律判定失敗しそうなくらいにロイス減りそうだな、ティアナは』

最終決戦で、フォワード陣のロイスをタイタスにしたら帰ってこれそうに…ってダブルクロスじゃねーよ、なのはだからな、これはｗｗｗ

「…こっちも、グダグダになってきた」

そうだな。ぼちぼち終わらせるか…皆さん、こんな駄文を見てくださってありがとうございます。年明けから忙しくなるので、なるべく年内に本編に入れるよう、努力してゆきます

「…それじゃ、また」

日常1　始まった日常（前書き）

日常パート入りました。６人動かすのでキツいとか…これから先心配だｏｒｚ

日常1　始まった日常

「…ん、…」

紅牙は目を醒まし、自分が横になっているのに気付いた

「（…何時もの、布団じゃない）」

それどころか、暖かい何かがあることに気付く

「こー君、おはようさん」

「……」

まだ寝惚け気味の紅牙は、本能的にそれにに抱きつく

「ちょ、こー君まだ朝やで…」

「…んみゅー」

「…何や、寝惚けてるんかい…」

そして、紅牙（寝惚け中）ははやてを抱き締めたまま二度寝の準備に入る。はやて自身は

「（んー、まだ9時やし…後一時間くらいやったら、時間もちょっと苦しくなるけど…ええかな？こー君あったかいし、うちまで眠くなってきたわ…）」

満更でも無いようで、夢の世界に旅立とうとするが…

「はやてー、もうそろそろ起きたほうが…って、はやてに何してやがるっ！！」

「…あつっ！」

はやての様子を見に来たヴィータの、見事なドロップキックによって紅牙が吹き飛ばされ、覚醒した

「…ヴィータ、あんまり女の子がそんな事したらあかんで？」

「いや、私はいいんだよ。はやて、何かされなかった？だからコイツはソファーにでも転がしときゃ良かったんだよ…」

ちょっと不満だったのかはやてはジト目だったが、ヴィータが真剣に自分を心配してくれてるのを見て、表情を緩める

「こー君、寝惚けてただけみたいやで。まぁ暖かかったからうちはええんやけどなー」

そして紅牙もちゃん目を醒ましたらしく

「…おはよう。…あれ、ここはどこ？」

「おはよ、こー君。ここはうちの部屋やで。詳しい事は…ご飯食べてからにしよっか？」

「…うん」

空腹だった紅牙も素直に従うことにした

「…闇の書と、守護騎士…ヴォルケンリッター、か」

朝食の後、シグナム達は改めて説明を行った。あの時は説明は駆け

足になってしまったし、主の友人であり、主を守ってくれた人物にも話す必要がある、と考えたからだ。ヴィータは難色を示したが、

「あの少年は信用に足る人物だ」

と珍しくザフィーラが推すので黙ることにした

「シグナム達のことはわかったけど…こー君も魔法使えたんやな。何かうちだけ置いてきぼりになった気分やわー」

「…私達のこれで全部だ。…次はテメェの番だぞ」

「…ヴィータ」

「っせーな、お前等だって気になってるんだろ?あの妙に強い鎧野郎をあそこまで一方的にブッ倒したんだぞ?はっきり言って、コイツは危険過ぎる」

「ヴィータ、そんなん言わんといて…」

「ごめん、はやて。そんなつもりじゃ…」

「…はやて、この子が危ないって言うのは仕方ないよ。僕だって使ってみて、怖いって思ったし」

悲しげな表情になったはやてにヴィータも慌てるが、紅牙がフォロ

ーする。それにヴィータは少しむくれるが、ザフィーラが口を挟む

「すると、お前はアレを使ったのは初めてなのか？」

「…うん、ゼオライマーを使ったのは二回目だけど…戦ったのは、初めて」

「なるほど…では貴方は管理局の人間では無いのですね」

「…うん、そんな組織知らない」

するとシグナムは難しい顔になる

「では、戦った奴は管理局の魔導士か…面倒な事になりそうですね」

「…いや、それはないよ」

紅牙は断言する

「何でだよ、管理局の魔導士だぞ？行方不明になったらゾロゾロ来るに決まってるだろうが」

「…じゃあ、管理局に…死体を動かせる魔法って、ある？」

「はぁ？そんなもんあったら、あの人手不足の組織だ。使いまくっ

てるんじゃねーの？」

「…なら問題ないよ…彼は、既に死んでいたから」

全員の表情が強ばる

「ってことは、あの人は…ゾンビ？」

はやてに至っては少し表情が青い。そこで、紅牙は先程のマサキとの会話を思い出す

『連中にはお前が説明しろ。俺はゼオライマーの調整をする…全く、まだ調整中のメイオウ攻撃まで使ったからあちこちに不備が出ている…それに【風】との同期か…これ等をさっさと済ませるから、暫くは出てこれん。ある程度の情報を与えれば引き下がるはずだ。ではな』

一方的に宣言して、反応無しは会話と言えるのか？という疑問を一旦置いて会話に戻る

「…僕のゼオライマーもそうだけど、八卦のデバイスは身体に寄生

？っていうかリンカーコアと一部がくっつくみたい。それで、条件さえ満たせば…死んでいても、八卦のデバイスが蘇生させるらしい」

「凄まじいデバイスなのだな。その八卦のデバイスとやらは」

もはや呆れるしかないシグナムだったが、一番の疑問を聞いておくことにした

「それで、私には君に一つ尋ねたいことがある」

「…僕に答えられることなら」

紅牙も空気の変化を読み取る

「君は…主はやての敵になるのか？」

そう、シグナム達にとっての最大の問題はこれである。
ティーダ・ランスターは自分達ヴォルケンリッターを圧倒した。だが、それははやてを守りながらの戦いだからであって、全力で戦えたのならまだ勝機はあった
しかし、この少年には勝機が見えない。その圧倒的な一撃を目の当たりにしてしまっている以上、それをはっきりさせないと主の命が危険にさらされることになる

だが、紅牙はあっさりと返した

「…今回、僕ははやてを守る為に力を使った。僕は…僕の周囲の人を巻き込まれでもしないと力を使う気は無いよ」

「何故だ?その力があれば…」

「…僕には現状では、八卦と戦う以外にゼオライマーの力は使わない。そこは安心して…別に力を使う理由も無いし」

「…そうですか」

シグナムは安堵する。はやては少しムッとしている

「シグナム、何でこー君をそんなに疑うん?何か悲しいわ…」

「そ、それは…」

狼狽するシグナムに代わってシャマルが説明する

「それは、私達より紅牙君のほうが遥かに強いからですよ、はやてちゃん」

「シャマル、何言ってるんだよっ!」

「事実ですよ。私達にあの攻撃…メイオウ攻撃でしたっけ?あれは耐えられませんし、紅牙君の速度から逃げられません…ですから、紅牙君が敵になってしまったらはやてちゃんを守るのは難しいんです」

「…そっか、でも心配あらへんな。こー君が敵になることなんてそれこそ無いに決まってるやん!」

心から紅牙を信頼しているのだろう。その言葉に若干守護騎士達は嫉妬するが、態度には出さない

「…それよりはやて、皆の服どうするの?流石にこの格好で街中は…」

「ザフィーラは普段は犬になるって言ってるから問題ないんやけど、他の子らは必要やね」

「主よ、私は狼です…」

ザフィーラの主張は当然の如く無視される。はやて、紅牙は狼なんて実物を見たこと無いし、他の守護騎士達も自分に振られた話で手一杯である

「しかし、私達にはお金がありませんし…」

「うちには金だけはあるから問題あらへんよー」

「でも…」

「まぁ、サイズとかわからへんし、今日買い物行くときにフリーサイズのを買ってくるから、また改めてみんなで買いに行こっか」

「…じゃあ、僕もついていくから、一旦戻って着替えてくる…服破れてるし」

「そんな！買い物など私達が…」

「その格好で行かれへんやん」

「あぅ…」

結局、主の生活の手助けをしようにも、服が必要であるという結論に達した守護騎士達は項垂れるしか無かった

「…じゃあ僕は一旦帰るよ。着替えて、風呂は…後でいいか。３０分もしたら戻るよ」

「また後でなー」

そして紅牙は帰宅した。するとマサキから再び話しかけられる

『ゼオライマー自体は使えるようになった。だが、【風】との同期が上手くいかん。メイオウ攻撃は暫く使うな』

「…どこか悪いの？」

『いや、システムに異常は無い。だが、認証にエラーが出る。こんなことは初めてだ…』

マサキが悩んでいるようだが、紅牙には何もすることができない。なので、できる事を聞いてみる

「…じゃあ転移ってできる」

『あのくらいなら問題ない』

「…じゃあ、試しに使ってみようか」

『そうだな。運用時のデータもあると比較もしやすいからな』

服を脱いだ紅牙は軽くシャワーを浴びることにした

「…流石に汚れてたから、シャワーくらい浴びたい」

『…成る程、まぁいいさ。好きにするがいい』

マサキが苦笑する。そして気付く。この姿で、はやてのベッドに寝ていたのだ。つまり…

「…ちゃんと、掃除もしないと」

さっさと支度しないと、と早めにあがり、着替える

「…じゃあ、行こうか」

『ああ』

靴を履いてから転移を行う。紅牙の姿が光に包まれ、そして消えた

日常1　始まった日常（後書き）

さて、後書きなわけだが…

「何でうちがここにおるん？」

いやね、日常編は後書きにゲストを試験的に読んでみようかな、と

「そうなんか。別にええよーネタばらしするんやろうし」

うん、話が早い。今回のはやてにはある野望があるんだよね。全く見えないようにしたけど

「な、何のことやろ…」

まぁヴォルケンリッターの私服に関してだけど、何であんなやり方したのかな？かな？

「いや、だってみんな服くらい自分で選びたいやろうし…」

ふーん。まぁいいや…嘘だっ！！って叫んでもいいが、はやてをいじめてハンマーとか降ってきても困るし

「それにな…お母さんの服使うにしても…下手したらシグナムは買い物に行くときにノーブラになるで。あのサイズはキツい以前に入らん…なんやねん、あのサイズ、反則やろ…」

あー…それで先に買ってくる、と

「まずはこー君を女性下着売場に連れていく…楽しみやわぁ」

ひでぇ…地味に狸の片鱗を感じたぜwまずは、ってことはまだ何か企んでいるっぽいけど…

「それは秘密や」

なら仕方ない、今回は短めでしめるか。では皆さん、また後書きで会いましょう！

「この形式、ザフィーラとか間がもつんやろうか…」

日常2　八神はやての誕生日（前書き）

少し日が空いてしまいました…言い訳は後書きにて…

日常2　八神はやての誕生日

「（…お金は…うん、相変わらずだね）」

貧弱な軍資金だが、簡単なものなら買えそうだ。そう判断した紅牙は八神家へと入る

「…お邪魔します」

「早かったな」

出迎えたのは武装したザフィーラだった。慌てて身体に続けて、タオルを巻いたシグナムがレヴァンティンを持って飛び出してくる

「ザフィーラ、何があった！…って紅牙か。驚かさないでくれ…」

「…あぁ、魔力に反応しちゃったのか」

「我々はいわばモグリに近い。なるべく魔法の使用は控えてくれ」

「…わかった。気を付ける…」

紅牙は顔を横に向けながら答える。何となく察したザフィーラも微動だにしなくなる

「…？どうしたのだ？」

「…シグナム、タオル落ちてる」

「……っ！？先に言えぇっ！！」

シグナムは慌ててタオルを広いつつ、玄関へレヴァンティンを投げつける。そしてそのまま脱衣場へと姿を隠す

「…目を逸らしてたのに、理不尽」

「……」

目を逸らしてた紅牙は、レヴァンティンを間一髪で白刃取りしたが、切っ先は眉間まで僅か数センチ。かなり際どい状態にザフィーラもうめくしかない

「…こちらに来たら、後頭部を貫かれたかもしれんな…」

「…この家では、僕達は弱者かもしれないね」

「そうかもしれんな…」

それから二人は、はやて達が風呂からあがるまで、これからの日々に軽い憂鬱感を覚えながら過ごすことになる

余談であるが、風呂場も軽い騒ぎになっていた為、紅牙ははやて達の文句をひたすら耐えることになった。流石に４対１では文句を言う暇すら無く、ザフィーラも同情の視線で見るが、保身の為に他人の振りをするしか無かったので、心の中で合掌をしていたとか

「…はやて、買いすぎじゃないか？」

スーパーにて、買い物カゴに山の如く積まれた食材を見ながら紅牙は呟く

「…みんな、どれくらい食うかわからんからなぁ。それに余っても、日保ちするから問題あらへんよ」

「…ならいい。はやてに任せるよ」

「よっしゃ、任せとき！」

紅牙は車イスを押しながら再び散策を開始した

「（…何か無いかな）」

と、プレゼントを探すのを忘れずに

「ぎょーさん買うたなぁ」

「…そうだね」

大量の買い物袋を車イスにひっかけて、はやては満足気にしている。
対照的に紅牙はどことなく暗かった

「（…見つからなかった。どうしよう…）」

結局、はやてのプレゼントは見つからなかった。やはり、値段が紅牙の所持金的に厳しかったりするものばかりだからであった

「こー君、どうしたん?元気ないけど…」

「…っ！いや、何でも……？」

「ん、何見てるん？…あぁ露店やってるんか」

紅牙の視線の先には、女性がアクセサリーを売ってる露店があった。
暫く見ていたが、やがて意を決したのか

「…はやて、ちょっと待ってて」

「ちょ、こー君！…まぁ男の子やし、ああいうの興味あるんかな？」

そして、置いていかれたはやては苦笑しながら待つことにした

「…すいません」

「あら、どうしたの？」

女性は営業スマイルで返す。先程からちらちら見ていた上に、はやての車イスは目立つ為、流石に感づいたので、

「（あら…もしかして、そうなのかしら。初々しいわねぇ）」

と、盛大に勘違いをしながら必死で商品を見る紅牙を見ていた

「（…これ、シグナム達の魔法陣についてたのに似てる）」

それは奇しくも、剣十字の形をしたシルバーのアクセサリーだった。
しかし、値段は書いていない

「…これ、いくらですか？」

「これ？えーと…あの子にあげるの？」

「…うん、誕生日だから何かあげたいんだ」

「そうなんだ…頑張るねー、少年！」

その商品は、一応は２０００辺りで客と交渉しようかと考えていたが、女性は悩んでしまう。小学生に２０００円はそこそこ辛い金額である。しかも、目の前の少年はお金を持ってそうに無い。だが、彼女（勘違い）の誕生日に何かを買ってあげたい、という心意気は汲んであげたい。そしてふと、目の前の少年が財布の中を確認している中で、千円札が一枚見えた

「（ちょいと痛いけど…ええぃ、ここで見捨てたほうが寝覚め悪いわよ！）」

と覚悟を決めると

「これなら、君はまだ小さいし千円でいいわよ」

「…え、いいんですか？」

少年が目を見開く。だが女性は心の中で泣きながらも笑顔で続ける

「いいのいいの、あの子も待ってるし早く行ってあげなさい」

「…ありがとうございます」

「しっかりやりなさいよー！」

お金を受け取り、簡易ケースな入れてから紙袋に入れて、少年に渡すと、少年は深く頭を下げてから少女の元に駆けていく

「あんな素直ないい子、やっぱ小さいうちからキープされちゃうんだろうなぁ…」

と、自分の男運の無さに凹みながら見送ることにした

「何買ってきたん？」

「…秘密」

「えー、教えてくれたってええやんかー」

「……今は、秘密…」

「こー君のケチー」

そして、戻ってきた紅牙は不貞腐れ気味のはやての追求を逃れる為に、車イスを押して進むことにした。しかし

「（…何時、渡せばいいの？）」

家に戻ってから渡すタイミングが浮かばなかった。ヴォルケンリッター達はまだ、はやての誕生日を知らない。したがって、家で渡すと微妙な空気になってしまうだろう

「（…どこかに寄って渡そうか…でも、公園くらいしか無いか）」

と珍しく頭を使いながら

そして、帰り道の途中で公園を通ることにした

「どないしたん？ちょい休む？」

「…そ、そうだね……今、やるしか無いか」

と意を決すると、緊張しながらも紙袋をはやてに手渡す

「……え？」

はやてが疑問を言う前に言ってしまう事にした

「…誕生日おめでとう、はやて」

「え、誕生日っ！？」

はやては固まる。その隙にたたみかける

「…そしてそれは、誕生日プレゼント」

紙袋を開けると、シルバーのアクセサリーが見えた

「何で…」

「…？」

「何でここまでしてくれるん？」

はやては震えていた

「うちは誕生日、一人ぼっちが当たり前や思ってた…こんな身体やし、友達もできんかったし、仕方ないって諦めてた」

「……」

「やのに、今年はこー君がいてくれた。今日はシグナム、ヴィータ、シャマルにザフィーラが来てくれた。友達に家族までできたのに…」

「…はやて…」

「もう、皆にこれ以上無いってくらいに貰ったのに、まだこー君はうちに優しくしてくれるんか…」

「…気にしないで、はやて。僕が渡したいから渡したんだ。僕も友達の誕生日に何かあげてみたかったんだ…でも、喜んでくれて良かった。実は自信無かったし」

「くれたってのが嬉しいねん…ありがとうな、こー君」

目に涙を浮かべながらも笑顔なはやてを見て

「…どういたしまして、はやて」

紅牙は、少し満足気に微笑んだ

その後、守護騎士達が誕生日と知り何か無いかと慌てるもはやてに制止され、ならばとシャマルが料理しようとしてシグナム達に止められる等、ドタバタとした1日を過ごす事になるが…

この1日が、はやてと紅牙、ヴォルケンリッター達の大切な思い出になったのは言うまでも無い

日常2　八神はやての誕生日（後書き）

どうも、あけましておめでとうございます。新年一発目のゲストはシャマルさんです

「あけましておめでとうございます…何故私なんですか？」

さて、今回は更新に日にちが空きましたが、それには、この話を一度書き直したからです。申し訳ない…

「何故書き直したんですか？…それと、質問に答えて…」

まだ、ヴォルケンリッターでは話を聞いてくれそうだからだ。ザフィーラも聞いてはくれそうだが、野郎同士でこの言い訳は…キツいｏｒｚ

「はぁ…」

まぁぶっちゃけると、これより数段糖分多目になっちまって、推敲段階で筆者が悶絶したので書き直しました

「これより…もっと酷かったんですか？」

うん、危うく年越し蕎麦噴き出すくらいにはヤバかった。これでも頑張って糖分減らしたんだ

「それにしても…紅牙君って、女たらしの素質でもあるんですか？」

あるかもしれん。本人は初めての友達だから色々初めてなんで、できうる事をやってあげたいって思いしか無いんだけどね

「…じゃあ、仮になのはちゃんやフェイトちゃんと先に出会ってれば、こういう事をしちゃったんですか？」

まぁ、結構やらかすだろうけど、はやては身体が不自由なのと、この頃はまだ大人しいから、余計に自分が～しなくちゃ、守らなきゃって意気込んでるのもあるだろうけどね

「じゃあ紅牙君にははやてちゃんは友達であり、守る対象であるってことですか？」

うん、ちなみに守護騎士達も守る対象になってるよ

「…それでシグナムやヴィータを呼ばなかったんですね（溜め息）」

…うん、ここでプッツンするだろうしね。紅牙は実は精神的にはかなり脆いって設定がありまして…

「え？あの環境でですか！たくましい子だと思っていたんですが…」

結構フェイトと似てるんだ。どれだけ嫌われても、捨てられても親の愛を求めてる。フェイトと違うのはアリシアがいた間が無い事。だからこそ、親の愛がどんなものかも知らず、どこまでも盲目的になってしまってる

「……うぅ、何か可哀想になってきました」

だからこそ友達であり、限りなく家族の温もりに近い…いや、家族そのものなはやてと守護騎士達を傍で見ていたい…って願いがあるんだ

「見ているだけ…何で入ろうとしないんですか？」

迂濶に入って、自分にとって理想の存在であるそれが壊れるのを怖がっているんだよ

「な…私達はそんなことをしません！紅牙君は恩人であり、はやてちゃんの親友なんですよ。どうして…信じてくれないんですか…」

あぁーシャマル泣かないで、俺が後で殺されるから…紅牙は家族の暖かさを知らないんだ。あっちが受け入れてくれても、どうやれば輪に入れるかすらわからないんだ。だからそれがふとした事で壊れてしまうことを極端に怖がっているし、それを壊す者は誰であろうと許さない。だからこそ、壊れた時は大変な事になるかもね

「何か考えないといけませんね…はやてちゃんも紅牙君も可哀想ですし」

それは頑張ってとしか言えないね。まぁ紅牙の家族への拘り…いや、もはや呪縛に近いそれを砕ければ話は別だけど…紅牙の両親が行方不明なのが、最大の問題だねぇ…

っと長くなっちゃったけど、今回はここまで！次は少し時間軸が進みますがまだ本編前…何時になったら入れるんだ…

「では皆さん、また後書きで会いましょう！」

…台詞取っても、次にシャマル出るの何時になるんだろうなぁ…（遠い目

第三章　白い魔王と白い冥王（前書き）

まだ顔見せ程度ですが、ついに魔王（なのは）登場です！

第三章　白い魔王と白い冥王

『先走った耐爬がやられて、既に3ヶ月が過ぎたわ、姉さん』

『だけど、【火】のブライストと【水】のガロウィンの適格者はまだ見つかっていない…』

『適性はある子達はいたけど…リンカーコアが無いから、使い捨てにしかならないわ』

『でも耐爬や塞臥みたいに死体を使うのは…それにアイツ、どうやら我々より先に解放されていた間に確保したみたいね…何かキナ臭いわ』

闇の中、二人の似たような声で会話が行われる

『でも、適性も本人の実力も申し分無し。私達より遥かにマシよ…姉さん、そろそろ動かないと…』

『そうね、タウ…この際、あの子達には悪いけど生け贄になってもらいましょう…あの汚らわしき裏切り者にして逆臣、【冥王】木原マサキを』

再び冥王の戦いの日々が始まる…

「さて、こー君。どこから行く？」

はやては満面の笑顔で、シグナムとザフィーラに連行される紅牙を見た

紅牙とはやて、守護騎士達が出会って早３ヶ月、新たな八卦や管理局の魔導士が現れる事も無く、平穏な日々が続いていた。紅牙には一月前に重大な事件が起きたが、ここでは割愛する

それまで生活が不安定かつ食事も適当だった紅牙は、八神家の食事に度々呼ばれる事になって、血色も微妙に良くなり、髪の毛の質も変わった。黒髪のバサバサの髪だったのだが、綺麗な黒髪へと変貌した。それを見たはやては

「折角綺麗な髪の毛やし、伸ばしてみるか？」

と勧め、今では紅牙は後ろでくくれるくらいには伸びてきた。それに合わせて身長も伸び、服も古着ばかりな上に合わなくなってきた

ので、見かねたはやてと守護騎士（主にシャマルが）デパートに紅牙を強制連行して今に至る

「…別に着れないわけじゃないし」

「アカン。折角こー君は男前やのに、ちょっとくらいお洒落にも気をつかわな…」

と紅牙の反論を封じるはやて

「仮にもお前は主はやてと共に居ることが多いんだ。みずぼらしい格好をさせて主に恥をかかせる訳にはいかん」

とシグナムがさらに畳み掛ける

「…ザフィーラの裏切り者」

「…仕方あるまい。俺と違って普段は獣の姿でいるわけではないのだからな」

最後の抵抗にジト目でザフィーラを睨むが、一応同情はしているのか目を逸らしている

「やから安いの探すさかいに、こー君は気にせんでええよ。うちは楽しいしな」

「…でも、はやてのお金、僕に使うわけには…」

「紅牙君、普段家でご飯を毎日一食は食べてる段階でもうそんな事言いっこ無しだと思いますよ？」

「…う〝…」

まだ葛藤があった紅牙だが、シャマルの言葉に何も言い返せなかった
紅牙はあれから基本的に夕食は毎日八神家でとるようになった。朝刊の配達の日ははやての家で朝食を食べてから寝ることもある
その為食事の事を出されるとぐうの音も出なかった

『（もう、完全に餌付けされたようだな、我が主よ）』

「（…ならあのご飯以上の食べ物出してよ、マサキ。【冥王】なんでしょ？）」

『（ククク…王がそんな真似するか？ならば適当な高級料理店でも襲ってしまえばいいだろう？食い放題だぞ？）』

「（…いいよ、それではやてのご飯のほうが美味しかったら…虚し過ぎる）」

『（…全くだな）』

マサキとも軽い馴れ合いができるようになったが、相変わらず言動が過激な事に変わりは無いので、はやて達には存在を伏せている

「（…ヴィータ辺りと衝突するのが目に見えてる）」

賢明な判断と言えよう

「こー君、はよ来てやー！サイズ測るの嫌がったんやから、試着くらいはしてもらわんとー」

「…わかった、今行く！」

そして紅牙は服を買う事になったのだが…

「…何でこんなに時間がかかるの？」

既に二時間が経過し、紅牙は若干疲れていた。どう考えても気疲れなのだが、紅牙には理解できない事ばかりで、その事にすら気付いていなかった

「女の買い物は時間のかかるものらしいな」

「…誰が言ってたの？」

「テレビで見た。世の中の真理の一つらしい、諦めろ」

「…そっか」

男二人で憔悴していた。手には数着の服と靴まであった。だが、はやての目の怪しい輝きは消えていない

「さて、こー君の服は終わったな。じゃあ…今度はうちらの冬服や！」

「…まさか…」

「そのまさかや！こー君には着いてきてもらうでぇ…楽しみや…」

戦慄する紅牙。はやてに服を買ってもらった手前、逃げる事もできない。視線で周囲に助けを求めるが…

「「「「……」」」」

はやてに先に何か言われたのだろう、えらく涼しい顔のシグナム、いつも通りの人の良さそうな顔のシャマル、狼狽える紅牙が面白いのかニヤニヤしているヴィータ、そして沈痛な面立ちで目を逸らすザフィーラ…

「……っ！」

完全な四面楚歌となった紅牙の腕を満面の笑みを浮かべたはやての手が掴む

「時間はたっぷりあるからな、こー君♪」

「…あーるーはれたー、ひーるーさがりー、いーちーばーへつづーくみちー…」

最初からこれが目的だったのだろう、鼻歌を歌いながらはやては紅牙（何かが壊れたのか子牛の歌を歌っている）の腕を掴んで進む（車イスはシグナムが押している）。そしてさすがにザフィーラは不味いので婦人服売り場のフロアのベンチにて紅牙の荷物と共に待機することとなった。彼はその主の指示に心から感謝したという

「さて、まずはスカートからにしよっか？それとも…下着からにする？」

「（…八卦でも管理局でもいいから来て…お願いだから！！）」

最近、はやてと関わる中で恥じらいを覚え始めた少年にとってそれは地獄のような時間だった。常日頃から無表情で反応も淡白な少年の分かりやすすぎる感情の発露は、彼とのコミュニケーションを望むはやてを大いに喜ばせ、彼の内なる人物も珍しく大爆笑していたという

「ねぇなのは、何であの子女物の服の売り場にいるわけ？」

「あの車イスの子の付き添いみたいだね。…にゃはは、何か可哀想だね」

奇しくも買い物に来ていたなのは達はその光景を目撃するなのはは予想だにしなかっただろう。その少年が、自分の生活にこれから深く関わって行くことになることを…

第三章　白い魔王と白い冥王（後書き）

さて、第三章始まりました。まだ9月ですが、今回でなのはさん登場と共に、本編を一部前倒しにするかもしれません

今回、はやての野望は2つ叶いました。紅牙にお洒落をさせること、それと…紅牙の恥ずかしがる顔を堪能する事です。ちょいとチビ狸っぽいですが、まだ子供のイタズラレベルだしいいかなってことで紅牙には犠牲になってもらいました

ちなみに余談で、これから数日紅牙ははやて宅に寄り付か無くなる、と言うのもやろうかと思いましたが、字数の都合で入らないのでカット。要望があるか余裕があれば書くかも？

そして、この章が終われば晴れて管理局（フェイト）を出せる！頑張れ俺…

そして、今はとあるキャラを殺すかで悩み中。割とお気に入りなんで、殺したくはないんですが、最近ＴＳＵＴＡＹＡで借りてきてＡ－ｓをまた見てると間違いなく紅牙に殺される結論に…何か考えないと

「ねぇ、作者さん…」

ん、今回は俺の独白だから誰もいないはず…え、ナゼ、ナノハサンガココニ？

「今回のタイトルについて…少し、お話しようか…」

ひぃっ！誰が助け…ぎゃあああああああああっ！！

第1話　予定外の帰還（前書き）

今回は、名前だけですがこの作品唯一の生粋の悪役登場ですではどうぞ！

第1話　予定外の帰還

「ええっ、裁判もう終わったの！！」

なのはは思わず叫んでしまった

「なのは…声大きいよ…」

「あ…ごめんね、ユーノ君」

ユーノのはまだ耳が痛かったが話を続けることにした

「陪審員の人が年配の方が多くてね…フェイトの記録を見たら大半の人が大泣きしちゃって…結果的に八割以上が味方についてくれたんで、スムーズに終わっちゃったんだ」

判決も想定していたよりもかなり軽めの処分で済む事になり、リンディ提督が保護観察を行う、という事で粗方終わってしまったのだ

「だから週末くらいにみんなで一度、そっちに会いに行くよ」

「みんなって、クロノ君達も？」

なのはは数ヵ月前に出会った人達の顔を思い浮かべる

「リンディ提督はフェイトの養子とかの件で遅れるらしいけど、僕とフェイトとアルフにエイミィ…とアイツの五人で先に向かうよ」

「そうなんだ…じゃあ、週末は賑やかになるね！」

「そうだね…じゃあ呼ばれたから、続きはまた今度ね」

「うん、楽しみにしてるから！」

ユーノからの通話を終える。近くの世界まで来ていたらしく、通信魔法で久々に話をしたなのはだったが、気持ちは既に先に向いていた

「フェイトちゃんが来るんだ…アリサちゃんとすずかちゃんにも教えてあげなきゃ！」

そうしてなのはの夜は更けていく…

「…やっぱ、ここはいいな」

『この場所がか？』

「…うん」

同時刻、紅牙は河川敷のサッカーグラウンドのベンチに座っていた。普通なら間違いなく補導される時間なので、なるべく街灯の当たらない場所にいる

『しかし貴様、まだ帰らぬつもりか？』

「…うん、今はまだ『居る』と思うし」

『貴様が貯めた財を食い散らかすハイエナがな』

「…マサキ」

紅牙の雰囲気が剣呑なものになり、厳しい表情になるがマサキは気にせず続ける

『息子を捨てたままでなら許そう。俺も人の事を言えた義理では無いからな…』

「…？」

首を傾げる紅牙に、己の失言に気付いたマサキは慌てて続きを話す

『だがな、捨てた息子から搾取を行うなどそれは最早親ではない。ただの下衆だ』

「…マサキ、やめて」

『いや、今回は言わせてもらう。貴様が帰宅するなり奴等が吐いた言葉なんだ？「まだ生きてたか、化物め」だぞ？貴様が俺を止めなければ、あの場で消していたぞ』

そう、一月前から紅牙の両親は帰ってきていた。…紅牙の貯めていたあぶく銭を奪う為に、足が残らず、かつ簡単に奪えるが故に…

実際、紅牙は両親の暴行にも一切抵抗せず、金を持っていかれるのも黙って見ていた。見ているしかできなかった

それが、紅牙にとって、唯一の両親との繋がりだから…物心ついた時から両親が自分に触れる時は、殴る時と蹴る時だけだった紅牙にとっての歪んだ…それでいて純粋な親への想いを確かめられる時間。

だが、それは最低な親に虐げられ、奪われる時間でもあった

「…服を一旦置いてきてよかった。はやてのくれた服を持っていかれるのは…辛いから」

『…紅牙、あの家を出ろ』

「…え？」

マサキは紅牙に諭すように話し始める

『はっきり言って、あの家に居る意味が無い。あれならまだ、あの小娘の所の庭でも借りて掘っ建て小屋でも作って暮らしたほうがマシだ』

「…好き勝手言うね、マサキ」

『当たりまえだ。宿主に万一のことがあってはかなわんからな』

「…大丈夫、刺されても、内蔵をやられなかったら3日もあれば治るし」

この頑健さと聖人の特性を持ったことは、ある意味紅牙にとって不幸だったのかもしれない。普通なら、とっくに死んでいてもおかしくないくらいの暴行を受けていても、たちどころに治ってしまうのだから

マサキは呆れながらも話を続ける

『なら弱音の一つでも吐いてみろ。貴様は本来ならまだ庇護を受けなければいかん年だぞ？…それがこの環境で強がってみせる。はっきり言って痛々しいにも程がある』

「…何が言いたいの？」

『もう少し周りを頼れ。俺は愚痴を聞くくらいしかできんが、小娘達なら喜んで力になってくれるぞ？』

マサキ自身も内心驚きながらも、話を続けてみる。すると紅牙の返事がくる

「…そんな事言われたの初めてだよ」

『…そうか』

「…僕のお父さんはヤクザだったから…心配はしても誰もそこまでは言ってくれなかった」

『貴様はそう考えていたのだろうが、周りはもどかしくて堪らなかっただろうな。そして踏み込めない自分の弱さにも苛立っているだろう。たまには周囲に頼ってみろ…流石に毎回こられるとウザいだろうがな』

「…わかった。今度やってみるよ…ありがとう、マサキ。心配してくれて」

『…っ！もういいだろう、さっさと戻るぞ、紅牙。俺は寝る。…それと、誰かが近づいているが魔力は無い。ならば問題ないだろう？ではな…』

「…あ…」

それを最後にマサキの反応が無くなってしまった

俺は一体何をやっているんだ？

マサキは驚愕していた。まさか自分の口から紅牙を説教するとは思っていなかった

代々の【冥王】と紅牙は大きく違う。基本的に【冥王】は力に溺れ、その力を己の欲望に使い、やがてティーダのように八卦の、自然の

意思に喰われ壊れる。今まではその、壊れた器を使っていた

だが紅牙は規格外であった。喰われるどころか、【天】の力を手懐け、初戦闘でこちらの乗っ取り無しでメイオウ攻撃を使いこなし、力に溺れることもなく、日常を送っている

確かに俺はヤツを、あの無欲な依り代を気に入ってはいる。だがそれは表面的な付き合いにおいてのみでは無かったのか？

それとも、全てはあのぬるま湯みたいな生活が原因なのか？

八神はやて達との日々。この姿になってから初めての優しき日々…

それが俺をも変えつつあるのかもしれない

フッ…俺も、随分と毒されたものだ…

そこには、徐々に表情と感情を取り戻しつつある紅牙の成長を見守るのも悪くない…そう思う、八卦達が見れば目を疑うような、木原マサキがあった

まぁいい、紅牙よ…貴様の生きざま、見せて貰うとしよう。八卦を殺し尽くした先に、貴様がどう在るのかをな…

そしてマサキは眠る。来るべき八卦との戦いに備えて

第1話　予定外の帰還（後書き）

マサキがどんどん善人になっていく…一方通行みたいな悪党にしたいんだけどなぁ…難しい

紅牙の両親が描写は無いけど登場します…が、ぶっちゃけ救いの無い悪党です。プレシアと違って元は善人って描写すらありません
登場予定の他のヤクザは瀬戸の花嫁の方々くらいには善人なんですがねぇ…

で、現在親にはブッ殺し予定が無いのですが…本音は殺したいけど、殺しにくくて仕方ないのです。A'sのシナリオ的に、終盤前には退場願いたいのですが、下手な殺し方すると紅牙が壊れそうですし…難しいですねぇ

１０万ＨＩＴ突破記念　幕間？（前書き）

１１万アクセスにユニークがもうすぐ１万５千…頑張っていこうと思います！

１０万ＨＩＴ突破記念　幕間？

オィィィ！何かＨＩＴ数増えすぎだろ…三章終わる前に幕間書くのは覚悟してたが、冒頭は想定外だったわ…ってか現在１１万…幕間が追い付かないでござるｏｒｚ

「しかも、あのような外道登場回とは…本編内で知っていればレヴァンティンの錆にしてくれたものを」

え、何でシグナム？紅牙とマサキは？

「何でも紅牙の両親の腐った設定を出すそうだな。教育に悪いと言う理由で、主はやてによって捕獲された」

はやて相手だと、ホント雑魚に成り下がるな、紅牙は…

「では、さっさと出して貰いたい。記念すべき１０万ＨＩＴでこんな話は続けたくない」

…了解、では

父親

ボクサー志望だったが、夢破れてヤクザの鉄砲玉に。そこから少しは成り上がるも増長し、干されかけたら今度は組の金に手を出してしまい、夜逃げする際に息子を刺して逃走する（肩で受けたので、傷は3日でほぼ完治）
紅牙を小銭を出す機械程度にしか見ておらず、本作屈指の最低キャラ

ガチャンッ！

あー…何故カートリッジロードしてるの？マジ怖いッス…

「…続けてくれ」

母親
世界を目指すという夢に乗っかって玉の輿に乗り損ねた愚か者
自分が化物を産んだと軽く病んでおり、こちらも紅牙を子供として見ていない。できうることなら殺したいくらいに考えている

設定は以上。名前はウザいから無しにした。扱い的にも名前で呼ばれる事無さそうだし

「……（剣を構えてプルプルしている）」

まぁ紅牙が意図的に伏せてた理由を察してやれ。はやてにだけはこ

の親を見せたくなかったんだろうよ…俺から見てもこれならさっさと沖にコンクリ抱かせて沈めて欲しかったくらいだわ…

「コイツ等は、報いを受けたのか？」

報いは一つ目は確定してる。ただ、これだと絶対死なないし、数年したらシャバに出そうだから無期懲役の服役（おつとめ）かマサキにめいおー☆してもらうか、他の八卦にズンバラリン辺りで考えてる

「（プロットを見て）…なるほど。これならまだ納得がいきそうだ…だが、紅牙は…」

こんな環境だからこそ、お前達に自分がボロボロになっていく姿を見せたくなかったんだろ？一応弁解はあるだろうからそこで聞いてやれ

「心得た」

これだけだと何か嫌なんで三章以降も支障が無い程度に軽く話すか

「なら質問を出そう。テスタロッサの裁判を早く終わらせた理由は？」

これは八卦が絡むから、戦いが多少は長期化するだろうって予測と、紅牙の誕生日までになのはとフェイトに会わせたかったってのが一つ

「しかし、それでは私達の正体が…」

すずかとのエンカウントさえ12月にしてしまえば、紅牙の誕生日を乗り切れば問題無くなるんだ。お前達だって、闇の書の侵食がキツかろうが、八卦とのエンカウント考えたら単独で動くの辛いだろ？

「…確かにな。一対一では悔しいが、攻撃力が遠く及ばん」

それと…あんないい子が責任能力の有無すら危ういくらいに逝っちゃったプレシアに命令されて、仕方なくの段階で同情は買えるだろ？

「だろうな」

だからさっさと終わらせたんだ。こんな勝ち確の裁判を長引かせたクロ助が悪いのか、監理局がボンクラの集まりなのかは知らんが、フェイトがなのはとイチャイチャできる時間は供給してやらんと…

それと、困ったことになった

「何が困ったのだ？」

聖祥ってやっぱエスカレーター式の私立なのな…こんな所に紅牙を通わせられないじゃないか…金銭的な問題で…

「…むぅ…ならば主はやてが出すのは…いかんな、むしろ意固地になって公立に行ってしまう光景しか見えん…」

先にはやてを聖祥に通わせるにしても…無理、だな。コイツの再生速度考えたらミンチにでもしなきゃならんかもだが、次元連結システムありゃ分か秒の世界だし

「チート能力で生活水準は上がらないからな。特に金銭面は」

一応、案はある…（プロット見せる）

「……これは原作後半が大惨事になるだろう？」

仕方ないさ。はやてをヒロインにするには鞭も必要なのだー！

「ほう？主を不幸にするのは確定事項か」

ジャコンッ！

…何で弓持ってるの？…って幕間で必殺技使うんかい！

「やかましい、滅せよ外道が！…駆けよ、隼ぁっ！！」

ぎゃあああああああああああっ！！

「悪は滅びた。次の後書きには復活してそうだが…まぁいい。その時はまた倒すのみだ」

１０万ＨＩＴ突破記念　幕間？（後書き）

「そして後書きはうちらがいただきや」

「…はやて、何かセコい」

「ええねんて。たまには」

「…まぁいいや。作者、実は姉妹以降に困っているんだって」

「何でや？」

「この作者、ＳｔＳやってた頃に週６バイトに教習所に学校重ねる無謀な真似してたから、リアルタイムでほとんど見てないから困ってるんだって」

「ってことはＳｔＳキャラは割と適当になるんか？」

「いや、作者が無い金使ってチマチマＤＶＤ借りてるみたい」

「…でも、ゼストやメガーテ辺りを知りたきゃ後半まで見なきゃな

らないしね」

「まぁええわ。その分大人の恋愛があるで！」

「…ふーん」

「あれ、何か冷たいで…」

「…気のせい…じゃあ、また」

第2話　影より支える者（前書き）

お久しぶりです

言い訳は後書きにてさせてもらいます

第2話　影より支える者

「見つけた。探したよ、紅牙君」

紅牙の前には黒いスーツの男がいた。マサキが引っ込んだ事からも、彼が魔法に関わる人物では無いが…そのまとう気配で、彼を一般人と呼ぶ人間はいないだろう

「…桧山さん、どうしたの？」

「なんでこんな時間にこんな場所にいるんだい？君の仕事はもっと遅くなってからじゃなかったはずだが…」

彼を知る青年は怪訝な顔をしている。少なくとも彼の知る少年は、無意味な夜遊び等はしないし、そんな経済的な余裕も無い。すると、考えられる事は一つ…

「奴等、だね…安心していいよ。私達がさっき行ったらもぬけの殻だったから」

「…そうですか、ありがとうございます」

紅牙はベンチから立ち上がり身体を伸ばす。身体のあちこちがコキコキとなるが、気にしないことにした

「…紅牙君、あの家を出ないかい？」

「…桧山さん、僕は…」

「わかってる。でも、本当なら君は学校へ通い、同年代の子達と遊び、勉強をして過ごしているはずなんだ…！」

桧山と呼ばれた青年は拳を握りしめていた。その右手が震えている

「我が組の人間の不始末はつけなくてはいけない。だが、君はむしろ被害者であり日が当たる場所で生きるべきだと、親父さんも俺達も、そう思っている」

彼、桧山はヤで始まる職業の人間であり、紅牙の父親は彼の部下であった。そして、彼等が逃げてから、彼の生活を裏から支えている人間の一人でもあった

「…でも、僕にとってあの人達は…」

「それでも、だ。君はまだ小学生だよ？例えば…」

片付け忘れていたのだろう、ベンチの傍にあるサッカーボールを手に取る

「昼間、ここでサッカーをしている少年達と混ざっていていい存在なんだ。だから…」

もう、何度目になるかわからない説得。彼は自分の立場故、あくまで彼が自分の意思で決めなければ助けるわけにはいかない。ずっと歯痒い思いをしてきたが、彼は説得を諦めなかった。そして、彼の知らぬもう一人の人物により、遂にそれが成る

「…少し、時間をください」

「…っ！本当かいっ！！」

「…まだ少し考えてみたいから…でも、それでどうしようも無い時は…お願いします」

「わかった、何時でも連絡してくれよ、紅牙君！」

「…では、もうすぐ仕事なので、これで…」

「ああ、いってらっしゃい」

この国の労働基準法では紅牙の年齢で働くことはできない。だから給料は出せないのだが、桧山達が金を新聞屋に渡し、さらに警察にも黙認させていた

紅牙は影より多くの人に支えられていることを知らない。だが、人

を頼ろうとする意思を見せ始めた彼が、それを知るのは遠い日では無いだろう

「さて、私ももう一仕事するか…」

桧山は携帯を取り出し、とある番号を押す。数回のコールの後、電話は繋がった

「…夜分遅くに申し訳ありません、高町さん」

『いえいえ、気になさらないでください…今日はどんなご用件で？私はもう現役ではありませんよ？』

「以前話させていただいた、部下の不始末の件ですが…ようやくあの子がこちらの話を聞いてくれるようになりまして…」

『そうですか、それは良かった』

電話の相手の声からも、喜んでいることがわかる。彼も愛娘と同じ年齢の少年がそんな生活を強いられていることに、心を痛めていたのである

「なので、彼が助けを求めた場合に、すぐに保護できるように準備をしてほしいのです。勿論一時的なもので構いませんので」

『わかりました。妻も男の子も欲しかった言っていたので喜びますよ』

「ありがとうございます。では、準備ができ次第連絡させてもらいます」

『連絡をお待ちしていますよ』

「それでは…夜分に失礼しました」

桧山は電話を切る。その顔には、部下が見たら明日は槍でも降るのかと勘違いしそうなくらいの満面の笑顔があった

「ようやく一歩前進だ。さぁ、確実に歩みを進めていこうか」

そして、桧山は影に戻る。あの少年を蝕むあの男達を排除し、彼に日の当たる場所に歩いてもらう為に…

「恭也、美由希、話がある」

電話の後、士郎は息子を呼び出した。もう日付の変わる時間に呼び出されたので、二人とも少し眠そうである

「何だよ父さん、明日も早いんだから早く済ませてくれよ」

「何、すぐに終わる…この写真を見てくれ」

二人に一枚の写真を見せる。そこには商店街を歩く、黒髪の、表情の抜け落ちた様な少年がいた

「この子がどうしたの？」

「この子は、とある組の金を持って逃げた男の息子なんだが…」

士郎は桧山から以前に聞いた話…特異体質の為に酷い虐待、ナイフを身体に突き立てられていた事、去年に両親が組から逃げた際にも無一文で捨てられた事、さらには必死に新聞配達を続けて両親の帰りを待っている事を話した
その話を聞き、恭也は苦い表情をし、美由希は涙を浮かべていた

「…だが、彼を無理矢理保護しても、彼はその驚異的な身体能力で

以て逃げ出し、家で飲まず食わずで待っていたそうだ…見かねた組の者が食べ物を渡そうとしたが、受け取れない、迷惑をかけられないと口にしなかった。だから彼に仕事を斡旋し、現金を渡すことで生活をさせているらしい」

「何ていうか…気むずかしい子だね」

美由希が答えるが、士郎にも苦笑いを浮かべている

「そういうのが迷惑をかけている、と自覚できてないんだろうね。背があるから少し大人びて見えるが、なのはと同い年だそうだよ」

「…ほう。でも金を渡している割には服を古びているし、血色も悪いみたいだけど？」

「今は交流をしている同年代の子がいて、食事は改善傾向にあるらしいが…最低限のお金以外は決して使わないらしい」

「何で？」

「理由は不明だが、それも時折戻ってきているらしい彼の両親に奪われた、とのことだ」

士郎の拳が堅く握られ震えている。同じ親として許せないのだろう

「だが、彼もようやくこちらを頼ろうとする意思を見せ始めた。だ

から何かあった時は家で一時的にとはいえ保護する予定だ」

そこで、と一旦言葉を切ってから士郎は二人に告げる

「二人にはこの子…四季紅牙君の護衛と監視を近いうちにやってもらうことになる。だから暇な時にそれとなく見ておいてくれないかい？」

「了解だ」

「わかったよ、お父さん」

「話は以上だ。遅くにすまなかったね」

そして、四季紅牙を守る大人達の戦いが、本人の気付かぬ影より始まっていた

第2話　影より支える者（後書き）

どうも、一月近く放置になってしまいました…申し訳ないです

「…言い訳は、あるのか？」

一応、リアルで学校の実習授業が始まったのと…ここから残りの八卦出すタイミングで悩んでたんだ。シグナム

「そうか…ああ、心置き無く斬れるようにマサキに頼んで紅牙は退場させてもらったからな。遠慮せず死ね」

ああ、ならぶっちゃけていくか！…前回（前々回？）は紅牙を取り巻く駄目な大人が出てきたが、今回はまともな大人の登場だ

「桧山、と言ったな。彼はヤクザなのか？」

ああ。しかも若頭の位置で妻が出産の際の事故で母子共に亡くなった、という悲しい過去があって跡継ぎは兄貴に任せて自分は下働きをしてる

「また重い設定を…」

それからかなり塞ぎ込んで冷徹な幹部みたいになっちゃったけど、紅牙に自分の子供の影を見てる。だからこそ叶うならば、紅牙を自分の手では日の当たる場所で暮らして欲しいと願っている

「こっちは悪人に見えて善人なのか」

ああ、そして今回は戦闘民族高町家の方々が登場しました。今回は出番無かった桃子さん含めて、なのはより絡みが多いかもしれませんね

「ん？待て、では紅牙は…」

それはネタバレだから言えないなぁ、ではまた次回！

「なっ、そこになおれ！今すぐ剣の錆にしてくれる！！」

両者退場につき後書き終了です。暫くは更新できそうなんで頑張っていこうと思います。ではまた次回！

第3話　翠屋ＦＣ（前書き）

また遅れました…詳しいことは後書きにて

第3話　翠屋FC

次の日、紅牙ははやて、シャマルと買い物に出ていた

「…結構買ったね」

「安かったからつい、な」

「紅牙君がいれば商店街に顔が利きますからね」

そして買い物を終えた彼らは商店街を出て、河川敷の公園にて休んでいた

「サッカーやっとるね」

「…うん」

この場所は奇しくも昨日、桧山と話した場所だった。それを思い出し、少し考え込む紅牙を見て

「暫くおるから、ちょっと見てくるか、こー君?」

そのはやての言葉と共に狙いすましたかのようにサッカーボールが

転がってくる。よく見ると、向こうで少年達が手を振っている

「こー君、返したってくれるか？シャマルもスカートやしな」

「…ん、任せて」

紅牙はサッカーボールを手に取ると、軽くトスしてボールを高々と蹴る

ドゴッ！！

凄まじい音と共にボールは射出され、少年達の頭上を通り越し、サッカーコートを斜めに切り裂きながら監督らしき人物の元へ届く。その人物はしっかりとボールをトラップしたが、その人物も、少年達も、はやても唖然としていた

「嘘やん…一発で届くんかい」

「紅牙君の身体能力なら簡単なことですよ、はやてちゃん。むしろボールが割れないように手加減してますし…」

「…ん、ちょっと張り切り過ぎた」

向こうで少年達がこちらに話しかけるかと話し合っていたが、どう

やら試合が始まるらしく、こちらをチラチラと見ながら戻っていった

「試合始まるみたいやな…ならちょっと見ていこうか」

紅牙がサッカーに興味があると勘違いしたはやては紅牙と一緒に試合を見ることにする

「（彼が四季紅牙君か…）」

翠屋ＦＣの監督、高町士郎は先程の少年が紅牙であることを知り、先程のロングボールで彼の身体能力の高さを知ることになった

「（まさか、ここまでとは想定外だった）」

確かに、このくらいは大人ならできるかもしれない。だが、彼はまだ１０にも満たない少年でしか無い。そして彼には今のが手加減さ

れたものであることまでわかった

「（桧山さんの言っていたことがわかったよ。確かに異端の力だけど…幸い、一緒にいる少女や女性とは普通に話しているようだが…あれは、危険だね。自分の力を割と無意識に使ってしまっている）」

当然ながら、あの年頃の体格の少年ではあの距離を飛ばすのは不可能に近い。そんな事を考えている間にも試合は進み、こちらが攻めこまれている。声を出すが、相手のＦＷは優秀だ。たちまちペナルティエリアに入られてしまったが、飛び出したＧＫと交錯し、お互いに転がった

「…ッ！大丈夫かっ！！」

ＦＷの少年はすぐに起き上がったが、ＧＫの少年は額を浅く切っ上にふらついている。軽い脳震盪を起こしているかもしれないので、士郎が抱えてベンチへと移動する

「流石に、病院に行ったほうがいいな」

ベンチでぐったりしている少年の状態を見てそう判断した士郎は、子供たちに暫く試合を任せることにして、病院に急行する。残された少年達は…

「誰がやる？」

「神埼より上手い奴いねーしなぁ…」

誰もあの少年、神埼よりＧＫに優れているわけでも無く、あの敵の猛攻を防ぐ自信も無い

「それに…あっ！」

悩みに悩んだ所で少年たちは一つの結論に行き当たる

「…あの子、怪我してたみたいだね」

「大丈夫かな？」

「…見えた分には傷は浅いし、脳震盪起こしただけだと思うよ」

「そっか…でも、試合は止まったままやなぁ」

すると、何人かの少年がこちらに走ってきた。息を荒げながらも、少年達は用件を話す

「なぁ…、GK…やってくれないか？」

「…僕が？」

「ああ、他にできる奴いないんだ…神埼の為にも勝ちたいし、頼むっ！！」

頭を下げる少年達を見て紅牙は少し考えていたが

「…はやて、遅くなるから先に帰っててていいよ」

「わかったわ。でもこー君がやるなら尚更帰るわけにはいかんなぁ」

「じゃあ、私が先に荷物だけ置いてきますね」

「いいのかっ！」

「…うん、いいよ。でもGKよく知らないからルールだけ教えて」

移動しながら簡単な説明を受けた紅牙はユニフォームを借り、グロ

ーブをつける

「悪いな、付き合わせてよ」

「勝ったらジュース奢るぜっ！」

「ってか彼女の前で無様な姿は晒せないしな」

「違ぇねぇ。俺達が何が何でも一点取る。だからお前はゴールを頼むぜ」

「…ん、了解した」

仮初めの仲間達の励ましの中、彼女と勘違いされているはやてからも檄が飛ぶ

「こー君、負けたらおかず減らすからなぁーっ！！」

「…ん、負けられない」

付き合いの無い少年達にはわからなかったが、紅牙は深く、静かに燃えていた

夕食のおかずを守る為に

「あ、サッカーやってる」

「なのはのお父さんのチームじゃない？でもおじさんいないよ？」

フェイトの歓迎会の為の準備をしていたなのは達は、たまたまその試合を目撃していた。そして彼女達もこの日、知る事になった

四季紅牙という少年を

第3話　翠屋ＦＣ（後書き）

どうも、最近遅れ気味な赤鉄です

遅れた理由としては、ちょこちょこと書いていましたが、大人達の暗躍後の紅牙の処遇です。一応、２ルート用意してますが…

高町家ルート
そのまま高町家に引き取られるルート。こちらだとＳｔｓの展望もありますが、紅牙は監理局に入らず、はやてとのフラグも叩き折ります。フェイトと多少仲が良くなるくらいで、なのはとは何にもありませんｗｗｗ

八神家ルート
闇の書事件後、八神家に住み着くルート。位置的には第６の騎士（これだとリインフォース・ツヴァイが７番目になります）としてはやてと共に監理局に嘱託として（表向きは）従うルート。一応ははやてにフラグを立てきっているが…

共通しているのは、Ｓｔｓではしっかり監理局嫌いになっている事、違うのはなのは達との交遊関係ですね

前者は敵対直前、後者は一応は味方、ヴォルケンリッターとは諸事情でどっちも仲は良くも悪くもなっていません

取り敢えず希望のある方は金曜日（１２日）までに感想に書いて下さるとありがたいです

そして現在のもうひとつの悩みは、クロ助…コイツは間違いなくマサキの逆鱗に触れちまうだろうし、紅牙すらキレさせかねないからタイミングを考えないと死人が出てしまうｗｗｗ

ではまた次回の後書きで会いましょう！

第４話　小さな前進（前書き）

タイトルは紅牙の成長を書きたかったから

そしてかなり痛い事が…

第４話　小さな前進

「あんなの、反則だよ…」

サッカーの試合は２－０で翠屋ＦＣの勝利となったが、その表情は暗い。対戦相手に至っては膝をついている者もいる。向こうの監督も呆然としている

「…ん、勝った」

紅牙はおかずを守れた為かホッと一息をつく。心なしか、その表情には満足気なものが感じられる

試合は酷いものであった。チームの支えを早々に失った翠屋ＦＣは前半、一方的に攻め込まれる事になり、１５分足らずで２０本近くのシュートがペナルティエリア内から撃ち込まれた。普通ならこの段階で勝負がついてしまうのだが…

「…点は渡せないっ！」

子供同士の為、聖人の能力をほぼ封じきっても、紅牙の身体能力は圧倒的といってよかった。その反応速度でシュートをことごとく止めてしまい、０－０で前半を終える

圧倒的優位なのにゴールを奪えない。それが相手チームを浮き足立たせ、無茶な攻めをしてしまう。そこに苦し紛れのカウンターが決まり、リードを奪うと相手は恐慌状態となる
こうなると守りも甘くなり、追加点を許すと相手チームは試合終了を待たずに気持ちが折れてしまった

「最後まで諦めるんじゃないわよ、見てて腹立つわね！」

「アリサちゃん、あれは仕方ないと思うよ…」

「猫の手を借りてきたら虎だったものね…」

ぶっちゃけ、なのは達はサッカーをよく知らない。だがあの少年が如何に常軌を逸しているかはよくわかった

「でも、あの子…学校で見たこと無いよね？」

「公立なんじゃないの？もしくはたまたま遠出してきただけなのかも？」

「私は何か見たことある気がするなー…やっぱり公立の子なのかな」

結論は出なかったが、いい時間になっていたのでなのは達はその場を後にする。そしてなのはは近い未来、この少年と強烈な再開をする事となる

尚、余談だがなのはが紅牙の姿を見たことがあるのは単に新聞配達をしているのを見ただけである

紅牙はユニフォームは洗って返すと伝えると、着替えて立ち去る事にした。少年達が呆然としている間に帰った方が余計な詮索をされずに済むと考えたからである

「…お疲れ様、こー君」

「…ん、ちゃんと試合は勝った。だからおかずは抜かないでね」

「うん、わかっとるよ」

そこには、さっきまで相手チームを恐怖のドン底に叩き込んだＧＫの姿は無く、何時もの紅牙がいた。はやてにはそれが無性に眩しく見えた

「（こー君は、本当なら今みたいに皆の注目を浴びるヒーローみたいになれるのに…うちが、足引っ張ってるんかな？）」

暗い気持ちになるはやてを見て、紅牙ははやての車椅子を押しながらぼそりと言葉を並べる

「…以前の僕なら皆に混じってサッカーをする事なんて無かった。適当に断って終わり、そのはずだった」

「え？」

紅牙は独白を続ける

「…僕が変われたのは、はやてと出会えたから。だから僕は変わっても…ちゃんとここに居る。黙って居なくなったりはしないから、安心して」

「…うん、ありがとうな。こー君」

はやては顔を俯かせ、声を押し殺して泣く。車椅子を押す紅牙に自分の泣き顔を見られたく無い為に

「おい、どーすんだよ。渡しそびれたぞ」

「あの空気に割って入る度胸、俺にはねーわ」

「「「同意」」」

ジュース奢る約束をしていた為、律儀に自販機で買って後を追った少年達だが流石に入れる空気では無かった

「まぁ今度来た時にでも奢ればいいんじゃね？」

「また俺の財布からかよ！」

「言い出しっぺなんだから払えよ。今月辛いんだよ」

「うるせー、せめて誰か半分出せよ」

「「「だが断る」」」

「チッ、せめてチェリオでも探すか…」

「ならスーパーでアメリカンコーラでも買っとけよ。安いだろ」

「デートの邪魔されて、報酬に温い炭酸飲料とか渡されたら、俺ならその場で振って発射してゴング鳴らすな」

「「「ですよねーｗｗｗ」」」

まぁ、次会った時に考えるか…と少年達もその場を後にした

その少し後、

「主はやてに何をした！正直に薄情しろ紅牙ぁっ！！」

泣き疲れて眠ってしまったはやてが答える訳もなく、紅牙はシグナムの問い詰めと言う名の戦闘訓練に付き合わされるハメになる

暫くしてはやてが目覚めるがそれを問い質すと、二人とも顔が真っ赤になって逃げようとするのでうやむやになった

これは闇の書を巡る悲しい物語が進む前の束の間の日々の、最後の思い出となった

第４話　小さな前進（後書き）

どうも、また更新が遅れました。一応理由は２つありますが…

・携帯にスタンドが降臨

キングクリムゾンッ！俺の携帯の時間を吹き飛ばすっ！！

はい、携帯が壊れました。ＳＩＭカードの読み取りに失敗するようになった為、電話やｉモード操作ができなくなったり、一旦電源を落とすと今度はついたり消えたりを繰り返し暫く操作不能になったり…

泣く泣く修理に出したら代機の性能が酷いわ、ＳＤカードの相性悪くて読まないわで貯めてたテキストも使えずまた書き直しｏｒｚ

２つ目は
単行本
なのは関連で最近買ったのですが、冥王は既に居るんですよね（汗
冥王の話をこの章で触れようと思ったのですが、これ見てしまった以上、軌道修正していました。というのが真相ｗ実は今も目処は立ったけど修正中だったりします

この章で最後以外にフェイトを出すのを諦めれば、早い内に更新があると思います

あ、アンケートについては八神家ルートの圧勝ｗｗｗ高町家ルートのメリットとかもあったのですが、次の幕間にでも簡単な話の展開でも説明しておこうかと思います。何で携帯がアンケートやってる時期に動作不安定になるかなｏｒｚ

愚痴ばかりになってしまいましたが、また次回の後書きでお会いしましょう！

２０万ＨＩＴ記念、幕間（前書き）

閲覧が気が付いたら２０万超えてた。感謝と共に何か気後れがｗ

２０万ＨＩＴ記念、幕間

もう２０万ＨＩＴか…早いものですね

今回はアンケートで見事に総スカンくらった高町家ルートの軽い流れをバラしてみます

闇の書事件以降、紅牙は高町家に引き取られて恭也と美由希の弟子として、戦闘民族に恥じない戦闘技術も習得。遠近共に死角無しの極悪魔導士に成長するが、とある事情にて監理局とは関わらずに生活する。
そして監理局入りを決めたはやてとのフラグをここで叩き折る。ここでなのはともこじれる

『…そんなもの、見たがる奴がいるのか？』

いたのかマサキ。これはまだ始まりに過ぎん

諸事情で機動六課に入るが、予定ではクイントも殺してるからスバル、ティアナの家族の仇だし、なのはとは真っ向から敵対、はやては無視なんでフェイトが苦労する事に

『胃に穴が空くんじゃないか？』

うん、この導入段階でキツい人が出てくると思ったし、それなら八神家ルートでいい気がしてきたんだ。どうせはやては苦労するし

『お前、実ははやて嫌いか？』

いや、どっちかって言うとなのはや特にＡｓまでの監理局側の連中が嫌いかな。Ｓｔｓは老害ばっかりだし最早論外

『脳味噌とか、俺が見たらまず消すだろうし、レジアスも初見で立場を分からせるだろうな』

はやてが紅牙の問題を解決できない限りはＡｓシナリオ終了から進展はあり得ない、とだけは言える。だから紅牙が下手にフラグ立てるとはやては一気にピンチになりかねない

『（プロット見ながら）これ、Ａｓでもフェイトの出番多いがよくフラグ立たないな』

そういう立ち位置の微調整はフェイトは上手そうなんで、仲の良い友達止まりにしかならなさそうだし…今の段階でフラグが剣山みたいになってるはやて見たら遠慮してしまいそう

『それはあり得るが…それと雑魚共（八卦）はどうするんだ、一部の生存を願う声があるが？』

現状、メガーヌが生存確定（ルー子を生後数ヵ月とするば一応殺せるけど）、流石に2才くらいまでは親元で育たないと親に拘らないだろうし…
そしてゼストもチンクを眼帯にするか否かで生かすかどうかが決まる。ってかコイツが紅牙の一番の強敵だから多分生き残りそうだ

『そうなると…クイント辺りが一番危険か？』

ああ、スバルが5才ならここで死なせてもいいし、ティーダ殺したから、仇の構図にしやすいんだよね

一応、紅牙をブチ切れさせる役で猫姉妹の代わりの生け贄を探してるが…これやったらヤバいかもなぁｗ

『（プロット見る）だが、シナリオ的にはまとまるな。クズにしては上等だ』

うるせー、後は防衛プログラム戦の為のお膳立てだな。迂濶に紅牙使うと一人で終わりかね無いｗｗｗ

『俺達なら仕方あるまい。今更何を気にする、腐れ作者よ』

スパロボでラスボスを単機無双やったけどさぁ、あれはやり過ぎると戦闘終了後の会話イベントが白々しく見えるぞ？

『…それは言ってはいかんだろう』

某ＦＦＴ動画でアグリアスさんの殺し文句を聞いた直後に女をナンパして使い捨てにする鬼畜王みたいになるぞ？

『…すると監理局は、眠らされた味方をジャンプで叩き起こして永眠させる鬼畜騎士団になるわけか。言い得て妙だな』

…てめぇ、瞼の裏に眠らされたスバル達をジャンプで睡眠→永眠にさせられているエリオが見えたじゃないか、どうしてくれるｗｗｗ

『知るか』

ああもうｇｄｇｄになってきたし、今回はこれまでにするか。次からちょっとずつですが、本筋の話も動いていきます

『ククク…次の４月の実習までにある程度終わらさないと、今年中に終わらせるのは絶望的だぞ？』

まぁ気合い入れるしか無いさ。では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

第5話　忍び寄る狂気（前書き）

今回は何時もよりさらに短めです

第5話　忍び寄る狂気

『そろそろね…』

『ええ、どうやらあの子達の傍に魔導士がいるみたいね。できれば離れた時を狙いたいけど…』

『あんなの、ただの子供じゃない。邪魔するなら適当にあしらえばいいんじゃない？』

『監理局に嗅ぎ付けられると厄介よ。私達にはあの組織は足枷にしかならない』

『確かにね…』

そこで言葉が一旦切れ、図らずも同じ言葉が放たれる

『『木原マサキを殺す為だけに生きる私達には』』

そう笑う、火と水の八卦たるシ・アエン、シ・タウ姉妹の顔には

明らかな狂気が宿っていた

「久しぶりだね、なのは」

「うん、久しぶりだね。フェイトちゃん！」

普段、なのはが訓練を行う桜台の公園で二人は再会を祝っていた

「クロノやユーノ達はちょっと遅れるって言ってたよ」

「そっか…じゃあ今のうちにアリサちゃん達の所に行こっか」

「うん、なのはの友達…会えるの、楽しみ」

二人は予定を変更し、アリサ達の所に向かう。それが新たな戦いの発端となるのを知らずに…

「なのは達、フェイトちゃんの身内が遅れるらしくって、先にこっ

ちに来るってさ」

携帯のメールを見ながらアリサはすずかに話す

「あ、こっちにもメール来たよ。なら私達も早く翠屋に行かないとね」

時間潰しに買い物に出ていた二人は早々に切り上げることにする。
来た道を戻る為に振り返ると、二人組の同じ顔の女性が立っていた

「ごめんなさい、ちょっと道を聞きたいの。いいかしら?」

女性の片方が柔らかな物腰で話しかける

「知人と翠屋という喫茶店で待ち合わせをしているのだが…どこにあるのか知らないか?」

そして、もう片方の女性が少しぶっきらぼうな言い方で聞いてくる。
同じ顔から違う口調で話しかけられるのに戸惑ったが

「翠屋ならこの先です、私達もそこに向かうのでご案内しましょうか?」

すずかが返すと、最初に話しかけた女性が

「ありがとう、じゃあ案内をお願いできるかしら？」

そしてアリサとすずかは二人組の女性を伴って翠屋に向かう

「（姉さん、何を回りくどい事してるの実体の無い私達がこの姿を保つのはキツいのよ！）」

「（だからよ、人気の少ない所を通った時に仕掛ければ結界も最低限で済むわ。大規模な結界を張れば木原マサキに気付かれる。せめて、不意打ちを仕掛けて先手は取りたいの）」

「（ちゃんと理由があるなら文句は無いわ…）」

そして、住宅街の中を二人の少女が知る近道とやらを抜ける時、結界が張られた

「え、何これ。壁みたいになってる」

「ちょっと！囲まれてる…出られないじゃないっ！」

突如、結界に閉じ込められた二人はパニックを起こす。姉妹はゆっくりと忍び寄り、その二人の肩を掴む

「ごめんなさい、恨みは無いけれど…」

「貴女達の身体と命…使わせてもらうわ」

シ姉妹の身体から出てきた黄色い宝玉がアリサとすずかの身体に沈み込んでいく。その苦痛と違和感に二人は悲鳴をあげる。だが…

二人の悲鳴は、最後まで結界の外に届くことは無かった

第5話　忍び寄る狂気（後書き）

フェイトは今回は自重する、フェイトは今回は自重する、フェイトは今回は自重…ヒャアッ、もう我慢できねぇ！登場だぁッ！！

終盤のとあるフラグ回避の為、シ姉妹に軽く発狂フラグを追加。お陰で導入があっさり終了してしまったｏｒｚ

一応、フェイト追加は火と水を短時間とはいえ、なのはだけはやっぱり無理、という結論からです。ってか下手したら死ぬｗＥＶＡのＡＴフィールドを軽く貫くトゥインロードとか絶対に助からないからｗｗｗってことになったので２ｖｓ２にすればまだ冥王やってくるまでは安心かな、と

コイツ等が終われば歪みまくったＡｓ本編だ…もう原作の形すら残ってねぇぜｗｗｗ

さて、Ａｓ１話に繋ぐ話も構想練っておくかな？

次回はなのは達と八卦の戦いになります。では皆さん、ちょいと早いですが、次回の後書きで会いましょう！

第6話　力の差（前書き）

予定を大幅に変更したらめっちゃ時間かかりました…ｏｒｚ

第6話　力の差

「…なのはっ！」

「うん、ちょっとの間だけど結界が張られたよね」

翠屋の近くまで来ていたなのは達はシ姉妹の展開した小型の結界を察知していた

「何かあったみたい…取り敢えず行ってみよう！」

アリサとすずかに少し遅れるとメールを送ると、なのは達は現場へと急行した

「フン、所詮はリンカーコアを持たない身体か…これじゃ力を１００％引き出したら３０分ももたないわね」

「仕方ないわ。まだ子供の身体だし…ブライストとガロウィンを最大出力で使えるだけマシよ」

アリサとすずか…いや、身体を乗っ取ったシ姉妹は速やかに現場を立ち去ろうとするが

「アリサちゃん、すずかちゃん、どうしてここにいるの！」

二人の…おそらくこの身体の持ち主と知り合いの少女達と遭遇する

「（ちょっと姉さん、コイツ等魔導士よ！）」

「（そうね…これは奇襲はあきらめたほうが良さそうね）」

言葉を返さない二人になのはが何かを言おうとしたが、その前にフェイトが立つ

「なのは…二人に誰かが入り込んでる…魔力の反応がある」

「あら、バレちゃった？なら仕方ないわね」

アリサが笑みを浮かべる。普段のアリサとか違う、妖艶とも呼べる顔立ちで

「なら冥王と戦う前に、貴様等で肩慣らしといかせてもらう！」

すずかが笑みを浮かべる。普段のすずかと違う、狂ったような笑みを

「！なのはっ！！」

「フェイトちゃん！！」

二人は咄嗟にその場から飛んで後退する。直後、二人のいた場所が大爆発を起こした

「もう終わりか？呆気ないものだな」

「魔力反応有り…良かったわねタウ。もう少しは楽しめそうよ」

空から観察していた姉妹の眼下で、桜色と金色の光が見える…恐らくは二人の魔力の色なのだろう

「金の方は【雷】に…塞臥が使ってた身体の魔力反応に近いわね」

「どうでもいいわ。敵なら叩き潰すだけよ」

煙が晴れると、そこにはバリアジャケットに身を包んだなのはとフェイトがいた

「クロノには連絡を入れた。すぐに来てくれるって」

「うん、なら私達は…」

なのはは杖を構える

「アリサちゃんとすずかちゃんを助ければいいんだね！」

「うん、とにかくどうやって二人を操ってるのかわからないから、バインドで捕まえないとね」

するとすずかが狂ったような笑みを深める

「貴様等ごときガキが私達を捕える？…いいでしょう、力の差を教えてあげるわ…ガロウィン！」

するとすずかの身体が水の柱に包まれる

「全く、仕方ないわね…行くわよ、ブライスト！」

続けてアリサの身体が炎に包まれる。程なくして全身をそれぞれ赤と青を基調としたロボットのような姿の二人が現れる

「この身体を諦めて帰るなら、命だけは取らないであげるけど…って、聞くだけ無駄かしら？」

こちらに敵意を向けたままの少女達を見て、赤いロボット…ブライストとなったシ・アエンは笑う

「姉さん、さっさと殺すわよ…私達には時間が無いんだから」

「そうね…さっさと終わらせましょう」

するとブライストの両肩の突起部分に膨大なエネルギーが収束していく

「「えっ！」」

その収束速度に咄嗟に二人は散開する。その瞬間、ブライストの前面に【火】の一文字が浮かび上がり、その文字を飲み込むかのように両肩のエネルギーは燃え上がり、ブライストの眼前で一つとなる

「挨拶代わりよ…マグラッシュッ！！」

膨大なエネルギーを内包した火炎弾がなのは目掛けて発射される

「なのはっ！」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん！」

避けきれないと判断したなのははプロテクションを展開する…が、着弾直前にその火炎弾は大幅に巨大化する

「嘘っ！？」

「大きさで判断したのかしら？まぁいいわ。これは殺し合い、舐めると…あっさり死ぬわよ」

プロテクションは大爆発に飲み込まれる。その中からバリアジャケットがボロボロになったなのはが落下していく

「なのはっ！」
「殺し合いの最中で敵に背を向ける…やはり子供ね」
「くっ！」

油断したフェイトに容赦なく砲撃が加えられるが、それを辛くもかわし、なのはをキャッチする

「大丈夫、だよ。フェイトちゃん」

なのはも意識を失ったのは数秒らしく、すぐに戦列に復帰する…がその表情が冴えない

「向こうの攻撃力は高い…下手に防御はできないね」

対してあちらの様子はどこかおかしい

「姉さん！いきなりマグラッシュなんか使って…冥王と戦う前に死んだらどうするのよ！」

「あらいいじゃない。この程度で死ぬなら冥王とは戦えないわ。違って、タウ？」

その会話はなのは達には聞き捨てならないものだった

「あの…死ぬってどういう事ですか？」

「はぁ？」

青い方…ガロウィンをまとったタウがなのはを睨むが、まぁまぁと姉がたしなめ世間話のように話す

「私達が力を使うには適応した身体とリンカーコアが必要なの…でもこの子達にはリンカーコアが無い…だからこの子達の身体の生命力を使って擬似的にリンカーコアを作って誤魔化しているのだけど…」

「それって…っ！！」

フェイトが蒼白になるのを愉しそうに笑いながら、アエンは話を続ける

「当然ながら、そんな無茶をすれば長くはもたない。恐らく、今日中には死ぬんじゃないかしら、この子達は」

「嘘…」

「嘘じゃないわ。早く助けないと手遅れになるわよ…」

「うわぁぁぁぁーーーっ！！」

怒りに身を任せたなのはが砲撃を行い、フェイトがバルディッシュを構えて突っ込むが、ブライストの右手に現れた棍で容易く防ぎ、フェイトを弾き飛ばす。そしてガロウィンが冷静に回避しなのはに砲撃を叩き込む

「いいわね…暫くこの子達の絶望に染まった顔を見て、私達の…冥王への憎悪の溜飲を下げるとしますか。」

「いいわね、姉さん。冥王への前哨戦としましょう」

ガロウィンの右手にも棍が現れる

「「さぁ、私達を愉しませない」」

そして、狂気を身にまとい、姉妹は二人の少女に迫る

「…マサキ、これは何？」

洗ったユニフォームを返しに翠屋に向かおうとしていた紅牙は途中で巨大な４つの魔力反応を確認した

『これは、【火】と【水】だな。さては誰かと遭遇して狂気に火がついたか』

「…狂気？」

気になった紅牙はマサキに問いかける。何か聞き捨てならない気がしたのである

『ああ、簡単に説明するならば…あの姉妹、シ・アエンとシ・タウは永き時の中で俺への憎悪に狂っている』

「…マサキ、何かやったの？」

『心外だな。我等は殺し合う関係…何度か殺している内に、以前の【風】のように宿主が力に喰われただけでなく、奴等も喰われてしまい今では俺に対する憎悪で動く迷惑な存在へと成り果てた…まぁ、不完全な宿主でもいいから適当に持ってきて勝負を挑んでくるので戦いやすいがな』

「…関係無い人とか巻き込む？」

『今も巻き込んでいるだろう？奴等は二人一組を前提にしたタイプだが、逆に言うと単機では八卦でも最もバランスが悪い。だから奴等が隠れるのは俺を闇討ちする為であって、それ以外は全く考慮しない』

「…なら、急ごうか」

『後2つの魔力反応が消えてからでも良かろうに…わかったわかった。では、行こうか、我等の戦場へっ！』

「…ん、さっさと終わらせて翠屋に行かないと」

紅牙は荷物を置くとゼオライマーへと変身し、現場へと転移した

「っ！！この魔力反応は…来たわね、木原マサキ！」

「って姉さん、これじゃ折角の不意打ちが台無しじゃない！！」

ゼオライマーの魔力反応を確認した二人は今更ながらにその事を自覚し、なのは達を睨み付ける

「やってくれたわね…もういいわ、死になさい」

既にボロボロになっていた二人に止めの一撃が撃ち込まれる…その瞬間現れた白いロボットがそれを容易く弾き飛ばした

「え？」

半ば死を覚悟した二人の前に現れたのは

「…ん、間に合った…下がって、後は僕が戦うから」

新たなる、冥王だった

第6話　力の差（後書き）

どうも、前回から予定を大幅に変更しまくったので時間がかかってしまいました

一つがシ姉妹の発狂ですが、まだＬ５ほどでは無く、また原作でも狂ってるわけでは無いのでかなり苦労しました

２つ目は戦闘。ぶっちゃけなのはは八卦相手に詰んでると言ってもいいくらいに相性が悪いです。大概の相手に火力と装甲で負けてるので下手な立ち回りさせると死んでしまいかねないのに、まだこの魔王はカートリッジシステムもついてないから…

なので多少苦労して戦闘をはしょり気味にしてでも、紅牙をさっさと出すことにしました。ぼちぼち本家冥王も本気出しますので戦闘は楽ができそうです（違

では皆さん、次回の後書きでまた会いましょう！

第7話　圧倒する力（前書き）

短いようで長かった、離ればなれの時間

それが終わり、ようやく再開できた私達を引き裂く新たなる戦い

新しい敵の手に落ちたアリサちゃんとすずかちゃん

私達は二人を助けたくて戦ったけど、その力の差は圧倒的で…

戦いに敗れた私達に止めの一撃が放たれた時、彼は現れました

魔法少女リリカルなのは　新たなる冥王…始まります

第7話　圧倒する力

フェイト視点

私の前に突然現れた白い鎧…それは私達が散々にやられた相手の攻撃を片手で弾き飛ばしてしまった

「嘘…」

シールドで角度をつけて弾くのならまだわかる。だけど今のは単に魔力…それも膨大な量をまとって軽く殴っただけ。向こうの二人も呆気にとられていたけど、すぐに笑いだした。その姿は…まるでお母さんに似た雰囲気があった

「随分早いじゃない？この子達が死体になってから悠々と来ると思ってたのに」

「早く来たなら好都合、より全力で戦える時間が増すだけ…さぁ、殺し合いましょう、木原マサキ！」

その二人に全く動じず、木原マサキと呼ばれた人は私達に話しかける

「…大丈夫？」

「え？…あ、はい！大丈夫ですよ」

「…そう、良かった。なら早く離れて。後は僕が相手をする」

そして前に歩みだそうとした彼を慌ててなのはが止める

「待ってください！あの二人は操られてて、私が助けないといけないんです！私が…」

無理して立ち上がろうとして倒れかけたなのはを私が支える

「なのは、無理しちゃ駄目だよ…」

「無理でもやらなきゃ！早くしないとアリサちゃんとすずかちゃんが…」

友達を助けたい、その想いだけでなのはは立ち上がろうとしてるのだろう。私はそんななのはを凄いと思う

だけど木原さんはその姿を一瞥すると、再びあの二人の方へ向き直る

「…悪いけど、今の君たちじゃ勝てないどころか足手まとい。僕が

戦うから、下がってて…ちゃんと助けるから」

「待って！！」

それだけ告げると木原さんはあの二人の方へ突っ込んでしまった

「フェイトちゃん、私達も行かないと…」

なのはは飛び立とうとしたが、それは私が阻止した

「…フェイトちゃん？」

「…なのは、下がろう」

「何でそんな事言うの！？あの二人を助けなきゃ…」

「なのは、前を見て？」

なのはに前を見ることを促す。なのはも不満があったようだが少し冷静になって前を見ると表情が固まる

「今の私達が行ってもあの人の邪魔にしかならない。今は様子を見た方がいい」

私達の目の前には…

私達が手も足も出なかった相手を一人で圧倒する白い冥王がいた

紅牙視点

「…助けるとはいったけど…具体的にはどうすればいいの？マサキ」

さっきのあの場ではマサキに助言を貰いながら、あの子達に下がるように言ったけど…かなり酷い事を言ってしまったような気がする

『問題ない。力の差もわからんゴミクズに優しい言葉をかける必要がどこにある？』

彼の暴言を聞きながら、飛んできた火球を再び弾き飛ばす

「くっ…今回の宿主はそこそこ使えるようね、木原マサキ！！」

「ならこれはどう？…メガサーチャービーム、発射！！」

ガロウィンの前面に【水】の字が浮かび、腰の両側から展開された二本の砲身から、凄まじい威力の砲撃が放たれる

「…ん、遅い」

紅牙が易々と回避すると、その射線上にあったもの全てが凍りつき、砕かれていくのが見えた

「なっ！照準はあっていたはずなのに…メガサーチャービームをかわした？！」

『ほう？八卦の武装の中でもかなり射撃精度を誇る、【水】を容易くかわすか。やるでは無いか紅牙』

「…来るのがわかっていたら避けるのは簡単。…で、どうしたらアイツ等だけ倒せる？」

「またそれか…まとめて殺した方が遥かに手っ取り早いぞ？」

「…さっきあの子達と約束したから…僕も無関係の人を巻き込みたくない」

「下らんな。さっさと殺して、文句を言うならあの雑魚も殺せばいい。それだけでは無いか」

どことなくマサキは不機嫌そうに答える。あの子達のどこが気に入らないかはわからなかったが、僕も半分は同意する

「…僕もあの白い服の子はちょっと腹がたった。確かに友達は大事…でも、あの子が死んだら悲しむ人がいる。それを判ってない」

『ほう、お前からそんな言葉が聞けるとはな…少しは成長したか？』

「…かもしれない。でも、僕は助けるって約束した…それに、僕達はそれができない程弱くない…違う、マサキ？」

『ククク…そうだな、我等は冥王！奴等ごときならばいいハンデだ……胸部の宝玉を砕け。リンカーコアに同化しきれていないならば、奴等の本体はそこにあるはずだ』

「…ん、わかった。行くよマサキ」

『ああ、我等冥王の力…見せつけてやれ！！』

紅牙は次元連結システムを起動させる。直後莫大な魔力が紅牙を、

ゼオライマーを包み込む。そして紅牙は腕を真横に薙ぎ払う

直後、シ・タウとシ・アエン…ブライストとガロウィンは衝撃波に弾き飛ばされた

「魔力値計測不能!?何なんですかこれは!」

アースラの艦内にエィミィの悲鳴が響く。

「海鳴市に強力な魔力反応があったからと急行してみたら…凄い事になっているわね」

アースラが到着したのは数分前。衛星軌道で一旦停止し、様子を確認して、なのは達が一方的にやられているのを確認後にクロノ達に出動を要請し、今転送を行おうとした矢先に張られていた結界が砕け散ったのである

それが何らかの結界破りならわかるのだが…その手段は、膨大な魔力による飽和。魔力を砲撃として放つのでは無く、単に魔力を垂れ流しただけ。それを凄まじい速度で叩きつけることで、結界が破壊されたのである

その直後、結界は彼自身の手で張り直されたようだが…その際に観測された魔力は計測機を軽く振り切ってしまった

「取り敢えず、彼？がなのはちゃんとフェイトちゃんを助けてくれたようだけど…クロノ、早く応援に行ってあげてね」

「了解した。早速現場へ急行する」

通信を終えたクロノはユーノとアルフに向き直り出動を告げる。アルフはすぐに返事をして転送の魔法陣に乗るが、ユーノが動かない

「おい、早く行くぞフェレットもどき」

いつもならここで文句の一つもありそうだが、それすらも無くユーノは微動だに…否、震えていた

「ユーノ、どうしたのさ?」

「……して」

「?」

「……うして」

「何やってるんだ、置いていくぞ!」

いい加減に苛立ってきたクロノが怒鳴るが、返ってきたのはユーノの悲鳴にも近い声だった

「どうして冥王がここにいるんだよ!!早く逃げなきゃ、みんな…みんな殺されてしまう…!!」

「フェレットもどき、アイツが何なのか知ってるのか?」

「知ってるも何も…スクライアの一族を、一時は滅亡直前まで追い込み、多くの次元世界…果てはアルハザードまで滅ぼした、最凶最悪の…」

ユーノはそこで一旦止めてから繋げる

「冥府の王さ。散々に暴れまわったせいで、当時の時代の文献は殆ど残っていないし、記録に残すのも憚られたのかもしれない。お陰で冥王と言えばガレアの冥王イクスヴェリアの方が有名だが、凶悪さならあっちとは比較にならない。僕も一族の口伝でしか聞いた事は無いんだけどね」

「ってことは…」

「…冥王となのは達が戦っている相手に何の繋がりがあるかは判らないけど、早く行かないとなのは達が危険だ。向こうに気付かれないようにこっそりとなのは達を連れて戻らないと…」

「大変だねぇ、そりゃ。…でもさ」

アルフは苦笑を浮かべている。そして魔方陣を指差す

「クロノは話し聞く前に行っちゃったよ?」

「……あの子は」

リンディは頭を抱えていた。もし、ユーノの話が本当なら危険極まりない存在であるし…

「それに、あの魔力反応…下手したら艦隊レベルですよね…」

あの個人で計器を壊すレベルの魔力がそれを物語っている。しかもどうやら結界内には干渉ができないようで、転送も通信もできない。だからクロノも近くまで転送されてから結界内に侵入するのだろうが…

「ユーノ君、アルフ…あの子が冥王に喧嘩を売る前に止めてあげて…」

リンディは自分の息子が取るであろう選択肢を想像し、遅れて出発した二人に祈っていた

第7話　圧倒する力（後書き）

なのはさんに前書き奪われたんで、こちらで謝罪をさせてもらいます。すいません、ヤバいくらいに遅くなりました

言い訳になりますが、実は前話投稿後、三日後にはもうできていました。できていましたが…

保存メールがありません

まさかのメールＢＯＸのデータ消滅。ですがめげずに再び書き直していると…

竜馬・隼人・弁慶「「「オープン、ゲェエット！！！」」」

携帯が真っ二つになりました。むしろゲッターよりバウ？
ワンセグ機種の稼働部分の不良により泣く泣く修理に

そしてまた劣化した代機で書き直し（執筆速度低下）してると携帯の修理完了の連絡。書きにくいし、画面小さくてやりにくかったので受け取りに行く

受信メールだけ保護されてたが、保存メールオワタ

…実質これは四回目にして、ようやく投稿に成功したわけです。なんでこんな手間取ったし…

それで、少し同じの書くのが飽きたので、先にアースラ組を登場させましたが…クロノに死亡フラグが立ちました。急げユーノ！！

…後、紅牙がなのはに苛立ちのようなものを感じたのは、同族嫌悪に近いものです。コイツもはやて達の為に自分が傷つくのは躊躇いませんが、親に捨てられた経験から残された者の痛みは知ってます。逆になのはは士郎が死んでないので、知りません。これが今の二人の違いです。これからこれはもっと差がひらいていくと思われますが…

次回はもう少し早く書きたいと思います。ではまた、次回の後書きでお会いしましょう！

第8話　迫り来る崩壊（前書き）

割と早く更新できました

ついに冥王が表に降臨！！

第8話　迫り来る崩壊

シグナム視点

今日は主はやてと共に買い物に出ていた。こういう事は本来シャマルの役割なのだが、病院に呼び出されていたので私が同行している。こういう時間も悪くない…そう考えていた矢先に結界…それも、膨大な魔力で無理矢理広域を飲み込むような代物が形成される。私の知る限りでこんな真似ができるのはただ一人…その人物に思念通話を試みる

『四季、聞こえるか?』

間もなく答が帰ってくる。念のために教えておいて良かったと安堵する

『…ん、聞こえてる』

『そうか。何が起きたのだ?こんな無駄に大きい結界を張って…監理局に気付かれたらどうするつもりだ!』

すると暫くの沈黙の後、解答が来る

『…八卦の【火】と【水】が魔導士の女の子二人と戦ってた。しかもコイツ等は周りの被害を考えない。それを考えたらいっそ広域結界を張った方が安全…この子達が監理局と関係があるかもしれないし、仮に関係があっても僕だけなら闇の書の事は隠せるしね』

『それは、そうだが…』

『…それに、僕の魔力は八卦と次元連結システムのお陰で変質しているから、ゼオライマーの魔力反応じゃ僕個人を探知できないらしい…だから、シグナム達は皆と連絡して隠れてて』

『しかし、お前一人では…』

『…問題ない。ちゃんとした宿主もいないコイツ等じゃ、【風】にも遠く及ばない。狙いも僕だし、一人で十分…だから、はやてと一緒にいてあげて』

『わかった、頼むぞ…四季』

『…ん、任せて』

紅牙との思念通話を終えると、すぐさま他の騎士達からの思念通話が来る

『ようやく繋がったか、何やってたんだよシグナム！』

『ヴィータも怒らんといたってぇな…こー君と話してたんやろ？』

思念通話にはやても入ってくる

『やっぱり結界を張ったのは紅牙君ですか』

『しかし、ここまでやる必要は無いのではないか？』

シャマル、ザフィーラも入ってきたのでシグナムは紅牙との会話の内容を話すことにした

『八卦衆の【火】【水】が魔導士を襲っていたらしい。まだ監理局の者とはわからないが、そうだった時に備えて我々は待機だ』

『相手は二人なんやろ？こー君が危ないやん！』

『四季の言葉を信じるなら、相手は本来の力を使えないようです。だから一人で十分と…シャマル、念のために結界内の索敵と紅牙の監視を頼む。紅牙が不利ならば我等で援護する』

主の親友にして、我等と主の恩人…彼を死なせはしない。もしもの時は闇の書の存在が監理局にばれるリスクを背負ってでも割って入る…

「では主、このままでは買い物もできませんし、一旦家に戻りましょうか？」

「そやね。一回戻ろっか」

そう決意しながら、私は主と共に来た道を戻ることにした

はやて視点

あかん、身体が重うなってきた…。でも、こー君はうちらを隠す為に戦ってくれてるんやから…うちも頑張らんと…

闇の書の主、八神はやて。その身体は既に危険な域にまで蝕まれていた…誰にも気付かせることもなく…

紅牙視点

「…むう」

シグナムとの思念通話を終え、後は敵を倒すだけなのだが…

「木原マサキ！何を遊んでいる！！」

ブライストのマグラッシュをかわして肉薄するが、棍に阻まれ、ガロウィンの射撃にて後退させられる。それもこれも…

「…マサキ、近接攻撃以外に手段は無いんだよね」

『ああ、面倒だがそれ以外に無い』

砲撃はアリサとすずかを傷付けてしまう可能性が高く、以前に竜巻を吹き飛ばした次元連結砲…砲撃のエネルギーを指定座標に転移させて爆発させるものだが、これは相手を内側から破壊してしまうので当然使えない。外側や宝玉をピンポイントで破壊することもできないでは無いが、そこまで慣れていないので危険過ぎるので使えない

当然、【天】の最たるものであるメイオウ攻撃は論外であり、現状でゼオライマーで使用できる武装は近接攻撃のみ、なのだが…

「…近接武装、無いよね」

あるのは両手の甲部分の宝玉に魔力を集束させて殴ることくらい…砲撃と殲滅に特化している上に、転移から超火力で吹き飛ばせる為に、近接戦はあまり想定されていないのである

その為、敵の砲撃を掻い潜る必要があるのだが二人のコンビネーションに邪魔されて接近しきれないでいる

逆に向こうもそれを不審に思い、牽制のみで本来の連携攻撃に踏み切れないでいる…変な形で戦線が膠着しつつあった

「…しかも、聖人の力は使えないんでしょ？」

『アレは一応、監理局側も知っているであろうレアスキルだからな。聖人から絞り込まれたら見つかる危険性は高い。使うならトドメの一撃のみだな』

「…ん、もう少し様子を見てから仕掛ける」

『ならば俺が挑発しよう。少し身体を借りるぞ？』

「…そんな事できるんだ…ん、わかった。任せる」

『（あっさり明け渡したな…だが、啖呵を切った手前、奴等を宿主もろともに殺すのは気にくわん。さっさと挑発してトゥインロードを誘うか）』

紅牙とマサキが入れ替わる。その瞬間、魔力の質が豹変する。圧倒的で膨大な魔力に重圧のようなものも加わり、近くにいたなのはとフェイトも巻き込み、ブライストとガロウィンを威圧する

「…！！何これ…暗い、怖い」

「フェイトちゃん！！っつ、何なの、これは…」

なのは達もそれに気付くが、戸惑う事しかできない。そして、その疑問はすぐに明らかになる

「久しぶりだな、戦狂いの雑魚姉妹」

「「！！」」

明らかにさっきと変わった声…紅牙の穏やかな声とは違う、その冷徹な声、そしてその乱暴な言葉に姉妹は狂ったように笑い出す

「ようやく出てきたか、木原マサキ！宿主すら満足に乗っ取れないようね」

「力はあるようだが、それで私達に勝てると思っているのか！！」

すると、白い鎧…ゼオライマーが震え出す、徐々に肩が震え、最後には全身が震える。木原マサキは笑っていた、その表情はわからないが、それでもわかるくらいに悪意に満ちた、嘲りの笑い声をあげていた

「ククク…ハハハハハッ！！笑わせる、貴様等雑魚が私達に勝てると思っているのか、だと？」

刹那、プレッシャーがさらに増す。マサキが放ったのは…強烈な殺気。それに慣れていないなのはとフェイトは、その場にへたりこんでしまう

「葎や塞臥ならいざ知らず、二人でようやく一人前の貴様等雑魚風情が…そもそも、この宿主が本気になれば貴様等塵も残らぬと言うのに…哀れなものだな」

「どういう意味だ！」

「この宿主は間違い無く歴代最強…下手をすれば、調整を施した秋津マサトや俺すらも上回る冥王だというのに…随分と甘くてな、貴

様等が寄生した肉体の主を助ける、そんな酔狂な事を言っているのだ」

嘲りの笑みを深めながらマサキは続ける

「だから貴様等ゴミでもまだ付け入る隙はあるぞ？俺はさっさと殺しても構わんが、俺達はそれが出来ぬ程弱くは無いからな。ハンデをくれてやる…さっさとかかって来い。その小娘の身体から引き剥がしてから…殺してやる」

『…マサキ、煽りすぎ。向こうが無茶したらどうするの？』

現在は逆に内側にいる紅牙も苦言を漏らすがマサキは笑みを浮かべるだけである

「（無茶をするように煽ったのだ。【火】と【水】の本領は最強武装の完全同時攻撃、トゥインロード。だがあの肉体では満足な一撃を放てまい、それで連携が乱れた所を叩く。引き剥がす為の一撃は貴様にくれてやる…だが、トドメは貰うぞ？）」

『…ん、わかった』

このままズルズルと行くよりは、向こうに多少無茶をさせてでもさっさと終わらせた方がいい。でも、あんなあからさまな挑発に向こ

うが乗るわけ

「姉さん、トゥインロード…行くわよ！！」

「待ちなさいタウ！明らかに挑発よ！！」

「挑発なら乗ってやる…どの道、トゥインロード級の攻撃じゃなきゃゼオライマーは破壊できないわ！！なら慢心してる奴に見せてやりましょう、私達の力を！！」

「…わかったわ。行きましょう、タウ！！」

ブライストとガロウィンは先程までと違い、散開する

『…本当に乗ってきた』

「奴等は所詮は戦狂い…まともな思考もできん以上、ただの雑魚だ。これを捌いて仕掛けるぞ、紅牙！」

『…ん、任せて』

？？？

「戦狂いとは聞いていたが…ここまでのものか」

『はい、どうやら冥王の宿主はあちらの宿主を助ける気のようです。どうされますか、我が主よ』

遠く離れたビルの屋上より戦場を見つめるのは一人の男。だが、声は２つ…

「冥王がもろともに殺すようなら割って入るつもりだったが、奴が宿主を助けるつもりならばこれは奴の戦だ…騎士の誇りにかけて横槍を入れるわけにはゆかぬ…すまぬな、葎」

『何を仰いますか。私は今、これ以上無い程に幸せなのです』

片方は外見通りの低い声、葎と呼ばれた方は少し声が高く優男風なのだが姿は無い

『私は女の顔を持った武人でした…それにより、武人になりきれず歯痒い思いをしておりました。これまでも、冥王に勝つ為に武人の

心を持たぬ卑怯者にすら力を与え続けました』

「……そうか」

『ですが今回は違う！私の理想の姿であり、心を理解してくれる騎士ゼスト…貴方を主とできた事、私は何よりも嬉しく思います』

「フッ…お前も私には過ぎたる臣だ、葎」

ゼストは笑みを浮かべるが、すぐに引き締まった表情に戻る、

「では、見届けるとしようか。新たなる冥王の戦いを」

ゼストの視線の先には迫り来るブライストとガロウィンを悠々と構え、迎え撃つゼオライマーの姿があった

第8話　迫り来る崩壊（後書き）

色々と登場しました。冥王はともかく、ゼストが書きにくい…

姉妹に負けフラグと、はやての侵食フラグが同時進行中

展開急ぎすぎだけど、ちょいとペース上げなきゃ終わる気しない。
もう原作展開に戻すの無理だしｏｒｚ

でもマサキ書きやすい。基本罵詈雑言ばっかりだから、自分の語彙が辛いくらい…

少しずつペースあげていきたいですね。では皆さん、次回の後書きで会いましょう！

第9話　姉妹の別離、砕け散る心（前書き）

色々書き方も試行錯誤しています。読みにくかったら感想で書いて貰えると助かります

第9話　姉妹の別離、砕け散る心

なのは視点

私の目の前で、私達が手も足も出なかった相手が本気の攻撃をあの人に…木原さんに仕掛けようとしている

「向こうの魔力が…高まっている？」

フェイトちゃんが独り言のように呟いている。確かに魔力が高まっている…でも、私達の使う普通の魔力とは何かが違う…そんな気がする

「でもフェイトちゃん。あの…木原さんの魔力はそれならもっと変だよ？」

あの人の魔力は正直、あり得ない領域だ。周囲の空間の魔力を空っぽになるまで取り込んでも、あそこまで圧倒的な魔力を保持し、軽々と扱う事はできないと思う…正直人間に扱える力をとっくに超えている

「うん…あんな人がいたらとっくに有名になってるはずだし…何故今まで現れなかったのか、聞いてみた方がいいと思う」

「そうだね。後で、お話…聞かせてもらおう」

すずか視点

綺麗な人達だった。確かに影のようなものはあったけど、そんなのは大人なら結構あることだし、聞いていいことじゃ無いって思った

そして私達は身体に珠を埋め込まれて意識を失った

次に目を覚ましたのは、なのはちゃん達に何かを打ち出した時だった。ボロボロのなのはちゃんとフェイトは逃げられず私は、危ないって叫んだ

でも、声は届かなくて、そのとどめの一撃がなのはちゃん達を吸い込もうとした時、あの白い鎧は現れた

なのはちゃん達に迫った光を殴り飛ばし、なのはちゃん達を庇うように前に出て来ると…あの人達の感情が流れ込んできた

殺す殺す殺す

もう、どうしようも無いくらいの殺意と狂気。何度かあの白い鎧と戦った記憶、そしてお姉さんと一緒にいる6人の仲間と壊れ行く世界…それらの記憶が殺意と狂気に塗り潰されていっている…

どれ程の事があったのかわからない。でも、あの私達を助けようとしてくれている白い鎧の人が負けたら、あの人もなのはちゃん達も助からない事はわかった

だから私は彼女達が攻撃を仕掛ける瞬間に精一杯の抵抗を試みる事にした

紅牙視点

『やはりトゥインロードか…紅牙、奴等二機の直線上に立つな。撹乱しながら片方を…』

「…トゥインロードってどんな攻撃なの？」

『…そうだな、説明してやる。奴等二機の直線上に相手を入れて、ブライストのマグラッシュとガロウィンのメガサーチャービームを同時に命中させて、相反する魔力で相手の防御手段を破壊しつつ、大規模の水蒸気爆発を起こす攻撃だ。一度メガサーチャービームでロックされるとマグラッシュも追尾されるから、奴等で唯一厄介な攻撃だな』

「…直撃したら結構危ない？」

『即死は無いが、それなりのダメージを貰うことになる。避けれるにこしたことは無いな』

紅牙は暫く考えてから、動きを止めて待ち構える

「…やっぱり一発撃たせよっか、マサキ」

『なっ！正気か紅牙！？』

流石にマサキも焦るが紅牙は至って冷静なまま

「…一応聞いておくけど、飛んでくるのはあくまでマグラッシュとメガサーチャービームだけなんだよね？」

『ああ。だがマグラッシュが照準に補助がついているせいで…』

「…ならギリギリで避けて不意打ちしよう」

『全く…当たればただでは済まんぞ？』

「…問題ない。当たらなければ、いいんでしょ？」

不敵に紅牙は笑い、その場で完全に停止したまま動かない。すると、ブライストとガロウィンはあっという間に回り込む

「動きを止めた！？まぁいいわ、いくわよタウ！！」

「了解、姉さん！！」

ガロウィンから放たれるレーザーサイトがゼオライマーを挟んでブライストに到達する

そして、【火】【水】の魔方陣を展開され、ブライストの前面には火炎弾が現れ、ガロウィンの腰部のレールガンにエネルギーが収束していく

「「喰らいなさい、トゥインロード！！」」

単独では他の八卦に劣る【火】と【水】が瞬間的に他の八卦を上回る火力を叩き出す特殊兵装トゥインロード。それがゼオライマーへと放たれた

直後、ゼオライマーは大爆発に飲み込まれた

トゥインロードの爆発を見たシ姉妹は狂った笑みを深める

「直撃…これならいくら冥王でも」

爆発を見たなのは達の表情が凍りつく

「あんな破壊力じゃあ…生きてても無事なわけ…！！」

そしてその表情は直後、驚愕へと変わる。その視線の先には…

ガロウィンの胸に拳を突き立てるゼオライマーの姿があった

数秒前

『紅牙!!』

「…ん、問題ない」

瞬間的に聖人の力を解放し、身体能力や反応速度を限界まで強化する。そして魔力にてさらに身体能力を強化を重ねていく

刹那、紅牙は自らメガサーチャービームの方に突っ込んで行き、さらにそれを左右に身体を振りながら紙一重でかわす。さらにすれ違いざまに僅かに拳を当てて軌道をずれす。そして軌道をズラされたメガサーチャービームの先には…

紅牙を追尾しようと、僅かに軌道がずれ初めていたマグラッシュがあった

そして爆風を背に加速し、ガロウィンを下から回り込み、奇襲の一撃を叩き込もうとする…が、ガロウィンが何故か防御もせずに無防備に胸部をさらけ出す

紅牙も、これを好機と捉え、マサキの制止も無視し、ガロウィンの胸に手を突き出す
そして、結果として、ガロウィンの宝玉をゼオライマーが掴み出すことになった

数秒前、すずか視点

『こっちに来る…今なら!!』

トゥインロードの妨害は間に合わなかったが、紅牙は巧みにかわし、さらに爆風を背負うことで、下から回り込むように突っ込んでくる

「くっ!?」

とっさにタウさんが防御をしようとしたので、それを全力で妨害する

「なっ、まだ意識があっただと!!」

『これで終わりです！！』

抵抗も束の間、すぐに身体の主導権が奪い返される。が、その僅かな時間に彼の腕が私に突き刺さる。直後、宝玉が抜き取られる

そこで私の意識は再び、闇に落ちた

シ・アエン視点

「タウ…タウーー！！」

トゥインロードの爆煙が晴れるとそこには…ゼオライマーに片腕で抱かれている、ガロウィンが外れて元の姿になった少女と…ガロウィンの宝玉があった

「ククク…我が宿主を侮ったな、出来損ない」

「木原マサキ…貴様、どうやってトゥインロードをかわしたっ！？」

「メガサーチャービームに突っ込みながらフェイントをギリギリでかわし、さらにメガサーチャービームを拳で僅かに軌道をずらし、フェイントで軌道がずれたマグラッシュにぶつけた…今の冥王だからこそできた荒業だな」

「そんな…」

「今回はここまでだな。貴様等の茶番に付き合う程、今の俺は退屈していない。さっさと死んでもらおうか」

すると、ゼオライマーの手に力が入り、宝玉がひび割れていく

「そんな、私はまだ…」

「タウ、逃げて！タウーー！！」

「半端な宿主を使う為に、無計画に貯蓄していた魔力を使うからこうなる…雑魚はとっとと消えろっ！！」

ゼオライマーの右手に魔力が収束する。直後…

ガロウィンの宝玉が…私の妹が…

粉々に砕け散る

「あああああああああアアアアアアアァァァァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

そして、磨耗していたらしい私の心も粉々に砕け散った

紅牙視点

「あああああああああアアアアアアアァァァーーー

『転移だ、紅牙！！』

マサキの咄嗟の指示に従い、金髪の女の子の落下コースに転移して、上手く衝撃を殺しながらキャッチする

「…ふう」

間に合ったことに安堵してあちらの少女達を見ると、あの二人も似たような表情を浮かべている

「…何で、逃げたのかな」

落ち着いてきた所でマサキに聞いてみる

『恐らく、完全に発狂してしまった為に奴が変質し、あの娘が適合できなくなったのだろうな』

「…そんなものなの？」

『こんなケースは初めてだ。まぁ奴は宿主をまた探してやってくるだろうが…片割れがいない以上大した驚異にもならん。さっさとこの小娘をあっちの小娘に預けて帰るぞ？』

「…了解」

そして僕達は座り込んでいる二人の小さな魔導士の女の子の所へ移動していく。途中、マサキから指示が来た

『向こうが話しかけてきたら、会話は俺がやる。面倒だが…仮に管理局だった場合、貴様の声があまり知られるとさらに面倒だしな』

「…ん、了解」

二人の前に降りると、マサキと入れ替わる。段々と慣れてきた感じがする

「（…歴代冥王でこんなことができたのは…マサトくらいか。となると条件である信頼関係が構築されている…つまり、奴は俺を信用してくれているのか…）」

『…マサキ、代わったよ』

「（……!?驚かせるな紅牙!!）」

『…怒られた…理不尽』

「（むう…さっさとコイツ等を渡して帰るぞ!）」

マサキは気を取り直して、気を失った少女二人を預ける

「暫くは気を失っているはずだ。コイツ等は魔法を知らぬのだろう？ならば今の内に言い訳でも考えておくことだな」

ククク…と悪役にしか見えない笑い声を出しながら二人にに忠告をする。すると二人は顔を見合わせ、こちらを向くと

「「あの…助けていただいてありがとうございました！！」」

二人が頭を下げる。マサキが珍しくまた驚いている。礼を言われるのに慣れていないのかもしれない。そんなマサキを他所に二人は話を続ける

「私はなのは、高町なのはです。こっちは…」

「フェイト・テスタロッサです。貴方は…木原マサキさんでよろしいのでしょうか？」

そして、ようやく回復したマサキが

「ああそうだ。俺が木原…」

マサキが名乗る瞬間

僕達の身体に無数の鎖…後で聞いたらバインドという拘束魔法が巻き付けられた

「マサキさんっ！？」

フェイトと名乗った少女が悲鳴のような声をあげる

そしてもう一つ、声が増える…

「僕の名は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。冥王、木原マサキ…武装を解除してこちらの指示に従ってもらおうか」

僕らの出会いを最悪のものへと変えた男の声だった

第9話　姉妹の別離、砕け散る心（後書き）

火は八神家ルートのフラグ回収の為に逃がしました。その為水だけぬっ殺したので、今回はメイオウ攻撃はお預けです。次の相手では使う予定ですし

後、マサキが結構丸くなってますが、これは紅牙がマサキを信用している為だと思ってください

そしてやっちまいましたよ、ＫＹクロノ…生き残らせる手段は用意してますが、間違いなくサンドバッグ…

楽しみで仕方ないので早めに更新すると思います。では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！！

第１０話　日溜まりの終焉（前書き）

お楽しみのＫＹ粛清の時間です

貴様はこの段階のフェイトにお義兄ちゃんと呼ばれる段階で粛清モノだと、敢えてここで言っておく（キリッ

第１０話　日溜まりの終焉

フェイト視点

改めて私達に名前を名乗ろうとしたマサキさんに絡み付く、無数のバインド…それを見たマサキさんの気配が変わる。表情はバリアジャケット？に覆われて見えないけど、怒っているのはわかる。私も思わず抗議しようとするが…

「クロノ君、マサキさんになんてことしてるの！！」

なのはの声には怒りが含まれている。当然だ、私達とアリサちゃんとすずかちゃんの命の恩人にすることじゃない

「…クロノ、どういうつもり」

私達の剣呑な空気に一瞬クロノはたじろぐけど、首を振って気を入れ直すと

「コイツはフェレットもどきの話だと、かなり危険な存在…最低でも高ランクのロストロギアを所持している。野放しにはできない」

「でも、だからっていきなりそんな事…」

「ククク…何時の時代もこういう俗物はいるものだな」

マサキさんがゆっくりとクロノの方へ向く。すると…

「なのは、フェイト！すぐにここから離脱するよ！！」

私達の傍にユーノとアルフが現れる。するとアルフが両脇にアリサちゃんとすずかちゃんを抱え、ユーノが私達の腕を引きながら後ろに飛ぶ

「ほう？貴様等も管理局だったか…」

マサキさんの視線の温度が下がる。いけない、このままじゃ

「私は管理局の嘱託魔導士です。でも貴方に害を与える意志はありません！」

「フェイト、何言ってるのさ！アレは数多の次元世界を滅ぼした冥王なんだよ！！」

「違う、あの人は私達を…アリサちゃんとすずかちゃんを助けてくれた…そんな人じゃない！！」

その言葉にユーノとアルフが固まる

「え、どういう事？」

「ってことはアイツはフェイトの恩人で…ってそりゃバインドやっちゃまずいんじゃないのかい！」

戸惑うユーノとアルフ…それを他所にクロノはさらにバインドを追加してマサキさんをがんじがらめにしていく…って

「クロノ！！」

「コイツをアースラに護送する。お前達も手伝ってくれ」

私達が抗議を繰り返しても聞く耳をもたないクロノ…そのやりとりの中、マサキさんをまるで繭のようになって拘束するバインドが…

何の予備動作も無く引きちぎられた

紅牙視点

「…鎖で縛られるの、結構腹が立つんだよね。昔の事を思い出す」

静かに怒る紅牙の心の中には過去の傷の一つが抉られ、血を流していた

それは誕生日だからと親がくれたプレゼントの一つ

首輪と鎖

僕は化物だから繋いでおく鎖が必要だ、と僕の首にはめられ、繋ぐ為の道具

あの日から僕の殴られ蹴られ、床に投げ捨てられた残飯を食らう日々が始まった…

首の痣も無くなって（聖人であることに感謝したことの一つだ）、

食事もはやてのお陰で改善できてきて、ようやく過去のものにできたのに…

『…ここまで酷いものだったのか、お前の生活は』

「…これが始まり、だから一番よく覚えている」

僕の怒りにゼオライマーが共鳴している。調度いい、僕を侮蔑する視線で見下ろす奴が前方にいる

『…代われ、俺が叩き潰す』

「…やだ、だってアイツは…」

マサキとの会話中に魔力弾が飛んでくる。それを軽く殴り飛ばす

「抵抗の意志有り、ならばお前を倒して連れていく！！」

「何言ってんだあの馬鹿は！！」

あっちでもう一人の男の子が喚いてる。だが正直どうでもいい

「…マサキ、今は代わらない。だって奴は僕がまず殴ることにした

から」

『…ほう？』

その言葉にマサキは非常に面白そうである

『…お前が自分の都合で怒るのを初めて見た気がするな』

以前のティーダとの戦闘も怒りはしたが、それははやて達の為であり、こんな例は初めてである

「…あんまり褒められた事じゃ無いけどね」

『何を言うか。今までの貴様がある意味狂っていただけだ。これは正常な怒りだ、恥じる事は無い』

そんな会話の中で再び攻撃、今度は数が増えたが…１０発の魔力を問題なく叩き落とす

『だから今回は譲ってやる。存分に冥王の力を振るうがいい、紅牙！！』

「…ん、了解」

そして紅牙はクロノに向かう為に足に力を込める。クロノは咄嗟に迎撃を取ろうと再び攻撃魔法…手慣れた魔法であるスティンガースナイプを用意するが…

クロノがスフィアを用意する前に紅牙は一瞬で眼前まで迫っていた

「なっ!?」

「…遅い、この程度?」

紅牙にしては珍しく、嘲るような言葉と共に鞭のような上段蹴りを打ち込む。クロノはとっさにデバイスで受けるが、ガードごと弾き飛ばす

「がぁっ!?」

「…がら空き」

弾き飛ばしたクロノを遥かに上回る速度で回り込み中断回し蹴り、その一撃でクロノは近くのビルへ叩き込まれる。すると瓦礫と煙りに隠れて見えなくなる

「…邪魔、鬱陶しい」

それをウザいと判断した紅牙は躊躇い無く砲撃を叩き込むことにする。死なない程度、本気でそれくらいしか考慮してないレベルの魔力が右腕に収束する

「…吹っ飛べ」

そして右腕に溜まった魔力を数十の散弾として解き放つ。一つ一つが最早なのはのディバインバスター級の威力の砲撃の雨が降り注ぎ、ビルは跡形も無く吹き飛び、周囲一帯は瓦礫の山と化す

『容赦の欠片も無いな』

「…殺すとか、腕を落とすとかはしない。でも…」

紅牙はゼオライマーで見えないが、口に三日月のような笑みを…おそらく、普段の紅牙を知るはやてやヴィータ、シャマルが見たらガ

チで泣くような凄絶な笑みを浮かべる

「…二度と、馬鹿な事を考えないようにしてあげないと。それに…」

人の心の傷を抉ったのだ。さらに初対面であの対応、そして仕掛けてきたのはあっち…ならば

「…容赦する必要、無いよね？」

『……』

初めての自身の怒りの解放。それは紅牙から他人を思いやる心を棚に放置させる事に成功していた

リンディ視点

「「「……」」」

結界内は何故か音声が繋がらない。映像はあっさり入ったのだが、音声を入れようとすると急に具合が悪くなってしまい（マサキの悪知恵。声が記録に残らなければ外見で判断できない為）仕方なく、無音声で見ていたのだが…

「クロノ…一人で先行したかと思えば、何やっとるかあの馬鹿はぁーっ！？」

エィミィの叫びはアースラの艦橋にいたスタッフ全員の心情を代弁していた。二人の一般人を救助した冥王は二人をなのは達に預け、そして頭を下げられた事に戸惑っていた。少なくともこれなら、あの二人なら会話ができる。そう考えた矢先にご覧の有り様である

「執務官じゃ無くて人としてどーなのよ、あのＫＹは…」

エィミィが頭を抱えるが、既にリンディは頭を抱えて項垂れていた…

「あの子、何で執務官になれたのかしら…」

そんな事をやっている間に冥王がバインドを引きちぎる。ユーノの話の通りならばクロノのバインドがいくら優れていようが意味が無

いのだろう

「提督、これ…魔力と腕力のごり押しですね」

スタッフの一人が呻くように言うが、皆の視線はさらに攻撃魔法を放つ我らがアースラが誇る執務官に釘付けである

「「「……」」」

最早声も無い一同、冥王が怒るのも無理は無いと思いつつ、さらに攻撃を行うクロノに目が点になる

そして三度目の攻撃の直前にクロノが冥王に二回程蹴り飛ばされてビルに突っ込んでも、心配をする者はいなかった。むしろ、ですよねー的な空気に包まれている

そして容赦無く降り注ぐ砲撃の雨。一応、スタッフの一人が魔力値を見ていたらしく

「一発一発がなのはちゃんのディバインバスターぐらいの威力ですねー」

と他人事の如く報告する。そして砲撃が止むと全員が同時に溜め息をつく。そしてリンディは念のためユーノに持たせた通信機で通信を行う

「ユーノ君。クロノだけどね…少し反省の為に痛め付けてもらってくれる？」

『…はい、あの攻撃に割り込む度胸はありません』

「そう、じゃあ後はお願いね」

そう言って通信を切る。流石に身内でも…いや、身内だから許容できなかったか、とエィミィを始めとしたスタッフ一同は冥王に同情しながら、クロノに黙祷を捧げた

紅牙視点

一応、クロノは生きていた。バリアジャケットはボロボロで、デバイスも二つに折れているがそれでも何とか生きていた

「（この煙と瓦礫を使ってやり過ごすか？いや、だめ押しが来る前に逃げた方が…）」

と考えている間に逃げれた僅かな時間を失う

「…この程度で勝てると思っていたの？」

「…！？」

背後に立っていたゼオライマーを見て、クロノの表情が凍る

「…つまらない、もう【殴って】終わらせる」

最初の殴る発言をあくまで実行する。それとクロノを見てマサキは嘲笑に近い笑みを浮かべながら悪魔の囁きを行う

『ゼオライマーの近接兵装、試してみろ』

その言葉と共に、拳に僅かだが、魔力が収束する。クロノが後ずさるがこの距離は紅牙の間合いだ。全く問題ない

「…僕を怒らせた事、ベッドの上で後悔しろ…！」

はやて達とこの前見た不良モノのドラマの台詞をパクりつつ、必殺の拳を叩き込む

ドゴォッ！！

軽く音速を超越した拳は鈍い音より先にクロノのバリアジャケットのパージを無視し、クロノの素肌の胸部の中央に叩き込まれる。直後、音と共に魔力によって生まれた衝撃が最早身を守るモノが何も無いクロノの全身を貫く

「……！？」

クロノの断末魔は拳打の轟音にかき消され、雷に打たれたかのようにビクッと震えた身体は

力無く崩れ落ちた

「…すっきりした」

『やはり馬鹿を黙らせるのは消す以外なら拳だな』

「…それは同意」

そして気を取り直してなのは達をどう対処しようかで考えていた矢先に大音量の念話が来る

『紅牙!!……はやてが…はやてが…!?』

声の主はヴィータ。紅牙が怪訝な表情を浮かべるとすぐに他の騎士からも念話が来る

『紅牙君、はやてちゃんが倒れたんです!!』

『紅牙、早く戻ってくれ!』

『今病院へと運んでいる。速やかに結界の解除を頼む』

シャマル、シグナム、ザフィーラからも念話が来る。最後のザフィーラのは最もだ海鳴市ほぼ全域を飲み込んでいるだけに、病院すら利用できないのである

「…マサキ！！」

『仕方あるまい、あの小娘達には後日話をすればよかろう』

「…仕方ないか」

そして僕達は転移を行い、結界を解除した。すぐにまた小規模の結界が張られた所を見るに、彼の搬送等で追跡どころでは無いのだろうそして僕達は何個か他の次元世界を挟んで、ゼオライマーを解除してから元の世界に戻り、病院へと急行する

結果としてはやては命に別状が無かった。それに安堵し、皆で帰宅して遅めの夕飯を食べた。だけどその次の夜から、シグナム達は全員ではやての家で過ごすことは無くなった

この日まで続いていて、そしてこれからも続くと信じていた、僕とはやてとヴォルケンリッター達の優しい、暖かな日々は音を立てて崩れ落ちた

第１０話　日溜まりの終焉（後書き）

そして私怨は入っていないと今更後書きで言い訳してみるｗｗｗ

取り敢えず、第3章終わりました。ちょいと紅牙の日常絡みで短編を挟んで第４章に入る予定です

八神家ルートは中盤までに埋めないといけない伏線とか多いから、この状況で短編しなきゃいかんという

でも、紅牙の成長に絡むものばかりで外せないんですよね。だからゼストの出番はまだ当分先だなｗｗｗ！！

では短編なので次は更に短くなると思います。では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

幕間　蒐集開始（前書き）

蒐集開始…長かったｏｒｚ

詳しくは後書きにて

幕間　蒐集開始

「紅牙君、ちょっといいかな？」

はやての家から自宅に戻ろうとすると、家の前に紙袋を提げた桧山が待っていた

「…桧山さん、何かあったんですか？」

すると、穏やかな笑みを浮かべながら桧山さんはこう言った

「紅牙君はサッカーに興味ありますか？」

「……っ！？」

「ああ、この前サッカーをしているのを目にしましてね、気になったのですよ」

「…え、それだけですか？」

「ええ、それだけです。同年代の男の子達に混じる姿を初めて見たので驚きましたよ」

「…そうですか」

それだけの為にここに来たのか？でも何故…

「…あ、ユニフォーム返しに行くの忘れた」

「ああ、それなら構いませんよ」

「…どういう事ですか？」

「監督の高町さんとは知人でしてね。話はつけてあるので、何時でも構わないそうですよ？」

「…でも、借りた相手が迷惑じゃ…」

「じゃあいっそチームに入ったらどうですか？」

「…（ふるふる）駄目、お金無いし」

すると桧山さんは顎に手を当てて考える…いや、フリだ。何か企んでいる…

「ならば資金があればサッカーチームに入りたい、と」

すると、紅牙としては悩んでしまう所である
紅牙自身、割りとサッカーを楽しんでいた。同年代の相手と競い合い、そして勝つということを知った。だからこそだろう

「……うん」

そう答えた。次の瞬間、桧山さんの口が三日月の形になった気がした

「そうですか。なら紅牙君、練習は土曜日の～」

「…待って、何故そこまで知ってるの？」

すると、桧山はしてやったりといった表情で

「後は紅牙君の返事一つの所まで話つけてましたから」

「……くっ！？」

『見事にしてやられたな、紅牙』

これには、マサキも笑うしか無い

「ではチームに入るに当たって、ボールとスパイクと…」

と、紙袋から色々とサッカーに使う物が出てくる。そこで、一つ問

題が生じる

「…で、でも新聞配達の仕事が…」

「ああ、それなら心配ありません。話はつけましたから」

微笑む桧山さんに対し、僕は項垂れるしか無かった

「で、サッカーチーム入ることなったんか」

「……うん」

翌朝、八神家の食卓にて紅牙はその事をはやて達に話した。黙っているのも嫌だったというのが本心だろうか

「よかった。ええ事やんか！」

「…え？」

てっきり反対される、そう思っていた紅牙は驚く

「でも、ボールとかスパイクとか色々いるんやろ？」

「…それは、桧山さんが既に準備していた」

「桧山さん？誰なん、その人は？」

聞かれたので桧山さんの事…父の元上司で、僕に護身術を教えてくれている人である事を伝える

「って事は、その人はこー君の保護者に近いんやね」

「…うん」

確かに僕は桧山さんには世話になりっぱなしだ。世間から見れば桧山が保護者に見えるのも仕方ないだろう。それにしても…

「…二人だけで朝御飯って久しぶりだね」

「うん、シグナム達用事あるゆーてたしなぁ」

朝、紅牙が来るのと入れ替わりに出掛けていったシグナム達…何か表情が固かったけど…はやて絡みの話なのかもしれない。後で聞いておくことにした

そして、一日には平和に過ぎて深夜の町…ビルの屋上に目をとじて、バリアジャケットに身を包むシグナム達の姿があった

「お許しください…我らはこれより、貴方との誓いを破ります…」

そして目を開き飛び立とうとするシグナム達の中央に転移する黒髪の少年、紅牙。それをシグナムは諦めにも似た感情を持って出迎える

「やはり来たか、紅牙」

「…やっぱり闇の書が原因なんだ」

「「「「!?」」」」

目を見開く者、口をあける者や口に手を当てる者、表情には出さない者と四者四様ではあるが驚いているのがわかった

「紅牙…てめー、どこまで知ってやがる」

「…何も知らない」

「え!?」

「…なるほど、カマをかけられた訳か」

ヴィータが顔を真っ赤にして怒っているが、この際無視し、シグナムに詰め寄る

「…はやては今、どうなってるの?」

「現在、主は闇の書に身体を蝕まれている」

シグナムは紅牙に話す。闇の書のこと、その性質のこと、そして…はやての幼い身体はそれに耐えきれずに侵食されていること、足の麻痺はそれが原因なこと。そして…その進行が早まっていること

「このままでは主はやては後数ヵ月ももたぬ」

「…そん、な…」

僕はその場に崩れ落ちる

「…はやてがそんな事になってるのに、僕は…僕は…」

地面に手をつき項垂れる紅牙…大切な友達が居なくなる、また失う
…また僕は…と思考の深みにはまる前にザフィーラに肩をつかまれる

「だから頼みたいのだ。我々が蒐集に行く間、主はやての傍にいて欲しい」

「紅牙君がいればはやてちゃんは寂しくありませんから」

「だからぜってーにはやてを守ってくれよ！絶対だからな！！」

守護騎士達は紅牙ならば信用に足る、紅牙ならばもしもの時に主を守ってくれると確信していた。そんな中、新たな声…それも嘲笑が響き渡る

『ククク…随分とおめでたい考えだなぁ、魔導書より生まれた人形どもが』

その声に、各々の武器を構える守護騎士達。しかし姿は見えない

『それよりもっと早い方法があるだろうが…貴様達があの魔導書もろとも消え去れば、少なくともあのガキの命は助かる…違うか？』

その声の主は目の前にいた。ついさっきまで、自分達を止める為に現れた少年が、侮蔑の混じった笑みを浮かべていた

「貴様…紅牙では無いな！名を名乗れっ！？」

「貴様等人形に何故名乗る必要がある。貴様等が闇の書を破壊して転移してしまえば、貴様等の主は助かるのだろう？何故をそれを行わない？」

「うるせーよ…アタシ等だってはやてと一緒に暮らしたい…でも、はやてが苦しむのはもっと嫌だ！！だから…だから…！」

「貴様の理屈は綺麗事を並べているだけだ。あの小娘を思うなら、今すぐにでも消えろ。共に過ごす時間が長くなればなるほど……別れが辛くなるぞ」

「「「……」」」

全くの正論。はやてを助ける最善策は闇の書の破壊…これを達成すれば今すぐにでもはやての侵食は止まる

「で、でもアタシ達じゃ破壊できないし…どーすりゃいいのさ！！」

「俺がいるだろう？何なら今すぐに塵すら残さず消してやろうか？」

ヴィータの表情が凍る。そう、あるのだ…闇の書を徹底的に破壊する手段が目の前に

「良い機会だから教えてやる、クソガキ…貴様は単にあの小娘…貴様等の主になついているだけの人形だ。その人形風情が単に主と一緒にいたい、と主の命を削りながらも、より一緒にいられる方法にすがっているだけなんだよ」

「違う！？アタシは…アタシはぁーー！！」

事実を認めたくない。はやての命より自分を取った事を認めたくない…その思いのままにヴィータはグラーフアイゼンを紅牙に振り降ろす。だが、咄嗟に懐に潜りこんだ紅牙（マサキ）のタックルに弾き飛ばされる

「フン、逆上して歯向かうとはいい度胸だ…闇の書の前に貴様から血祭りに…」

『…両者、それまで』

飛ばされたヴィータがグラーフアイゼンを握り直し、マサキがゼオライマーを呼び出すその瞬間に

紅牙の声が響き渡る

「？紅牙…お前は一体何を…」

シグナムが怪訝な表情を浮かべながら訪ねると、さっきまでの凶暴な気配は鳴りを潜め、普段の紅牙に戻る

「…今のは、ゼオライマーに宿る人格、木原マサキ。ちょうどいいや…八卦の事で隠してたことも話す」

『紅牙、貴様何をっ！！』

さっきの紅牙と同じく、どこからともなくマサキの声も聞こえる

「…マサキ、言っていい事と悪い事がある。それにこれは言っておいた方がいい…昨日の戦い、見てたでしょ？」

「わかった…話してくれ」

そして紅牙は八卦のデバイスに人格が宿る事、人格が入れ替わる、場合によっては乗っとる事が可能な事を教えた

「大体はわかったが…それは紅牙も危険ということだな」

「…どういう事？」

『俺がお前を乗っとる事を懸念しているんだろうさ』

「あったりめーだ！テメェみたいな野郎、信用できるかよっ！！」

『ククク…随分と嫌われたものだ』

噛みつくヴィータと嘲るマサキが一触即発の空気の中、紅牙はあくまでマイペースに返答する

「…それは無い。もしマサキにその気があるなら、もう乗っとられてるんじゃないの？」

『そういう事にしておこうか、ククク…』

「全く…お前の事だぞ？少しは緊張感を持て」

ザフィーラも溜め息をつくが、紅牙はここで最大の懸念事項を述べる

「…少なくとも、蒐集の最中に八卦が出たら逃げて。今は【火】【月】【山】【地】【雷】が残ってるけど、【火】と【雷】以外は冥王の事を話してから、決闘場所を指定すれば高確率で帰るらしいから」

「何を根拠に…」

『奴等は典型的な武人だからな。正々堂々と戦うと確約すれば、それから逃げる事はしない』

「成る程、その者達は騎士と同じ考え方のようだな」

シグナムが何か考えていたのかは容易に想像できるが敢えて触れずに話をまとめる

「…じゃあ僕はシャマルとはやての護衛でもしておく。何かあったら呼んで」

「わかった。……すまない、紅牙」

「…気にしないで、僕もはやてを助けたいって気持ちは一緒だから……さっさと終わらせて帰ろう、昨日までの日々に！」

「「「「ああ、すべては我らの主の為にっ！！」」」」

こうして僕達のはやてに嘘をつき続ける日々が始まった

幕間　蒐集開始（後書き）

実はこの次の話ができた方が早かったりします。下手に原作を気にしたら書けないから、もう好き勝手やることにした。後悔は後でするｗｗｗ

紅牙も蒐集に参加しますが、現時点では積極的に参加しません。理由は次の次くらいにわかると思います

次は今から出かけるので、帰ってきたら投稿します

では皆さん、次回の後書きで会いましょう！

幕間　戦力分析（前書き）

一度書いたけど、何か気に入らなくて書き直しました。

あんまり変わってないはずなんだけど、何が気に入らなかったのかがわからない…ｏｒｚ

幕間　戦力分析

フェイト視点

クロノは全身打撲に加え、胸骨と肋骨9本を折る大怪我だった。でも、最低限の手加減はしてくれたみたいで、後遺症が残ることは無いそうだ

あの戦いから一夜明けて、まだ意識の戻らないクロノ以外の全員がブリーディングルームに集まっていた。昨日の戦いと、これからの方針についてだ。リンディさんが映像を出しながら話始めた

「昨日の戦闘記録なんだけど…やられたわ。全てのデバイスの音声記録が駄目になってたのよ」

「どういうことなの？」

なのはが首を傾げる。私も良くわからない。するとエィミィが説明してくれた

「向こうの結界に、音声をデータ化できないようにするシステムが組み込まれていたみたいでね。デバイスの記録にも音声が何も残ってないの…」

「そんな…」

ユーノ君も驚いている

「元々の音声データのあるこちら側の人間はともかく、なのはちゃん達が戦った二人組と彼…冥王の音声記録のサルベージは絶望的ね。それで直接会話した二人を呼んだの」

確かに、それならなのはもこんなに早く呼び出した理由が頷ける

「率直に聞くけど、冥王はどんな人だった?」

「え、えっと…」

「なのは、私が説明しようか?」

「うん、フェイトちゃんお願い…」

言葉に詰まってしまったなのはに変わって説明する

「私個人の感想ですが…冥王は二重人格、もしくは何らかの形でもう一人の人格が宿っていると考えられます」

「あ、それだよ！何か変だったもん、魔力の波動や気配まで変わっちゃうし…」

するとユーノ君が難しい顔で聞いてくる

「なのは、フェイト…あの時二人は木原、って呼んでたよね？」

「うん、しっかりと本人からは聞けなかったけど、木原マサキって呼ばれてたよ」

「やっぱり…」

ユーノ君はさらに表情を険しくする

「伝承に残る冥王の名は2つ、マサキとマサト。マサトの死後、冥王マサキは多くの世界を滅ぼした。意訳のミスとも言われてるが、自分が死んでから世界を滅ぼすってのは不可能なはず…だったんだけど、今回ので説明がついたよ」

ユーノは真剣な顔で話を続ける

「あの白い鎧…あれがデバイスなのかもしれないけど、冥王はあの中に生きているんだ。それで宿主を乗っ取って…」

「待って、ユーノ…私達が戦った二人はアリサちゃんとすずかちゃんを無理矢理乗っ取ったけど、マサキさんは違うようなことを言ってたよ」

慌ててユーノの推論に口を挟む。ユーノは少し不満そうな顔をするが私の話を聞いて首を傾げる

「相手は冥王だよ、奴がそんなこと…」

「でもそれじゃ、何でアリサちゃんとすずかちゃんを助けてくれたのかな？」

それでも持論を支持しようとするけど、なのはが封じる。そうなのだ、それだと何故助けたのかという話が成立しなくなってしまう

「うーん…フェイトちゃん、貴方が会って、話してみた感想はどう？」

「正直…マサキさんはちょっと怖いです。でも二人を助けてくれたり、私達に名前を名乗ろうとしてくれたりしましたし、決して悪い人じゃないと思います…それに」

「…それに？」

「…最初に私達を助けてくれたのは、元の身体の持ち主さんなんですが…何て言うか、凄い大きな力なんですけど…穏やかな感じがし

たんです。あの人達がユーノの言う冥王だなんて、信じられません」

これは、私があの人達に思った正直な思い

「…一旦冥王の件は保留にしましょう。次に現れた時はなのはちゃんとフェイトちゃんの二人に交渉を一任するわ」

「「はいっ！」」

私達は元気良く返事する。するとずっと黙ってたアルフが私に話しかけてくる

「そういやさっきから、そいつ名乗ろうとしただけで何で名乗らなかったのさ？」

「あ…（汗」

私もなのはも目をそらす。リンディさんは溜め息をついて

「まさか、そのタイミングでクロノはバインドを仕掛けたの？」

「「……」」

沈黙は何よりの肯定になる。私はその事を生まれて始めて知った

暫く嫌な沈黙が流れた後、リンディさんは咳払いをして新しい話題に入る

「それで戦力についての分析なんだけど…まずはこの二人ね」

すると映像はあの赤と青の鎧…こうして見るとロボットみたいな姿のそれが写し出される

「この二人は魔力量だけならＡＡＡランク…何の魔力も持たない一般人がこの領域の魔力を持つこと自体が異常よ」

「その事ですが、そちらは音声が生きている記録によると、生命力を使って擬似的なリンカーコアを生成していたようです」

「見事なまでのロストロギアね」

続いて二人の攻撃の時の映像に切り替わる。全面に【火】と【水】の文字が現れる

「これはこの世界の文字で、それぞれ火と水を意味します」

そして打ち出される砲撃に吹き飛ばされる私達

単体でなのはがいいように遊ばれるレベル。近接戦闘も普通にこなしていたし、下手をすれば総合ではSランクかもしれない

「そして、彼に仕掛けた最後の攻撃だけど…」

画面が切り替わり、トゥインロードと言っていた二人がかりの攻撃のシーンになり。急に無音声になったのが正直不気味だ

「この攻撃に限ってはSS－ランク相当になってるの。やっぱり連携がメインだったのでしょうね」

そして画面が再びマサキさんに切り替わる

「そして彼だけどね…現状ではアースラのアルカンシェルくらいしかまともに対処手段が無いわね」

「ぶっちゃけますね、リンディ提督」

「仕方ないじゃない」

呆れ気味に話を続けるリンディさん

「まず魔力量はアースラの測定器を一個壊したわ。少なくとも個人が持てる力を超えているわ」

そして、あの二人の連携攻撃をあっさりと回避し続けるマサキさんが映る

「戦闘技術…こっちも高いわ。あれだけの空間攻撃を回避しながら一切攻撃せずに近づけるだけでも異常よ」

そしてトゥインロードのシーン。ここで超スロー映像になる

「私はこれを見た時、笑うしかできなかったわ」

砲撃の瞬間、水の方の砲撃に身体を左右に動かしながら接近…よく見ると、火の方の砲弾がぶれている。あっちは追尾型のようだ
そして水側を紙一重でかわしながら拳を当てて機動をずらす。するとそこに火の砲弾が近づき、水側の砲撃が火を貫く。そして大爆発がおきる

よく見ると彼は爆風で加速しながらも青い方に接近、一撃で仕留めてしまったもう空いた口が塞がらない人もいた

「そして、彼の砲撃よ」

そして彼がクロノに攻撃魔法…破壊の雨ともいうべき砲撃の嵐は瞬く間にビル周辺を更地へと変えた

「ムラが激しいけど、一発一発がAランク以上…こんなものをろくにチャージ無しで撃ってくる…下手な戦艦より火力もあるわよ」

「でも、どうしてこれをあの二人に使わなかったのかな?」

なのはが首を傾げる…この子はたまに凄く怖いことを言う気がする

「なのは、あんなの当たったらアリサちゃんとすずかちゃんが大変なことになるよ…」

すると、なのはは得心がいったかのように手を叩く。あの人に任せてつくづく良かったと思う。二人の為にも

「そして最後がクロノのKO瞬間か…」

「これは魔力を衝撃に変換して全身に叩き込むタイプの近接魔法ですね。零距離で入ったせいか、見事に全身に浸透して、全身に均等にダメージを与えています」

スタッフの一人が説明してくれる。そして最後に補足が入る

「ちなみにこれ、かなり手加減されてるみたいで、さっきの砲撃の3割程度で撃ち込まれています。恐らく全力なら執務官はバラバラになっているかと」

それを聞いてリンディさんが溜め息をつきながら話をまとめる

「以上から、攻撃力、速度、近接戦技術から見ても、アースラ総出でもあっさり返り討ちになるのが目に見えてるの。だからまずは交渉からよ二人とも、お願いね」

木原さんと話すのは乗り気だったんだけど…これってかなり重要な任務な気がする

そして、【本来こういう事を任されるはずの執務官】は次の日にようやく意識を取り戻すも、アースラスタッフ総出の説教タイムに見舞われることになった。

私もやったよ？一時間くらいは

幕間　戦力分析（後書き）

書き直しで疲れたのでゲスト予定だったの魔王様の出番は先送りですｗ

そして、今回はアースラ側の戦力分析。マサキの入れ知恵で情報収集が難航しております

管理局側の対マサキ用の人材はフェイトです。ってかこの子以外にはできませんｗｗｗ

次はまだ悩んでます。先に短編やっちゃうか、次に入ってしまうか…かなり悩みどころです

最近、他のＳＳも書いてみたいと思うようになりましたが、ただでさえ遅い執筆速度が目もあてられない事になるので、Ａｓ終わるまでは連載したいなー、と思います

では皆さん、また次回の後書きで会いましょう！

幕間　その火力、高過ぎる為（前書き）

紅牙の蒐集参加光景ですｗ

幕間　その火力、高過ぎる為

紅牙と守護騎士達が蒐集を初めて間もなく、紅牙は翠屋ＦＣに入った。桧山との約束や恩義もあるし、はやてに話してしまった以上誤魔化しようが無いのもあるが…それ以外の事情により、割りとはやての傍にいることが多くなったのも理由にあげられる

理由の為に少し、時を遡る

ズドォーーーンッ！！

周囲の大地を震撼させる一撃が、付近の樹海に潜んでいた鳥類を怯えさせ、一斉に飛び立たせる。よく見ると木々が僅かに震えており、その中では陸上、樹上の動物達も逃げているのがわかる

その状況を作り上げた少年、四季　紅牙はゼオライマーをセットアップした状態で右手を突き出している。そしてその右手の先には…

薙ぎ倒され、焼け焦げた木々と虫の息で横たわる火竜の姿があった

この火竜、大きさも１０ｍを優に超えており、真竜クラスの力がある、その世界の本来の覇者は何時ものように狩りに出ていたのだが…今日は邪魔をする影がおり、それを排除しようとしたのだが…相手が悪すぎた

そのブレスをかわし、爪の一撃を弾き飛ばし、苦し紛れの牙は…その口に自身のブレスを遥かに上回る一撃を叩き込まれる事となった

そして僅かに息をする竜を見て安堵の息をつくと、蒐集の為に（散歩に行っている事になっている）ザフィーラを呼び出す。紅牙は闇の書と関わりが無い為に単独で蒐集を行えないのである

「来たぞ、紅牙。蒐集対象は……なっ、火竜…それもかなりの年齢のものではないかっ！？」

「…そう。それなりに稼げそう？」

「まぁそれなりには稼げるだろうが…」

困惑しながらも蒐集を行う。人間では無いが、二桁に届く量のページ量に呆れるしかなかった

「…俺達が交代で丸1日近く、必死になって稼いでいる量に匹敵するページを数分で稼がれたらたまったものでは無いな…」

「…ん、お腹空いた…」

背中が煤けているザフィーラと（地球では早朝の為）空腹を訴える紅牙。だが、マサキの言葉が二人を現実に引き戻す

『流石に成り行きとはいえ、真竜を倒したのはまずかったようだ…この次元世界への大質量の物体の転移を確認した。十中八九、管理局の連中だ』

ザフィーラも流石に我に帰り、転移の準備を始める

「…あれは蒐集しないの？」

「いや、やってしまえば闇の書の存在が早期にバレることになる。まだ管理局の目が厳しくなるのは困るからな…ここは退くぞ、紅牙」

「…むう、了解」

少し不満げな表情を浮かべるも、すぐに無表情に戻り、ザフィーラの傍に移動する

そして数秒後、彼等はこの世界より消えた

その後

「やはり紅牙は主はやての傍にいるべきだ」

「…むう」

シャマルがはやてを病院に連れていっている間に、リビングにて早朝の件の会議が開かれた。ちなみにシャマルは思念通話での参加である

『紅牙君の戦闘能力は私達の中でも突き抜けてますし、真竜クラスでもあっさり倒せるのはわかりましたが…』

「あまり大物を狙いすぎてバレてしまえば本末転倒だ」

「管理局員狙うにしても、テメェの魔力はデカ過ぎて隠密行動には向かねぇからな。たまに稼いで貰うくらいがちょうど良いんじゃねぇか？」

「…むう…」

紅牙はちょっとだけムスッとした表情をしている。僅かな変化だが、それを見抜ける様になりつつあるのに、時間の経過を感じる

「紅牙、お前には元々の仕事やサッカーもある。流石にこれを軽んじるのは主はやても困惑するだろうし、お前がいてくれれば安心できる。八卦が来たらすぐに呼ぶから普段の蒐集は私達に任せてくれ」

「……わかった」

ジト目でシグナムを暫く見ていた紅牙だが、不承不承といった感じで承諾した。それを見て、ヴィータはニヤけながら

「まぁ適材適所ってことだ。大砲ぶっぱなしてばっかりのお前には向いてないんだ。アタシ達に任せとけっての」

「……っ！」

「ヴィータっ！！」

表情が強張る紅牙とザフィーラの叱責。当のヴィータはしてやったりといった表情である

ここで補足しておくが、紅牙とヴィータの仲はそこまで良くない。性格が合わない為に度々かち合うのだが、ヴィータが噛みついて紅牙が受け流すという関係が定着しつつあった
だが、マサキが加わった為にヴィータという火に油どころか爆薬を投げ込む為、さらに悪化していた。その為、少しだけ気が晴れたヴィータだったが

『紅牙、報復案Eだ。残すなよ』

「…ん、了解」

どんよりした空気の紅牙が立ち上がると、守護騎士達（特にヴィータ）は飛び上がり、構える…が紅牙はそれを素通りしてリビングを出ていく

「何だ、アイツ？」

「さあな？少なくともわかるのは…」

いつの間にか人間形態になっていたザフィーラがヴィータを羽交い締めにする

『…ヴィータちゃん？』

「お前の説教だな」

リビングより、ヴィータの情けない悲鳴があがった

「…ん、何か聞こえた」

『近所の犬が吠えただけだ。さっさと済ませるぞ。報復案Ｅ（ＡＴ）をな』

報復案Ｅ…それは単純かつ、地味な報復である。そしてそれは数時間後に明らかになる

「あー食った食った」

ヴィータは食事を終えて、冷蔵庫に向かう。そして冷凍庫に手を伸ばす

「やっぱ食後のアイスは最高だよなー♪」

上機嫌で冷凍庫を空け、昨日に買ったハーゲン○ッツを探すが…あったのは購入時の紙の箱のみで、アイスは欠片も無かった

「あれ？昨日確かにはやてに頼んで買ってもらったは…っ！？」

ヴィータの表情が凍りつき、ゴミ袋にゆっくりと視線が動く。そこには…

無惨にも食い尽くされた、ハー○ンダッツのアイスの空き容器が、まるで戦場でこと切れた足軽の如く、幾つも晒されていた

「だ、誰がこんな…」

膝をつくヴィータ。はやて達は困惑の表情を浮かべている。そして、何時もいるはずの男…紅牙がいない。そこでヴィータの何かが切れた

「上等じゃねーか…戦友達（アイス）の恨み…張らしてやるぜぇ」

鬼気迫る表情でグラーフアイゼンを握りしめる

「待てヴィータっ!?」

「放せシグナムっ、アタシは…アタシはアイツを殴らなきゃ気が済まねぇんだ!!」

すると、珍しく八神家で風呂からあがってきた紅牙がリビングに戻ってきた。その手には…ハーゲンダ○ツのアイスが握られていた。

「……っ!!コイツ、コロスッ!!」

「…これは夕方はやて達と買ってきた分」

「人のアイス食い尽くしてまだ食う気かテメェはっ!」

「…人のせいにしてアイス狙ってるの?……意地汚い」

「ーーーっ!!」

マサキの入れ知恵を受けながら煽る紅牙と、怒りで言語機能すらやられつつあるヴィータ。そしてそのやり取りを見て大爆笑するはやて

蒐集が始まっても、はやての周囲家はやはり平和であった

幕間　その火力、高過ぎる為（後書き）

「…これはどういう事？」

ん、紅牙君。珍しく怒ってる？

「…（指をパキパキと鳴らす）」

おーけー、ちゃんと説明しよう。だからその握撃を止めるんだ

「…ん」

ふう…まぁ理由は本編で語った通り。ゼオライマーの魔力がでかすぎて普通に察知されかねないのと、やっぱり大火力がネックになる

「…だから何でそれが駄目なの？」

例えば、ＳＴＳの機動六課のはやてが前半で限定解除した回で、はやてが撃破されたら普通に大騒ぎになるでしょ？

「…うん」

これと一緒。あんまり強いの狙うと誰が倒したんだって話になって、そこから闇の書に繋がるリスクが出てくる。だからシグナムからストップが出た

「…はやての力になれない。…悔しい」

だからお前にははやての生活の方で力になる役目もあるんだろ？

「…ん」

後はラストの補足だな。アレは一応アイスを下の段の冷凍室に隠していたりします。昼間に食い荒らした分を買って補完はしてあげています。怒り狂うヴィータを見るのが（マサキが）楽しいらしく、煽りまくってますが

「…マサキは性悪だから」

紅牙も徐々に染まってきてるね。

「…たまには憂さ晴らししても、バチは当たらないと思う」

まぁね。久しぶりにこの形式にしたけど、短編の間はこれでいこうと思う

「…では、また次回の後書きで」

幕間　糖分自重なはやての幸せ（前書き）

すいません、遅くなりました

実ははやてと一緒に終わらせる予定だった、桧山さんの話が大きくなってきたので、はやての話と分割して書き直したわけです…

どうしてこうなった…

幕間　糖分自重なはやての幸せ

はやて視点

この話のちょっと前に八卦とまた戦ったらしいけど、その後こー君は元気無かった。その事をつい聞いた時後悔しました。こー君はうちに管理局の魔導士にバインドっていう魔法の鎖みたいなので縛るヤツで縛られた時に昔の事…未だに血を流し続けていた心の傷の事わ話してくれました

それを聞いて、うちは泣いてしまいました
実の親に首輪で繋がれ、虐待され続けた…そんな信じられないような過去を背負って尚、親が帰るのを待ち続けるこー君が可哀想で…

でもこれはうちの自分勝手な想い。こー君に同情しかできへん自分が悔しい、こー君を助けられない自分が腹立たしい…そんな感情でぐちゃぐちゃになってたら不意にこー君に抱き寄せられた

「…はやて、ありがとう。…確かに思い出したのは辛かった。でも、僕には父さんと母さんだけの世界で生きているわけじゃない。…はやても、シグナムも、ヴィータも、シャマルもザフィーラも、マサキや桧山さんだっている。だから僕はもう大丈夫…むしろはやてが泣いてるほうが、嫌だ」

ソファーで隣同士で座ってたからうちはこー君に抱き締められてた。

こー君は不器用や、やからこんな直接的に慰めてくれたりする。それが嬉しくて、うちは泣き疲れて眠るまでずっと泣いたままやった

そして、うちは夢の中で凄い悲しい夢を見た。銀髪の綺麗な人が涙を流しているのが印象的やった。でも、その夢の細かい内容は思い出せないけど、結末の一場面だけはしっかり覚えてる

その結末には、悲しい物語に泣いていたうちとその銀髪の人の涙を理由を変えてしまった

うちにとってのヒーローの、以外と大きな背中があったってことだけは

目が覚めた時には夕方になっていた。身体には毛布が掛けられていて、うちの身体は凄い暖かいままやった
それもそのはず、そこには無防備な寝顔を晒して眠るこー君がおったんやから

「〜〜〜〜〜〜〜〜っ！！」

咄嗟に口を抑えて声が出るのを阻止。そして深呼吸をして冷静になったのを確認してからこー君の寝顔を観察する
人形みたいな顔立ちなのは相変わらずやけど、何か妙な可愛らしさがある。いつもより無防備やからかな？

気が付いたら、うちの顔はこー君に近づいてた。こんなシチュエーション、最近見たドラマにあったような…

確かドラマやったらこの後、ヒロインの子が男の子に…キス、したんやっけ？え、キス？

そんな事を考えてた間に、うちらの顔同士が触れ合うような距離になってしもうた
うちとこー君が、キス？雰囲気に流されてうちが遂にしてしまいそうになる直前にリビングのドアが開いた

「っ！！」

咄嗟に顔を離して、毛布に潜り込む。結果的にこー君の腕の中で甘

えてるような状態になったけど、背に腹は代えられへん

「はやてー、あれ？なんで車イスだけ…ソファーにいるのかー」

「おるよー」

入ってきたのはヴィータやった。名残惜しいけど、こー君から離れて返事する。するとその声でこー君が目を覚ます

「…んみゅ、あれ？寝てた…」

「おはよう、こー君」

「…はやて、もう大丈夫？」

「もう大丈夫やで？こー君に一杯優しくしてもろうたからなー」

「…うー／／／」

耳まで真っ赤になるこー君。多分、うちも顔真っ赤やと思う…こー君は不器用過ぎるなぁ、お陰であんな夢みたいな時間過ごせたわけやけど…

二人してもじもじしてるのを見てヴィータが首を傾げていた。そしてこー君が急に慌て始める

「…今日は確か夕刊の日、もうとっくに終わってる…まずいっ！！」

毛布をひっぺがし、部屋から飛び出す直前にシャマルとぶつかりそうになる

「きゃっ！どうしたんですか、紅牙君？」

尻餅をついて目に涙を浮かべているシャマルに申し訳なさそうな表情をしているが、明らかにこー君の顔には焦りが見える

「ああ、新聞配達の件なら大丈夫ですよ？私が連絡をしておきましたから」

「「…え？」」

うちとこー君の声がハモる。さらにシャマルは爆弾を投下した

「その毛布掛けたの、私だったんですけど…」

「あ、そうやったんか。ありがとなーシャマル」

「いえいえ、いいものを見させてもらいましたから♪」

妙に上機嫌なシャマルは携帯を取り出した。石田先生との連絡用にシャマルは持っているんやけど…嫌な予感がする

「こーんな写真も撮れましたしね♪」

「「〜〜〜〜っ!?」」

それはうちにとっても、こー君にとっても衝撃的な一枚やった

こー君の腕の中で甘えながら眠るうちと、うちを抱き締めながら眠るこー君の写真

別角度や毛布を掛けた後のものもあるらしく、何枚かの写真が順番に映る度にこー君が石化していっている
まぁ、うちも真っ赤を通り越しているのがわかるからなぁ

「…まさか、シャマル…それを…」

「ええ、新聞屋の方に見せました」

「…ああ…ああ…」

崩れ落ちるこー君。確かにこれは恥ずかしいやろうなぁ

「新聞屋に連絡して、理由を説明する為に画像を送ってからまた電話させてもらったら、快く了承してくれましたよ。これを邪魔したら馬に蹴り殺されちまう、って大笑いしてました」

新聞屋のおっちゃん、間違いなく商店街にばらまいたやろうなぁ…ってそれってまさか！

「うちも巻き添えやんか！」

頭を抱える…いかん、来年くらいまではネタにされそうや…

「はやてちゃんも検査が夕方にありましたが、石田先生にこの画像を送って明日にしてもらいましたよ♪」

「…シャマル、何て事を…」

こー君が戦慄している。今度はうちが石になってるかもしれん

これから暫くの間、うちらは夫婦呼ばわりされ続ける事になった。
よく行く場所にことごとく画像がばらまかれてしまったから逃げられへんかったから、耐えるしか無かった
シャマルは二人で散々説教したけど、し足りんくらいや、画像は全部没収して消した…事になってる。うちにはこー君の寝顔を消すのは無理やったんで、こー君にはＳＤカードに画像を避難させてから、空フォルダ見せて納得してもらった。こー君は携帯持ってないからあっさり引っ掛かって、それから追求される事も無い

こー君に抱き締められてた写真はプリントアウトして一枚を部屋に飾って、現在待ち受けになってます。これがあればあの時の温もりを思い出せるから…

以上で、八神はやての闇の書事件の合間に起こった、一番幸せやった事件の話を終わります

幕間　糖分自重なはやての幸せ（後書き）

「今回は恥ずかしかったわー」

……

「返事がない、ただの屑鉄のようだ」

……酒入ったままＳＳは書いちゃダメ、絶対

「なんか大麻のポスターみたいなこと言ってるけど、正気？」

正気だから書いてたＳＳを添削してた時に悶絶したんだよ。何やってんだ俺、状態

「でも、結局アップした理由は？」

一応、俺がはやてルートからフェイトルートに逃げない為の予防線。これでも脳内プロットではかなり仲良いんだけどな、紅牙とフェイト

「天然同士、気が合うんは仕方ないと思うで」

やっぱそうだよね。それと、次の章はフェイトがヒロインで、それ以降はＡｓシナリオに食い込み始めるから、こんな話やれないし

「そっかー、まぁ仕方ないかな？」

そして、予定がズレまくってるが、桧山さんの話やってから次章に入る。ここからはＨＩＴ数とかの短編以外は挟まないから速度が上がる…といいなぁ

「実習忙し過ぎたから、夏休みまでに終わらせるんが目標に変更したんやったっけ？」

うん、後半は話膨らませるとそうなりかねないね。まぁ今は桧山さんの話の再編集です。ＧＷは多少忙しいかもしれませんが、自由な時間はあるはずなんでちょっとずつ書いていきます
では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

幕間　桧山の決意（前書き）

これにて幕間は終わって４章に入ります…長かった

幕間　桧山の決意

はやて視点

今日はシャマルとヴィータと…こー君と桧山さんの五人で市外の自然公園に来てます。
シグナムは道場に用事があったのと、ザフィーラ一人留守番なのは可哀想ってことで留守番になりました

こんな状況になったのを説明するには、数日前に遡ります…

数日前、八神家にて

「どうも、紅牙君がお世話になっています」

今日はサッカーの日なんでこー君は居ない。シグナムは出掛けてい

て（実際は蒐集）、シャマルと二人の時にスーツを来た穏やかな顔をした男性…桧山と名乗る男性がやってきた

彼は菓子折りをシャマルに渡すと膝を屈めて同じ視点から、うちに話しかけてきました

「少しお願いがありまして…こんなチケットがあるのですが、紅牙君を連れてどうですか？」

それは市外の大きな自然公園の日帰りツアーのチケットで、身体障害者にも対応したものでした

「何で今日持ってきたんですか？紅牙君が練習やって知ってはるはずやのに…」

「だから、です」

人差し指を立てながら笑顔で話す桧山さん。何でやろう？胡散臭さが半端無いんやけど…

「紅牙君に話を振っても逃げられるのがオチですから。でしたら貴方達を巻き込んでしまえば、紅牙君に逃げられる心配はありませんしね」

この人、はっきりとうち等を利用するって言い切りおった…

「それって私達をダシに、紅牙君をそこに連れて行こうってことですか？」

流石にシャマルも少し頬がひきつってるわ…なんつーか、この人の第一印象が食えない人で確定してしもうた…

「はい、紅牙君のお友達と家族の方相手に腹の探り合いをする気はありません。ですから、理由もお話しますが…お二方は、紅牙君の生活環境について、どれくらいご存知ですか？」

顔立ちは穏やかなままやけど、僅かに雰囲気が変わった。真剣に聞いているのもわかったので、周りに人がいないか確認してから、こー君の家族と虐待の過去について話した

「かなり深い所までご存知でしたか…ならば紅牙君がこの町から一歩も出た事が無いのもお分かりだと思います」

ここで、桧山さんが何を意図してるのか分かった

「桧山さんは…紅牙君に外の世界を見せてあげたいんですね？」

桧山さんは苦笑いを浮かべながら話してくれました

「はい、ですので予定が合うのならばご協力をお願いしたいのですが…」

それに2つ返事で了承したうちは桧山さんと予定の調整をして、こー君を捕獲してここに来たんやけど…

「…おー」

カブトムシをジーッと見続けるこー君。身体能力高いし、万一、野生に還ったらどうしようと思ったけど、今のところはあちこちを興味深そうに見て回っているだけ

ヴィータも好きに遊ばせている。体面上、迷子になった時用にシャ

マルの携帯を持たせてるけど、実際は思念通話で事足りるからホント魔法は便利やなぁ

…などと考えていたら、ヴィータが帰ってきてた

「はやて、こっちにすげーのがあるんだ、早くいこーぜ！」

この言葉と共にうちは車椅子ごと拉致された

桧山視点

「ふむ…」

紅牙君もはやてさんもヴィータさんも各々で楽しまれているようで何よりです

後は…

「シャマルさん、皆さんお楽しみのようですし、我々もお茶でも飲んでゆっくりしましょうか？」

「あ、はい。わかりました」

そして、近くにあった喫茶店で暫く休憩することにしました。するとシャマルさんが話しかけてきました

「つかぬことをお聞きしますが、私達は世間一般からはどういう風に見えるんでしょうか？」

はやてさん達との関係でしょうか？

「美人な姉妹だと思いますよ。一人男の子が混じっていますけどね」

「いえ…やっぱり母親の位置になるんじゃないかって思ってしまいまして…」

年が離れているのを気にしていらっしゃるのでしょうか？

「お若い女性がそんな事言ってはいけませんよ」

「いえ、失礼ですが…桧山さんと夫婦ではやてちゃんや紅牙君が子供に…／／／」

ああ、子連れっていう意味でですか。そんな事を気にしていられるって事が若いって事だと思いますがねぇ

「ハハハ、こんな美人を妻にできるならその男性は幸せ者ですよ」

事実だ。直接の面識は無いが、シグナムという方も大変な美人であり、世間では美人ばかりの家という認識で間違いないはずだ

「それに、貴方のような美人を３０を折り返したオッサンが妻にできたら、それだけで人生勝ち組ですよ」

軽く笑うと、シャマルさんが目を大きく見開いていた

「ええっ?!２０半ばくらいだと思っていました…」

「やっぱり、そう思われていましたか…」

高町さんと二人で話していると、よく大学生くらいの子達に話しかけられますが、若く見られてましたか…

「すいません…」

「いえ、気にしないでください。何時もの事ですから…」

そう言いながら、向こうで今度はクワガタを凝視している紅牙君を見つける

「あの子も楽しんでくれて、本当に良かった…」

その微笑ましい光景を暫く見た後、ふと正面のシャマルさんに視線を戻すと、顔が赤くなられていた

「どうしましたか？」

「い、いえ何も…」

顔を赤くして俯いたシャマルさん。何があったのでしょうか？

シャマル視点

危うく赤くなった顔を見られる所でした…でも、この人がそんな年
輩だったなんてわからないですよ

１８０近い身長に、きっちり着こなしたスーツに穏やかな雰囲気を
まとった、はっきり言ってかなり美形の顔立ち。確かにあのサッカ
ーチームの監督さんと町を歩けば、若い女の子に声をかけられるで
しょうね…

「そういえば…」

「どうしました？」

「桧山さんは奥様やお子さんはおられないんですよね？紅牙君をこ
こに連れて来たのも考えると」

正直もったいないと思う。紅牙君を微笑みながら見守る姿に、私で
すらやられそうになった。仮に紅牙君がいても選び放題な気がする

「ええ、いましたよ」

「え…あ、すいません」

「いえ、お気になさらないでください」

地雷を踏んでしまった…すると、桧山が語り始めた

「ヤクザ者として生きると、どうしても誰かを不幸にしてしまう…そのツケが、妻と息子にいってしまった…」

チャラ、と鎖の音がすると、桧山さんの手には写真の入ったロケットがありました

「妻は身体が弱かったのですが、どうしても子供を産みたいと言い、無理な出産を行いました…」

「じゃあ、奥様は…」

「ええ、それが原因で亡くなりました。ですが、息子は…出産後間もなく何者かによって保育器から連れ去られました」

「…え?」

「私に恨みを持つ者の仕業でしょう。お陰で妻は一度も息子を抱く事もできずに逝ってしまった…さぞ、無念だったことでしょうね」

「そんな…」

シャマルは既に涙を流しているが、一度話し始めてしまうと立て板に水を流したかの如く、すらすらと言葉が出てきてしまう

「方々を探しましたが、息子は新生児ですし、発見できずに終わりました…ですが、ここでもう一組の夫婦が出てきます」

桧山さんの雰囲気が変わる。まるで怒りや悲しみを奥底に押し込めてしまったが故に感情を無くしたような声で話を続ける

「四季と言う、我が組の下働きの夫婦に自宅分娩で、息子が産まれました。出産前の診断で高確率で死産だと言われたにも関わらず、自宅分娩で元気な息子が産まれました。名を紅牙と言います」

桧山さんの言おうとしている事だけははっきりとわかる

「まさか…」

「確証はありません。その時点では拾った恩こそあっても、彼等に恨みに思われる謂れはありません…ですから、もし紅牙君が…妻の、春香の抱く事すら叶わなかった息子だと言うなら」

ロケットを持つ手が震えている。それまで押さえていた感情が溢れていく

「私は彼等を殺すかも、しれませんね」

桧山視点

…全く、お茶の席で、女性に言う事ではありませんね。春香に叱られてしまいます

「すいません、こんな席で…」

「いえ、でもどうしてそんな事を…」

「それは…私はあの子が私の息子だとしても、父親だと言えないからです」

「何故ですかっ！本当に親なら…」

「怖いんですよ。あの子をこちらの道に引き込んでしまわないか」

すっかり冷めてしまったコーヒーで口の中を一旦潤す

「これは逃げているだけです。でも、それでもあの子をこんな道を歩かせたくない。日の当たる場所を歩いて欲しいんです…私は臆病なんですよ。だから四季の始末の後、あの子をお願いしたいのです」

するとシャマルさんが暫く考えた後、意を決して答える

「お話はわかりました。でも、そんな事を気にする必要は無いと思います」

「…え？」

「桧山さんと紅牙君の会話を見聞きしたのは今日が初めてですが…何と言うか、凄く不器用な会話なんです」

「不器用、ですか？」

シャマルさんの言いたい事が分からず首を傾げる

「必死に歩み寄ろうと空回りする父親と、どう接していいかわからない子供みたいで…そうやって認識すると、急に微笑ましく見えてしまいまして…」

そしてシャマルさんは笑顔で言いきりました

「だから親子になってもいいと思いますよ。紅牙君がそっちに引き摺られるのを良しとしないなら、桧山さんが守ればいい…それが親の勤めだと思いますから」

目から鱗が落ちるような言葉でした。そして私の中で一つのパズルが組上がっていく

その通りだ。仮に血が繋がっていようがいまいが関係無い。彼女達も直接の血の繋がりの無い紅牙君を家族として接している。私にもできない、ということが無いはず

それにだ、もしあの子に害を為す存在があるならば私が守ればいい…高町さんと共に鍛え上げた、この両の拳を以て…妻を、息子を守れなかった我が拳を再び握るのみ

「私にも…もう一度、誰かの親になる機会が、あったのですね」

「はい、桧山さんなら喜んでくれますよ。紅牙君は照れ屋さんですから、口には出してくれないでしょうけど」

口に手をやって笑うシャマルさん。確かにその光景を想像すると、笑みが深まってきます

「ありがとうございます、シャマルさん。私は…紅牙君の父親になれるよう、頑張ってみます」

この日が私、桧山明臣（あきおみ）にとっての決意の日となりました

その日の晩、高町さんのお宅に連絡させていただくと、「ようやく踏ん切りがついたか」と言われました。あの方には学生時代から本当に頭が上がらないですね

さあ、あの子の幸せと私の幸せの為、明日からも頑張りましょう！

幕間　桧山の決意（後書き）

「ようやく終わりましたね」

うん、一話増えたからね

「私なんて、後始末用のインスタントキャラだったのにかなりの重要キャラになってしまいましたし…」

士郎の後輩で武術の達人（拳一つで士郎（全盛期）とまともにやりあえる）なんて強烈な後付け設定まで増えたしな

「しかし、私の出番…増えますよね？」

いや、増える場所はあるが次の話は出番決まってるから無問題

「そうですか。次の八卦はフェイトさんと絡むのなら…あの方ですか」

うん、だから実は書くのが楽。フェイトとのやり取りが面倒なくらい。原作混ざり始めるし

「原作を遥か彼方にそぉい、したままで全く絡めませんからねぇ」

原作キャラと八卦衆の戦闘力に差を作り過ぎたのが原因だね。強化前のなのは達じゃ紅牙がいなけりゃ話にならないし、紅牙出すと蹂躙して終わるからね

「次は初めての共同戦闘らしいですね。大丈夫なんですか？」

やれるだけやってみるさ…そっちも上手くやれよ？

「高町さん所の恭也君と美由希さんをお借りしてますからね。この布陣でしくじる訳にはいきませんよ」

まぁそうだよな…では、皆さん「次回の後書きでお会いしましょう！」

…この台詞の奪われ方は初めてだわｏｒｚ

第４章　母の幻影と父の背中（前書き）

今回はプロローグ的なマスターシーンのみなので、めっちゃ短いです

第４章　母の幻影と父の背中

「不完全とはいえ、シ姉妹があそこまで手玉に取られるか…」

暗闇の中、妙齢の女性が笑みを深める。だが、その独り言は男のものである

「こんな使い勝手のいい身体が手に入ったのは良かったが、恐らく冥王側も歴代最強なのだろうな…惜しむらくは、この宿主の自我が残っている間に憑依できなかった事か」

八卦のデバイスは術者の精神に依存する所がある。その為、死んで時間が経っており…さらに自我に問題があったのだろう、精神に異常がある為に本来の性能は活かしきれない、はずだった

だが、この肉体…残っていた情報だとプレシア・テスタロッサはオーバーSランク級の魔導士であった為に、それを差し引いても今までの身体では一番の性能だろう

「この女性もまた、苦しんだのだろうな…」

含みのある言葉を吐きながらも男…八卦の【雷】のオムザックである塞臥はモニターに映る、管理局の魔導士…クロノを一方的に倒す少年、四季紅牙を見つめる

「さあ、新たなる幼き冥王よ…お前はこの悲しみしか残らぬ負の連鎖を断ち切る者なのか…お前が悲しき運命（さだめ）を繰り返す者なのか…見極めさせてもらうぞ…」

過去にも裏切りを働き、他の八卦にすら忌み嫌われる男、塞臥は静かに闇に消えていく…冥王を見極める為に

第４章　母の幻影と父の背中（後書き）

さて、第４章が始まりましたが…取り敢えず、悲しいお知らせをしなくてはなりません

ぶっちゃけ、前々からも言ってた気もしますが、この章ははやてとヴォルケンズには出番はありません。一応、後者は僅かに描写で出るくらい…つまり、意味ありげな事言ってプロローグに出てきた塞臥を倒すまでは出番がマジでありません。でも、コイツは今までの敵とは別次元の強さだったりします

替わりに、この章はフェイトが思いっきりヒロインをします。アリサとすずかともロイスが先に取れます
…なのは？恭也兄ちゃんのが出番多いかもしれませんな（爆

更新速度は上げていこうと、努力はしてみます。それでは皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

第1話　再会は踏み台から（前書き）

また遅れましたｏｒｚ

第1話　再会は踏み台から

紅牙視点

「…ん、終わった」

『以外と早く終わったな』

夕刊の新聞配達を終えた紅牙は、帰路の公園で軽く休憩をしていた

「…今日は少なかったからね」

『人員が安定してきたからな。その分、一人頭の負担も軽減されているはずだ』

最近はバイトも増え、出勤回数も仕事量も減っている。なのに時給は上がっているのを申し訳なく思いながら（実際は金額の帳尻合わせの為）、帰宅路を歩いていた

『【水】を殺ったから、速やかに【火】が来るかと思ったが何の音沙汰も無く、他も動きがない…つまらん』

「…確かに、問題だね。これじゃ蒐集がやりにくい」

現在はこの世界から容易に行ける世界に限定して蒐集を行っている。

原因は勿論管理局と八卦である。
前者は目をつけられないように、後者はすぐに対抗できる紅牙を用意できる、という点でこのやり方にするしか無くなっている

「…せめて【雷】を倒せば蒐集範囲が広がるんだけど…」

『塞臥は用心深いからな。恐らく終局までは出てこないはず…っ！』

公園内に魔力反応を感知し、緊張が走る

『これは…確か金髪の小娘の方の魔力だな』

「…取り敢えず、様子だけ見に行こう」

そして二人は公園内の高台へと向かう

フェイト視点

私は今、迷子になっていた。悩みながらあちこち歩いていたら、来た道がわからなくなっていた。典型的な迷子である

悩んでいたのは、先日の一件。八卦と木原マサキの遭遇である
交渉を一任されたとはいえ、私達ならまだ話になるという段階で、あちらはクロノのせいで敵意を持っていると見ていい。なのはもいるのだが…ＯＨＡＮＡＳＨＩという単語と共に、今回は一人でやった方がいいんじゃないか？という疑念が頭をよぎってしまった

だが、いざ会ったとして何を話せばいいの？世間話ができる状態じゃないし、管理局への同行等は絶対に無理。となると、その場で話を聞くしか無いけど…何を聞けばいいのだろう？

八卦という単語はこの世界の言葉で、世界の全てを八つの事象に分けたものらしい。アリサちゃんとすずかちゃんにとり憑いていたのは【火】と【水】。マサキさんはユーノ君が聞いていた口伝では【天】…圧倒的な砲撃からもそれは理解できたけど、あれでも牽制レベルの火力らしい…それを聞いて、ますます話し合いに持ち込む必要が強くなってきた

取り敢えず、会ってから考えよう。と一旦考えを保留にした時には私は既に迷子になってました

そして、普段は使わないように言われた魔法を少し使い、木の上に飛び乗り、現在地を確認。自宅の方向を確認してから降りたんだけど…

真下にいた男の子に驚いて、集中が乱れて落下。結果的にその男の子の頭に着地する事になってしまって…

紅牙視点

『（紅牙、無事か？）』

「（…ん、ちょっと痛かった。後、誰かが乗ってる）」

紅牙は今、うつ伏せになっている。そして、後頭部に子供一人分程度の重量が集中している。

「痛ぅ…」

呻き声みたいなのが聞こえる。どうやら声からして、フェイトと名乗った女の子みたいだが…

『（紅牙、今回はお前に任せる。俺の声はバレているからな）』

「（…ん、了解）」

取り敢えず二人で話し合いを終えると

「きゃあっ、だ、大丈夫ですか！？」

フェイトは、僕を踏みつけたままだと気付いて慌てて立ち上がったようである。どうやら、僕の頭を踏みつけた後、僕は地面に叩きつけられ、さらにバランスを崩したフェイトが尻餅をついたようである

「…ん、大丈夫」

普通なら首が折れるか、意識は刈られるであろう連撃を受けても、僕は耐えていた。耐えられる環境に育った事に地味に感謝した

そして何事も無く立ち上がると、向こうは僅かにふらついている

「本当に、すみませんでした…」

『（ある意味、運がよかったな。向こうはそれどころでは無くなっているぞ）』

「（…ん、でも様子がおかしい）」

フェイトのふらつき…というよりも、微妙に崩れた体勢が戻らない。

そんな中

「…痛ぅ…」

僅かな呟きと表情の変化が見られたので、声をかけてみる

「…怪我、したの？」

すると向こうは慌てて

「い、いえ大丈夫です。軽く足をひねっただけですから」

と手を振ろうとするが、バランスを崩す。咄嗟にフェイトの手を掴

み、転倒を阻止する

『（態々厄介事に首を突っ込むか…）』

「（…見てみぬふりは、したくない）」

そして紅牙は始まりの言葉を放つ

「…怪我してる人を放っておけない。掴まって」

フェイト視点

私は今、さっき会ったばかりの男の子…四季紅牙君に背負われています。いわゆる、おんぶという形です

最初は肩を借りようとしたんだけど、身長が１５０くらいあるであ

ろう紅牙君相手（後で同い年と知ってかなり驚きました）だと、私の体勢が却って辛かったので、紅牙は私を横抱き…通称、お姫様抱っこの状態で抱き抱えたんだけど…

「これは、流石に恥ずかしいよ…」

「…むう、なら別の方法にする」

と弱々しく抗議したらキョトン、と首を傾げた後この格好になりました。彼にはまだ、そう言う羞恥心とかが無いのかな？

彼はこの辺りの地理に詳しく、マンションの名前を出しただけで、番地まで当ててしまい、「…じゃあ、そこまでは送る」とそのまま歩き出しました

顔立ちは整ってるし、髪も綺麗な黒髪。僅かに汚れているのは私が足蹴にしたから…流石に罪悪感がわいたので頭を軽く払っていると、「…気にしないでいい」と言ってくれたりしました

お互い無言なのは気まずいので、色々お話をしました。最近こっちに引っ越してきて聖祥付属に通い始めた事、友達の事を話たりしました。紅牙君はあまり表情を変えないけど、感情が無いわけじゃ無いみたいです

それに、紅牙君は身体を鍛えているみたいで、私を背負ったまま歩いても、汗一つかいていません。その事を聞くと

「…新聞配達やってるし、鍛えているから」

と話してくれました。どうやら紅牙君は家庭の事情で新聞配達をやっているらしいです。私達とは全然違うなぁ…という認識と、どこかで妙な親近感が入り交じりながら、途切れ途切れの会話は続きました

１５分ほど、そんな風に話しているとマンションが随分近くに見えてきました。すると、駐車場からリンディさんとエィミィがやってきて、こちらに気付きました

紅牙視点

あちらからフェイトの名を呼ぶ女性二人がやってくる。フェイトの反応を見る限りは知り合いと見ていいだろう

「…ここまで、かな」

「え？」

フェイトの足に衝撃を与えないようにゆっくり降ろすと、フェイトから離れる

「…じゃあ、また」

それだけ言い残し、立ち去ることにした。はやて達は夕食の買い物に向かっているはず。追い付ければ献立を僅かに好物に誘導できるかもしれない、完全に餌付けされた者の考えを張り巡らせながら紅牙は帰路についた

フェイト視点

怪我は大したことは無かった。やはり右足を軽くひねっただけのようで、完治に三日もかからないだろう

「にしてもあの子、顔といい、態度といい、カッコ良かったねぇ。」

「そう?私には随分と可愛らしく見えたけど」

リンディさんとエィミィは紅牙君について話をしている。私は彼が同い年である事を話すと、僅かに驚いた後、エィミィがニヤニヤしながらクロノに話を振る

「つまり私等くらいの年には、クロノより頭何個分上の身長になってるのかなぁ?」

「…当て付けのつもりか?」

と冷ややかに睨み返すクロノ

「だってぇ、優しくて背も高くてイケメン候補で、何より空気も読めてるなんて優良物件だと思わない?」

「空気が読めなくて悪かったなっ!」

クロノは先日の一件度々ネタにされている。けど、自業自得だからフォローのしようが無い

二人のやり取りを見ながら、私は夕食までの時間を潰すことにした。
次、あの子に会えたらちゃんとお礼も言おうと心に決めながら…

第1話　再会は踏み台から（後書き）

火竜の天鱗が出ません

先日、遂にキレて友人二人と銀レウスをラオートによる閃光ハメで３分未満狩りによる乱獲に走りましたが…５０匹狩って天鱗一枚とか、あの空の王者（笑）は絶滅させて欲しいのでしょうかねぇ…ｗ

息抜きに狩ったナルガからは毎回天鱗が出るのもお約束ｗ

すいません、モンハンやってましたｏｒｚ…雑誌で３ｒｄの情報見たら、久しぶりにやると腕落ちてて泣きましたよ

で、リハビリがてら色々狩ってたら普通に更新遅れました。さらに、実はこの話、水曜日にはできていたのですが…後書き書いてる最中に一度電池が切れて、そのまま忘れてました（爆

取り敢えず、次からはこんなポカはやらないように気を付けます。

では皆さん、次回の後書きで会いましょう！

第2話　冥王と雷光（前書き）

今回の話は好き嫌い別れるだろうなぁ、と思います

第2話　冥王と雷光

フェイト視点

私は今、アリサちゃん達とリムジン？で河川敷に向かっている。昨日会った少年、紅牙君に会う為に。こうなった経緯は朝、バス停で…

「フェイトちゃん！？その足どうしたのっ！！」

テーピングした足を少し引き摺ってバス停に来た私な血相を変えてなのはが駆け寄ってきた

「大丈夫、ちょっと捻っただけだから…リンディさんも大袈裟にテーピングしただけだよ」

「でも、フェイトちゃんが怪我するって…何かあったの？」

「うん、昨日ね…」

私が説明する前にバスが来てしまった

「バス来ちゃった…まぁアリサちゃんとすずかちゃんにも聞かれるだろうから、一緒に聞くね」

「わかったよ、なのは」

そして私達はバスに乗って学校に向かったんだけど…

「さあ聞かせてもらおうかしら、フェイト？」

満面のひきつった笑みを浮かべるアリサが私に迫ってきた

【火】と【水】の一件は二人に記憶が無いから、それを誤魔化して

終わりのはずだったんだけど…この二人はそうはいかなかった
アリサちゃんは【火】が発狂して剥がれたから中途半端に記憶が残ってたし（記憶の逆流が無かったのは不幸中の幸いだけど…）、すずかちゃんに至っては普通に意識があったらしい

結果的に私達は魔法少女であることを明かさなくてはならなくなったわけだけど、二人は普通に受け入れてくれた。それ以来、私達の絆はより強いものになったわけ、だけど…

「「「……」」」

多分、二人は私が無茶なことをしたと思っているのだろう。なら速やかに誤解を解かないと…

アリサ視点

「私達が塾に行っている間にそんな事があったんだね…」

横ですずかがいい笑顔で聞いている。絶対に勘違いしてるわね…

「にしても…フェイトも結構ドジなとこあるわね」

「あう…／／／」

顔真っ赤にしてフェイトが俯いちゃった。可愛いわねぇ…そんなだから男子の注目の的になるのよ

「で、フェイトちゃんはその子…紅牙君だっけ?その子にちゃんとお礼を言いたいんだ」

「…うん」

横でなのはがフェイトの話をまとめている。でも…

「四季紅牙って名前の子…同い年なんだよね?付属では聞いたことないわ」

横でなのはとすずかもうなずいている。長身、長めの黒髪、人形のよう…表情に変化が少ないのだろうが、多分美形なんだろう。そんな男子がいれば間違いなく耳に入る。さらに新聞配達の手伝い…となれば恐らくまともに学校に通っているのかすら危うい…そうなると探すのは学校の外になる、かなり難易度が上がるだろう

「そっか…また会えた時にお礼を言えばいいんだし、ごめんね」

フェイトが申し訳なさそうにしている。フェイトのそんな顔見たく無いし、多分この子は私達が塾でいない時はひたすら公園辺りでその子を探すだろう…それは避けたい

「あーっ！！」

「きゃっ！な、何よなのはっ」

「ちょっと前にお父さんが話してた、翠屋ＦＣの新人ＧＫが確か紅牙って名前だよっ！」

なのはがＧＫの名前を出すと、頭の中でパズルのピースが噛み合っていく。確かソイツは…

「前にサッカーの試合見た時に相手チームを絶望させてた、あの無愛想なヤツよね」

「アリサちゃん、その言い方はあんまりだと思う」

すずかは苦笑いしている。確かにフェイトには悪いが、そう思ってたんだから仕方ないじゃない

「でも確かに酷い人だと思ってたよ。あっちのチームの人達、あんなに苦しそうな表情なのに試合終わったら表情一つ変えずに帰っちゃうし」

なのはが珍しくそんな事を言う。気になったので聞いてみた

「アンタが一方的に嫌うなんて珍しいわね、どうしてそんな毛嫌いしてるの？」

「何でかはわからないけど…多分、対戦相手に全く容赦しなかったからかな…あそこまで心を折りにいく必要なんか無かったと思うんだ」

「なのは…」

「でもその子は見ず知らずのフェイトを助けたんでしょ？ならそこまで酷いヤツじゃないんじゃないの？」

流石に少しその子の援護をする。さらにすずかも続く

「それに、もしかしたら仕方ない事なのかもしれないよ」

「何でなの、すずかちゃん？」

「多分、紅牙君はあまり人と関わって生きてないんだと思う…夕刊

の新聞配達してるって事はまともに学校も行ってない。なら尚更だよ」

すずかの意見にになのは以外が納得した。でも、確かにそれなら私達がまともに見たことが無いのもわかる

「だから他人を知らない分、力の差を見せつけて絶望させてても多分それをわかってない…そう言いたいの、すずか？」

無自覚に圧倒的な力を振りかざす。本人が気付いて無いから余計に質が悪いわね

「まぁいいわ、取り敢えず今日は土曜だから昼までだし、終わってから行こっか。フェイト一人だとわからないだろうし」

取り敢えずここで話は終わらせた。このまま続けても、多分気分が悪くなるだけだから

フェイト視点

そして、私達は河川敷のサッカーコートに来たわけですが…

「また、酷い試合になってるわね…」

ルールは大体アリサに聞いたけど、試合は後半で、現在は４－０で翠屋ＦＣの圧倒的優勢、試合もひたすら相手チームが攻めているように見えるが、攻められている翠屋ＦＣ側は余裕のある表情なのに対して、泣きそうな顔になっている
そして守備を掻い潜り、相手のＦＷがＰＡ内からシュートを放つ。コースのゴールの枠内の右斜め上…小学生のサッカーならば普通は取れるはずの無いコースだが、

「…ん、問題無い」

パシッ

端を狙うあまりに威力の無いシュートとはいえ、それを容易くワンハンドキャッチし、前線へボールを送る。そこからのカウンターで５点目が入る

「何これ、勝負になってないじゃない」

アリサが不機嫌そうに呟く

「あんまりだよ…」

なのはも苦々しい表情をしている。すると終了のホイッスルが鳴る

結果としては翠屋ＦＣの圧勝…だが、見てる側には一方的な蹂躙にしか見えなかった

暫くして解散し、まばらになって帰る少年達の中にいる紅牙に声をかける

「あ、あの…」

「…ん、昨日の…どうしたの？」

向こうもすぐに気付いたらしく、止まって皆と別れてこちらに来る

「昨日は言いそびれたからお礼を言いにきたんだ、ありがとう」

すると、少し驚いたらしいがまたすぐに無表情に戻った

「…そっか、それでわざわざこんな所まで来たんだ。さっさと帰るべきじゃ無かった…」

「そんなこと無いよ！急いでたみたいだし…ね」

「…ん、わかった。そういうことにしとく」

何となく独特の空間に入りにくかったみたいだが、アリサが会話に入ってくる

「ふーん、無愛想なヤツだと思ってたけど、そこまで酷いわけでも無いのね。あ、私はアリサ・バニングス、フェイトの友達よ。呼ぶときはアリサでいいわ」

「…僕は四季紅牙。紅牙でいい」

「私は月村すずかです」

「…高町、なのはです」

「…高町監督の、娘さん？」

「そうだよ」

アリサに続いて、二人も自己紹介する。けどなのはは少しぎこちない、苦手意識とかあるのかな？

「紅牙、単刀直入に聞くわ。…どうしてあそこまで容赦無く相手を叩き潰したの？」

アリサは恐らく、学校から気になっていた事を質問した。なのはも厳しい目で見ている…が、紅牙君は淡々と答えた

「…サッカーは、そういうものだから」

「どういう意味ですか？」

なのはは納得できない、といった表情で抗議する

「…僕はまだサッカーを始めたばかりだ。でもわかることはある…

これは、そういう競技だってこと」

「その為なら、あっちで泣いてる子達みたいな子が出るのも仕方ないってことですか？」

「…泣いているからこそ、手加減せずにやった意味があった」

「アンタ、それ最低な意味に聞こえるわよ？」

アリサもかなり冷たい目で見ている

「…今日は公式戦だったんだ」

「それが何よ？」

「…これはリーグ戦だけど、あのチームは今日負けたら三位が確定する。つまり、今日負けたら終わりだったんだ」

「…っ！」

アリサが息を飲む

「…僕らのチームは二位、あっちに負けたら僕達が終わりだった。だから負けられない…負けてたら、泣いていたのは僕らのチームだったと思う」

私も、アリサも本気で勝ちにいったのは理解した

「でも、一点くらい取らせてあげたら…」

なのはがそう言って固まる。紅牙の無言の圧力に気圧されたのだろう、それくらいに、静かに怒ってる気がした

「…それは、今日まで必死に練習してきた相手を侮辱することだ…それに」

紅牙の圧力が増す。なのはが後退りしている

「…僕は、今日初めてＧＫを任された。それは高町監督や皆が僕を信頼してくれた証…それを、裏切れと？ふざけるな。僕は翠屋ＦＣのＧＫを任されたんだ。任された以上は、全力で守る。それだけ。情けなんてかける気も、余裕も無い」

なのはは俯いている。紅牙君の言っている事は間違ったことじゃない。頭では納得しているんだろうけど、心では納得できない、そんな感じなのだろう

「…悪かったわね」

「…わかってくれたなら、いい」

彼に感じた親近感の意味に気付いた。彼も私も、不器用だ…そういう意味では似た者同士なのかもしれない

「でもね、アンタ他人を誤解させるような態度多いわよ？もうちょっと愛想良くできないの？」

「…中々、難しい」

どうやら努力はしているが、苦労しているらしい。確かにもうちょっと愛想が良くなれば人気者になれるだろう

アリサ視点

コイツは中々面白い、私はそう思った。確かに性格的になのはとは

合わないかもしれない。でも、前回は無自覚だったかもしれないが、今回は勝つ為に全力を尽くしたに過ぎない

「でも、あそこまでやった以上は負ける訳にはいかないわよね？」

「…ん、負ける訳にはいかない。だからもっと上手くなる必要がある」

そこで紅牙の携帯（桧山が持たせた。料金システムを知らないので自分からは使わない）が鳴る。少し離れて二、三会話すると、電話を切って戻ってきた

「…用事ができた。もう帰るね」

「そっか、じゃあまたね」

「…またね」

「不様な負け方するんじゃないわよー！」

そして紅牙は小走りで去っていった。地味に急いでいたのかもしれないわね

「私達もここにいても仕方ないし、行こっか？」

「うん！」

「ごめんね、私の都合に付き合わせて」

フェイトが申し訳なさそうにしている。なのはもまだ少し沈んでる。
まぁこういう時はパアッと騒ぐのが一番ね

「じゃあ皆、行くわよ！」

これが、これから腐れ縁になる男、四季紅牙と私達の初対面の出来事だった

第2話　冥王と雷光（後書き）

今回はアリサの好感度が少し上がりました。すずかの好感度はゼオライマーがバレるか、はやて絡みまでは上がりません

今回はフェイトのフラグ回収と、魔王のフラグ完全消滅です
なのはと紅牙、ある意味似た者同士ですが、二人には致命的な差があります
紅牙ははやて達を守る為に自分の意志でティーダを殺しました。なのはは敵であったフェイトやヴィータ達をも救い、かけがえの無い親友となりました。これが他者の為に平気で自分を犠牲にする二人の相違点です

紅牙は敵を傷つけるのを嫌います。ですが、紅牙の大切な人達が傷つくならば、躊躇いなく敵を排除します。しかし、赤の他人に関しては目に見える範囲では助けますが、それだけです。

だからこそ、なのはは絶大な力を持つ癖に、自分の周り以外をどうでもいいと断じ、管理局を嫌う紅牙とは相容れません。Ａ'ｓシナリオが終わる頃にはちゃんと理由が明かす予定ですが、現時点では不快に思うかもしれません
それ以外だと、自分の文章力不足と、現国の勉強を手抜きしていた自分を呪うしかありませんがｗ

ちなみに次の話は既にほぼできてます。ってか次の蒐集を本来先に出す予定でしたが、この話を入れる場所が無いのに気付いて慌てて書きましたｗ

後、ＨＩＴ数が既に４０万いってたり、お気に入りが既に２００いってたりで幕間をやろうかな?と思ったのですが、既に散々幕間いれてまた幕間かよ!になりそうなんで、要望があれば幕間の小話入れるかな?と思います。多分桧山と紅牙の話で、なのはキャラの出番少ないと思いますが

では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう!

第3話　なのはの蒐集とフェイトの決意（前書き）

もう出来てるのを出し惜しみする理由も無いので、連投します

第3話　なのはの蒐集とフェイトの決意

紅牙視点

フェイト達と別れてから、何時ものように八神家で過ごし、その後蒐集に出掛けていたのだが、ヴィータが大きな魔力反応を確認し、魔導士と戦闘しているとの事でシャマルと急行したが（八卦対策の後方待機目的）、戦っていたのはなのはであり、管理局の人間である。その事を告げると、シャマルは慌ててシグナム達と合流、蒐集後に速やかに撤収の流れだったが…

「…むう、めんどくさい」

「本当に面倒な事になってます…」

ヴィータはこの間ボコった魔導士と連れの少年の二人と

ザフィーラはフェイトの使い魔と

そして、シグナムはフェイトと

ヴィータ以外は戦局は優勢、さらにその間にシャマルがなのはの蒐集を行う事に成功する。なのはの悲鳴に少し気分が悪くなるが、はやての為と割り切ろうとしていた

「なのはっ！」

「私に背を向けるとは随分な余裕だ…なっ！」

なのはに気を取られたフェイトが弾き飛ばされてビルに突っ込む。
咄嗟にデバイスで防御したが、バルディッシュは半ばから折れていた。恐らくもう戦えないだろう

そう考えると自然に

「止めだっ！」

レヴァンティンを振り上げ突撃するシグナムとフェイトの間を

膨大な魔力の砲撃が引き裂いた

シグナム視点

今、信じられない事が起きた。
私はテスタロッサという少女に止めの一撃を打ち込もうとした。その瞬間に視界の端から、理不尽な破壊力の砲撃が私の眼前を通り過ぎ、結界を嘲笑うかのように打ち砕いた

想定外の事に一瞬思考が停止したが、他の誰もが予想外だったらしく全員が動きを停めていた。その僅かな隙に…

その少女を守るかのように、ゼオライマーが現れた

「（何のつもりだ、紅牙っ！！）」

僅かに残っていた思考能力で、念話による抗議を行う。すると、紅牙から返答が返ってきた

『（…もうあっちの子の蒐集は終わった。なら、これ以上の戦闘は無意味）』

「（しかし！）」

「（これ以上戦うと俺達も気付かれかねない。ならばいっそ、俺達がミスリードも兼ねて第三勢力を装う。これから適当に牽制するか

らさっさと逃げるがいい…）」

「（何しゃしゃり出てきてんだ、馬鹿マサキ！ホントに何考えてってうわぁっ！？）」

マサキが一応の説明をしてヴィータが噛みつくと、ヴィータを掠めるように砲撃が放たれた。

「（さっさと消えろ、次は当てるぞ？）」

「（……帰ったら、ちゃんと話聞かせてもらうからな！覚えとけっ！！）」

ここまでやっては話し合いは無駄、押し通すしか無いと理解したヴィータも渋々撤退した。私達も撤退するしか無い

しかし、管理局に気付かれた事といい、八卦や紅牙達といい問題は山積みだ

「全く…苦労が絶えぬな」

だが、その表情には笑みがある。あの暖かな日々に戻る為なら、どんな艱難辛苦もいとわない。それが、主はやての為になるのなら…

紅牙&ａｍｐ;マサキ視点

結界を張り直した後に、シグナム達に牽制で数発の砲撃を適当に撃ち込み（何発か掠めたと、後で涙目のヴィータに怒られた）、逃がしてから、紅牙…いやマサキはフェイトに向き直る

「全く…怪我人の癖に無茶をするものだな？」

「えっ！？何でそれを…」

軽く溜め息をつきながらマサキは話す

「着地の度に重心がずれている。武術や剣術に心得があれば誰でも気付ける」

「あぅ…」

凹んだフェイトに僅かにだが、フォロー…いや、次の相手へのトスを行う

「まぁ、そういえば相手のリーダーに怪我人が戦わねばならぬくらいに、そちらの執務官は無能だったのだな」

「随分と勝手な事を言ってくれるな」

なのはを支えるユーノとアルフ、そしてマサキに刺々しい声色で返答するクロノがやってきた

「そういう貴様こそ、結界まで張り直しておいて、奴等は素通しで見逃しているじゃないか」

してやったりと笑うクロノに対してマサキは無言で肩を震わせる。どう見ても笑っている風にしか見えない

「何が可笑しいっ！」

「ククク…いや、貴様は実に馬鹿だな、とな」

笑いながらマサキは殺気を放つ。クロノがそれに気圧される

「何故俺が貴様達を助けたと思う？理由は簡単だ。俺はこの近辺を今は寝床にしている…庭先で野犬が吠えているから追っ払いに来ただけだ」

「ちょっとアンタ、アイツ等はなのはを…」

「知ったことか。こっちの小娘は管理局絡みである事を否定しなかった。フェイトか、コイツはそれに噛みついてきた。だから名は覚えていたし、野犬を払うついでに助けた」

「それだとなのはを見捨てたように思えるけど?」

「結界の外の位置から、結界の中で何が起きたかまでは知らんよ。そっちの小娘の反応が消えて、フェイトが危険になったのでめんどくさいが割って入った。それだけだ」

「動機はわかったが、それだと逃がした理由にはならないぞ?」

クロノはただ厳しい目で睨むが、マサキは侮蔑を込めて返答する

「まだわからんか?全く…管理局の執務官とやらは、無能を置く役職なのか?もう少し権限を剥奪した方がいいと思うぞ、盗聴している指揮官?」

『…やっぱりバレましたか。ユーノ君、お願い』

するとユーノが通信機を取り出し操作する。すると、緑の髪の女性が現れる

『（…昨日、フェイトを呼んでた人だ）』

『初めまして、冥王木原マサキさん。時空管理局、リンディ・ハラオウン提督です』

「用件は…任意同行か？俺はもう眠い、断ると先に言っておくぞ」

『はい、そちらの件は無理だとわかってますから。交渉も嘱託のフェイトちゃんに任せる事にしました。執務官はいきなりやらかしてしまいましたので』

「ちょ、提督！初耳なんですが！？」

『当たり前じゃない！？そんな理由もわからないの、クロノ？』

「名字が同じか…もし身内なら、何故連中を逃がしたかわからんようだから教えてやれ。では、俺は帰って寝るとする」

マサキが背を向け、転移の魔方陣を展開する

「あ…待ってくださいっ！？」

「…何だ？」

マサキが振り返る

「あの…次に会った時は、ちゃんと、お話…したいです…」

言ってて恥ずかしくなったのか、しどろもどろになりながら話すフェイトを軽く笑い

「フッ…考えておこう」

その言葉と共に、マサキは消えた

リンディ視点

「ふぅ…」

取り敢えず、冥王には過剰に干渉せず、さらに交渉にはフェイトを使うことを宣言できた。これだけできれば上等だろう。後は…

「クロノ？何故彼が逃がしたのか、まだ分からない？」

『…忘れてたわけじゃないの？』

全く…この子は嫌な奴相手だと、短絡的な思考に走りやすいわね…

「彼にとっては、彼女達なんか取るに足らない程度だからよ。下手に自分の事を探られるより、彼女達にも手を割かせた方が、彼もやりやすいんじゃないかしら？」

『じゃあ、八卦との戦いが彼の目的なのかな？』

「まだ分からないわ。それは次に会った時にお願いね、フェイトちゃん」

『はいっ！』

心強い返事が返ってきたわ。後は心配事は、なのはちゃんと…クロノの将来かしら？

フェイト視点

「フェイト、何かあったらすぐに私を呼ぶんだよ？」

「大丈夫だよアルフ。マサキさんもそんな悪い人じゃないし」

マサキさんはなのはは見捨てて、私は助けてくれた。確かに結界ごしでさらにビルの中じゃ見えないにしても、動くのが遅い。そんなにも…

「管理局を嫌う、何かがあるのかな？」

あの人達を逃がしたのも、理由はリンディ提督達への嫌がらせに近い。それらの結果が、私達の目の前で眠るなのはだ…

「アイツ、後5分…いや3分早く割り込んでくれたらなのはも助かって一網打尽だったのに…」

マサキさんなら、多分あの人達もあっさり倒すだろう。今回の砲撃だって、適当に撃って、掠めただけであの赤い服の子の上着が半分近く消えていた。パージまで使わされたのだろう

そんな力を持ち、悪い人じゃないのに何故管理局と半ば敵対し、そ

れで私を助けてくれたのかが分からない

「次に会ったら絶対にお話、聞かせてもらうからね。マサキさん…」

なのはの真似をしてみたら、アルフがビクッとしていたが、多分気のせいだと思う

塞臥視点

「あの少女、やはりプレシア殿の記憶にあった…」

戦闘を離れた位置から傍観していた妙齢の女性…プレシアに宿る塞臥が呟く

「プロジェクトF…」

それは大まかにしか確認していないが、クローンによる人造魔導士を作成するもの、それだけで八卦衆たる塞臥には十分だった

「何時の時代、世界でも人は変わらぬか。だからこそ冥王も我らも変わる事ができぬ……だが」

塞臥は静かな決意を込めた目を細める

「貴方の娘、フェイト・テスタロッサ。闇の書…いや、夜天の主、八神はやてと守護騎士達…彼女達が冥王、四季紅牙をさらなる高みへ導くならば、可能かもしれぬ…私が望んだ結末へ」

かつて、私達が求めて、取り零してしまった未来。八卦衆の中で、私だけが知る真相…他の誰も信じない、否、信じたく無かった寂しく、悲しい結末

「陛下…いや、我が友マサトよ。冥王の定められた運命を変える者がついに現れた。私も…皆も、もうじき逝く事ができそうだ…その時はまた…」

皆でまた、笑いあおう。王と臣下としてでは無く、かつての姿で…兄弟として…かけがえの無い、友として…

第3話　なのはの蒐集とフェイトの決意（後書き）

さて、ようやくA's の序盤、なのはの蒐集にいきました。長かった…

なのはフラグはへし折ったので、変則的ですがフェイトにOHANASHIフラグが立ちました。フェイトがやると妙な怖さがあります。可愛げがまだ残るのが魔王との違いか…

今回、冥王計画ゼオライマーの原作との致命的な違いの伏線が出てきました。これにより、塞臥は正直別人（コイツは野心を植え付けられてただけで、正直悪人じゃないと思いますが）になってますし、かなり強くなってます。多分、全員リミッター外した機動六課と一人でやりあえるくらいには
だからガチで紅牙とやりあえるので、バトルが楽しみな反面、書ききれるのか心配だったりします

展開はこの章は一気に進む予定なので、キリキリ行きたいです。では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

第４話　騎士との亀裂と甦る悪夢（前書き）

今回から、さらに虫酸が走るような最低な話があります。ご注意を

第４話　騎士との亀裂と甦る悪夢

紅牙視点

なのはを蒐集した夜が明けて、僕は朝食を摂ってから一人で公園に来ていた

僕は結局、フェイトのことを話さなかった。フェイトのことを話すことがはやてを裏切るような気がしてしまったからだ
シグナム達は渋々といった形で納得したが、それよりも管理局に見つかったことの方が問題だったのでうやむやになった

現在は一緒に蒐集を行っているのを見つかればアウトなので、蒐集のメンバーからも外された。妙な疎外感を感じながら散歩をしていると、見知った顔に遭遇する事になる

「…あ、紅牙君」

「…また会ったね、フェイト」

「どうしたの？何か上の空って感じだったけど…」

気が付けば、はやての家から自宅の近所まで迷い込んでいた事に内心驚きながらも、平静を保つ

「…そうなの？」

「うん、何か悩みでもあるの？」

悩みは…ある。はやての事、シグナム達との関係に入った亀裂、八卦衆の事、フェイト達の扱い、そして…行方不明の両親の事

だが、これは自分の力で何とかしなければならない問題と紅牙は決め付けていた。生まれながらの聖人にして、暫く前に冥王となった紅牙には人を頼る選択肢は未だにかなり低い位置にあった

「…大丈夫、これは自分の力で解決しなきゃいけないから」

「…そう、でも何かあったら言ってね。話を聞くくらいはできるから」

そして、ここでも紅牙は選ばない。だが、紅牙はこの後にその考えを改めるような事件に遭遇する事になる

目の前の二人目の友達、フェイト・テスタロッサを二つの事件に巻き込むことによって…

フェイト視点

やっぱり、この子は昔の私と同じだ。誰を頼るでも無く、自分の力で何でもやろうとする

この子は凄い。魔法を知らないのに、魔法を使う私に匹敵するくらいの運動能力があるし、気を配れる優しさもある。なのはが私のような状態になって身動きが取れなくなったらこんな感じになるのかもしれない

だからかもしれない

「…そう、でも何かあったら言ってね。話を聞くくらいはできるから」

三回会っただけの子にこんなことを言ってしまったのは

それで私は立ち去ろうとしたんだけど…

「…痛っ」

自分の足の事をすっかり忘れてた。テーピングが外れてしまって、

さらに昨日の戦闘で悪化しちゃったから…今、満足に動けないんだった

「…酷くなってない？」

「テーピングが外れただけだよ。近くに座れる所は…」

ここは住宅街の真ん中、公園ならばあるかもしれないが…

そんなことを考えてると、紅牙君が思いもよらぬ事を言った

「…僕の家、すぐそこのアパート」

「…え？」

「…取り敢えず、そこまでは運ぶ」

すると紅牙君は私を横抱きに…またお姫様抱っこをする

「…すぐだから、ちょっとだけ、我慢してね」

「…うん／／／」

バルディッシュも修理してていないから、一人で途方に暮れていた

時に、またこの子は私を助けてくれた

「（お返ししなきゃ、って考えてたのに…どんどん借りが貯まっていくよ…）」

実は昨晩も紅牙に助けられていたことも知らずに、フェイトはこれからどうしようかと悩み始めた時に、紅牙の動きが止まる。どうしたのか、と顔を見ると表情が凍りついている

「…まずい、フェイト。ここから離れ「何がまずいんだァ、このバケモノ」…っ！？」

そこにいたのはガラの悪い、３０過ぎくらいの夫婦

「ちょっと見ない間に鎖から逃げて、随分と身なりが良くなったじゃねぇか。…ガキの癖に女連れやがってよォ」

「そこら辺、よぉく聞こうじゃないか…アタシ等が居ない間に、バケモノのアンタが何してたか知らないが…ちゃあんと躾もやり直す必要があるみたいだしねぇ」

「…父さん、母さん、何で…」

するとゴッという鈍い音と共に私は地面に投げ出された。痛みに顔

をしかめながらも周囲の様子を確認すると…

半狂乱になって、さらに金属バットを振り降ろしている女性と

金属バットで滅多打ちにされ、頭から血を流す紅牙君の姿があった

紅牙視点

「（…まさか、このタイミングで帰ってくるなんて…）」

紅牙は両親と対峙した時にすぐに逃げ出すべきだったと後悔した。
間違ってもフェイトを巻き込んではならない。これを恐れて今まではやてや守護騎士達すら自宅には近寄らせなかったというのに…
だからこそ、速やかに逃げようとしたが、できなかった

身体を、恐怖が支配していた

「ちょっと見ない間に鎖から逃げて、随分と身なりが良くなったじゃねぇか。…ガキの癖に女連れやがってよォ」

下卑た目でフェイトを見下ろしながら笑う父親

「そこら辺、よぉく聞こうじゃないか…アタシ等が居ない間に、バケモノのアンタが何してたか知らないが…ちゃあんと躾もやり直す必要があるみたいだしねぇ」

冷ややかな目で見下ろす母親。そして…咄嗟の事で反応の遅れた口が

「…父さん、母さん、何で…」

引き金を引いてしまう

ゴッ！

母親が金属バットを真横に薙ぎ払う。咄嗟にフェイトだけをその軌道から逃がすが、自分は逃げない。こちらに注意を引き付ける為にそしてフェイトを投げ出す形になる。少し痛いかもしれないが、我慢して貰えると嬉しい

そんな事を考えていると、次々と鈍い痛みがやってくる

「バケモノめっ、アタシはアンタみたいな生き物産んだ記憶なんざ、無いんだよっ！！」

母さんは僕を子供とは認めていない。だからこう呼ぶと半狂乱になって殴られる…久々だからこんな事も忘れてた。いや、はやて達との日常には要らないから忘れようとしていた

バケモノの僕が、逃げられるわけ無かったのに

『（紅牙、変われ。俺がコイツ等をブチ殺す）』

「（…駄目）」

『（何故だっ！こんなゴミ、生かす価値も存在する価値も…「（…マサキ）」）』

半狂乱の母は暫く殴らせれば息が切れるだろう。その間に案の定、怒りを露にするマサキを抑えなければならない

「（…こんな親でも、僕にとっての、親なんだ…）」

『（…俺も気になる事ができた。暫くは耐えていろ）』

その言葉と共にマサキが引っ込む。調べものをしているマサキはこちらから呼んでも反応が薄い事がある。これならば安全だろう

「さて、ここは人目につくからいい加減中でやるか」

父親に髪を掴まれ立たされる。脇にはフェイトが抱えられている

「…っ、フェイトっ！？」

「こっちのガキも中々の上玉だ。このバケモノが何してたか聞き出さないとなぁ…」

「…くっ！！」

頭を金属バットで殴られたせいか足元が覚束無い

そして、僕達は家の中に引きずり込まれた。そして、僕には忘れたい過去の再来、フェイトには見るに堪えないような…

悪夢のごとき時間が始まった

第４話　騎士との亀裂と甦る悪夢（後書き）

また遅れました。そして両親登場です

しっかし、コイツ等書くとモチベの低下がヤバい。執筆速度にまで影響出るとか…

ちなみにコイツ等は可能な限り、最低な人間にしています。後腐れの無い為にも。次回もこの二人のターンなのがさらに…

さて、紅牙はここで、過去と向き合う形になります。両親との再会。それによる虐待で、過去に縛られて再び心を失うのか、それとも…そしてマサキが調べているのは一体何なのか?次回には明らかになる予定です

コイツ等終わらせたら塞臥出せる。気合い入れたい…

では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう!

第5話　砕け散る幻と悪夢（前書き）

今回は色んな意味でＲ１５です

流血ありますし、ちょっとレイプ紛いの描写もありますのでご注意を

第5話　砕け散る幻と悪夢

紅牙視点

悪夢は始まった

僕は台所の傍にあった壁に鎖で繋がれている。正に一年前までの日常の再来だ

この生活が始まったのは、保育所を出る辺りだったろうか？
両親は確かに乱暴だったが、まだ普通の家庭の範疇だった。その頃から仕事が上手くいかず、僕への八つ当たりが出始めた。当初こそ慌てたりしていたが、僕の身体の傷があっという間に治り始めると、それを見てバケモノ呼ばわりするようになった

間もなく訪れた、６歳の誕生日の日…僕は鎖で繋がれた

それから二年間、僕は鎖に繋がれたまま殴られ、蹴られ続けた。食事も満足に摂れず、酷い生活を送っていた

そして去年の僕の誕生日、両親は組の金を使い込んで、蒸発した

組の人達が乗り込んで来た時に見たのは、肩を包丁で刺され、左の掌をナイフで貫かれて壁に縫い付けられて虫の息だった僕の姿だった

桧山さんはすぐに僕を保護してくれて、一旦組の元へと連れていかれ、治療を受けた
その傷が癒えると僕はすぐに脱走し、家に帰って両親を待った
当時の僕には、両親の暴力の捌け口になる以外の価値なんか無い、と思っていたから

その後、桧山さんや町の人達のお陰で今の…はやてと出会う前の生活になったんだけど、僕はまともに喋れなくなっていて、コミュニケーションも苦労したと言っていた

何故なら何かを喋れば殴られた。物を投げられた。蹴られた

僕だって痛いのは嫌だ。だから言葉を封じて殴られる機会を身体が減らそうとしたのかもしれない。だから僕は未だに口数が少ないし、断片的なしゃべり方なのかもしれない

そして、僕ははやてと…マサキと出会った。それは初めての友達と魔法との出会い

そこで僕は…人殺しをした

だからかもしれない。人を殺しておいて、幸せな生活を望んだからバチが当たったのかもしれない

先月にも両親は帰ってきていた。その時は少し殴られた後に逃げたから、問題は無かった。身体が震えて表情も固い、だから2日ほどはやての所に行けなかったくらいだ

だから今、僕はその罰を受けているのだろうか？一年前の再来の如く、父さんは僕の髪を掴んで立たせる。その右手には逆手に持った柳刃包丁、それを…

何の躊躇いもなく、僕の肩ごと壁に突き刺した

「……がぁっ！！」

血が流れる。そして腹を殴られる。脚を蹴られる。顔を殴られる。その衝撃で肩からさらに血が流れる

「紅牙君っ！！」

父さんの後ろにフェイトが居た。母さんに足を…怪我をしている方を押さえつけられていて、痛みに顔を歪め、目に涙を浮かべている

「紅牙ァ、どこであんな上物拾ってきたんだぁ？」

父さんがニヤニヤと笑っている

「まぁ、ブッ壊れたらテメェと一緒に繋いでやるよ。それまで待ってな」

すると、父さんが背を向ける。直後、マサキの声が響く

『（やっぱり予想通りか。ここまで当たると笑いも出んな）』

「（…何が、わかった、の？）」

父さんがフェイトの近くまで行く。父さんが何かを言うと、フェイトの表情が驚愕から恐怖に染まる

『（ＤＮＡや身体の組成を調べていた。唾飛ばして喚く馬鹿女のも唾液からとれたし、あのチンピラは殴られた時に情報を手に入れた。さっき一旦引っ込んだのは解析の準備の為だ）』

「（…だから、何が…）」

母さんは呆れた表情になった後さらに一撃、フェイトの足に叩き込んで離れて、煙草に火をつける

『（結論から言う。貴様は奴等の息子では無い）』

「…え？」

父さんがフェイトに覆い被さる。フェイトの悲鳴が聞こえるが、それどころじゃなくなってしまった

『（…ＤＮＡや身体組織が別物だ。貴様が冥王なのだから、ある程度は仕方ないにしても一致する場所を探す方が困難だし、優勢も劣性の形質も無い。だめ押しに魔力も見たが…これは貴様でもわかるだろう？）』

僅かに神経を研ぎ澄ませる。眼前にあるのはフェイトと父さんの魔力、母さんには欠片も無い。そして…僕とは質が全く違う…必死に暴れているフェイトのは金色の綺麗な魔力だが、それを嘲笑う父のは…血のように赤く、禍々しいものだった。そして僕の魔力は…どこまでも白かった。そして何かを言われると、フェイトはピタリと抵抗を止めた

『（あのチンピラにリンカーコアがあったのは驚きだが、その程度だ。貴様とは全く違う。もう一度言う。アレは貴様等の両親などでは無い）』

「…父さんと母さんが…僕の両親とは、違う？じゃあ、何で…」

「あァ？」

フェイトの服を脱がせようとしていた父が作業を中断し、こちらを向く。やけにフェイトが無抵抗なのが気になる

「それを、どこで知った？」

「…え？」

「いい機会だから話してやろうじゃないか」

母さんが僕の足の甲にナイフを突き立てる

「…がああっ！？」

「紅牙君っ！話が違います、抵抗しなかったら、紅牙君を傷つけないって！！」

「さぁなァ、俺はしないって言ったけどなぁ？」

「だから言ったろ？アタシはアンタみたいなバケモノ産んだ覚え無いってね」

母さん…いや、母さんだった人は煙草を吸いながら話を続ける

「アタシが産んだ子はすぐに死んださ。でもそれじゃ組から金を貰いにくいんだ。あの組長、ガキには甘いからねぇ…赤ん坊食わせる為って言えばそれなりに包んでくれたのさ」

「だけどよォ、流産は二回目だった。自宅分娩が良くなかったのかもしれねぇが、まぁいい。ソイツ等は次のゴミの日に捨てたからな」

「酷い…」

「生きる為には金がいるんだよ…で、困った俺は、二個隣の町の産婦人科に忍び込んで、男の赤ん坊を一匹さらってきた。ソイツが…テメェだよ、バケモノ」

「…じゃあ、僕は…」

僕の中の、大切なものが壊れていく

「その名前は保育器の横についてたプレートにあった名前だ。よかったな、名前は本物の親につけてもらってんだぜェ？」

「…あ…あ…」

「まぁ、金づるとしては便利だったぜ？今も小銭稼ぐ機械だしな。まさか女までヤらせてくれるたァ思ってなかったけどなァ」

父さんが下卑た笑い声をあげる。僕が、壊れていく

『（紅牙っ！くっ、宿主がこんな状態では入れ替われぬかっ！！）』

マサキの声が、遠退いていく…

その中で、僕は…

フェイト視点

痛い…怖い…

それは今まで私が体験した事の無い恐怖だった

私を助けようとしてくれた人が殴られ、蹴られ、傷ついていく

そしてその人は息子を包丁で壁に縫い付けた

信じられなかった。私も母さんに酷いことをされた。だけど、何の理由も無く傷をつけられた事は…

更に紅牙君を傷つけて、その人は私の方を向く。すると、私を抑えてた女性が私の怪我している足をさらに一度踏み抜いた

「あああっ！」

痛みに気をやっている間に男は私の目の前に来ていた

「さァて、お楽しみの時間だ」

「ひっ…」

身体が本能的な恐怖を感じた。だから悲鳴をあげようとしたが口を塞がれ、押し倒される。必死に抵抗しようとするが

「別に抵抗してもいいぜェ、すればするほどあのバケモノに刃物が刺さっていくだけだからなァ？」

私の側にナイフを突き立てながらそう男は笑う。それだけで私は抵抗できなくなってしまった

「ククク、そうやって素直になってりゃあ気持ちよくなれるぜェ…」

私の服に手をかけられる。上着を脱がされるが私にはすすり泣くくらいしかできないそしてシャツを脱がされる所で…

「…父さんと母さんが…僕の両親とは、違う？じゃあ、何で…」

「あァ？」

男は手を止めた。この人達が両親じゃない？確かに顔立ちとか似てる所は少ないけど…

「いい機会だから話してやろうじゃないか」

煙草を吸っている女性が紅牙君の足をナイフで貫く。さらに柄を踏みつけて床に縫い付ける

「…があぁっ！？」

「紅牙君っ！話が違います、抵抗しなかったら、紅牙君を傷つけないって！！」

「さぁなァ、俺はしないって言ったけどなぁ？」

男は私の上でニヤニヤと笑う

「だから言ったろ？アタシはアンタみたいなバケモノ産んだ覚え無いってね」

女性は嫌らしい笑みを深め、煙草を吸いながら話を続ける

「アタシが産んだ子はすぐに死んださ。でもそれじゃ組から金を貰いにくいんだ。あの組長、ガキには甘いからねぇ…赤ん坊食わせる為って言えばそれなりに包んでくれたのさ」

「だけどよォ、流産は二回目だった。自宅分娩が良くなかったのかもしれねぇが、まぁいい。ソイツ等は次のゴミの日に捨てたからな」

「酷い…」

亡くなったとはいえ、子供をゴミとして捨てるなんて…

「生きる為には金がいるんだよ…で、困った俺は、二個隣の町の産

婦人科に忍び込んで、男の赤ん坊を一匹さらってきた。ソイツが…テメェだよ、バケモノ」

「…じゃあ、僕は…」

紅牙君の目から光が失われていく…

「その名前は保育器の横についてたプレートにあった名前だ。よかったな、名前は本物の親につけてもらってんだぜェ？」

「…あ…あ…」

「まぁ、金づるとしては便利だったぜ？今も小銭稼ぐ機械だしな。まさか女までヤらせてくれるたァ思ってなかったけどなァ」

紅牙君は動かなくなった。心が壊れたのだろう…かつての私のように

「さァて、俺も楽しむか。嬢ちゃんがどこまで耐えられるか楽しみだぜ」

男は私の首筋を舐める。あまりの気持ち悪さにさらに涙が流れる

「嫌…誰か…」

「これはこれでいいなァ、まぁ壊れたらアイツと仲良く繋いでやるよ」

バルディッシュも無い。この目の前の男は魔力をそれなり持っているらしく、それと、この男に触れられる感触の気持ち悪さ、これのせいで魔法が…念話すら使えない。誰も…助けに来てくれない

「まァ、馬鹿なバケモノについてきた迂闊さを呪うんだな。それにこのボロアパート、今日の昼間は誰も居ないんだよ。だから…だァれも助けちゃくれないぜ?」

「…やだ…やだ…誰か、誰か…」

恐怖で心が塗り潰されていく。横で笑う女の声が気にならないくらいに心が、蹂躙されていく

「…誰か…誰か…」

そして私はかすれるような声でその言葉を言った

…誰か、助けて…

紅牙視点

僕が僕として構成されていた根っこはたった今、砕け散った

僕が信じた存在。いくら憎まれても、嫌われてもすがり続けた存在はまやかしだった

四季紅牙として生きたものを、その根幹としていた存在が無くなったのだから

なのに何故だろう

何故、僕は…まだ僕でいられるんだ？

僕の目に父さんだった人に押し倒される少女が…フェイトが写る

『（おい、返事をしろっ！紅牙っ！！）』

僕の心に呼び掛けるマサキの声が響く

そして僕は気付いた

僕はもう、かつての僕じゃないことに

桧山さんは僕の生活を支えてくれている

新聞屋のおっちゃんも、僕のワガママで働いているのを笑って許してくれる

商店街の人達は僕に笑いかけてくれる

翠屋ＦＣの皆は僕を仲間と認め、信頼してくれた

シグナムは頼りになる戦友だ

ヴィータとは喧嘩友達のような関係になった

シャマルは僕達にとっての姉のような存在だ

ザフィーラとは数少ない、男同士の友情が生まれた

マサキは僕に魔法という新しい世界をくれて相棒になった

そして、はやては僕の初めての友達になってくれた

皆が僕を支えてくれたから僕は変われた。そしてまた変わっていく

…それが、成長なのかもしれない

そして、今目の前でフェイトが泣いている。フェイトは僕の友達だ、

泣いている顔は見たくない。笑っていて欲しい

そして、フェイトの声が…心からの悲鳴が聞こえる

…誰か、助けて…

僕は足を振り上げる。刺さったナイフは地面から、その勢いで足の甲から抜けて、天井に突き刺さる
そして振り上げた足を床に叩きつける。床が割れ、轟音が響く。その轟音と共に僕は疾風となる。壁に刺さった包丁も抜け、僕の身体と共に風となる

そして僕は父さんだった人を蹴り飛ばし、フェイトと二人の間に立った

第5話　砕け散る幻と悪夢（後書き）

ようやく外道のターン終了です。これでコイツ等をサンドバッグにできますｗｗｗ

取り敢えず今回の話は紅牙の過去からの脱却の回です。これと、これからの話で紅牙は失っていた時間を上回るような急成長を強いられます

それと、紅牙の…や口数少なく区切って喋る理由が明らかになりました。ですので、Ａｓ終わる頃には口調が少し変わってるかもしれませんね

次回は紅牙の反撃となるのか？では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

第6話　紅牙の決意と男の背中（前書き）

色々と積み込んだら、フルボッコ本番までいけなかったでござる

第6話　紅牙の決意と男の背中

紅牙視点

自分でも信じられなかった

繋がれた鎖を引きちぎり

恐怖を踏み潰し

僕に…いや、過去の僕にとって絶対だった親を…

自分の理屈で蹴り飛ばす事になるなんて

「……紅牙、君？」

フェイトが呆然としている。…ここで僕は衝動的にせよ、聖人の力を無意識に解放したことに気付く

「…ごめん、僕は…あの人達の言う通りのバケモノ…でも…」

無意識にだが手加減を加えたらしく、僕の蹴りを受けた父…いや、父親だった人が立ち上がる

「よくも…よくもヤりやがったなァ、バケモノォ！！」

殺気を撒き散らし、殺意を形にしたかのような武器…コンバットナイフを構えて男が吠える。フェイトは先程の恐怖を思い出したのか、身体を震わせるが、その頭に手を…血で汚れていない左手を頭に乗せる

「…今だけは…この二人からは絶対に守るから。絶対に、家族の所に帰れるから…」

フェイトの震えが止まる。すると膝から力が抜ける

「…え…」

「ようやくか…流石にテメェには効きが悪かったが、ようやく回ったようだな」

『（毒か…どこまでも姑息な…）』

怒りに震えるマサキに釘を刺そうとするが…

「（…ごめん、マサキ。これは…）」

するとマサキは鼻で笑い、

『（分かっている。これは貴様の戦いだ…最後まで付き合ってやるさ）』

「（…ありがとう）」

男がナイフを振り上げ、突っ込んで来る

「死ねやぁ、このゴミがぁっ！？」

「…まだ、負けた訳じゃ…ない！」

ナイフが降り下ろされる。が、紅牙はその腕を取り、投げ飛ばす

ドゴォッ！！

壁に鈍い音と共に叩きつけられる男。直後女を睨むと男に駆け寄り、さらに鞄から拳銃を取り出す

『（…紅牙）』

「（…ん、問題無い）」

女は出鱈目に拳銃を乱射するが、毒に冒されても尚、聖人の力を解放した紅牙には無駄な抵抗だった

キィンッ！

身体を沈め、こちらに当たる一発のみを手にしていたキーホルダーで弾く

「…桧山さんの稽古で受けさせられた貫手のほうが、怖い」

すると男は狼狽えながら喚き散らす

「何故だっ！何故今になって牙をむきやがったっ！！」

「…簡単な、こと」

フェイトを一瞥してから向き直る

「…友達を守る。それに何か理由が必要なの？」

絶句する両親、そしてフェイトは安堵の表情を浮かべた

フェイト視点

それはまさに疾風だった。床を踏み抜かんばかりの踏み込みからの一撃、それは私に覆い被さる恐怖を一撃で吹き飛ばした

「……紅牙、君？」

自然と声が出た。多分、呆然としているのだろう。…確かに鍛えている身体だった。でも、あんな…人外の領域に到達は普通の人間には無理だ。すると、私の考えに気付いてしまったのか、紅牙君の表情が曇る

「…ごめん、僕は…あの人達の言う通りのバケモノ…でも…」

咄嗟に違う、と叫びたかった…でも、まだ恐怖に支配された身体は満足に動かず、声がかすれてしまう。

「よくも…よくもヤりやがったなァ、バケモノォ！！」

私を蹂躙しようとした男が顔を真っ赤にして吠える。すると、私は自分の身体を抱き締めていた。想像以上の恐怖に身体が動いてくれない。すると、私の頭にやや冷たい手が乗せられる

「…今だけは…この二人からは絶対に守るから。絶対に、家族の所に帰れるから…」

紅牙君の手が冷たい、さっきまでは暖かかったのに…恐らくは大量の出血が原因なのだろうが、それを感じさせない…静かな、そして力強い声が私の恐怖を消していく。この感じ…どこかであった気が

…と、考えている間に紅牙君の膝が僅かに沈む

「…え…」

「ようやくか…流石にテメェには効きが悪かったが、ようやく回ったようだな」

自分の子供に毒…そんな信じられない事を平然と言う男はさらに大振りのナイフを構える

「死ねやぁ、このゴミがぁっ！？」

「…まだ、負けた訳じゃ…ない！」

ナイフが降り下ろされる。が、紅牙君はその腕を取り、その力も利用して投げ飛ばす。

ドゴォッ！！

壁に鈍い音と共に叩きつけられる男。直後、紅牙君が女を睨むと男に駆け寄り、さらに鞄から拳銃を取り出す

「（…って拳銃っ！？）」

そして女は出鱈目に拳銃を乱射する。殆んどが外れるが、その内一発はこちらに飛来する…が、

キィンッ！

紅牙君は手にしていたキーホルダーで難なく弾く。その光景に、私は呆然とする他無かった

「…桧山さんの稽古で受けさせられた貫手のほうが、怖い」

その桧山さんって何者なんだろう？と現実逃避していると、男は狼狽えながら喚き散らし始めた

「何故だっ！何故今になって牙をむきやがったっ！！」

…今までよく反抗されなかったね。紅牙君は我慢強すぎると思うんだ。でも、確かにこの紅牙君は怖い

何故ならば、この力を己の欲望のままに使えば、それこそ好きなように生きれるだろうし、それを止められる者はいない。友人が力に溺れてしまわないか、と心配になってしまう

だけど直後、私はこの考えに至った事をすぐに後悔することになる

「…簡単な、こと」

私を一瞥してから向き直る

「…友達を守る。それに何か理由が必要なの？」

紅牙は何も変わっていない。確かにさっきよりは力強い感じがするし、何より言葉に力がある

でも、その優しい所は何も変わっていない

紅牙君が今、戦っているのは私の為…二、三度会っただけの私の為にこんな姿になってまで戦う優しい男の子

私が安堵の表情を浮かべると、不意に第三者の声が響き渡る

「友達を守るのに、理由なんか要らない…か。いい言葉だな」

声がした窓に目を向けると、そこには…

私の親友の兄がいた

恭也視点

「紅牙君、だっけ？悪いが土足で失礼するよ」

俺は窓から入り、フェイトちゃんの傍まで歩く。紅牙君が警戒の視線を向けてきた所で、自分が名乗ってない事に気付く

「恭也さん、どうして…」

「…フェイト、知り合い？」

「うん、なのはのお兄さんだよ」

それを聞き、確認の為かこちらを向いたので自己紹介をする事にした

「俺の名前は高町恭也。君には高町監督の息子、って言ったほうがいいかな？」

「…じゃあ、何で武器を持ってるの？」

「…やっぱりただ者じゃないか。桧山さんにね、君の周囲を警戒してくれって頼まれたんだ…って訳だから逃げられると思うなよ、クズ野郎共」

逃げようとした二人に向かって、床に刺さっていたナイフを蹴飛ばして牽制する。すると…

「ごめん兄さん、遅くなりました！」

ベランダから美由希が入ってくる。これで逃げ道は玄関のみ

「畜生、折角ここまで逃げたンだ！ここで捕まって…たまるかァーッ！」

ナイフを構えて紅牙君に向かう。ここで、部屋に飛び散り、床に溜まる凄まじい量の血に気付く。それは全て紅牙君から流れたものだ。さらに肩に刺さり、傷口は抉れられたのか、さらに血を流している。普通の人間なら確実に失血で死んでいる量だ…

案の定、身体の動きが鈍っている紅牙君は逃げれない

「へへッ、毒に怪我、さらに大量出血、これならバケモノでも死ぬだろう、ってか今すぐ死にやがれェーッ!!」

フェイトの安全を優先したから紅牙君とは僅かに距離がある。ここからでは…そう思った矢先に、玄関が突き破られた

あの人なら…任せていいな

紅牙視点

迂濶だった。出血を忘れていた…この一撃は避けれ無いな

そして僕の心臓に突き立てられようとしたナイフは

玄関を吹き飛ばし、突入してきたスーツの男の手により腕を止められ

骨の砕ける音と共に床に落ちた

「ぎゃあァァァァァーッ!?」

のたうち回る男を塞ぐようにスーツの男が立つ。結果、僕にはその大きな背中が見えた

「全く…貴方が私の息子にしてくれた所業に比べれば、こんなもの…序の口にしか過ぎませんよ?」

だからなのだろう、僕は力が抜けて座り込んでしまった。それは、その背中がもたらした安心と信頼

だから、自然とその姿は憧れとなり

後に、僕の目指す目標となる

「…息子…じゃあ、桧山さんが…」

「はい、その通りです」

背中越しに桧山さんが振り向く。何時もの笑みより、さらに自然な笑みを浮かべて…

すると、隣にフェイトと恭也さんがやってくる

「桧山さん、後は任せていいですか？」

「はい、紅牙君とそちらのお嬢さんをお願いできますか？」

「一人で大丈夫ですか？」

恭也さんを兄と呼んだ女性がこちらにやって来ながら桧山さんに訪ねる。あの二人は桧山さん相手に腰を抜かしている

「ええ、何せ…『私の息子をさらって虐待してくれていた』のですから…お礼はたっぷりとさせていただかないと…」

何故だろう、急に部屋が寒くなった

『（あの男が貴様の父か…あの殺気といい、納得がいった）』

「（…そう、なんだ…）」

『（ああ、我等の出番はここまでだ。後はじっくりと休むがいい…）』

恭也さん達は顔を青くしているが、気にせずに意識を手放すことにした。倒れる直前、慌てる恭也さんと桧山さんの笑みがさらに深くなったが、まぁこれから寝る僕には関係の無い事である

第6話　紅牙の決意と男の背中（後書き）

ちなみにクソ野郎の骨が砕けたのは、桧山さんに握り潰された為です

高町兄妹はクソ野郎が蹴り飛ばされたタイミングで到着、さらに盗聴機で桧山さんは状況を把握しながら急行していたというオチ

取り敢えず、サンドバッグは何時でもできる状態にしたので、この章の間に幕間で消化予定にして、次回は少し話を進めます。要望が多ければ短めですがさっさと幕間書きますｗｗｗ

次回は高町家です。（戸籍的にも物理的にも）家を失った紅牙、彼は一体どうなるのか…

では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

取り敢えず５０万ＨＩＴ記念幕間　日陰者のやり方（前書き）

お待ちかね、クズ夫婦の処刑です。一応、まだ生きてますがｗ

実は一度書いて、グロいのはかなり削ったのにまだグロい。何故だろう…ｗ

こんな時間に投稿してアレですが、食事中の方は読まない事を推奨します

取り敢えず５０万ＨＩＴ記念幕間　日陰者のやり方

桧山視点

「さて…」

愛用の手袋…部分的に合金のプレートを付けている代物なので、最早簡易的な手甲なそれを身につける

「紅牙君もフェイトさんも退場した…これで、あなた方に何をしても問題はありませんね？」

確認がてら口に出す。あの二人は日の当たる場所こそが相応しい…私のような日陰者がこれから作る、陰惨な場にはいてはいけないし、そんな彼等がいる場所でそんな事を行ってはいけない…そう、自分を律して耐えた時間が終わる

「ひィッ！？」

「おや、もう殺気に気付きましたか…逢理（おうり）。やはり、私も相当キてるようですね…」

空気が震えているのか、窓ガラスが煩いですね…

「…破ッ！！」

ドオォンッ！！

私の震脚で生き残っていた窓ガラスが全て割れる。さらに床は砕け、周囲のモノは原型を留めず吹き飛び…

「グギャッ！！」

「ア、アタシの顔が…」

二人に容赦無く木材や石綿の破片が突き刺さる

「痛ェ…いてェ…」

「痛い？まさかこの程度で音をあげませんよね？」

逢理の髪を掴み、立ち上がらせる

「あなた方が私の…春香が命を代償に産んだ、可愛い息子を…あそこまで弄んでくれたお礼は、きっちりと返させていただきます…で

すから…」

右腕をひく…刹那、逢理が水平に手元から離れる

ドゴォッ！！

その突きはほぼ音速に到達し、インパクトの際の鈍い音を置き去りに、逢理の肩を半ば貫通しながらも壁に叩きつける。私の左手に残る頭皮の残った髪の一部を残して

そして、這いずって逃げようとする女…こちらは名前は忘れた…の脚に右足を容赦無く叩きつける

グシャァッ！！

「～～～～っ！？」

こちらは左足が膝辺りのみが不自然に２０ｃｍ程床にめり込み、潰れて骨が飛び出している。私が医者なら躊躇い無く切断をするくらい酷い有り様だ

二人の声にならない絶叫をＢＧＭに私は笑う…あの子の前では決し

てしない、悪魔のごとき笑みを浮かべて…

「…まだまだ貴方達には苦しんでもらいますよ?…先に言いますが、舌を噛むなら顎を砕きます。肺に肋骨が刺さったなら窒息しないよう、もう片方の肺は生かして逆さに吊るします。手足が千切れて出血が激しいなら傷口を焼きます」

私の言葉一つ一つで、二人が絶望する様は心地よい…

「ですから安心して…悲鳴をあげてください、絶望してください…私は、貴方達二人がこの世に生を受けた事自体が間違いだった事を、この場にて証明してあげましょう」

命を代償に産み落とした息子を奪われ、抱くこと無く失意の思いを抱いたまま逝った、我が妻、春香…

そして、貴様等クズの欲望、怒りの捌け口にされて、心に深い傷を負い、感情を無くしてしまった我が息子、紅牙…

二人は優しいから、こんな事は望まない。だからこそ私が変わりにその怒りを解き放とう。今日ばかりはヤクザ者として生まれた事を父に感謝するとしましょう

さぁ、子を奪われた母の哀しみ…心に傷を負った息子の痛み…そし

て立て続けに愛する者を奪われた父の怒り…

存分に、味わいなさい

恭也視点

俺は今、紅牙君を抱えて一目散に逃げている

「ちょ、兄さん…早いってば！」

気を失ってしまったフェイトちゃんを背負った美由希が抗議の声を

あげる

「すまない、少し取り乱した」

速度を一旦緩めるが、走るのは止めない。今の血まみれの紅牙君を人目に晒すわけにはいかないからだ

「取り乱した…やっぱり、桧山さんの殺気？」

すぐ後ろについた美由希が聞いてくる

「お前もわかっただろ？あの人は…普通じゃない」

直後、微弱な振動が伝わってくる…これは、あの人の一撃だろう

「あの人、何者なの？それとこの子は…」

「父さんの知り合いらしいけど…詳しい事は帰って聞くとしよう」

会話はそれっきりにして自宅を目指す。多分、俺は怖いんだろう…あの人の浮かべた笑みが…そして、紅牙君を連れて戻って早くこの仕事から離れたいのかもしれない

桧山視点

「あ…が、ァァ…」

グシャァッ！！

「ゲピィッ！！」

今度は逢理の左腕を踏み潰す。最初の一撃で左腕が千切れかけていたのでちょうどいいですね

「もう、この腕は…要りませんよね？」

ブチッ！！

「あああアアアァァァァァァァァァァッ！！」

左腕を千切ると、ドス黒い血が噴き出す。私は、近くの鞄からオイルを取り出し、肩にかけるそしてマッチに火を灯す

「まさか、アンタ…」

「さっき、言いましたよ?出血多量なんて生易しい殺し方はしない、と」

笑顔でマッチを落とす

ボッ

「■■■■■■■■■■■！！」

左肩を燃やされ、最早人語を介さなくなった逢理の悲鳴をＢＧＭに鞄を再び拾い、書類を取り出す。そして、痙攣していている逢理の右手を取り、返り血で血印をつけさせる
そして逢理を蹴り上げ、頭から肩口辺りまでを天井に突き刺すと、痙攣が止まった

「さて…貴方にはこれに名前を書いてもらいます」

その書類を女に渡す

「何だいコレ…誓約書？」

「ええ、息子の親権を返して貰おうかと」

「へぇ…」

女は嫌らしい笑みを浮かべるが、桧山は先に切り捨てることにした

「嫌がるなら貴方も血印だけ付けて今すぐに屍になってもらいます。私としては時間をかけたくないだけなんですよ」

「クッ…」

「要は…書いている間は無事でいられるということですね」

「書けばいいんだろ、書けばっ！！」

女はサインをいれる。そして名前を書き終わった直後、

「おっと、手が滑…ッ！？」

書類を駄目にしようと、縦にボールペンを滑らせようとしたが、それはできなかった。その隙に桧山が書類を回収する

「手口が見え見えです」

「あ…あれ、何でボールペンが無いんだ?あれ、手が…っ!、腕、アタシの腕ェッ!?」

女の二の腕から先は桧山の蹴りで千切れ飛んでいた。そして思い出したかのように血が噴き出すが、その傷口に何かの液体がかけられる

「ひっ」

それがオイルだと気付いた時には腕は松明のごとく燃え上がっていた

「さぁ、醜悪な臭いと共に、醜く燃え上がりなさい。手続きが終わるまでは生かしてあげますから…存分に苦しんで苦しんで苦しんで…死になさい」

桧山の哄笑と暴虐は部下が来ると共に終わりを告げたがその時には、…部屋はあちこちが破壊され、火が燻り、二人の四肢は半分以上が無くなり、身体のあちこちは焼け爛れ、顔も最早誰なのかわからないくらいに破壊され尽くし、それでもギリギリで生かされている二

人の姿があった

そしてこれが後に、一つの狂気を生み出す事になる

取り敢えず５０万ＨＩＴ記念幕間　日陰者のやり方（後書き）

実際は遥か前に５０万いってます。本当にこんな駄文にお付き合いいただき、ありがとうございます

もう４０話過ぎてますが、ようやく折り返し地点付近…塞臥絡みが終われば一気に進む予定なのに…そこが遠い

では次回の後書きでお会いしましょう！

第7話　高町家にて…フェイトの敗北（前書き）

後半、終わらせ方に困ってましたが、いい案が浮かばなくて投げました

こういうので地味に更新止まるのが辛いですｏｒｚ

第7話　高町家にて…フェイトの敗北

フェイト視点

私は今、なのはの家にいます

もう夜なのに…明日は学校があるのにまだいる理由は…紅牙君が目を覚まさないからです

少し、時間を戻します

「…っ！ここは…」

布団をはね除けて周囲を見回すと、見覚えのある部屋だった

「あっ、フェイトちゃん！目が覚めた？」

そして、私の顔を覗き込む親友の顔があった

「凄い怖い思いをしたんでしょ、大丈夫なの？」

「うん、私は大丈夫…痛っ！」

不意に足が疼く。布団を足まで捲ると、包帯を巻いた痛々しい私の足があった

「酷い腫れ方だったよ。本当に大丈夫？」

なのははこれを見てしまったのだろう。それでこんな心配を…でも、そんなことよりも…

「紅牙君は？私と一緒に恭也さんに運ばれていたはずなんだけど…」

「え？お姉ちゃんがフェイトちゃんを運んだのは見たけど、お兄ちゃんは見なかったよ…でも、いつの間にか家に帰ってたような…」

「恭也さんはここにいるんだね！」

「う…うん」

私の剣幕になのはが少し引いている。でも今回は引くわけにはいかないのでこのまま押すことにした

「お願い、案内して」

結果としてすぐになのはのお兄さん…恭也さんにはすぐに会えた
私がお願いしたら、少し上を向いて考えて「覚悟はあるか？」と聞かれたので、はい、と即答した
すると溜め息をついてから客間まで連れてきてもらい（なのははそこで待たされていた。ごめんね…）、中に入るとそこには…

全身のあちこちを血の滲む包帯に覆われ、血の気が無く青白い顔をして眠る紅牙君の姿があった

私がその場に崩れ落ちそうになるのを恭也さんは支えてくれて、私に言った

「大丈夫、まだ死んでない。眠ってるだけだよ」

フラフラとした足取りで近付いてみると、弱々しいが確かに息がある

「良かった…」

私のその声には嗚咽が混じっていた。私を助けてくれた彼に、もしもの事があったらどうしよう、そんな事ばかり考えていて、彼が生きていてくれて気が抜けたんだろう

私が紅牙君の枕元で泣いている間に恭也さんはいなくなっていた。
気を利かせてくれたんだろう
そして私は今、紅牙君が起きるのを待っている訳です

辺りはもう暗くなって、部屋も薄暗くなっているけど…私は明かりもつけずにずっと枕元に座っているだけ…

本当は手を握りたいけど、紅牙君は全身に無数の怪我をしている。
こんな動作でも負担をかけないか?そう思うと手を伸ばして紅牙君の右手の上に手を乗せる。これくらいしかできない

「癒しの魔法が使えたらなぁ…」

多分適正的にもまともに使えないだろうが、それでもあれば少しは力になれるのに…

いや、仮にできてもバルディッシュが無いから結局まともに使えないだろう。自分がいかに魔法に頼っていたのかを思い知らされた

「(こんなんじゃ、マサキさんにも笑われちゃうかな…?)」

そんな思考を頭の中で展開しながら、時間だけが過ぎていきました

紅牙、精神世界にて

「…みゅ、ここは…？」

「起きたか、紅牙」

そこは平原。だが空は果てしなく白く、何も無い

起き上がった紅牙の前に立つのは、黒い服を来た青年

髪は紅牙と違い、美しさは無いがより深い闇を持つ漆黒…その姿は静かに、そして強烈な気を放っていた

「…マサキ？」

「ほう、わかるか」

口元を僅かに吊り上げ笑うその姿を見て、紅牙は確信する

「…うん、性格の悪さが出てる」

「……」

暫く、気まずい沈黙が続いた

「…全く、こんな馬鹿をやっている場合では無いんだがな」

「…今まで、こんなの無かったよね」

マサキが気をとりなおすと、紅牙は疑問を口にした

「ああ、貴様と精神がより深い所でリンクできるようになったからな。今回のように意識が深く落ちれば、お互いの精神を短時間だが、完全に繋ぐことができる」

「…そーなのかー」

「精神の完全連結は魔導士ならば腰を抜かすような所業だぞ？まぁお前に言っても仕方ないか」

首を傾げる紅牙相手にため息をつく

「俺が今回来たのは、貴様に武器の使い方を教える為だ」

マサキは虚空から両側に異形の刃を持つ、槍と剣の中間のような武器を取り出す

「今までならば何とかなったが、塞臥や葎が相手となると武器くらいは扱えねば、面倒な事になる。貴様は徒手空拳を得意としてるが、俺は得意としていない。ならばコレを貴様が使えるようにすれば、いざという時に入れ替わりながら戦える」

マサキは異形の武器を構える。すると紅牙の眼前に同じ武器が虚空より落ち、突き刺さる

「…これを使えればいいんだね」

紅牙は武器を手に取る。マサキは笑みを深める

「ああ、貴様が目覚めるまでの間、実戦形式で鍛えてやる」

それから体感時間では数時間、マサキと戦い続けた

マサキには桧山さんのような速さも無い。シグナムのような鋭さも、ヴィータのような重さも無い。しかし、一本も取れなかったのは…

「…僕の動き、読まれてる？」

こちらの方が速さは遥かに上だ。なのに、その攻撃はことごとくを防がれている

「当たり前だ。俺は八卦衆を鍛えたのだぞ？こちらは専門では無くても、素人のお前には遅れを取らんよ」

何百度も組手を行い、休憩を取るとマサキが声をかける

「これくらい使い込めば、何時でもコイツをイメージできるだろう。暇な時に素振りでもしておけ。本来は逆なのだがイメージを先に刷り込ませたかったからな」

すると何か美味しそうな匂いがした。すると、身体が軽くなっていく

「どうやら今回はここまでか…しかし、あの娘も浮かばれぬな…」

マサキが何とも言えない表情をしている

「…ん、どうしたの、マサキ？」

「いや、何でも無い。…やはりガキか、色気より食い気が優先とは…」

そんなマサキの呟きと共に視界は白く染まり…

目を覚ますと、お盆に料理を乗せた綺麗な人とフェイトがいた。フェイトは少し機嫌が悪い、何故だろう？

フェイト視点

私は多分、不貞腐れている。それは自覚できる

「はい、あーん」

「……あ、あーん／／／」

紅牙君は目を覚ました。…桃子さんが持ってきたご飯の匂いに釣られて。お腹が空いていたのだろう、それにあれだけの出血だ、身体が食べ物に反応するのも当然だ

でも、怪我してるって言っても桃子さんにあっさり抱き抱えられ、借りてきた猫みたいになってあーんされているこの状況は何なんだろう。そうこう考えてると、目があった

「…フェイト、どーしたの？」

「…何でも無い」

「あらあら♪」

全く自覚が無く、首を傾げる紅牙君。そっぽを向く私、それを見てニコニコと笑う桃子さん

紅牙君が怪我をしているから、負担をかけない為にやっているのはわかる。最初は照れていたが、今では諦めたのか、慣れたのか、はたまたご飯最優先なのか…3つ目な気がするのは何故だろう？多分、表情の変化に乏しいはずの紅牙君の表情が僅かに緩んでいる様に見える。ご飯が美味しいからかもしれない

「…ふぇいふぉ、ふぉーふぃふぁお？（フェイト、どーしたの？）」

「え…あ、ごめんなさいっ！」

気が付いたら私の手は紅牙君の頬をつねっていた。慌てて手を放す私の顔は真っ赤になっていただろう

この日、私は女性として桃子さんに敗北した（主に料理的な意味で）

私が料理を勉強し始めたのはこの次の日からだった。それだけは確かだ

そしてこの日の最後の記憶は、ご飯を食べ終わるとすぐに眠ってしまった、紅牙君の寝顔だった…

「息子がいたら、こんな感じだったのかしらね、春香ちゃん…」

そう、呟きながら優しい表情で頭を撫でる桃子さんを見て、僅かな悔しさと新しい目標を立てた

そう、この日が私にとっての大事な1日になったのは言うまでもありません

以上で私、フェイト・テスタロッサの怖くて、暖かくて悔しかった1日を終わります

第7話　高町家にて…フェイトの敗北（後書き）

これで、章の半分…紅牙とフェイトの話を分割した方が良かったんじゃないかと地味に後悔w多分、この章は13話くらいまではいくと思います。それくらい、塞臥は重要なキャラですし、シ姉妹みたいな噛ませでもありません

そして、驚いたのがフェイトの完全ヒロイン化…はやてが絡めないこの章の間に、紅牙とのフラグがえらい事になりました。だが、今回は桃子さんに全てを奪われました。この子はご飯に逆らえない子ですから…でもフェイトの料理フラグも回収するから侮れない

このコンビですが、一応考えている間柄は【親友】だったりします。お互いが気楽にいられる関係…仲も良く、無自覚に互いに触れられるような距離で町中を歩いてそうな感じ。端から見ればカップルにしか見えないって感じですね。多分腕組んでも気付かないかもしれません、天然コンビですからw

次回は一夜明けた高町家と、プレシアの影がちらほらと。展開事態は一気に進める話なんで気合い入れたいと思います

では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

第8話　取り戻したモノ（前書き）

眠れないので何となく書いてたら、完成してしまいました

第8話　取り戻したモノ

フェイト視点

結局、遅くなってしまったので私はなのはの家に泊まる事になった。
ずっと紅牙君の傍にいたせいか、むくれていたなのはも機嫌が直って良かった

それで、なのはのベッドで二人で寝た…んだけど、紅牙君が気になっていたのはなのはには内緒

そして、高町家の朝は早い。恭也さんと美由希さんは稽古、なのはも朝早くから魔法の練習をしている…のだが…

「…にゃはは、また失敗しちゃった」

リンカーコアを奪われたのだから、当然なのだが今のなのはは魔法を満足に使えない。っていうか帰ってきたのは昨日だし、心配かけるのは良くないと思うんだけど…

「レイジングハートも頑張ってるんだから、私も負けてられないよ」

今、レイジングハートとバルディッシュはカートリッジシステムの追加と調整をしている。ベルカの騎士達に負けたのが、二人も悔しかったのだろう

でも、今のなのはには危うさがある。仕方ないと言えば仕方ないのかもしれないが…

「なのは、もう無茶をしないでね」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん」

「私にはそう見えないよ。…なのはも紅牙君みたいに傷つくかもしれない。そんなのもう、嫌だよ…」

フェイトが目に涙を浮かべる。これには流石になのはも慌てるが

「…大丈夫、無茶はするかもしれないけど、無理は…しないから」

「「えっ!?」」

二人が振り向くと、ベンチには紅牙が座っていた

「…ずっと見てたの?」

「…大丈夫だよ、フェイトちゃんの辺りでここに着いた」

「…（ほっ）」

魔法についてはバレてないと安堵する。紅牙君の場合、知っても「…そーなのかー」で済んでしまいそうだけど…

「でも、何でここに来たの？」

「…桃子さんが、ご飯、作ってた」

「それがどうしたの？」

「…今から戻ると、調度いい時間」

すると紅牙は言いたい事を言い終えたらしく、二人に背を向けて歩き出す

「戻ろうか、なのは。練習もまだ早いみたいだし」

「そうだね、戻ろう」

二人も帰路についた

そして、玄関に差し掛かった所で

「…にゃあああああああっ！！」

「ふぇっ！」

「きゃっ！」

聞き覚えのある、そして想定外の悲鳴があがる

「…紅牙君っ！！」

まだ僅かにだが痛む足を無視し、家に駆け込む。今度は私が紅牙君の力に…そう内なる決意と共に紅牙君の所についた所で私は固まった。そこには…

Tシャツを脱がされ、ズボンも半ばまで脱がされて尚抵抗する紅牙君と、下着姿の美由希さんだった

そう、そこは脱衣場であった

「…えーっと…」

私の頭はフリーズしていた。お風呂に入るなら服を脱ぐのは当然、だけど紅牙君はジタバタともがいている。けど、美由希さんを傷つけないように手加減し、さらに右手を使えない紅牙君では美由希さんにかなわない。ズボンも脱がされる。私の顔が熱くなる。暑くなるあつくなるアツクナルアツクナルアツクナルあつ

「フェイトちゃん、取り敢えずこっちっ!?」

そして私より早くフリーズから復帰したなのはによって、私は脱衣場から退場した

朝ごはんの支度は七割ぐらい終わっていた。それが終わるまでに食器の配膳をすればすぐにご飯を食べれるだろう。紅牙君はちょうど私達にも仕事がある時間に合わせてくれたみたいだ。その事を桃子さんに話すと

「そうなの。やっぱり紅牙君は料理を結構やってるみたいね」

紅牙君は少し支度を手伝ってから、私達を迎えにいった。サラダとかは半分くらい紅牙君がやったらしい。私はやっぱり料理を覚えようと決意した

「でも、何でお姉ちゃんが紅牙君をお風呂に入れてたの？」

「紅牙君、昨日すぐに寝ちゃったからね。ベッドに寝かせた時に身

体は拭いたんだけど、お風呂入ってないでしょ？」

「でも、紅牙君は大怪我してるんじゃ…」

「だが、もう包帯を外していただろう？」

サラダを運んできた恭也さんが会話に加わる

「朝起きてきた時に外していたからね。慌てて確認したら、もう傷口が完全に塞がっていたよ。直接洗うのはまだ危ないだろうが、洗い流すくらいなら問題無いだろう」

さらに新聞を読んでいた士郎さんがこちらに加わる

「それで、稽古をして汗かいたからシャワー浴びるっていってた美由希ちゃんにお願いしたの。紅牙君はまだ利き手使えないしね」

…紅牙君、それで抵抗してたんだ

「だけど、流石に恥ずかしがって嫌がっていたんだけど、美由希が紅牙君を気に入ってしまってな…」

「さっき大喜びで脱衣場に引きずり込んだ所だ」

紅牙君、ご愁傷様

ご飯が出来た辺りで二人があがってきた。本当に軽くシャワーを浴びただけらしい。だが、紅牙は顔を赤くしていた。やっぱり恥ずかしかったのだろう。美由希さんも美人だし

紅牙君はまだ右手が上手く使えないらしく、ぎこちなかった為、途中から食べ終わった美由希さんに抱き抱えられてまたあーんされる羽目になっていた

「…きゅー…」

「ああもう可愛いなぁ、髪の毛もサラサラで綺麗だし…いっそもう家で暮らさない？」

結局、紅牙君は美由希さんが学校に向かうまで解放してもらえなか

った。私は自宅に帰って着替えてから学校に向かったので、なのはから聞いただけなんだけど、美由希さんは弟も欲しかったみたい紅牙君みたいに人形みたいな綺麗な男の子で、感情を表に出せないだけでいい子なんだからそりゃ気に入るよね…

紅牙視点

「…むきゅー…」

紅牙はソファーにたれていた。某パンダの如く

『…完全な好意のみで来られるのもまた、恐ろしいものだな』

高町夫妻は喫茶翠屋に向かった。紅牙は行っても足手まといだから、と留守番する事にし、昼食だけ翠屋に食べに向かう。という事になっている為、マサキと素で会話している

「…どう反応したらいいのか、わからない」

『すまないが、俺も専門外だ。ただ抱き締めるだけなら痛いとか言えばいいのだろうがな…』

美由希は右手側は脇腹辺りから抱き締めたりと、紅牙に極力負担をかけないように可愛がっている。風呂場でも世話になっている手前、そういう要素が無いので抵抗できないのだ

『しかし、桧山といい、あの夫婦といい、この町はおかしく無いか？年齢が２０代で止まるのか？』

「…商店街とかは普通だよ」

『特に妻の方だ。あの小娘とは血縁のようだが、仮に学生結婚したとしても２０後半…どう見ても２０を過ぎたくらいにしか見えんし、夫の側も息子が血縁として約４０弱…あっちも２０代にしか見えぬぞ？』

「…大丈夫、僕、最初は桃子さんを、なのはのお姉さんだと思ってた」

微妙にげんなりしている紅牙をマサキは苦笑いの混じった声でフォローする

『安心しろ。美由希の方と並ばれたら姉妹にしか見えんし、小娘とセットでも初見は首を傾げる』

そんな中、二人が考えないようにしていた事をぽつりと紅牙が呟く

「…流石に、新聞配達はクビ、かな？」

『…仕方あるまい、はやてとの件はフォローがあったが、今回は対外的には大怪我だ。バレたならば暫くは出れぬだろう…最悪、桧山のフォローに期待するしかあるまい』

すると、紅牙は苦々しい表情を浮かべて、力の入らぬ右手の拳を握りしめる

「…結局、他人任せ…僕は、弱い…っ！」

今回は恭也さんや美由希さん、そして桧山さんがいないとフェイトを守れなかった。それどころかマサキがいなければ、抗う意思すら持てたか怪しい

『…最初から最強の存在なんぞ、居る訳が無かろう、愚か者が』

そんな僕の弱音をマサキは切り捨てた

「…ばっさり、だね」

『当たり前だ。この馬鹿者が』

マサキの雰囲気が珍しく穏やかになる

『俺とて、最初は挫折続きだったさ。それでも足掻き続けた結果が、このゼオライマーと【冥王】という称号だ』

「…マサキ」

『お前は屑共に虐げられ続けた。その中でも決して砕けなかった心、それが間違いなく今のお前が誇れるモノだ。確かにお前はあんな屑すらあの状況にならねば抵抗できぬ愚か者だ。だがお前は抵抗した。それは明らかな進歩では無いのか？』

「…それは、…」

『あの時、お前が抗う事を諦めればフェイトは…一生消えぬ心の傷を負ったはずだ。下手すれば壊れたかもしれぬ。それをお前は守りきった。あの時のお前の抵抗がフェイトを救ったのだ。それだけは忘れるな』

「…僕は…僕は…、っ！」

ふと気付くと、僕の頬が濡れていた

「…え？涙…何で…？」

『お前が人の心を取り戻している証なのだろうな。お前がかつて、人形となった過去に勝てたからでは無いのか？』

「…そんなこと、無い、…僕はまだ…勝てて、無いよ」

まだ、恐怖は完全には消えてない。だからこそ勝たなくちゃいけない。僕は、友達を傷つけられたくは無いから

『ならば、心も磨け。次こそフェイトやはやてに指一本触れさせずに叩き潰せばいい。お前に必要なのは、確固たる心なのだからな』

マサキ視点

俺も随分丸くなったものだ。だがまぁいいさ…俺は、コイツに、紅牙に賭けてみたくなった

初めて見た時は、自我が薄く、御しやすい宿主と思った

だが、紅牙は瞬く間に冥王の力を自在に使いこなしていった

そしてコイツの心が空虚なのは、何も与えられなかったからだ

それを短期間で取り戻して行く中で気付いた

紅牙は甘い。だが何故あの環境下で甘い人間でいられるのか？

それは紅牙の本質が受け入れる事にあるからだ

俺も八卦のしがらみも、はやてと闇の書…いや、夜天の書の事も、本来は敵のはずのフェイトですら受け入れ、守る

恐らく紅牙は誰かに必要とされる事に飢えていたのだろう。だからこそ…アイツに、マサトに被ってしまう

冥王であることを強制されながらも、それしか無いからこそ受け入れ、そして受け入れ続けて壊れてしまった優しき冥王

だからこそ俺は…

塞臥視点（近隣の管理外世界より）

ここ数日の冥王の動きは目覚ましいものがある。やはり、フェイトの存在が起爆剤になったのだろう

「やはり、マサトと似ている…だから木原マサキが惹かれたのかもしれぬ」

これならば、そろそろ仕掛けても良いのかもしれない。いや、仕掛けないと葎が動くだろう

「今の葎には彼等では勝てない。今の彼ではあの男には届かない…

ならば」

私の命を以て、冥王を新たな段階へと進ませる

「プレシア殿、感謝します。貴女のご息女の助力で、私の役目も後少しになってしまいました。なれば…」

塞臥は腕を一閃する。その腕より伸びた鞭…は無数の衝撃音と共に岩山を軽々と粉砕する

「俺は近日、冥王との戦いを行う。誰にも邪魔はさせぬし、横取りはさせぬっ!!」

ヒュンヒュンヒュンヒュン…バシバシィッ!!

文字通りの鞭の嵐、それが収まる頃には塞臥の姿は無かった

ゼスト視点

今の攻撃、何とか防ぎきったが…クイントは兎も角、メガーヌは置いてきて正解だったな

『…ゼスト様、どうされます？』

葎が聞いてくる

「堂々と宣言された以上は様子見だな。正々堂々挑むならば、それこそ介入するわけにはいかぬからな」

『御意。しかし…塞臥、あの男は…』

「裏切りの八卦衆…だったな」

葎の話では裏切ったのは一度では無く、無意味に冥王の援護をした時もあったらしい。だが…

「あの者には凄まじい決意と気迫があった。今更冥王に挑むという発言といい、それは何なのだ？」

『それは…』

「いや、お前達にすら分からぬのならば、俺には皆目見当もつかぬのだろう…ただ」

『…ただ？』

これは推測だ。だが葎には話しておくべきだ

「俺にはまだ何か、裏がある様に思える。あの冥王の少年といい、今回は今までと違う何かが起きるのかもしれぬ…用心してくれ」

『御意』

そして俺もその場を後にした。冥王と塞臥の戦いを見届ける為に

第8話　取り戻したモノ（後書き）

今回は紅牙が涙を取り戻しました。かつてははやてが代わりに泣いてくれましたが…こう成長を書いていると感慨深いものがあります

今回は伏線の回収とバラ撒きをしました。美由希がべったりなのは、かつてアンケートして没った高町家ルートの名残ですw紅牙は義姉に服従し、共に日々鍛練する中で美由希はかなりのブラコンになっていましたが、八神家ルートだから何もしないのは寂しいと回収したら、何故こうなった状態にw

紅牙は年上の女性は苦手です。母親は産まれてすぐに亡くなりましたし、屑はあの有り様なんで、オバチャンとは最近になってコミュニケーションをとってますが、若い女性には羞恥心も芽生えた事により一気に苦手になりました
ぶっちゃけ、シグナムやシャマルは紅牙に勝ちたければ、水着で戦えばいけます。紅牙が一目散に逃げて終わりますwww

そして、塞臥が登場。武器も登場しましたが、一部の方は気付いたかもしれませんが、某少年漫画に登場した代物です。その武器の使い手とかは作者的にはかなり好きなキャラです。その不器用な生き方とか、友情が

次の次くらいからは戦闘始めなきゃ、多分無駄に伸びるんでキリキリいきたいと思います

では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

６０万ＨＩＴ記念、幕間（前書き）

すいません、かなり遅くなった上に幕間…本当に申し訳ありません
ｏｒｚ

６０万ＨＩＴ記念、幕間

『おいコラ、これはどういうことだ？』

…気が付いたら６０万超えてるわ評価も凄いことになってるわで先に幕間やることにしたんだ

「…専門学校辞めて就職したんだっけ？」

ああ、休学とかしてる間に学習課程が変わって一部単位が死んで卒業が絶望的になった

『具体的には？』

学校から片道３０分ｏｒ一時間の実習行きながら、１年～３年までの授業を虫食いで受ける。それで各実習（３週間が後１０回）を欠課を２日と四時間以内に抑えつつ、一つも落とさずに卒業する

『…物理的に可能なのか？』

一応は可能。だが、一度でも何らかの事情で欠席したら終わる。だから実質見込み無し。だから辞めた

「…で、今は老健に就職したんだっけ？」

ああ。それで書く時間が減ってる間に、次の話で重大なミスしてるのに気が付いてな、それの修正でほぼ書き直しだ

「…がんば」

…頑張るさ。それと、気になる事があってな

『また何かやらかすのか？』

いやね、休憩時間とか帰って気疲れでぐったりしながら他の方のＳＳ見てると、如何に自分に文才が無いかって事が…

『それに、結構スルーして、何話分か纏めて読ませてもらっているから余計に感想も書きにくい、と』

ああ、本当に書くのが慣れない。酒入ると気軽に書けるけど、今医者に酒を止められてるから受けを取りにいけない…

「…取り敢えず、地道にやっていこう？」

そうだね…っと！忘れる所だった…また安価取ろうかって話なんだ

『前回も前々回の安価も、現時点では伏線にしかなってないよな？
また伏線だけにするのか？』

仕方ないだろ、このタイミングしか無いんだから…内容は３つなんだけど

１：リインフォースの生存

『ほう？』

これはまぁ先の話ですが、この次の安価と絡んで来るのでここで決めたいだけです。一応、Ａ－ｓシナリオでは退場しますがＳＴＳまでに復活予定です

「…バラしていいの？」

本来は隠してサプライズの予定だったけど、ＳＴＳの原案を軽く作

ったら…（原案を二人に見せる）

「…うわぁ…」

『また伏線まみれな…』

結果的にその中間の話をかなり書く必要が出るので、ここでバレるのですよ。しかもかなり早い段階で…ならば先に安価やろうって結論に至りました。そして次は…

2：アリシア復活イベントの有無

「…また荒れそうな…」

うん、今回の幕間はこれと次の安価の為に用意した。ちょいと時間軸ずらして復活予定だけど、この章で話固めないと不具合が出そうで…

『今もあるだろうが、この阿呆が』

やかましい、これ以上不具合増やしたく無いんだよ

…取り敢えず、紅牙達とは外見年齢は幾らか差をつける予定な上に、半オリキャラ化しそうです。それでいいなら復活させようかな、と。ＳＴＳでさらにはやてが茨の道を行く事になりますが…

『お前、まだはやてを精神的に苛める気か？』

仕方ないだろ。ラスボスルートなんだし

３：ぬこ姉妹、殺ってもいいよね？

『…ほう？（口元をニヤリとさせながら）』

片方がＤ，Ｃ，の猫耳メイドだったりと個人的にはかなり惹かれましたが、多分話の流れ的に死ぬ、またはそれに匹敵するような目に遭います。なので、念のために先に勢い余って殺っちゃってもそのまま逝くぜ！って言質を取りたかった

『…ちなみにクロノをボコる話だが、当初は片目を抉るか、片腕を引きちぎるくらいはやる予定だった。けど、これとフェイトと友好的なフラグの為に胸骨肋骨の複雑骨折程度で済ませていたりする』

「…今回は殺りにいくんだね」

当分先…なんだが、この章終わったら一気に時間経過が速くなるからなぁ。原作を元にやれるから、かなり書きやすくなるし、後は伏線回収するだけ

『地味にここら辺りが一番辛いのか。次の話で回収予定だった伏線は次の章になったし』

ああ、バトルまでいけば後はレールに乗るんだがなぁ…

「…安価は締め切りとかどうするの？」

取り敢えず、金曜の２４時までを期限に、集まらないようなら塞臥戦辺りまで引っ張る

『つまりは盆過ぎか』

不吉な事言うなよ！まぁＳＳもう一個書けば多分それも余裕だろうが…

「…何書くの？」

テンプレ的なゼロの使い魔に東方混ぜた転生モノだな。こっちは転生ネタ避けたから書いてみたくなった、紅牙の人生は多分、普通に生きてきた人間なら間違いなく狂う境遇だったし

「…それが避けた理由だったんだ」

普通はＤＶと生活環境で狂ってるだろうしな。そんな奴をはやてやフェイトの前に出したくない

『なのははいいのか…（パラパラと原案見ながら）こっちも普通の転生と比べると力の代償が中々グロいぞ？』

いや、普通にチートにしたら力に溺れそうじゃないか？
少なくともオリ主系として、俺は力に酔って自滅する自信がある。だから紅牙もゼオライマーを手にするまでは辛い人生だし、これからも辛い経験をする事になる。って訳でこっちもそういう設定にした。それに…

『…それに？』

東方クロスの段階で介入するであろう隙間妖怪が、何の代償も無しに力をくれる訳が無いだろ

『ククク…確かにな』

よっぽど話に詰まったら息抜きに書き始めるかもしれませんが、あくまでこっちがメインです。次は修正して今週中にあげるのを目標とします。では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

第9話　塞臥の訪問（前書き）

後半ちょいと詰め込み過ぎた気がします…でも携帯は字数が辛い…

ｏｒｚ

第9話　塞臥の訪問

紅牙視点

「……」

紅牙は一人、翠屋へと向かっていた。ひとしきり泣いたら、ちょうどいい時間だったからである

『む、あれは…』

しかし、紅牙は今看板の影にに隠れている。その先には

「なぁシグナム、こー君何かあったんかなぁ？」

「いえ、私は何も聞いてはいませんが？主にも何も伝えていないのですか？」

「うん…こー君、ちょっと前に2日くらい家に来なかった時あったやろ?ちょっと気になってな…」

はやてとシグナムがいた。咄嗟に隠れた紅牙だが、多分シグナムの方は気付いたはず…顔を合わせづらい紅牙は道を変えようと歩き出すと、さらに声が増えた

「…ゼェ…ハァ…はやて…、大変だっ!」

息を切らせながらやって来たのはヴィータだ。これはまずいと急いで離れようとした矢先に、信じられない言葉が続く

「紅牙の住んでた部屋が…火事で全焼したって…」

その瞬間、紅牙は矢のごとき速さで自宅に向かった

シグナム視点

ヴィータの発言に言葉を失う主。そして私は紅牙のいた所へ駆け出す

「えっ…」

「シグナムっ！」

ヴィータが制止の声をあげるが気にしてられない。何があったのか、当人に問いただせばいい

「くっ…」

だが、紅牙は既に消えていた。姿は見えない…仮に全力で逃げたならば、もう追い付けはしないだろう。私は諦めて主のもとに戻る

「シグナム、どうしたん？」

主の顔色が悪い。当然だ、彼女は若干だが紅牙に依存している部分がある。その紅牙の住み処が焼けたのだ。気にならない訳が無い

「いえ、紅牙の姿が見えたので追いかけたのですが…既にいなくなっていました」

「そっか…でもこー君大丈夫かな?ご飯もそうやし、怪我してないか心配や…」

はやては紅牙を全面的に心配をしているが、二人は身体面や生活面は全く心配していなかった。身体面はただの火事ならば紅牙ならば問題にならないからであり、生活面も最悪、完全に八神家に住み着けばいいのである。今でも半居候だし、はやてならば喜んで紅牙を住まわせるだろう

「なぁ、もしかして…はやてが買ってくれた服とかも燃えちまったから顔を合わせられないとか、考えてるんじゃねーか?」

「先日の件での気まずさもあるのかもしれない。とにかく、まずは紅牙に会うことが先決だ」

シグナムはザフィーラとシャマルにも思念通話で連絡をとり、紅牙を捜索してもらうことにする

「主、ご安心を…紅牙は私達が見つけてみせます」

「うん、あんまり無茶したらあかんよ。…なぁ、シグナム?」

「はい？」

「こー君、うちに会いたく無いんかな？」

はやての声が涙ぐむ。ヴィータが慌てるがはやてはさらに自虐を続ける

「もしかしたら、可愛い子見つけたんかもしれんよ。こー君はホンマやったら、もっと人気者になれるはずなんや。うちなんかよりいい子がこー君の傍に居てくれるんやったら…」

「そんなわけねーよ！！」

はやての肩を掴みヴィータが叫ぶ

「アイツははやての為に冥王の力を使ってるんだぞ！その気になれば、管理局相手に喧嘩売れるよーなふざけた力だ。それをはやての為に使ってアイツは戦ったっ！！そんなヤツがホイホイと他の女んとこに行くわけねーだろっ！！」

「ヴィータ…お前…」

シグナムは驚いていた。顔を合わせては憎まれ口を叩くヴィータと、

それを受け流しながら、時折辛辣な言葉を返して口喧嘩を行っていた紅牙。だからヴィータが真っ先に紅牙を擁護したのが想定外だったのだ

『あらあら、やっぱり二人は喧嘩するほど…な関係だったのね』

『主のライバルは案外近くにいたのだな』

「ちょ…馬鹿、ちげーよ!!私はあんな…」

ガシッ

「…え?」

いきなり凄い力で肩を捕まれたヴィータは振り返る。そこには…

先程までの暗さはそのままに、満面の笑顔を浮かべるはやてがいた

「…ヴィータ？」

「は、はいっ！？」

思わず敬語になり姿勢をを正す。そこには鉄槌の騎士を心の底から震えさせる存在がいた

「ちょっと、向こうでＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしよっか？」

「ちょ…やだ…シグナム、助けてくれっ！」

車椅子なのが信じられない無いような力でヴィータを引き摺り、路地裏へと向かうはやて。そしてヴィータは引き摺られながら、目に涙を浮かべながらシグナムに助けを求める

「…主よ」

「……何、シグナム？」

平坦な無機質な声。それに内心怯えながらシグナムは非情な言葉を放つ

「時間はあります。ごゆっくりとどうぞ」

「シグナム、テメェ売りやがったな！！」

「ありがとな、しっかり聞いてくるわ♪」

そして泣き叫ぶヴィータの声が響いたが、さすがに誰にも声は届かなかった…そしてその声はすぐに消え、その間に起こった事はシグナムは記憶することを拒否した

フェイト視点

私は今…

アリサとすずか、それと能面のような表情をしたなのはに尋問されています

始まりは昼休み、皆で屋上でお弁当を食べたんだけど、今日はお弁当は桃子さんが私の分も作ってくれたんだ。それで昨日はなのはの家に泊まった事を話したら…

「でも、今日学校なのに態々泊まったのって、何か事情があったの？」

「うん、昨日ね…」

それになのはが紅牙君が私と一緒に運び込まれた事を喋っちゃったから大変、なのはは妙に黒い笑みを浮かべながら紅牙君の事を話した。怪我の事まで話しかけたから慌てて止めたけど、二人には大体理解できたようだ

「ねぇ、お願いだから話してってばっ！」

アリサもすずかもお金持ちのお嬢様で、何度か誘拐されかけたり、なのはも巻き込まれた事があったらしい。だから余計に心配をかけてしまったみたいだ

「わかった…でも、誰にも話しちゃ駄目だよ。これは紅牙君にとって大事な話だから…」

だから私は一部をぼやかして話した。紅牙君の家で足のテーピングを巻き直そうとしたら暴漢に襲われて、紅牙君が助けてくれたけど怪我をして動けなかった所に恭也さん達が通りかかったっていう、概ねは間違ってない説明をした

「へー、中々いい所あるじゃない！」

「でも、怪我は良くないよ…」

二人は対照的な反応を示す。アリサはその根性がいい！と言う反面、すずかはやっぱり自分の為に怪我して欲しくない、と言うとアリサも微妙な表情になっていた。なのでフォローはする

「朝は普通に元気だったから、もう大丈夫みたいだよ」

ここで、あまり会話に入らなかったなのはが目を見開く

「え…嘘…そんな…」

「どうしたの、なの…は…」

私もなのはの見ている方を見て、固まる。そう、その人は本来はここにいるはずじゃない人だ…

「…あの人誰よ？」

アリサが呟くと同時に結界が張られ、私となのはと…

「お母さん、何で…」

そして、プレシア・テスタロッサは穏やかな笑みを…私自身の記憶には見たことの無いような笑みを浮かべていた

『すまないな、私は八卦衆が一人、塞臥。君の母上の身体を借りている』

そしてこれが、母の身体を使った八卦衆、そして八卦衆の中で最も【冥王】に拘った人、そして…最も自己犠牲の強かった人である塞臥さんとの出会いでした

紅牙視点

「…はは、燃えちゃった」

紅牙はかつて、自分が最も拠り所としていた自宅…否、自宅であったものの中で棒立ちになっていた

玄関に置いていた為、火を逃れ、僅かに焦げただけのサッカーボールが足下にある。そして、その手には…

かつて、はやてに買ってもらった服の残骸が握られていた

『…紅牙…くっ、結界かっ！』

マサキも声をかけあぐねていたが、結界を察知してからはすぐに頭を切り換える

『紅牙、行くぞ！もう何も失いたくは無かろう！！』

「…うん、行く」

その目には静かな闘志を宿し、紅牙は結界目掛けて転移する

そこがどこなのかを確かめもせずに…

フェイト視点

暫く無言で対峙していたが、すぐにお母さん、いや塞臥さんが構えを解く『…ふむ、そちらのお嬢さんは少々邪魔、だな』

塞臥さんが言い終わるや否や、一瞬でなのはの背後に回る

『暫し、眠ってもらおう』

その指がなのはに触れると、なのははその場に崩れ落ちた

「なのはっ！？」

『安心しろ、眠っただけだ』

塞臥さんはなのはを支え、それから優しく横にすると…私に頭を下げた

『すまない、君の母上の身体を勝手に借りている。だが、直に君の元へ帰す。これだけは約束しよう…それと、君に似た少女、彼女も時間の進行を停めている。彼女も私と【冥王】、いずれかの勝者が連れて戻ることも約束しよう』

「アリシアもいるんだ…」

『ああ、虚数空間内だから、潜航できるのは【冥王】の称号を持つ、【天】のゼオライマー、それと私の【雷】のオムザックくらいだからな…さて、本来の用件を終わらせようか』

塞臥は姿勢を正す

『…ふむ、【冥王】がもう、ギリギリだったな。では言伝てを頼みたい…今夜、我、八卦衆が一人塞臥と【雷】のオムザックは冥王に勝負を挑む！戦う意志あるならば、明日までにビル街に来られよ！！…そして、来ない場合、この町を焼き払わせてもらうっ！！』

「えっ！？」

つまり、この人は今晩冥王と戦う…そして、冥王が来なければ町を焼き払う…って、ええっ！？

『確かに伝えたぞ、では…また会おう、我等と同じ、造られた少女よ！』

塞臥の足下に魔方陣が展開される

「私と一緒…貴方達は一体…」

そしてフェイトの言い終わる前に光と共に消える。そしてその場には、代わりにゼオライマーがいた

「フェイトか。これも最早奇縁と呼ぶべきか？」

マサキが苦笑と共に私の名を呼ぶ

「あ、あの…マサキさん…」

「塞臥が来たのだろう?何があった、話してみろ」

私は塞臥さんの言った事を伝える。するとマサキさんは大笑いを始める

「ククク…いいだろう、ならば真っ向から粉砕してやる」

「あの…粉砕はできれば…」

「何故だ?言ってみろ」

私は塞臥さんがお母さんの遺体を使ってる事を説明した

「(オーバーSランク…また厄介なものを)」

『(…マサキ)』

「(判っている。格上の魔導士の身体を持つ塞臥を、肉体を破壊せず制する…中々に面白いやってみようでは無いか)」

そしてマサキは不敵に笑っていると

「お願いです、私も…一緒に戦わせてください!」

「母の為か？」

「…はい」

マサキはフェイトの目を見る。折れる気は無さそうだし、下手したら勝手に来るだろう…ならば

「…善処はしてやる。ただし、俺に貴様を守る余裕は今回は無い。自分の身は自分で守れ、それができるならば、貴様が来るのも貴様の自由だ。勝手にしろ…」

事実上の許可にフェイトは目を輝かせる

「ありがとうございます！！」

「後、管理局に報告は構わんが、無駄に足手まといを連れてくるな。邪魔だからな。分かったな？」

「はいっ！」

そして９０。頭を下げる。マサキはそれを見て満足気に笑い転移の準備を終える

「用は終わった。ではな」

そしてゼオライマーは颯爽と姿を消した…が、

『（…マサキ、照れてる）』

「（五月蝿い、黙っていろ紅牙っ！！）」

内側ではこのように大変喧しい退場であったが

紅牙視点

ひとしきりマサキと口喧嘩しながら学校の敷地ギリギリに転移する。

すると、向こうから桧山がやってくる

「おや、紅牙君ではないですか。何故ここに」

「…何となく」

咄嗟に返すが、桧山は黒い笑みを浮かべる

「高町先輩が探してましたよ。携帯が繋がらないし、昼になっても来ない、と」

「…あ」

すっかり忘れていたのを空腹と共に思い出す

「幸い、まだ連絡をとってませんし、ちょっと用事に付き合っていただければ口裏を合わせますよ？」

「（…マサキ）」

『（…飯を食いたければ従うしか無かろう）』

翠屋の昼食、桃子の料理、さらに空腹が紅牙から思考能力を奪いさった。本来なら本能的に気付くであろう、桧山の悪巧みにすら気を配っていなかった

「…ん、わかった」

そして、紅牙は学校内で幾つかのマークシート式の問題を解かされる事になる

「…むー…」

はっきり言って、紅牙は勉強はできない…と言うよりはやっていない。新聞配達の仕事上、最低限の漢字の読み書きや生活に必要な簡単な計算は教わっているが、理科や社会は絶望的である。その為…

「…いいや、適当に埋めちゃえ」

問題を解き終えるまでに話をつけていたらしく、紅牙はお咎め無しで翠屋のランチにありつけた。満足気に食べる紅牙を見て微笑む桧山、その二人を見て桃子は感極まってカウンターの裏で涙を流してしまう

「良かったね、春香ちゃん…やっと明臣さんが心から笑えるようになったよ」

そして時は決戦の時へと近づいていく…紅牙が【冥王】の意味を知る戦いへと…

第9話　塞臥の訪問（後書き）

塞臥との決戦が秒読みに、そして紅牙がフラグを立て、桃子は泣いちゃいました

取り敢えず簡単に関係を説明すると…

桧山→士郎の後輩

春香→桃子の友人

その為、桃子も士郎も桧山夫妻を襲った不幸を知っており、その分、紅牙を可愛がっています。それがまた、なのはから見れば気に入らない事（親を取られた気分）に繋がっています。

そしてこの章唯一の出番のはやては、ヴィータ相手に嫉妬の力のお披露目wツンデレみたいな事するから…

さて、紅牙＆amp;フェイトVS塞臥のお膳立ては整いました。アリシアは全く感想が現時点0で反応が無いので、安価次第でどうにかできる様に無い知恵絞ってぼかして後の話に引き伸ばしました。では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

第１０話Ａ　決戦準備～フェイトｓｉｄｅ～（前書き）

先にクロノを酷い目にあわせたくなった。反省も後悔もしない

第１０話Ａ　決戦準備～フェイトｓｉｄｅ～

フェイト視点

「そう…じゃあ、今回はフェイトちゃんに任せるしかないわね」

あの後、リンディさんに報告して、学校が終わってすぐにアースラに向かうと、私となのはを待ってくれていたようで、すぐにミーティングが始まりました

「何でアタシまで駄目なのさっ！」

ミーティング、と言っても今回は戦場に来る事をマサキさんに許されているのは私だけなので、私をどう配置し、戦闘区域の外に他のメンバーを並べるか、しか無いんだけど…ここで使い魔だからある意味当然かもしれないが、アルフが大反対した

「八卦ってのは、アリサ達のような一般人が使っても、フェイトやなのは達より強いんだろ？それをよりによって、あの女の身体で使うんだよ！？フェイト一人じゃ、何かあった時に手遅れだよ…」

アルフの言うことは最もだ。一般人を使ってもＳランク級の力を与える暫定的にロストロギアに指定された八卦のデバイスを、オーバ

ーSランク魔導士に使わせればどうなるか…想像もつかない。だけど…

「大丈夫、本来の目的とは違うけど、バルディッシュもパワーアップしたし」

バルディッシュは修理の際にカートリッジシステムを導入し、バルディッシュ・アサルトにパワーアップした。私もマニュアルを読んで覚えたし、軽くシミュレーションもしたから後は実戦で覚えていくだけ。それに…

「今回はあくまで、マサキさんと塞臥さんの一騎打ちだから、私は見届けるだけだよ。私は巻き込まれないように近くで逃げるだけだし」

「あんな連中の喧嘩に巻き込まれたらひとたまりも無いよ。だから、ね？」

「ごめんね、アルフ…私はこの戦いを見届けなきゃいけない…そんな気がするんだ…」

「フェイト…」

アルフの耳も垂れ、声にも元気が無くなっていく。申し訳ないとは思うけど、何故か引く気にはなれないのだ

「冥王相手に啖呵切っちゃった以上、行かない訳にはいかないしねぇ…あの人、前にもフェイトを助けてくれたし、もしかしてフェイトに気があったりして」

エィミィがぽつり、と呟くと私は自分の顔が熱くなるのを感じた。違う、と叫ぼうとしたら、私の真横から先に大声が飛んできた

「そんなこと無いよ！きっと紅牙君みたいに偶然が続いただけなの、マサキさんがフェイトちゃんを…そんなのあり得ないよ！！」

何故かなのはが、顔を真っ赤にして怒りながら反論していた。っていうか…

「何故そこで紅牙君が出てくるの…なのは？」

「え？…あれ、何でだろう？」

「その紅牙って奴が木原マサキを宿している冥王なのかい、なのは？」

「ふぇ！？うーん…どうかな？確かにリンカーコアもあるし、かなりの魔力もあったんだけど…マサキさんとはまた違うんだよね…」

なのはが呟く。それより気になったのは…

「何時、リンカーコアを調べたの？」

「家に運び込まれた時だよ。紅牙君、身体に薄く魔力を纏ってたの。後でユーノ君に聞いたら、身体が治療速度を上げる為に本能的に魔力を行使してるんだって…そうだよね、ユーノ君」

話を振られると、それまで考え事をしていたユーノが顔を上げた

「そうだよ。多分、その紅牙って子は身体強化系のレアスキルを持っているんじゃないかと思う。じゃなきゃ、魔法も知らないはずの人間が身体の治療に魔力を用いるはずが無い。無いんだけど、彼は魔力と魔力以外の何かを行使していたんだ」

「何か？魔力以外に何かがあったの」

「少なくとも、ミッド式やベルカ式、いや、管理局に存在する魔法体系にそんなものは存在しないはずだったんだ…だけど、これと似たような現象を僕らは見ている」

そう言うと、ユーノはスクリーンに映像を出した。それはクロノがリンチされている動ｇ…もとい、クロノが無謀にもマサキさんに喧嘩を売った結果が映されている動画が出てきた

「この時、魔力以外の何かが感知できたんだ。それが何か分からないけど、この少年…四季　紅牙に起きていた現象と酷似しているん

だ。少なくとも無関係じゃない」

それは、紅牙君が八卦と関わりがある…と。それならば…

「紅牙君がマサキさんって事？」

「いや、何らかの手段で普段は木原マサキを抑えているのかもしれない。それか、ある程度の力があれば共存みたいな関係になるのかもね」

「でも、母さんの意識が無くて、塞臥さんだけが出てたよ？アレは…」

「え、アレってアイツはいないんだ。良かったぁ…」

ようやくお母さんの意識が無いのに気付いたアルフが胸を撫で下ろす。そこでクロノが会話に入る

「つまりは木原マサキと塞臥とやらの、他人の身体を借りた喧嘩というわけか。アイツを見る限り、負けは無いだろうが…」

「そりゃその身で以て味わってるしなぁ」

「うるさい！とにかく、奴が弱ればロストロギアの不法所持を理由に逮捕だってできる。無理でもプレシア・テスタロッサの遺体を入手して奴等を解析、最悪解剖でもすれば、八卦の情報がわかるかも

しれな…あれ、どうしたみんな？」

周囲が無言になり、約一名以外の皆が感情のこもっていない冷たい目で見ている事にようやくクロノが気付く。そして残った一名は…泣きそうな目でクロノを見ていた

「クロノ、マサキさんやお母さんに何をする気なの…？」

フェイトの瞳が揺れる。ようやく失言にクロノが気付くが

「エィミィ、やりなさい」

「あいあいさー。没シュート、と」

リンディの指示でエィミィがスイッチを押す。クロノは咄嗟に身構えるが…何も来ない事に拍子抜けする

「あれ、何も…ってぎぁあああああああぁぁっ！！」

クロノが気を抜いた瞬間、なのは、アルフ、ユーノの三人がかりでバインドを仕掛ける。直後にギャグマンガの如く足元の床が扉のように開き、クロノの座っていたパイプ椅子ごとクロノを奈落の底に落とそうとする…が

「…ふんっ！」

穴が狭かったのもあり、咄嗟に足を壁に突っ張り、身体を壁の両側に押し付けて何とか落下を阻止する

「ちっ、しぶとい奴め」

「落ちれば良かったのに」

「お前等、それが友人に対する言葉か！？」

ユーノ、なのはの容赦無い言葉に涙目になるクロノ。だが、そんな彼に運命はさらなる追い打ちを仕掛ける

コツンッ

「痛っ、…何だこれ？…え、カートリッジ？」

ガシュッ！

その機械音の方に振り向くと…

「まさか、初使用が身内相手になるなんてね…」

『世の中そんなものです』

バルディッシュのザンバーモードを最上段に構えるフェイトがいた。
髪の影に隠れて顔は見えないが…怒っているのは良く分かる

「ま、待て…話せばわかる…」

「分かりたくない…マサキさんだけじゃなく、死んだお母さんにさらに酷い事しようとする奴の事なんて」

クロノは必死にバインドを外そうとするが、焦りからか三人がかりなのかは不明だが全く外れない。そして一歩踏み出したフェイトの顔が見えた

全く感情の無い、能面のような顔、虚ろな瞳…多分、子供が見たらトラウマモノだろう。それだけの恐怖がクロノを駆け抜けた

「少し…頭、冷やそうか…」

そして容赦無くバルディッシュは降り下ろされ…

クロノは今回の作戦の待機からも外された

第１０話Ａ　決戦準備～フェイトｓｉｄｅ～（後書き）

クロノを酷い目にあわせた。だってムシャクシャしたから。理由はそんなもんです

取り敢えずかなり締め切りも適当にしたとはいえ、信頼と安定の安価０。これは見てる人居ないのか、見る気がもう無いのか…さっさと書かないと、と追われる心配無いのも気楽な反面モチベの低下も酷いけどね

息抜きにゼロ魔書いてみました。まだプロローグしか無いけどｗあっちも多分…いや間違いなくここでは嫌われるかと思います。テンプレとは程遠くなりそうですし

文才と時間が欲しい…

まぁ愚痴ばかり書いても仕方ないので今回はこの辺りで。ではまた次回の後書きで会いしましょう…

第１０話Ｂ　決戦準備～紅牙ｓｉｄｅ～（前書き）

元々、前回のとセットの予定だったので短めです

おのれクロノ…また酷い目に遭わせてくれる…

第１０話Ｂ　決戦準備～紅牙ｓｉｄｅ～

紅牙視点

紅牙は食事の後、高町家近所の桜台の公園にザフィーラを呼び出し、今夜に八卦の一人と一騎打ちを行うことを話した

「で、今夜に一騎打ちを行う…と」

「…うん」

「管理局の魔導士を連れてか？」

「…そうなるね」

何とも面倒な事態になってきたので、ザフィーラにまず話す事にしたのだ。この場にヴィータがいれば、癇癪の一つくらいは起こすだろう事は紅牙にもわかったいたのである

「つまり、今回も我らは見ているだけ、と？」

いや、管理局側はこれ幸いとこちらに戦力を傾けるリスクがある。それをザフィーラに言うと僅かに目を見開く

「お前は時折、馬鹿なのか天才なのかが分からなくなる」

「…僕は馬鹿だよ。本能の塊みたいなものだし」

「それでそれだけ考えれたら十分だ。…皆には話は通しておく」

「…ありがとう、ザフィーラ」

「ただし」

ザフィーラが鋭く睨む

「これが終わったら釈明…いや、主に話くらいはしてやってくれ。ずっとお前の心配ばかりしている」

「…ん、わかった。でも今晩は桧山さん食べに行く…だから、明日でもいい？流石に夜中ははやても迷惑だろうし」

「桧山殿か。何故彼と？」

「…うーん…説明しにくいけど…」

紅牙は桧山が実の父親だった事を話すか躊躇したが、話すことにした。ただ、その時に起きた事件はぼやかしたままで

「そうか、それならば主も納得する」

「…さっさと終わらせないと遅れちゃう。だから全力でやる」

「街を壊すなよ？」

「…僕もメイオウ攻撃を市街地で使う程、外道じゃない」

『何か暗に俺が貶されたような気分なんだが？』

「…気のせい」

「気のせいだな」

『貴様等…』

野郎三人で軽く談笑してから解散となり、ザフィーラは八神家へ向かった。紅牙も高町家に戻り、身支度を整えてから家を出る

「…行こう、マサキ」

『ああ、行くぞ紅牙よ』

ザフィーラ視点

ザフィーラが帰ってきた時には、八神家は全員帰宅していた。何だかんだで紅牙は八神家の一員になりつつあり、大事な仲間だからだ

「主、今晩の分の紅牙の食事も必要ありません」

「えっ？」

「おい、いきなりはやてを泣かしてるんじゃねーぞ！」

「私はそんなつもりで言った訳では…」

その言葉にはやての目に涙が浮かぶ。一瞬で三人が敵に回り、狼狽えるザフィーラだが、紅牙が桧山と外食を摂る事を説明する

「何で桧山なんだよ。今までもそんなこと無かったろ」

紅牙は桧山に体術を教えて貰ってはいたが、そんなことは一度も無かったのだ

「意外だな。お前は桧山のオッサンとか言いそうなものなのに」
「いやな、あそこまで若々しいとオッサンに見えねぇよ」
「…なるほど」

シグナムは苦笑しつつ、疑問を口にする

「それはつまり、家を失った紅牙を桧山殿が引き取るという話か？」

その言葉に俯いていたはやての顔があがる

「…え？紅牙君が連れていかれるの？」

「いえ、厳密には在るべき姿に戻るだけです。主よ」

「何勿体ぶってんだよ、ザフィーラ」

「今話すさ」

ザフィーラは紅牙と桧山が実の親子であった事を説明する。するとそれにシャマルが話をあわせてくる

「これはこの間、自然公園に行ったときに明臣さんが話してくださったのですが…」

さらにシャマルが桧山の息子が保育器より連れ去られ、失意のまま紅牙の母親が亡くなった事を話す。はやてはそれを聞くと泣き出してしまう。騎士達は何も言わない、否、言えなかった。紅牙の秘密に近づいていながらも、主を最優先にして動かなかった結果が、主を悲しませているのだから…

「主はやて、申し訳ありません」

「ええんよ、皆が悪い訳や無い…こー君が本当のお父さんと会えたんやから、めでたいことや。それやったらしゃーない」

はやては涙を拭いて強がる

「いいのですか?」

「ええよ。こー君夜中は…無理やから明日には来るんやろ。その時に聞けばええし…それに」

はやての目が光るその視線の先にはシャマルがいた

「え、何ですか?はやてちゃん」

咄嗟に胸を両手で庇いながらシャマルがはやてを見る。実に日頃の行いが出た結果である

「さっきシャマル、桧山さんの事、明臣さん言うたよな?何があったんか聞きたいわー」

「え?…ああっ!!」

シャマルの顔が真っ赤になる。それを見てはやてはニヤリて笑い、シグナムとヴィータは顔を僅かに赤くする。ザフィーラは役目は終えたとばかりに床で丸くなる

「シャマル、我らの役目は主の守護だぞ。それを前に男等…」

「…うわ…やっぱシャマルは進んでるんだな…」

「ヴィータちゃんっ!私と明臣さんはそんな関係じゃ…まだ手を繋ぐのも…って私は何を…」

顔を赤くしながらも、リーダーとして振る舞うシグナム、真っ赤になって俯いてブツブツと呟くヴィータ(免疫無し)、そしてさらに自爆するシャマル

何だかんだで、紅牙の問題も解決に向かうと知ると、何時もの八神家に戻りつつあった。だから彼女等は待つ事にした。彼が無事にこ

の場所に戻る事を願いながら

第１０話Ｂ　決戦準備～紅牙ｓｉｄｅ～（後書き）

と言うわけで、今回は紅牙とザフィーラ視点がメインの八神家でした。ちょいとシャマルの伏線回収したけど思ったより文字数増えなかった。次に期待かな

マサキが貶された云々言ってたのは、原作見た方ならわかると思いますが、コイツは市街地ど真ん中だろうが平気で全力戦闘します。それどころか『ゴミがいくら死のうが、どうでもいい。相手の手が少しでも緩むなら有効活用するべき』とか言いそうなタイプだし、この戦闘の締めは市街地ど真ん中でのメイオウ攻撃だったりします。紅牙主人公でホント良かったよ…

そして桧山さんがシャマルに地味にロックオンされました。未だに亡き妻一筋だから強敵だろうが頑張れシャマル！そして紅牙の食生活の行方はどうなる？↑桧山はキャラの元ネタの都合で、料理が全くできません

これだけで短編一つ作れそうですが、まずは塞臥だ。中々戦闘に入れない…次には無理矢理に入る予定。そしてＳＴＳ後半を見る予定だったりします。ゼストのキャラ掴む為に

では皆さん、また次回の後書きでお会いしましょう

第１１話　神代の武器（前書き）

すいません、遅くなりました…

戦闘描写がががｏｒｚ

第１１話　神代の武器

～フェイト視点～

ビル街に到着すると、既に周囲一体にマサキさんの妨害入り結界が張ってあった。それを抜けると、一際高いビルの屋上で二人は既に対峙していた

私は、全力でその場所に向かおうとした時、無数の何かに襲われた

～時間を少し戻して、紅牙視点より～

「…着いた」

転移で一際高いビルに着地すると、結界を展開する。実は細かい構成はマサキ任せなのだが、紅牙はマサキの細工内容も知らない。そういった事はマサキに任せた方が良いと、紅牙も理解しているのである

『…塞臥、出てこい。【天】にそんなチャチな光学迷彩は通用せんぞ?』

『流石に光は【天】の領分か。夕方から用意して待っていたというのにな…』

避雷針の傍からプレシア…いや、塞臥が現れる。そして、その姿にマサキは驚愕する

『なっ…塞臥、その姿は…』

『俺が何時までもオムザックの弱点を残していると思ったか?』

プレシアの身体の各部には本来の黒衣の上に金色に近い黄色の鎧のようなもので覆われ、胸部には宝玉が輝いている

その姿はまるで、全身を覆い隠す八卦のデバイスとミッド式のバリアジャケットの中間のような状態である

『八卦のデバイスは全身を覆い隠す…それは本来は高過ぎる八卦の

デバイスの出力と反動から、自信の肉体を守るものである。耐爬辺りならばいざ知らず、貴様がそれを捨てるとは…気でも触れたか？』

『ククク…そうかもしれんな』

ゼオライマー以外の八卦のデバイスは次元連結システムが搭載されていない。それはつまり、戦闘中に宿主の急速な回復はできない…否、大出力の八卦のデバイスの戦闘状態の維持で、そんな魔力を回す余裕が無いのである

ましてや【雷】のオムザックは武装の威力の面ではゼオライマーの次に位置する。そのオムザックから宿主の安全を本来守る為の装甲を削る…マサキで無くとも塞臥を知る者ならば正気を疑うだろう

『確かに、プロトン・サンダーを乱用はできん…だが、これならば俺の力を１００％発揮できる！』

塞臥は右手で虚空を掴む。すると手に赤い柄が現れ、それを真横に一閃する

ヒュンヒュンヒュンヒュン…

「……っ！？」

二人の世界に入ってしまい、蚊帳の外になっていた紅牙は咄嗟に横に飛ぶ

バシィッ！！

直後、紅牙の居た場所は砕け散り、幾つか下の階までその衝撃が突き抜ける

『成る程…確かにそれは貴様の身体ではオムザックと同時に使えなかったからな。使える肉体を得たから増長したか、塞臥？』

「…どういう事、マサキ？」

『簡単な事だ、紅牙君…かつての俺はこの禁鞭とオムザックを同時に扱えなかったのさ』

塞臥は右手を前に出し、その長さ４ｍ程の赤い鞭…禁鞭を見せる

『これは宝貝と呼ばれる、旧き神代の時代の武器さ。宿主の気と魔力を食わせる事で力を発揮する…最も、修復できたのは禁鞭を始めごく小数のみだったがな…』

『そして宝貝は主を選ぶ。それまで誰も使えなかったが、禁鞭は塞臥を選んだ…しかし、ここで問題が発生した』

『悔しいが、俺は八卦衆の中では中途半端な力しか持たぬ。魔力は葎やロクフェルに劣り、体術も耐爬や祇鎗には劣る…そんな俺では、この禁鞭とオムザックの片方しか制御できなかった…』

塞臥の右手が震える

『だが、今の奴は肉体だけはオーバーSランクの魔導士だ。八卦のデバイスでも燃費の悪いオムザックを使いつつ、禁鞭を振るう余裕ができたのだろうな…しかし』

マサキの声に嘲りが混ざっていく

『貴様は八卦の人形の中でも知恵が回ると思ったのだがな。その宿主の間はいいが、次以降はそのレベルの肉体を見つけれなければ、自滅するのみだ…』

八卦のデバイスはその調整は困難だ。専用の施設を失っている為、設計者であるマサキ以外は弄る事すら困難なのだ

だが、塞臥は今回遂にそれを行った。オムザックの装甲を減らし、宿主の負担を軽減する事で、禁鞭を使用可能にしたのだが…

「…マサキ、装甲をあんまり減らさずに禁鞭は持たせられなかった

の？」

『オムザックは至近距離での使用を想定した結果、その装甲のみでプロトン・サンダーに耐える為だけに人型を捨て、さらに３ｍ程の大型の構造をしていた。その為に禁鞭を同時使用は多大な負担をかける為に片方は待機状態になるように設計されていたのだ。幸い、腕も無いから禁鞭を掴む手も無かったしな』

『ああ、だから次からは大変だろうな…【次があれば】、だがな』

『塞臥…何が言いたい？』

塞臥の感情に引っ張られたのか、プレシアは笑みを浮かべる。その凄絶な笑みは紅牙をも緊張させる

「…マサキ」

『ああ、俺達も行くぞ、紅牙！』

紅牙はキーホルダーを構える

「…滅びの力よ、冥王の鎧よ、その力を示せ…ゼオライマー、セットアップ」

白き光に包まれ、瞬時にゼオライマーのセットアップを終えると

塞臥は待っていたとばかりに、禁鞭を振り上げる

『さっきの言葉の意味、真実を知りたければ俺を倒してみせろ…行くぞ！！』

塞臥が禁鞭を降り下ろす

ヒュンヒュンヒュンヒュン…

今度は周囲一体に赤い鞭が舞い踊る。禁鞭が伸び、紅牙を包囲すると、無数の鞭打が襲いかかる

「…くっ！」

全包囲から来る攻撃をかわしていると、少し離れた位置より悲鳴があがる

『む…あの子はプレシア殿の…』

フェイトが無数の鞭に襲われている。塞臥が意図的に狙った訳では無いが、一度制御を外し目眩ましに使った部分の制御を一瞬で戻すには時間が足りなかった。

この場はさっさと撃墜してしまい、戦闘後に回収してもらおう、塞臥はそう割り切ったし、マサキもそう考えるしか無かった。お互いにフェイトに割く余裕は無かったのだが、一人だけは違った

「…フェイトっ！？」

『紅牙、何をする気だ！！』

紅牙はフェイトを守る為に無理矢理な転移を行う

そして紅牙は閃光に包まれ…

フェイトを突き飛ばし、身代わりに鞭打の嵐にその身をさらした

～フェイト視点～

赤い何かが迫って来たのに気付いた時には私は包囲されていた。
ビルを砕きながら迫るソレをまともに受けたらタダでは済まない、
でもかわす時間が私には残されていなかった

「…フェイトっ！？」

私が最近良く耳にする声と閃光と共にゼオライマーが現れ、私を
突き飛ばすまでは

「…えっ？」

私は赤い嵐のちょうど穴を通ったが…ゼオライマーには無数の赤
い鞭の嵐が叩きつけられ、装甲のあちこちが砕け散りながら遥か下
の地面に叩きつけられる

「マサキさんっ、大丈夫ですか！！」

あちらも茫然としているが、私は構わずに地上に降りて、マサキさんの所に駆け寄る

「しっかりしてください、マサキさ…え？」

そこで私は見てしまった。ゼオライマーの頭部パーツが砕け散り、額から一筋の血を流す人形のような綺麗な顔立ちの少年の顔が

「…あ」

『…全く、もう知らんぞ？』

「…ごめん、マサキ」

『過ぎた事は言っても仕方ない。まずは塞臥だ』

「…うん」

…完全に会話は私を置いてきぼりだけど、これだけは口にでてしまった

「やっぱり紅牙君だったんだ…」

「…ん、僕が【冥王】だよ」

私は自分で悲しげな表情をしているのが分かる。やっぱり紅牙君の口から直接教えて欲しかったな…

「教えて…くれなかったよね？」

「…ん。だって、聞かれなかったし」

私の表情が凍りつく。だが、紅牙君は構わずに続きの言葉を放つ

「…聞かれてもないのに、教えてくれなかったとか、言われても…その、困る」

「クスッ…そうだね。ごめんね、紅牙君」

紅牙君はコクリと頷くと、上空から降りてくる塞臥を見据える

「…フェイト、離れてて。塞臥は狙う気は無いみたいだけど、かえって危ないから」

『紅牙、向こうは待つ気は無いようだぞ？』

ヒュンヒュンヒュンヒュン…

私を離れさせる前に再び鞭の嵐がやってくる。それに対し、紅牙君は拳を向ける

「…舐めないで」

ゴバァッ！！

紅牙君の右拳より光が一気に放出される。戦艦の砲撃を容易く凌駕するその圧倒的な一撃は、禁鞭の攻撃を容易く蹴散らす

だが、紅牙君の一撃も威力は減衰されてしまい、塞臥さんの防御魔法であっさりと弾かれる。その壮絶な火力のぶつかり合いに、フェイトは唖然とするしか無かった

「…むう」

『あちらもこの小娘を遠慮してか、プロトン・サンダーを使わない。ならば今の内に掻い潜って一撃を叩き込むまでだ、やるぞ紅牙よ！』

「…任せて」

紅牙君は虚空より異形の幅広の刃の槍を取り出す

『なっ、それはマサトの愛用していた槍ではないか！？』

『覚えていたか、塞臥。ならば見せてやる…かつての冥王の戦いをなっ！！』

「…ん、行く」

紅牙君は塞臥さんの動揺の隙に空を駆けた

第１１話　神代の武器（後書き）

今回、ようやく塞臥の固有武装が明らかになりました。バレてた方には多分今更な話ですがｗ

取り敢えず、禁鞭単体の性能は一応非殺傷設定ができるだけで、威力も射程もそのままです

この武器は、ジャンプに昔連載していた封神演義に登場する、殷の大師であり主人公の太公望にとってのライバルキャラである聞仲の宝貝（読みはパオペエ）です。黄飛虎との友情や、不器用な生き様…未だに作者のジャンプ漫画では好きなキャラで、上位にランクインしています

塞臥は仕様変更により、外見プレシアでもコイツを持たせても良いようなキャラに化けたので、今回は禁鞭を採用。だけどここで問題が…

「ここでソニックフォームになれないフェイトって禁鞭振り回すだけで足手まといじゃね？」

……いや、確かにそうだけどさｏｒｚお陰で幕間に回収予定だった話が出来て、奴が本編に再登場しやがりますがねｗ

後、塞臥がオムザックを軽装化してますが、イメージはプレシアが聖衣（クロス）を装備している感じです。イメージ的にはチャンピオン連載のロストキャンバスのパンドラ様が近いのかな？いや、あんなに若々しく無いかｎ（脳天に落雷が入りました、続き（ｒｙ

…取り敢えず、プレシアさんにＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされる前に逃げます、動ける内に…

では皆さん、また次回の後書きでお会いしましょう！

第１２話　乱入者（前書き）

どうしてこうなった…

第１２話　乱入者

～リンディ視点～

『正体が解ったか。なら後は用意をして捕縛するだけだな！』

『クロノ…お前って以外と馬鹿だよな』

『何だとこのフェレットモドキ！』

『五月蝿い、この三流執務官っ！！』

「あ～はいはい両方黙って…真面目に考えてどうやってあの子を弱らすの、暴れられただけでこっちは壊滅するに決まってるよ。ユーノもこう言いたかったんでしょ？」

『あ…うん』

クロノとユーノ、さらにエィミィが加わった通信を聞きながらリンディは頭を抱える

「クロノ、そんなに元気なら現場に出なさい」

『言われなくても！！』

クロノはバリアジャケットを展開し、転移していく

「提督、行かせて良かったのですか？」

「ええ、下手に抑えるよりも、身体で覚えた方が早く学習するでしょうし…それに現場なら、フェイトちゃんが止めてくれるでしょうしね」

リンディはなのはに通信を繋ぐ

「なのはちゃん、…なのはちゃん？」

『え？あ、はい！何ですかっ！！』

「大丈夫、ボーッとしてたけど…もしかして、びっくりした？」

『ええ、まぁ…』

珍しく歯切れの悪い言葉を言うなのはに怪訝な顔をするも、すぐに気を取り直す

「貴方の役目は後方待機だけど…もしもの時は、フェイトちゃんをお願いね？」

『…はい』

どこか表情が優れない。何かあったのだろうか？

そんなリンディの考えは見事に的中していた

～なのは視点～

正直、そんな気はしていた。だけど、頭がそれを理解する事を拒否していた

無意識に治療に回せるくらいに膨大な魔力

その圧倒的な身体能力

この2つを繋げたら、あの少年にしか行き着かなかった

あの子…紅牙君は今は私の家にいる。お父さんもお母さんも、紅牙君にかかりきりになっている。お姉ちゃんもべったりだし、お兄ちゃんも、気が付いたら紅牙君の部屋…前々から用意していた空き部屋に居たりする

そして気が付けばフェイトちゃんも…

私と紅牙君は全く違う。あの河川敷での会話で紅牙君との価値観の違いを思い知った

私は、嫉妬しているのかもしれない。フェイトちゃんを庇いながらも、あの赤い鞭の嵐を容易く吹き飛ばしたあの力を

『…マスター？』

「…大丈夫だよ、魔力も大分回復してるし、何発か撃ちながらフェイトちゃんを連れて逃げるくらいならできるよ」

『そうですか…無理をなさらないでください』

レイジングハートにまで心配されちゃった…まだまだだなぁ、となのはは溜め息をつきながら戦場に意識を戻す

その視線にはフェイトへの心配と…自分よりも遥か先を行く紅牙への嫉妬を織り交ぜながら

～クロノ視点～

正直な所、僕は奴が気に入らない

危険なロストロギアを躊躇いなく使い、その圧倒的な力を当たり前かのように振りかざすその姿が

そして僕にできた義妹の心に奴が入り込んでいたことも…だが、これはあの子を助けてくれた事もあるし、帳消しにしてもいい

でもやっぱり一番はあの時の言葉

…つまらない

一方的に攻撃され、さらに砲撃の雨を耐え抜いた矢先に、眼前に現れた奴の言葉…木原マサキのでは無く、四季紅牙の言葉が許せなかった

確かに僕は彼ほど超越した力は無い。だが、奴に僕の努力すら否定する資格は無い！

だから僕は奴に一泡吹かせてやる。これは最早、執務官じゃない…僕個人の意地の問題だ

「今に見ていろ…」

クロノは暗躍する。紅牙への復讐を誓いながら

～ザフィーラ視点～

俺は今、紅牙の戦いを見届ける為にビル街から監視している

流石にこんな魔力の流れを感じてしまえば、誰かが斥候に出なくてはならない。仮に誰が戦っていてもだ

「紅牙…お前は主にとっての光なのだ…死ぬなよ…」

あくまで推論だが…紅牙が死ねば、主の…八神はやての心は多分壊れる。それは主の衰弱死を意味し、我らにとっての破滅でもある

…もしもの時は、命に代えても割って入る、そして救い出す

「お前は、俺を恨むかもな…」

だが、悪いが俺は躊躇わないし後悔はしない。何故ならば俺は…主はやてに仕える盾の守護獣なのだから

～紅牙視点～

「…キリが無い」

ヒュンヒュンヒュンヒュン…

周囲は完全に禁鞭に覆い尽くされていた。その為にフェイトを逃がせなくなり、紅牙は防戦を強いられていた

「このままじゃ…」

フェイトの表情は優れない。明らかに負傷している紅牙に任せなきゃいけない状況に歯痒い思いを感じていた。そんな中、バルディッシュに追加された機能を思い出す

「そうだ！紅牙君、私は自分で脱出するからもう少しだけ耐えてっ

！」

「…ん」

左手に魔力を収束させ薙ぎ払う。掻い潜ってきた鞭を右手の槍で打ち払う。そんな紅牙の姿を見ながらフェイトはバルディッシュのカートリッジをロードしていく

『そんな時間、与えると思ったか！！』

禁鞭の勢いは増し、遂には全包囲より攻撃が迫る

「…ぐっ」

『紅牙、離脱しろっ！』

「…駄目、フェイトは…僕が守らなきゃ…」

バギャッ！！

禁鞭が肩に当たり装甲に罅が入る

「紅牙君…」

「…安心して。今この場だけは…僕が君を、守る…だって、僕は…」

ゼオライマーに膨大な魔力が集まっていく

『紅牙が今から穴を開ける。小娘、その魔力を全て逃げに使え』

「…はい」

自分がいれば、それだけで紅牙は防戦を強いられる。だからフェイトは決断する、紅牙の為に一時撤退する事を

「…僕は…【冥王】なんだからっ！！」

槍を地面に突き立て、両手を組み合わせて魔力を一点に収束させて、ただそれを解き放つ

轟ッ！！

紅牙は自身の足が地面にめり込みながらも砲撃を放った。それは全てを吹き飛ばし、上空へと飛んでいく

「…フェイトっ！」

「また後でね、紅牙君！！」

ソニックムーブ

フェイトが持つ、高速戦闘の為の魔法。それをカートリッジをロードまでして起動し、紅牙が開けた穴を通過していく

そしてフェイトは目を見開く。紅牙の背後より迫る禁鞭が見えたのだ

「紅牙君！！」

高速移動して離れてしまった自分では間に合わず、声では遅い。紅牙も気付いたが、回避はもう間に合わない

禁鞭は剥き出しの紅牙の頭を叩き潰そうとして

謎の一撃に弾かれた

『な、何だとっ！！』

「いけませんねぇ…大の大人が子供にこんな武器を使うなんて」

ビルから飛び出した黒い影…桧山明臣は笑顔を絶やさず紅牙に並び立つ

「…桧山…さん」

「驚きましたよ。待ち合わせ場所に向かったら、繁華街が急に無人になったのですから…まぁ詳しい事は後で聞きます。今は…」

ゾクッ

紅牙は本能的に後ろへ飛び、桧山と距離を取る。桧山の表情は変わらない、だが決定的に先程とは違う…その僅かに浮かぶ笑みには…人を容易く殺せるレベルの殺気がこめられていた

「私の息子に手を出してくれたお礼をしなければなりませんね…そうそう、そちらに隠れてる方もいらしたらどうですか?」

桧山が拾った小石を音速に近い速度で瓦礫の影に投げると、それは槍によって弾かれる

「まさか気付かれるとはな…」

「そこまで闘志を剥き出しにして気付かないとでも?」

そこにはベルカの騎士、ゼストがいた

『葎、手出し無用と言ったはずだ!!』

『ああ、だから観戦していたのだがな…そちらの御仁に気付かれてしまったよ』

そんなやり取りの中、紅牙は桧山に話しかける

「…桧山さん」

「…何ですか、紅牙君」

その他人行儀な呼び方に内心傷つきながらも桧山は視線を答える

「…ごめんなさい、あっちの人、塞臥は僕が倒す。…僕が倒さなきゃいけないんだ」

すると桧山はこちらを見る。殺気は全く感じられない

「危ないですよ?」

「…構わない。これは僕が越えなきゃいけない戦いだから」

桧山は溜め息をつく

「それじゃ私が格好が付きませんが…仕方ありませんね。ならば、私はあちらの方を相手しましょう」

「…いいの？」

「構いません。下手に横槍入れられるよりは、私が相手をした方が確実ですし」

「…でも…」

「大丈夫ですよ」

桧山は軽く拳を振るう。拳の距離より僅かに離れた瓦礫が砕け散る

「私も、これでも喧嘩には自信があるのです」

「…わかった、でも無理はしないで」

紅牙は桧山から視線を外し、再び塞臥と対峙する

「…お待たせ」

『さぁ、反撃開始だ…覚悟しろ塞臥！！』

『いいだろう、その力、俺に見せてみろ！！』

そして、魔力砲と禁鞭が交差する。周囲に破壊の嵐が吹き荒れた

～ゼスト視点～

「我が名はゼスト…一介の騎士だ」

「私は桧山明臣…あの子の父で、ただのヤクザ者です」

【冥王】の父親を名乗る男、桧山明臣…この男の存在は嬉しい誤算だ

「まさか傍観のみのはずが、こんな手練れと戦えるとはな」

ゼストは槍を構える。そしてローズセラヴィーをセットアップして地に足を付ける

『ゼスト殿?』

「すまんな、葎。俺はどうしてもこの御仁と一騎打ちをしたいのだよ」

デバイスを持たず、さらに無手の男に空から仕掛ける…いくら何でもそれは、騎士の誇りが許さなかった。…それに

「この世界は独自の戦闘技術があると聞く、俺はそれを戦いたかったのだ」

「そうですか。ならばこちらも魔法とやらの力…見せてもらいましょうか!!」

ゼストは槍を突き込み、桧山はそれをかわしながら拳を振るう

史上最強の場外乱闘が、始まった

第１２話　乱入者（後書き）

何故か最強親父決定戦が始まりました。どこをどう間違えたんだ…
やっぱり熱中症が悪いんか…

作者にはコイツ等をまとめて書く技量はありませんので、話ごとに分けて書くと思われます。最悪、親父組は幕間送りですがｗ

では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

第１３話　塞臥の真意（前書き）

約２ヶ月放置…スランプ続いたとはいえ、これは酷い

内容も詰め込み過ぎた感がｏｒｚ

第１３話　塞臥の真意

「…はあぁぁぁっ！」

ギィン！ギィン！　ゴバァッ！！

左右から迫り来る禁鞭を弾きながらの砲撃。だが、塞臥もこれは読んでいるようで、禁鞭による迎撃で威力をある程度殺してから、防御魔法で容易く弾く。だが、その隙に紅牙は距離を詰めていく

この二人の戦いは距離が重要である。離れていれば塞臥が有利、近ければ紅牙が有利なのである

塞臥には禁鞭とプロトン・サンダーがある。特に禁鞭は距離があるほど紅牙の砲撃を相殺できる回数が増えるだけに、塞臥はなるべく距離を取りたい

逆に紅牙は、単純な火力では大幅に上回っているが、周囲の桧山やフェイト（管理局の他の連中は数に入れていない）を巻き込みかねないので、牽制程度の砲撃しか放てず、それでは禁鞭と塞臥の防御を貫けない。だから紅牙は接近を繰り返していく…

そして、その距離はジワジワと縮まりつつあった

『くっ…とんでもない速度だな。こんな速度で戦う【冥王】は初めて見たぞっ！』

『当然だ塞臥っ！コイツは歴代最強の…【冥王】なのだからな！！』

マサキの啖呵に塞臥の表情が歪む

『木原マサキ…この少年が本当に全てを終わらせてくれるのか？』

「…どういう事？」

紅牙が動きを止めると、塞臥も禁鞭を止めた。

『君が我々をこの終わらぬ宿命から…遥か昔より続く【冥王】の悲劇の物語から救ってくれる存在なのか…この戦いはその見極めなのだよ』

『紅牙、耳を貸すな。奴等は敵だ…ただ叩き潰せばいい』

『木原マサキ、その様子だと紅牙君にはまだ話してないみたいだな。初代冥王、秋津マサトと二代目冥王、秋津幽羅が辿った末路を…氷室美久が選んだ結末を！！』

『塞臥…まさかお前はっ！』

マサキの声に焦りが混じる。思えば初めてかもしれない、マサキがここまで取り乱すのは

『ああ…お前が鉄甲龍要塞をメイオウ攻撃とそれに伴う次元震で消す前に、何とか間に合ってな…お前が、あんな選択肢を選んだ理由も、理解している』

塞臥、裏切りの八卦衆とも呼ばれる男だと、敵にも味方にも男だとマサキからは聞いていたが…

『つまり貴様は、全てを知った上で道化になったのか、塞臥…お前は…』

『ああ、俺達八卦衆はコンプレックスを宿して産まれる用に作られた。何かあった時に仲間同士で食い潰すようにな』

塞臥は空を見上げる

『そして俺は貴様に野心を植え付けられた。だが、その野心に駆られ暴走した俺を、友が…マサトが、祇鎗が救ってくれた。だからこそ、今度は俺がアイツ等を救う番だ。ならば…喜んで道化にもなろう、そうは思わないか、木原マサキよ?』

『…その為にロクフェルを突き放し、ただ一人この永き時をさ迷い続けたというのか』

『だからそれは貴様も同じだろう。終わりの無い、破滅の物語をなぞり続ける哀しき王よ』

「……」

紅牙は会話に参加せずただ聞くだけだった。下手に口を挟めない、それだけの雰囲気が場にあった

そして、その静寂を打ち壊すのもまた、同じく永き時を生きたものだった

『…ほう、では貴様が幽羅様を壊した訳では無いということか』

「…っ！！」

バギィッ！！

ゼオライマーの砕けた肩部から宝玉が覗く。声の主はさらに捲し立てる

『ならば我らが貴様を憎み生きた悠久の時は、全て貴様の偽りから生まれた…そういう事だったのか、木原マサキィッ！？』

『耐爬、お前まだ統合されていなかったのか』

『あぁ、俺もこの【冥王】が気がかりでな…お陰で聞き捨てならない物まで知る事になったがな』

塞臥は溜め息をつく。流石にこれは予想外だったようだ

『まぁ祇鎗やロクフェルに聞かれなかっただけマシか。この戦いが終われば結果はどうあれ教えてやる、暫く待っていろ』

『分かった。ならばもう一つの用件だ…四季紅牙よ』

「…何？」

紅牙は自分の肩を見ながら会話する。端から見ればかなりシュールな光景である

『この数ヵ月、貴様を見てきた。結論から言わせて貰うと、俺はお前は【冥王】になるべきでは無い、そう思う』

「…何故」

『耐爬、貴様さっきから好き放題言いおって…！』

「…マサキ、ちょっと黙ってて」

『なっ、紅牙、貴様…！』

マサキを一時精神の奥に押し込み、お互いに会話できない状態にしてから再び肩の宝玉を見る

「…続けて」

『…ここまでマサキとゼオライマーを扱えて、何故彼が相応しく無いか、俺も興味が出てきたぞ、耐爬』

塞臥も興味がわいたようで、こちらを見ている

『塞臥、少し違う。【冥王】としての適性そのものは、マサキやマサト陛下、幽羅様と比較しても遥かに上だ。だが俺は言いたいのはそんな事では無い…優しすぎるのだ、この少年は』

『……』

『俺も見ていて不憫に思ったさ。親の愛を知らずに育った故に、この少年には愛という感情が欠落している。だからこそ、見返りを求めず、自己への愛も無いから傷つく事を恐れない。少なくとも、この少年には時間が必要だ。だから…』

「…大丈夫だよ、耐爬」

愛に生き、愛に殉じた八卦衆の一人耐爬。彼の言葉を遮り紅牙は口を再び開く

「…僕は、以前はただの人形だった。でも皆が…僕に心をくれた、アイツ等に抗える強い心を皆がくれた…だから…」

紅牙の目に強い意志が宿る

「…今度は僕が皆を守る。それに、マサキがどんな哀しい過去を背負っているのかは知らない。無理に聞く気も無い…でも」

話してくれないだろうし、と言いながら紅牙は拳を握りしめる

「…その哀しい物語が繰り返され続けたのなら、僕の代で終わらせてみせる。それが…」

耐爬を、そして塞臥を見据え

「…僕が、四季紅牙がマサキに恩返しできる、唯一の事だから」

その言葉に、塞臥は目を見開き、耐爬は宝玉を明滅させた

『…やはり、私は間違っていなかった』

塞臥は再び禁鞭を強く握り締める。そして耐爬は…

『木原マサキへの恩を返す、か…』

「…うん、こんな事本人には言えないけどね」

ほんの僅かであるが、笑みを浮かべながら紅牙は話す

『…私が戦ったあの少年とは見違える程に成長したのだな』

「…あ…」

ゼオライマーの、肩にあった耐爬の、【風】のランスターの宝玉が光を失っていく

『ならば私は、君がどのような王になるのか、見届けさせて貰おう…それと』

「…っ！ぐ、あ…！？」

急な頭痛と共にわずかによろめく、がすぐに立ち直ると、紅牙は目を見開く。その手には、一挺の銃があった

「…これは」

『我が主、ティーダ・ランスターの最期の想いと形見だ。機会があれば、彼の妹君に渡してやってくれ…では、な…』

そして耐爬は消えた。ティーダ・ランスターの記憶の一部とデバイスを遺して

『…ようやくか、耐爬の奴は…消えたようだな』

そして圧迫から解放されたマサキが不機嫌極まりない声と共に出てくる

『（しかしゼオライマーに完全に【風】が統合されたか。アイツ、何を吹き込んだのだ?…まぁ、後で聞けば分かる話か）』

「…マサキ、やれる?」

『貴様が押し込んだのだろうが!…まぁいい、鬱憤は塞臥、貴様で晴らしてやろう』

そのマサキの姿に、塞臥は笑みを浮かべる

『マサキ、君は本当に紅牙君を信頼しているのだな…だからこそ、任せられる…さぁ紅牙君、再開しようか…君への試練をっ！』

塞臥は再び禁鞭を振るう。だがその顔には笑みがあった。彼には既に確信があった、彼こそがこの悲劇を終わらせてくれると

そう信じ、塞臥はプロトン・サンダーのチャージを開始した

第１３話　塞臥の真意（後書き）

お久し振りです。仕事辞めて、資格取りに講習行く用意しながらバイト探したりと相変わらず忙しない生活のせいで更新放置してました。申し訳ない

…と言っても、この話は先月には大体できていました。そして気に入らないから書き直しを繰り返してましたが、これ以上続けても劣化しかしない気がしたので投稿しました。お陰で再登場した耐爬の話がまた一話で消化…すまん、まだ出番あるから勘弁してくれ

取り敢えず塞臥戦はやりたい会話イベントは全部終わらせたので、次で大体決着付ける予定です。最強親父決定戦は幕間送りですね。奴等を派手にやると、こちらが地味に見えるｗ

では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

１４話　獅龍の槍と冥王の覚醒（前書き）

一週間は無理だった…流石に間延びしたからって２つを１つにするのは無理でしたｏｒｚ

１４話　獅龍の槍と冥王の覚醒

～紅牙視点～

「…身体が、軽い」

それは恐らく間違い等では無いだろう。何故ならば

ヒュンヒュンヒュンヒュン…

『何なのだ、この有り様は…』

今の紅牙は禁鞭の防御を行わず、かといって砲撃も行わない。ただ、塞臥の元へと突撃しているだけだ…音速を鼻で笑うかのような速度で前後を含む上下左右への、不規則な超高速で

『ハハハ、耐爬が手を貸しただけでそこまでの力を使えるか、それでこそ【冥王】に相応しい…』

塞臥は自身が追い込まれているにも関わらず、笑みを深める。塞臥にとってはこれこそが望みだったのだから

『【風】と完全に同期した事でゼオライマーの運動性が向上したようだな…』

「…ん、避けるの楽だし…それに」

ダンッ！

紅牙は空中を…正確には足元に展開した魔方陣を踏みつけ、急激な方向転換、さらに加速していく

『さぁ…もっと見せてくれ、君の力をっ！！』

～フェイト視点～

暫く二人が話していたと思ったら、急に気配が増えたり減ったり

していました。そして、気配が減った瞬間…さらに紅牙の力が増しました。あれ以上強くなるんだ…と、軽く目眩がしたら、紅牙君がとんでもないスピードで塞臥さんに接近していきます

塞臥さんも禁鞭で迎撃していますが、紅牙君のあまりの速さについていけず、一度も弾かれてすらいません
そして何かを足場にしているのか、急激な方向転換を…前後も含めた上下左右全ての方向に出鱈目に駆け回り、塞臥さんに接近していく

そして、肉薄した紅牙君は、その手に持つ異形の槍を振り降ろした

～クロノ視点～

「…畜生」

理不尽だ。何故アイツだけがあんなに出鱈目に強くなるんだ

僕は執務官になる為に努力を惜しまなかった。リーゼ達に散々しごかれて、ようやく今の力を手に入れた

なのに、奴はロストロギア…それ一つであんな理不尽な力を振りかざしている。確かに奴にはレアスキルもあるようだし、才能もあ

るんだろう

…僕は、奴に嫉妬しているんだろう。なのはやフェイトにすら頼らなければならない状況の僕達管理局に比べて、彼はあのプレシア・テスタロッサ…いや、塞臥と言ったか。八卦のデバイスを持つオーバーSランクを圧倒している。悔しいけど、到底届かない世界だ

…ならばどうすればいいか、簡単だ。奴を高みから引き摺り降ろせばいい…

…覚悟しろ

その呟きと共に奴は手に持つ槍を振り降ろした

～紅牙視点～

ギィンッ！！

『ぐっ！？』

金属音のような音が響くが、禁鞭はあくまで鞭だ。それで攻撃を受けるならば、柄を使うか、両手を使う必要が出てくる。塞臥は表情を歪めながらも後者を選択した。だが、塞臥にとっては、それは誤った選択だったと言える

「紅牙のみと油断したか、塞臥っ！？」

『木原マサキだとっ！…まさかっ！？』

「もう遅いっ！！」

格闘戦こそ紅牙の方が上だが、この槍での戦闘における技量はマサキの方が遥かに上回る。だから紅牙は接近に徹し、一撃目を受けさせると同時にマサキと入れ替わる

そして、マサキはつばぜり合いの状態から槍を真ん中で分割、短槍と剣に分離させ、塞臥に斬りかかる

「獅龍…神威乱舞っ！！」

マサキは音速を遥かに超越した速度で無数の斬撃を放つ。それは、まさに白銀の嵐、そしてこれは…秋津マサトが本来使用していた技である

斬撃の嵐は容赦無く塞臥を飲み込み、切り裂く。幸い、非殺傷設定にしている為に致命傷こそ無いが、全身の各部位を防御できるように装備されていたオムザックの装甲の大半を破壊していく

「終わりだっ！」

『がはっ！？』

最後の一撃…柄で胸にある宝玉を真っ直ぐに突き込む。その一撃により、塞臥はビルに突っ込み、そのビルは崩れていき、その姿は見えなくなる

「…相変わらず無茶苦茶するね」

『フン…俺の使う紛い物とはいえ、貴様は初見で全部受けきっただろうが』

「…単に速いだけなら、桧山さんの右ストレートの方が速いし、重いから…それに、本家はもっと凄いんでしょ？」

『ああ、その本家を受けてきた奴だ。急所を全て外しただけでも立派だな』

そしてマサキはゼオライマーのチャージを開始する

「…マサキ？」

『禁鞭が通用しない。近接戦は論外…ならば奴に残された手段は一つ…原子核破砕砲、プロトン・サンダーのみ。ならばこちらも最大の攻撃力で迎え撃つまでだ』

「…でも、下には桧山さんやフェイトが…それに、ザフィーラもいる」

マサキはそれに気付き、座標を確認し頭を抱える

『チッ、塞臥のチャージを終えるまでに地表から離れるぞ、紅牙っ！！』

『させると思ったかっ！！』

マサキが上へ飛ぶように指示をするや否や、瓦礫の山から飛び出して、一気に接近してくる。そして塞臥の前面には【雷】の文字…チャージは完了していると見ていい

『さあ、君に選んでもらおうか…ここで終わるかっ！！それとも彼等を犠牲に生き延びるかをなぁっ！！』

『しまった！もう…』

塞臥を中心にエネルギーが集束している。これがプロトン・サンダーなんだろう…これが発動するだけで、下で戦っている桧山さんと、少し離れてみているフェイトが犠牲になる…ならば

『紅牙君っ、私は何とかするから、気にしないでっ！！』

フェイトの悲鳴混じりの声。いくら彼女でも、逃げる事は間に合わないだろう

「こちらは問題ありません、お気に召さらず」

下には肩から血を流す桧山と、槍を杖代わりにして対峙するゼストを守るように、他の二人の魔導士…気配からして残りの【山】と【地】であろう二人が全力で防御魔法を用意しているが…恐らく間に合わない。バリアジャケットの無い桧山は大怪我で済まないかもしれない

…ならば

「…正体もバレたんだ。出し惜しみはしない」

紅牙は切り札、聖人の力を最大で解放する

「…があああああああっ！！」

それに呼応し、ゼオライマーが…次元連結システムが、悲鳴をあげる程の速度でエネルギーを増大させていく

『なぁっ！？』

流石に捨て身だった塞臥も、マサトやマサキの操るゼオライマーを遥かに逸脱したその力に一瞬固まる、そしてその一瞬が命取りとなった

ガシィッ！！

紅牙は瞬時に塞臥に背後に移動する。そして、両肩を掴み、右足を背中に当てる。直後、

ゴゥッ！！

『がふっ！』

完全に置き去りにされたソニックブームが塞臥を襲う、それによりさらに装甲を剥ぎ取られた直後

二人は閃光に包まれた

～塞臥視点～

俺は笑っていた。借り物の身体も傷だらけ（非殺傷設定の為あくまで傷は小さいが）、オムザックの装甲も既に七割は破壊された。恐らくプロトン・サンダー一発撃てればいい方だろう

あの少年は、歴代の【冥王】から見ても、正直異常だ。まるでゼオライマーが彼の為に作られたのかと錯覚する程に…

そして、彼の全力を見て納得した。そう、この連鎖する物語は彼を待っていたのだ、と。そして彼がこの物語を終局に導くのだと

今、頭越しに見える彼の前面に【天】の文字が輝いている。そう、それはメイオウ攻撃の発動を意味する。だが、このプレシア・テスタロッサの肉体にダメージは無く、むしろ彼が傷ついている

『まさかっ!?』

『こんな芸当ができるとはな…しかし、いくらなんでも無茶をし過ぎだ、紅牙』

「…ん、まだ大丈夫」

信じられないが…今、彼はメイオウ攻撃を内側に…自分に向けて発動しているのだ

『分からんか、塞臥。次元連結システムのちょっとした応用だ。無限にエネルギーを汲み出せるならば、無限に取り込む事もできる。メイオウ攻撃を触媒にして貴様のプロトン・サンダーもろともにエネルギーを取り込んでいるのだ…最も、並の【冥王】が使えば、メイオウ攻撃とプロトン・サンダーのエネルギーを制御できずに自滅するだろうな』

「……」

紅牙君は制御にかかりきりか…ならば、今がチャンスだ

『…マサキ、これでこの物語は終わる。これでようやく、マサト達も解放される』

『塞臥、貴様、そこまで…だが、この連鎖を終える事等…』

『マサキ、お前の憎まれ役も終わりだ。彼ならば最後の試練だって乗り越えてくれる。その為の剣もある、だからお前にできる事は…彼を、その時まで守り抜く事だ』

『フン、わかっている。こんなチャンス、もう二度と無いだろう事もな』

『ならいいさ…これで…』

光は徐々に弱まっていく…

そして、光が消えると共に、【雷】のオムザックは砕け散り、塞臥は地面へと投げ出された

～リンディ視点～

「どーします？生きてた計測器やセンサーの大半がおシャカですけど…」

「理不尽よ…」

前回盛大に壊されてしまい次こそはと、用意していた新型の計測器が軒並み破壊されている。どうせならエラーで機能停止してくれた方が良かった。それならば再起動で済むし、損傷だって軽微だからだ

だが、結果は全滅。性能に拘らず、信頼性で選ぶべきだったと後悔している

「提督、これ…費用で落ちますかねぇ…」

多分、落ちない。だって戦闘に参加したのはフェイトちゃんのみ、それも見ているだけって言う有り様。それを横から観察して機器を壊している。アースラは戦闘に全く参加していないし、乗組員の給料の天引きすらあり得る

唯一の収穫は【冥王】の身元が分かった事。これで彼から情報が取れるし、あわよくば協力までこぎ付ける

リンディは打算を働かせる。ただ彼女にとっての誤算は…

その場に保護者がいた事、それにつきる。そして、この後にアースラスタッフは地獄を見る事になる

～フェイト視点～

二人を中心に光が、それも目も開けれない程の光に包まれると、
そこからとてつもない…次元震すら生ぬるい程の魔力が集束する

怖い、身体が震えている。恐怖で足が動かない…と同時に先日の
あの時の事を思い出してしまい、悲鳴をあげそうになるのを堪える。
何故ならば…

「紅牙君が、いるから…」

そう、あの光は彼の魔力光…果てしなく純粋な白銀の光、それを
理解すると幾度と助けてくれたその姿を思い出し、いつの間にか身
体の震えも消え、恐怖も無くなっていた

そして光は小さくなると共に地上に降りていき

光が消えて、母の姿が地面に崩れ落ちたと共に私は駆け出した

１４話　獅龍の槍と冥王の覚醒（後書き）

最近、全く公約が守れません。某政党のようになりたくは無いのに…ｏｒｚ

取り敢えず塞臥戦は（無理矢理）決着。本来は、獅龍神威乱舞発動辺りで一話、決着で一話でしたが長過ぎたので一話に。削るのがどれだけ大変か分かりました。そして、どれだけ虫食いになるのかを…

そして今回、遂に紅牙が本気でゼオライマーを使いました。聖人の力を解放状態ならば、ゼオライマー側が悲鳴をあげるレベルにまで成長してました…お陰で、これからマサキはゼオライマーを紅牙に追い付けるように調整する日々が待っています。頑張れマサキｗ！

次で塞臥編は終了。これが終わってからの日常と、色んな意味で困っている最強親父決定戦が待っています。コイツ等、強すぎるんだよ…ＳｔＳなのはでも桧山がアームドデバイス持ったら一方的にやられる光景しか見えない…

次は確約こそできませんが、なるべく早く書けるよう、頑張りたいと思います

では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

第１５話　語られる真実（前書き）

すいません、遅いってレベルじゃないくらい遅れました…言い訳は後書きにて

第１５話　語られる真実

「お母さんっ！！」

紅牙君とお母さん…いや、塞臥さんの元へ駆け寄ると、紅牙君はバリアジャケットを解除して肩で息をしていた

『全く…無茶をするからこうなるのだ…まぁ貴様で無ければ出来ぬ芸当だったから仕方ないと言えば仕方ないのだが…』

「…ん、…だったら、大丈、夫…まだ、動けるし…」

その姿を見て、地面に仰向けに倒れていた塞臥さんが笑う

『見事です、新たな冥王、四季紅牙君。これで、俺達の宿命は最終段階へと向かう、感謝する』

その顔はお母さんのものだけど、何かをやり遂げた、そんな雰囲気が塞臥さんから感じられて、私は何も言えなくなってしまう。するとそこに、紅牙君が桧山さんと呼んだ人と、その桧山さんと戦っていた騎士が二人の女性に支えられながらやってきた

『…来たか、葎、祇鎗…そして…』

塞臥さんは騎士の人を支える女性を見てさらに笑みを深める

『…ロクフェル。お前達にも散々迷惑をかけてしまったな、すまなかった』

塞臥さんが謝罪する。それに桧山さんを支える女性から、男の人の怒りのこもった声が響く

『何故俺達に何も話さなかった！お前は何を知ったのだっ！！何故、ロクフェルを置いて独りで…何と戦っていたのだ…！』

祇鎗さんの声も最後は震えている。相談してくれなかった事に怒っているんだと思う

『祇鎗、俺が戦っていたのはこのふざけた茶番とこの終わらない運命だ…だが、今回が最後だと、確信できた。そして、俺の役目は終わった…後は、僅かな時を待つだけだ』

塞臥さんは紅牙君…いや、恐らくマサキさんを見る。けどマサキさんは沈黙したままだ

すると、騎士の人から若い男の声が発せられる

『つまり、貴様の度々の裏切り、単独行動はこの時の為の布石だった…だが、俺には何故貴様がこんな事をしたのかがわからん』

『塞臥、貴方は…』

塞臥さんは祇鎗、葎、ロクフェルと呼んだ三人を見て、マサキさんを見る

『…話すぞ。恨むなよ、木原マサキ』

『フンッ、勝手にするがいいさ』

塞臥さんは目を閉じて語り始めた

『俺が知ったのは、データベースから閲覧に成功した、幽羅様の最期とマサキの暴走の理由だよ』

『おい、幽羅っ！返事をしろ、幽羅ぁっ！！』

マサキの絶叫が響く。マサトの死後、ゼオライマーを使ったのは幽羅、我等が守る姫君であり、マサトの妹だった彼女しかゼオライマーを使う事が出来なかった

だが、マサトが冥王に選ばれたのにはちゃんとした理由がある。ゼオライマーは宿主を選ぶ…そして絶大な力を引き換えに宿主の生命力を蝕んでいく

度重なる古代ベルカの国々の侵略に対抗する為に、幾度も試作型のゼオライマーを使ったマサトの身体は着実に崩壊に向かっていった。そして、マサトは若くしてその命を落とす事になった

「…それって！？」

私は思わず紅牙君を見る

『心配するな、コイツは聖人の力を宿している。それに加え、マサトを遥かに上回る適性を持つ。それに俺も永い時の中で改良はしている。だからコイツがゼオライマーに蝕まれる心配は無い』

私がホッとしたの見て、塞臥さんは話を再開する

マサトの死後、多くの国々が攻めてきた。それに我等八卦衆はかかりきりになり、中央への警戒が疎かになっていた

そこを年寄り共は利用して、内通し一気に国を崩そうとした。それに対抗する為に幽羅様はゼオライマーを使い、亡くなられた

『…なんという…』

ロクフェルさんが呆然とし

『幽羅様…申し訳ありません…』

震えた声で葎さんが呟き

『……っ！！』

祇鎗さんは怒りの余りに言葉も出なかった

そして、幽羅様が亡くなられた以上、実権を握るのは元老院の年寄り共だ。奴等は幽羅様の亡骸を改造し、擬似的なマサキの依り代

にした。さらに奴等は…新たな冥王を作る事を要求した

「マサキ様、新たな依り代を」

「次はそのゼオライマーに耐えれるような逸品をね」

「その使えない人形は長くは保ちません。急いで貰いたいものです」

「顔だけならば娼婦でも良いのです。それに死体では面白味もありませんしな」

直後、年寄りの内一番近くで幽羅様の身体に触れようとした者の首が飛んだ

『俺は…』

「ひっ、ひぃぃぃぃっ！！」

無造作に首をはねながらマサキは…感情を露にし、その怒りをぶちまけた

『俺はこんなゴミの為にマサトを！美久を！幽羅を犠牲にしたのかっ！！俺は…俺はっ！！』

ゼオライマーの暴走する魔力によって城が…マサト達が必死に守り、作り上げた世界が崩壊していく

『お前達が世界を守り、死んだとしても残るのは…こんなゴミだらけだ…』

マサキは老人達の死体を見下ろしながら、エネルギーのチャージを開始する

『マサト、美久、幽羅…それに八卦達よ…すまんな、俺はこの世界が憎くて仕方が無いのだ』

彼方には民が…ゼオライマーを見て歓喜し、ベルカの国々を滅ぼせと叫ぶ愚か者達がいる。その為に彼等は命を散らし、八卦達も命がけの戦いをしているというのに…コイツ等は…

『俺はお前達の命を食い潰すこの世界を許さない…憎んでくれて構わない、だが…』

八卦のデバイスは本来、性能向上と次代の育成の為、果ては永劫に国を守護する為に最初の宿主…つまり俺達の魂を転写するように作られた。だが…

『ゼオライマーは代々の宿主の魂を封じ続けてしまう欠陥品だ。マ

サトも、美久も、幽羅も囚われ、眠り続けてしまっている』

ゼオライマーのが両腕を構える。そして現れる【天】の一文字

『だが、ゼオライマーを完全な形で継承できれば奴等を解放できる。だから貴様達には俺を恨んでもらう…』

ゼオライマーが光に包まれる

『そして、俺は貴様達と戦う事で、冥王の覚醒を促すと共に、完全なるゼオライマーの為の補助パーツになってもらう…さぁ』

膨大なエネルギーによって生まれた大規模な次元震が、メイオウ攻撃が世界を破壊していく

『永き時の旅路、付き合って貰うぞ、八卦衆！』

そして、世界は崩壊した。アルハザードを含む多くの古代文明を巻き込みながら…

『…これが、あの時に監視映像から知った、世界崩壊の真実だ。マサキはさも自分の好きなようにやった風に言っていたが、まぁ間違ってはいないな、若干の脚色があっただけだ』

塞臥さんに祇鎗は声を震わせながら問いかける

『つまりだ、我等の王は未だにゼオライマーに囚われていると。そういう事だな、塞臥』

『ああ』

『ふざけるなっ！！』

祇鎗さんの怒号が響く

『お前はその真実を知って、その上で新たな冥王を生み出す為、その為に俺達から離れ、独りで戦い続けたのかっ！！』

『ああ、耐爬は幽羅様がいると知れば彼女を愛するが故に戦えなくなるだろうし、シ姉妹は狂ってしまった為に下手に刺激しても悪化するだけ。お前達も主君があそこにいて、主君を救う為の戦いと知れば本気になれまい』

『だからと言って、独りでやる必要は無かっただろう！』

ロクフェルさんの嗚咽混じりの叫び。ああ、この人は塞臥さんの事が好きだったんだ

『すまない。だが俺は何に代えてもマサトの力になりたかったんだ。野心を植え付けられた八卦衆として、苦悩した日々から祇鎗、お前とマサトとは救い出してくれた。だからマサトを救う為ならば…お前達に憎まれても構わなかった。お前にならばロクフェルを任せられるしな』

『塞臥、お前…』

塞臥さんも、不器用な人だったんだ。大切な人を助ける為には時には冥王を守らなくちゃいけない。だから他の人達を裏切るような形になってしまった

『だが、時はきた。新たな冥王が生まれる時がな…この時を待ちわびた…だから葎、お前に頼みたい』

『…俺にできる事ならば』

『可能な限り強くなれ。そして冥王の最期の障害となれ…融合が不完全な祇鎗とロクフェルにはできない、お前にしか頼めないんだ…』

『葎、俺からも頼む』

祇鎗さんも葎さんに頼む。すると葎と呼ばれていた騎士…いや、これは宿主の方?がフッと笑う

「どうやら更に精進する必要があるようだな、葎」

『はいっ！』

「塞臥とやら、安心しろ。俺もまだこの程度で収まる気は無いのでな」

『そうか…ならば思い残す事は無い』

塞臥さんは笑うと、私の方を見る

『待たせてしまったな。貴方の母君が話をしたいそうだ…これが私に出来る、最期の恩返しだ。受け取ってくれ』

そして塞臥さんの…オムザックの宝玉が砕け散ると共に、バリアジャケットが解除される。私は思わず近くまで駆け寄ると

「また、会えたわね…フェイト」

私の、待ち望んだ…だけどもう二度と聞くことはできないと思っていた声が、私の耳に届いた

第１５話　語られる真実（後書き）

『……何か、言い残す事はあるか？』

取り敢えず講習の課題めんどくせぇ

「…他には？」

短期バイトばっかりで探すのが面倒でござる

『それは貴様が接客業嫌ってるから、そんなバイトしか無いんだろうがっ！！』

とまぁこんな感じでリアルで忙殺されてました。申し訳ありません

「でも、スパロボＬ買ってたよね？」

うん、アリス可愛いよアリス…とまぁ脱線はここまでにして、今回はほぼオリジナルになっちゃった過去が一部判明しました。マサキが世界を滅ぼした理由と、冥王と八卦衆が争う意味も判明

「…そういや、葎一人に頼んだ理由は」

理由は幾つか。葎があの中では最強だから、後は次話で明かす予定ですが、クイントとメガーヌは八卦のデバイスとの融合が不完全の為、最大限に力を発揮できなくなってます

『で、この話でこの章終わらせる予定は?』

…塞臥の話す量が増えちゃったので思いきって分割した。なのはがプレシアに会う余裕無いだろうが、それはもう諦めたw正直、次話は紅牙、フェイト、プレシア、桧山の四人いれば話は進む。マサキも蚊帳の外になりかねん

『なん…だと…』

それでは皆さん、公約守れないので開き直って次話は未定です。プレシアは次で死なせる予定でしたが、助けたい方は感想に投げてください。致命的には話歪まない事に気付いたんで、A's終了後くらいには話に合流できるかと思います

よし、マサキが呆けてる間に…では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう!

第１６話　繋がった母娘の絆（前書き）

半月経ってしまったが大丈夫か？

大丈夫だ、問題しか無い

プレシア助けようとしたら、一話で終わらなかったでござるｏｒｚ

第１６話　繋がった母娘の絆

～フェイト視点～

私は今、呆然としている

「こんな形で再会出来るなんてね…」

そして私は八卦のデバイスによる支配から開放された…横になったままのお母さんの所へ歩いていく

「おかあ…さん」

そして、私は紅牙君に並ぶ形でお母さんの傍まで歩いた所で膝から崩れ、座り込む。すると自然と顔が近付く

「まだこんな私を母と呼ぶなんて…馬鹿な娘ね」

「だって…私にとってお母さんはお母さんだから…」

すると、お母さんの右手が私の顔に伸びる。私は咄嗟に目をつむり、身体を縮めるが…想像していた衝撃は来なかった

「全く…以前の私を殴り飛ばしてやりたいわね」

ぎゅっ

音に表すならばそんな感じだろう。それは以前ならば首を掴まれた音として、だっただろう。だけどこれは違う…だって…

「えっ、暖かい…っ!?」

私は身体を起き上がらせたお母さんに抱き締められ、胸に顔を埋めていた

「こんな優しい、可愛らしい娘がいたのに…傷付けてばかりだったなんてね…ごめんなさい、フェイト」

驚きのままに顔を上げると、そこには…涙を流す母の顔があった

「お母さん…」

「私ね…彼の、塞臥の記憶を見ていたのよ」

お母さんは涙を拭くと、塞臥さんの事を話始めました

「彼等八卦衆は同一の遺伝子から造られた存在。そして彼等は一つの強烈なコンプレックスを持ち、それにより互いを憎み、競い、潰し合うように生み出された…フェイト、貴方と良く似ているのよ。アリシアと同じ存在になるように造られ、アリシアの存在がコンプレックスになっていた貴方と」

私の目に涙が浮かぶと、背中に回されていた手の片方が私の頭を撫でてくれる。それだけで不思議と私の涙は収まってしまった。優しい母の目と暖かい温もり…その両方が原因なのかもしれない

「でも彼等は、同じく木原マサキの同位体として造られた秋津マサト、そして秋津幽羅、ゼオライマーの管制ＡＩとして造られた氷室美久達と宿命に抗い…そして打ち勝った。そんな彼等を見ているとね…貴方をアリシアではなく、フェイトとして見れるようになってきたのよ」

私の目が見開かれる。隣の紅牙君達は何も言わない

「するとね…私の為に必死で頑張ってくれた貴方が…堪らなくいとおしくなったの。あの別れの時に大嫌いって言ったけど、あれはアリシアを選んだ私の決別の意味だったの…そして、そんな事を言った私自身を呪ったわ」

お母さんの顔が歪む

「確かに私に残った時間は少なかったわ。でもね…貴方に割く時間が…貴方に愛情を注いであげれる時間を捨ててしまった私が憎くなったわ」

「お母さん…」

「そしてアリシアは塞臥が時間を停めた。そして【冥王】ならば救えるって聞いて私は、アリシアじゃなくて貴方を…フェイト、貴方を…」

「もういいよ」

私はお母さんに抱き付く、いやしがみつく

「私は今、幸せだよ?お母さんが今抱き締めて、頭を撫でてくれる、それ、だけで、私は……っく、ひっく」

お母さんを困らせちゃ駄目なのに、嬉しいのに、幸せなのに、涙が止まらない…

「だか、ら…笑って、欲しい…。私は、お母さんが…大好き…だか

ら…」

これ以上はお互い、言葉にならなかった。私達にできたのは抱き合い心のままに泣くことだけだった

その頃

「……（うるうる）」

『（おっ、泣くのか紅牙？）』

「（…むぅ、泣かない）」

『（ククク…ならば耐えてみせろ）』

「（…言われるまでも、無い）」

「ひっぐ、良かったよぉ…」

「ハンカチ、お貸ししましょうか？」

『うむ、頼めるか桧山殿』

『親子の和解…感動しましたぞっ！！』

「少し静かにしてやれ、葎」

『確かに葎、こういうのは弱そうだものね』

「やっぱり親子は仲良くが一番よ～」

思いっきり泣いた後もお母さんに甘えていたら、唐突にその幸せな時間は終わりを告げた

「ごぷっ！？」

私の身体にお母さんが吐き出した血がかかる

「お母さんっ！！」

お母さんの身体が後ろに倒れるのを全力で阻止し、今度は私が抱き抱える

「どうやらもう時間が無いみたいね…そちらの小さい【冥王】さん」

「…ん、どうしたの？」

お母さんは紅牙君に話しかける

「一つ、頼みがあるの…聞いてくれる？」

「…僕にしかできない事なら」

お母さんは少し笑うと

「貴方に、フェイトの事をお願いしたいの」

「…え？」

思わず、私が声に出してしまった

「塞臥が見た事、聞いた事、知った事は共有していたから知っているのよ…あの、白い服の子と貴方になら…フェイトを私の娘を託せるの、だから「…断る」…え？」

お母さんの声を遮り、紅牙君がはっきりと、断ると言い切った

「…勝手に生きるのを諦めないで。それはまだ死んでない人が言う事じゃ無い」

紅牙君がお母さんに近付く

「…僕の本当のお母さんは産まれてすぐに死んじゃった。そして僕は誘拐されたから、顔も知らない、声も知らない…頭を撫でられたらどんなに安心したのか、どんな人だったのか、抱き締められたらどんなに暖かかったのかも、もう…分からない」

紅牙君は相変わらず表情の変化は薄いけど…それでも、怒っているのだけは分かる

「…だからそんなお願いは却下。貴方は僕が死なせない…だって、

貴方が生きていればフェイトは…もっと幸せになれるはずだから…
…マサキッ！！」

『全く…手間を増やすだけだぞ？治療しても足手纏いが増えるだけだ…それにまだ他の八卦との戦いが「…マサキ」……あーもう、好きにしろ、俺は忠告はしたからなっ！！』

すると紅牙君から白銀の魔力が溢れる。それに共鳴して、お母さんの傍に転がっていた【雷】のオムザックの残骸が光を放つ

「…僕とマサキ、それにゼオライマーと次元連結システムの力があれば…」

『幸い、統合を開始していたオムザックにプレシア・テスタロッサのＤＮＡ及び、身体データはある…さぁ、運命に唾を吐いて未来を歪めてやろう！』

紅牙君が全力で魔力を放出していると、お母さんの顔色が青白くなっていっていたのが止まる。…そして代わりに紅牙がどんどん弱っていく

「…私は本来消えるはずだった存在…骸が動いていただけなのよ！…ただでさえそんな消耗しているのに、貴方が危険よっ！貴方は死んではいけない、今すぐに止めなさいっ！！」

っ！そうだ、紅牙はあれだけの戦闘をこなしていたのに…

「…ごふっ！？」

『くっ、紅牙ぁっ！？』

「紅牙君っ！？」

そして紅牙君の突然の吐血にマサキと桧山さんが声を荒くする

「…大丈夫、マサキ…続けよう」

『しかし！』

「…僕は…」

紅牙君が私を見る

「…折角仲直りしたフェイトがお母さんと離れて、悲しむ姿、見たくない…だから」

その言葉に私の心が揺れる。そして紅牙の手がお母さんに触れる

「…ゼオライマーよ、僕に力を示せぇっ！！」

紅牙君の咆哮と共に世界は光に包まれた

全く、世話を焼かせる

プレシアに触れたのも、偶々胸部…心臓やリンカーコアに一番近いのも、そこで魔力を最大出力で放出したのも偶然、そしてプレシアが偶々傍にあったオムザックの宝玉の欠片を掴んだのも偶然だろう

前者は紅牙の直感だろうし、後者も偶々右手がちょうど宝玉に触れる位置にあったに過ぎない

だが、その2つの偶然…いや奇跡がこれを可能にした

本来、八卦のデバイスはリンカーコアと同化している。特にプレシアのように一度死んでいる肉体ならば肉体を再構成を行う事で生前のスペックをある程度取り戻せる

そして、デバイスと同化している為にこちらから干渉等本来できないし、剥がれた後は自壊を待つだけ…そのはずだったのだがな…

だが、今回それを可能にしたのは3つの要素だ

1つは、塞臥がプレシアの為に余力を残して自壊した事。本来ならばあり得ない事だが、自分のやるべき事を終えた塞臥のせめてもの恩返しだったのだろう。その為に肉体が自壊する前にプレシアが解放された

もう1つは、その状態になった為に他の治癒手段を受ける状態にになり、尚且オムザックを手にした状態にあった事。これにより、オムザックを端末として活性化、力業でプレシアを治癒できた

最後の1つは、紅牙がいた事。これはあくまで理論上は可能、というだけ。実現できるならばもっと多くの命が救われている。だが何故紅牙だけが行えたのか…答えは単純だ

根本的に足りないのだ、魔力が

今回紅牙がやった行為は言うなれば、主のいないデバイスを遠隔起動させ、ソイツにアルカンシェル級の魔力を注ぎ込み、治療魔法を発動する行為だ。普通なら送信側が干からびるか、受信側が砕け散るだろう

だが送信側が紅牙、受信側が八卦のデバイスで【天】に次ぐ出力の【雷】、これらの要素に加え、プレシアのデータをオムザックが所持していた事が救いとなった

全く…こんな力業で無茶を押し通すとはな…だが、だからこそ面白い

残ったのが奴等三人と言うのも救いだ。奴等ならば、この状況で寝首をかくような真似はするまい

…さぁ、残りの僅かな時を楽しもうか…相棒

第１６話　繋がった母娘の絆（後書き）

プレシアを力ずくで助けてみました。これによりフェイトの戸籍がフェイト・テスタロッサのまんまでリンディの養女にならなくなりましたとさ

プレシアの件の擦り合わせばっかり考えてフェイト側考えてなかったよｗｗｗ

ＯＴＺ

「なぁ」

しかめプレシアとアリシアにヤツをあーすると…

「ちょっと」

でもそれじゃハーレムっぽくなるよな？でも…

「話聞けやぁっ！！（文庫本を投げる）」

ぎゃぴぃっ！？　　…誰だ！…ってはやてか、どうした？

「どーしたもこーしたも無いわっ！！このままだとこー君がＮＴＲされるってユニコーンさんとこの感想で漏らしたから、聞かせて貰おう思うてな」

今回の話が全てだ。今まではＳＴＳ持ち越しだったり本筋に絡みにくいキャラだったりしたが、フェイトが参戦したら一気に危険だねって話

「ちょ…私、あちこちのＳＳで負け越してるんやけど！！」

基本はなのはかフェイト、ＳＴＳ限定にしてもティアナに負けてるんじゃないか？ヒロイン数は

「酷いっ、ちょっと前まで一緒に寝たり甘過ぎな展開やったのに…目が覚めたら反対側にフェイトちゃんがおった気分や…」

間違っていないのが笑えんな。しかも、はやてには関係が進展しない壁があるしなぁ…

「フェイトちゃん達にあって私に無いもの…まさか、巨乳か！こー君おっきくなったらおっぱい星人になってまうんか！？」

さあ？まぁボチボチ終わろうか、次回はようやくアースラに行けます。リンディ達を襲う悲劇を書けます…そして書きたかったのが書けるｗ

「ちょ、無視せんといて…そや！中学から私もこー君に揉んでもらって大きくすれば…」

「…僕は、そこまで露骨にスケベじゃないもん…」

「え？あ、こー君！そんな引いてますみたいな目で見んとって、お願いやから…ああ、ちょっと待って！？こー君、こー君っ！！」

あっちは大変な事になってますが知りませんｗでは皆さん、次回の

後書きでお会いしましょう！

幕間　倒れた子と守る親達（前書き）

明けましておめでとうございます

長くなったので、取り敢えず前半部分を切って先に投稿します

幕間　倒れた子と守る親達

光が収まると、そこには血色の良くなったプレシアと、ゼオライマーを待機状態に戻しへたり込む紅牙の姿があった。フェイトはただ呆然としていた

『全く…無理を通すのはいいが、後先を考えて貰いたいものだな』

「…ん、まぁ終わり良ければ…ってヤツ。……んみゅ？」

紅牙はここで自身が所謂魔力切れ状態である事に気付いた。実際は聖人状態になれば使えるのだが、平時に使えるレベルの魔力は空っぽになるまで使いきったのだ。その為、紅牙は自分に起きた初めての事態に気付いていなかった

「…っ！不味いわ！！フェイト、早くあの子を治癒魔法の使える人の所へ…」

ブシュッ

「…え？」

紅牙の肩から、足から…血が吹き出した。そして紅牙は倒れる

「くっ…メガーヌっ！！」

「はいっ、…ロクフェル、行くわよ～」

『ああ、あの子をここで死なせる気は無いっ！』

『奴は聖人の能力で怪我を誤魔化していたに過ぎん。魔力切れで無意識に聖人状態を維持できなくなった段階で、こうなる事は予測できていた。傷を塞ぎ、自己の治癒力を促進させるだけでいい、それで魔力が回復するまでもたせれば十分だ』

そしてマサキの指示で治癒を行うメガーヌを見てようやくフェイトが正気に戻る

「紅牙君…紅牙君っ！！」

飛び付きそうになるのをプレシアが止める

「お母さん、紅牙君が…」

「ちょっと落ち着きなさい」

ぺちっ

「痛っ」

パニック状態のフェイトの額に軽くでこぴんするプレシア。フェイトが額を抑えて涙目になっているのを抱き締めたい衝動に耐えながらも先に諭す

「今の紅牙君は安静にしなきゃ駄目よ…どこかの医療機関に行くなりしないと…」

「それが…そうもいかないのですよ」

左肩を布…恐らくスーツの左袖だったであろう物で縛り、止血をしている男…桧山が話に加わる

「紅牙君はあのような異常な治癒力や身体能力を持っています。ですから通常の医療機関に預ける訳にはいかないのです。薬や医療品だけ集めて、どこか休める場所へ移動した方がいいですね」

「紅牙君の身体に関して問題無い医療施設……あっ！！」

そこでフェイトは閃く

『どうした何処かいい場所でもあったのか？』

マサキが問う。いつの間にかゼスト、クイント、メガーヌ、桧山のその場にいる全員が見ているのに気付き顔を赤くする

「ほら、しっかり言いなさい」

「は、はいっ！」

俯いてしまったフェイトにプレシアは発言を優しく促す。…ここにアルフがいたら目が点になっていただろう…実際はサーチャー越しに見ていて既に石化していたりするのだが…

「あ、あの…だったら、アースラに行きませんか？」

その言葉にアースラを…管理局を信用していないマサキが反論する

『ふむ、一理ある…が、そのまま拘束される危険があるな』

「そ、そんな事ありませんっ！」

「いや、あるだろうな」

咄嗟に否定するフェイトだが、横からゼストが肯定する

「アースラの指揮官はリンディ・ハラオウン。海も常時人材が不足している。保護観察処分の君を使うくらいにはな」

「聞いた限りではロクでもない組織のようですね。それは何となく理解できました。高町先輩の娘さんも言い様に使われているようですし」

「……」

ゼストと桧山の言葉をフェイトは否定できなかった。それは事実だからだ。だがクイントは賛成に回る

「それでもいいから行っちゃいましょうよ、隊長」

「クイント…もう少し物を考えて…」

そこでゼストは言葉を止める。クイントの目が真剣だったからだ

「先ずはこの子を安静にして治療する事が先決です。それが最優先です」

「ふふっ」

メガーヌは彼女の考えが分かったようで、背中を向け治癒に専念する

「ここには手負いとはいえ、八卦の【月】を持ち、オーバーSのゼスト隊長とそれと互角に戦い引き分けた桧山さん、そしてまだ戦えるか怪しいけどプレシア・テスタロッサもいる…いいわよね？」

クイントがプレシアを睨む、するとプレシアも意図が理解できたらしく笑みを浮かべる

「ええ、いいわよ。どうせ世間じゃ犯罪者だし、この子の為なら多少の無茶もやってあげる」

クイントは同じく笑みを浮かべると

「それに八卦の【地】のメガーヌに【山】の私…これだけの布陣でこの子をむざむざ拘束なんてさせる？…そんなもの、粉砕してやればいいのよ。何なら最後にアースラ沈めてトンズラしちゃえばいいわ」

『また、無茶苦茶な…』

「いいじゃない、祇鎗君。私、いい加減腹立ってるのよ…あの女のやり方に」

クイントは拳を握り締める

「ギンガやスバルよりちょっと上の年の子達を前線に送り込んで、まだ１４の実の息子が歴戦の執務官になるようなくらいに戦わせてる…命の危険があるのよ？死んじゃうかもしれない、それを…」

怒りのままに握り締めた拳からは血が滴り落ちる

「人材不足？子供達には関係無いの、貴方も、なのはって子にしても…学校で勉強して友達と遊んで…そんな生活を送るべきなの…そして」

クイントはボロボロになっている紅牙を見る

「この子は特にそう。経歴調べた時、思わず端末を握り潰しちゃったわ…」

「物に当たるのだけは止めてくれ、費用で落とす為にレジアスに小言言われるのは俺なんだからな」

「す、すいません……それに散々泣いちゃった。何故この子だけこんな辛い思いをしなきゃいけないの？親の愛情を求めてただ待ち続けて、傷ついて…」

クイントの目に涙が浮かぶ

「桧山さん、貴方が紅牙君の父親じゃなかったら、私は何があってもこの子を引き取るつもりでした…」

「そうでしたか。ナカジマさん、心配していただき、ありがとうございます」

「いえ、勝手な事言ってすみません…だから、私はあの女からこの子を守ります。例え、管理局の体制に逆らってでも」

ゼストは溜め息をつきながらクイントをあきれ果てた目で見る。
それにクイントがビクッと反応する

「馬鹿者、それでは俺がゲンヤ殿に合わす顔が無い…桧山殿?」

「ええ、当然です」

二人は右の拳を互いに出し、軽く甲を打ち合わせる

「さて、フェイトさん…行きましょうか、アースラに」

「え…あ、はいっ!」

そして一同はアースラへと向かう。フェイトもまさかクロノ達がこの面子に喧嘩を売るとは夢にも思わなかったのである

「紅牙が連れていかれただって!?ザフィーラ、何してやがったんだ!!」

ヴィータが怒りのままにザフィーラに掴みかかる。だがザフィーラは平然としている

「お前、何をしたのか分かっているのだな?」

シグナムも言葉だけは意図的に抑えている。だが殺気に近い感情が漏れているくらいに怒っていることが、表情からもわかる

シャマルは泣きじゃくるはやてを抱き締めているが、同様に怒りを込めた視線をザフィーラに向けている

「こー君が…こー君がぁ…」

はやては号泣していた。紅牙の件で泣いたのは以前に見ていたが、ここまで泣いたのは初めて見た。以前も胸が締め付けられたが今回はそれ以上だ

これで自分を恨んでくれるならまだいい。だが、優しい主はそれをせずにただ紅牙が連れていかれた事を悲しむ。正直、これが一番辛い

「紅牙は今回ばかりは無茶をし過ぎた。一度しっかりと治療を行う方がいい。それにあちらには桧山殿がいるから問題は無い」

ゴッ！！

ヴィータが我慢できずに強烈な右ストレートをザフィーラの腹に打ち込んだが、それによろめきながらも話を続ける

「落ち着け…桧山殿は八卦のデバイスを宿す恐らくSランク相当の騎士とやりあい、引き分けた。そしてその騎士や他の八卦が同行している…いくら手負いでも、俺達を追いきれない程度の戦力しか無い連中に彼等を止める手段等無い」

「なっ…」

シグナムは呆然とする。自分達よりも格上の騎士と戦い、引き分

けた…それはすなわち…

「私よりも、彼の方が、強いと？」

「ああ、彼の技量は凄まじい…我等では、飛べない彼に空から一方的に仕掛けるしか活路は無い」

「ふざけるな！そんな汚い真似等…」

「では、聞こうか？ならば一切飛ばずに素手のみで、同じく飛ばない俺を十人同時に相手にして、倒せるか？」

ザフィーラの問いにシグナムもヴィータも言葉に詰まる

「恐らく彼はそれぐらいは軽くやってのける…それに紅牙も大人しく捕まるような輩では無い…さて、主はやて」

はやては話を振られて少し戸惑い気味に顔をあげる

「紅牙は出血もしています…よって、明日の食事は血になるものを多目にした方が良い、と思われます。よって肉類を買い足しに行きましょうか」

「…ザフィーラは信じてるんやね、こー君が無事に帰ってくるのを」

顔をあげたはやては少し不貞腐れ気味である。それにザフィーラは苦笑を浮かべながら

「アイツは自分にとっての数少ない、男友達ですから。男同士の友情と信頼はまた、違うものなのですよ。主はやて」

その言葉に、さらにはやては不貞腐れた。これにはザフィーラも苦笑するしか無かった

「さて、ようやく準備は整った」

アースラの医務室前にてクロノは笑う。そして自分の左手を見る…おぞましいまでのプロテクト、強化を施した上に魔力行使、魔力循環を妨げる用に魔改造を施したバインドの術式を見る

「一泡吹かせてやる…今に見ていろ…！」

そしてクロノは医務室の中へ入る。その復讐の牙を眠る紅牙へ突

き立てる為に

幕間　倒れた子と守る親達（後書き）

信じられるか、この話、アースラ崩壊日誌だったんだぜ？アースラ…舞台になるのはラストのみとか…

「それは次回に持ち越しなんだろう？」

うん…と言うわけで今回のゲストは男友達…ってのを強調してしまい、はやてに不貞腐れられたザフィーラです

「うむ…しかし、ここぐらいまでは年末にはできていなかったか？」

出来てたよ。アースラ崩壊日誌に拘って、後半部分書こうとしたらやりたい事多すぎてまとまらないと言うｏｒｚ仕方ないので、確定してるここまでを先に投稿させてもらった次第でして…

「確か現行のでもクロノが今までで一番の重傷だったな」

それどころか、巻き添えでエィミィ負傷とか、リンディさんの腕がズンバラリンとかアンチ管理局で済まない話になりかけて、慌てて修正したりしてますな

「管理局嫌いが盛大に出ているな」

仕方ないだろ、管理局…特にリンディ周りとか中枢とかが大嫌いなんだから。むしろ大義の為に望んで悪になるレジアスとかのが好感持てるよ

「まぁ…な。それにはノーコメントだ」

他人事じゃないぞ。紅牙もコイツ等大嫌いだから、コイツ等のさばらした状態で万が一機動六課に入る事になれば、紅牙のはやてへの好感度がどんどん低下するぞ…まぁこれならフェイトも共倒れになるけどな

「主が泣くぞ」

それは知らんよ。下手すりゃシカトぐらいはされるようになるかもね。現在のはやてがそれをやられたら…それだけでリインフォース出てきそうなぐらいに暴走しそうだがw

「当然だ、紅牙は既に主はやてを支える最も大事な柱なのだからな」

ふぅん…まぁいいや。取り敢えず次回はアンチ管理局全開になると思われます。今回はまだエンジンかかり始めた程度でしたが、次は

自重する気も無いでしょう

「なら炭鉱にこもらず、さっさと続きを書け」

神お守り出たらな…では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

幕間　風纏う逆十字（前書き）

お久しぶりです。２ヶ月以上放置してましたｏｒｚ

まだ死んではいないのでそこだけは安心してください、どうぞ！

幕間　風纏う逆十字

「で、話す気は無いと」

「くどい、お前に知る権利は無い、知りたければレジアスから引き出してみろ」

ここはアースラのミーティングルーム。リンディは応急措置を施された彼等に挨拶もそこそこに、まず地上部隊である彼等が何故ここにいるのか聞こうとしたが、ゼストに突っぱねられた

「私達はレジアス准将の…ひいては三提督の特命で極秘に動いていますから、話す権利も義務のありません」

クイントもメガーヌも話す気は無い。というか、リンディに対しての嫌悪感を隠す気も無かった

「（随分と嫌われているわね…）しかし、メガーヌさん、貴方は産休のはず。お子さんはいいのかしら」

「今は召喚した子が見てくれています。それに、ちょっと様子見でついて来ただけですから、私は任務は知ってますが協力しているだけで参加はしていません」

事実、メガーヌは紅牙を心配して見に来ただけで、本来は参加する予定では無かった。その為今はガリューがルーテシアの面倒を見ている

…ちょうどその頃、夜泣きしているルーテシアを必死であやすガリューの姿が町外れの公園にあったりする

「さて…そちらは、桧山さん…でよろしかったかしら？」

これ以上問答を続けても無駄と判断したリンディは残る部外者…桧山に話かける

「はい、桧山明臣です。今回は息子がお世話になりました」
「いえ、こちらもフェイトちゃんがお世話になりましたし、お互い様です」

リンディにとっての誤算、それは彼の外見から真っ当な職業の人間だと思っていた事である。士郎の例もあり失念していたのだろう…ツケは高くつく事になるのだが

「貴方は一般人でしたね。まずは管理局についてお話いたします」

暫くして説明を聞き終えた桧山が一度目を閉じ、開く。その目は…感情を宿していなかった

「全く…聞けば聞くほど…傲慢な、ふざけた組織だと分かりました」

「えっ！？」

リンディが目を丸くする

「…管理？保護？誰がそんなものを求めましたか、要は自分達を上位に置き、他の世界を下に見て管理という名の支配をするだけではないですか」

それは桧山から見ても中世のイギリス、スペイン、ポルトガル…彼等の開拓と変わらない。その先にあるのは…

「そして圧倒的な技術力…ひいては力を見せつけ、交渉ではそちらが主導権を握り、管理、保護を名目に好き勝手荒らし回る…居直った強盗と大差ありませんね…ヘドが出る」

「……」

リンディは何も言わない、否、言えなかった

「今、この世界は私達は私達のやり方、生き方で世界が回っています。貴方がたは勝手にやってきて私達の生活を引っ掻き回す。正直そんな組織、迷惑以外の何者でもありません」

「しかし、ロストロギアのような危険物は…」

「そうやって紅牙君も丸め込むつもりでしたか？高町先輩の娘さんのように」

「…っ！」

リンディの顔が歪んだのを見逃す桧山では無い

「全く、ふざけていますね。特に子供に命のやり取りをさせて、自分達は安全な場所に陣取っている辺りがね…」

ここでリンディはようやく桧山の異変に気付いた

「私はヤクザです…人様から褒められるような仕事ではありません。ですがね…そんな私達達にも通すべきルール、最低限の掟があります。…それはね、どんなクズでも落とし前は自分で付ける。そして、力が無くても躊躇い無く仲間の為に矢面に立つ覚悟。貴方方にはそれすら無いようですがね」

「何が…言いたいんですか？」

桧山は彼には珍しい、侮蔑を込めた笑みを浮かべる

「貴方方の立ち位置は理解しました。なら勝手にやってください…もし、それが私達の邪魔になるならば容赦無く叩き潰させてもらいますが」

「…できると、お思いですか？」

リンディが挑戦的な笑みを浮かべ、拳銃を突き付ける

「貴方方の文明はまだ質量兵器に頼った世界、そんな貴方ではこれにすら対抗できな「五月蝿いですね」…痛っ！！」

パンッ！

その軽い音と共に手の中の拳銃は桧山の蹴りで真上に弾き上げられ…

ザンッ！！

桧山が足を振り下ろすと拳銃は真っ二つに切り裂かれた

「私の格闘技術がそれなり有効なのは確認が取れています。対人ならば飛ばれたら地面に叩き落とすのが少々面倒なだけです」

淡々と桧山は喋りながら衣服の乱れを整える。そこに新たな乱入者が現れる

「…司令、封鎖は終わりました」

やや浮かない表情のエイミィと、俯いたまま笑みを浮かべるクロノが入ってきた

「封鎖？…なるほど、時間稼ぎだった訳ね」

クイントが獰猛な笑みを浮かべる

「ええ…私達は正直、貴方達の事はどうでもいいんですよ」

リンディは感情の無い目のまま口元だけで笑みを浮かべる

「私達の目的は闇の書…不確定要素の【冥王】は邪魔なだけ。でもね、その戦力は非常に魅力的なのよ…」

「私怨…その為にまだ心の幼いあの少年を利用し、駒にするか…あの少女のように…腐っているな」

「何とでも言いなさい…あの人を死に追いやった闇の書を葬れるならば、どんな手段だって…」

「司令…」

若干引いているエイミィと違い、クロノは晴れ晴れとしている。

今の空気にそぐわないくらいに

「なるほど…だから僕が【冥王】に報復するのを止めなかった訳だ」

「ねぇ…クロノ、それ、どういう事なの?」

クロノ達と同じ扉から入ってきていたフェイトが訪ねる。傍らにはなのはやアルフ、ユーノの姿もあった

「クロノ、お前まさかあの子に何か…！」

「ああ、したさ…奴は今、身体中から血を流して転がっているはずさ…改良したバインドで魔力循環機能も阻害してやっているからな」

その言葉に桧山は笑みを浮かべる。それを見たなのは達が凍り付くような笑みを

「ほう、中々面白い事をしたようですね」

桧山が一歩前出る。だが、増長したクロノだけは気付かない…否、クロノだけが気付かないように気配を隠しているのである。…『邪魔が入らないように』

「アイツには散々煮え湯を飲まされたからな。これで弱らせたアイツに暗示を使うか、最悪でもアンタ達に駒になって貰うかはできるからな」

「ククク…やはり子供ですねぇ」

「な…アンタ、自分の息子がどうなっても「親子揃ってうるさいですね」…ごふっ…」

「クロノ君ッ！？」

瞬時に接近した桧山の貫手は…バリアジャケットを容易く貫き、クロノの腹に突き刺さっていた。

「安心してください…内臓は痛めていませんから。…今はまだ、ですが」

ズボッ

内臓の隙間をぬって突き刺さっていた右手をクロノの腹から引き抜く。その手は赤く染まっていた。逆になのはとユーノは顔色を真っ青にしていた

「が…ふっ…」

「クロノーッ!!」

そして支えを失い、崩れ落ちるクロノを必死に支え、泣き叫ぶエィミィを見て

「おや、女の子を泣かせてしまいましたか。これは失態ですね」

軽く肩をすくめる桧山にゼストは苦言を漏らす

「流石にやりすぎだ。それにあの少年には対策があるだろう？」

「ええ、ですから彼を生かしているんじゃないですか」

桧山は酷薄な笑みを浮かべる。それをまともに見たエィミィが悲鳴すらあげれずに表情を凍りつかせる

「紅牙君に闇討ちを仕掛けて勝ち誇り、さらに人質にしてるんですよ？本当ならば、フェイトさんと使い魔のアルフさん、後はなのはさん以外は皆…殺していますよ」

「子供を傷つけられた親ってのは怖いんだよ…君達も、これに懲りたら馬鹿な事はやめときなさい」

桧山を横目に見ながら、クイントが忠告する。エィミィはガタガタと震えながら必死に首を縦に振る。そんな中、新たな来訪者が現れる

「あらあら、もう流血沙汰になってるのね」

「え、お母さんっ！」

その場に新たに現れたのはプレシア・テスタロッサ、とそれに手

を引かれながらやってきたまだ顔色が優れない紅牙であった

「残念ね。貴方が仕掛けようとしたバインド、紅牙君にかかる頃には魔力循環機能を阻害する部分は、全部私が外してたのよ。…詰めが甘かったわね」

「…んみゅ、まだ眠い…」

『時間的には普段は寝てる時間だが…あぁもう締まらん、いい加減起きんか、紅牙ッ！！』

マサキの怒号でようやく目が覚めた紅牙はクロノを見て、溜め息をつく

「…桧山さん、殺したの？」

「いいえ、内臓も傷つけてませんし、ピンピンしてますよ」

桧山の言葉を証明するようにクロノはエィミィに支えられながらも立ち上がる。それを見て、紅牙は容赦無く切り捨てる

「…情けない」

「ッ！キサマが…キサマが言うかあああアアァッ！？」

クロノは絶叫をあげながらエィミィを突き飛ばし、デバイスを呼び出し紅牙に突撃する。それに対して紅牙はプレシアを庇うように立つ。そして右足で虚空を十文字に切り裂く。するとその蹴りの軌跡が逆十字を形成すると…

ギィンッ！

「なっ…」

クロノが降り下ろそうとしたデバイスは紅牙の眼前…否、眼前に発生した十文字の蹴りの軌跡に止められていた

『…ッ！これは…』

「…真空逆十字（ソニッククロス）」

紅牙が蹴りによって生み出したのは真空の刃で形成された逆十字。桧山明臣がかつて見せた技を、本家より多目の気を使う事で何とか完成させたのだ

「…やっぱり、耐爬のお陰か。前より風が読める」

紅牙は足を一旦引く

「またかっ！またお前はそんな簡単に先に…」

「…もう黙れ」

目をむいて吼えるクロノを一言で黙らせる。その間に桧山がエィミィを連れ出す…その『射線』から逃がす為に

「…今回、お前は僕だけじゃなく、桧山さん達を利用した。、お前は…」

エィミィが『射線』から離れたのを確認してから、紅牙はクロノが必死に破ろうとしている『真空逆十字』の中心を…蹴り抜いた

「…もう一度反省して来い」

轟ッ！！

その直後、紅牙の右足を基点に横向きの竜巻がクロノを襲う

ソニックトルネード

桧山がかつて戦った相手の技を自分向けにアレンジし、習得した必殺技とも言える大技。恐らく、八卦のデバイスを装備していても無傷では済まないだろう一撃が生身より放たれた

「、がっ、あああああああああアアアアアッ！！」

紅牙の蹴りより生まれた竜巻は全く容赦無く壁を打ち砕き、通路を打ち砕き、さらには部屋を数室巻き込み、破砕した所で消滅した

『全く…これでこの威力か…セットアップしていれば、デッドロンフーンを使わずとも船体に風穴が空いていたぞ』

マサキが呟くが、アースラ組は呆然としていた。躊躇い無く放たれた一撃にて、クロノは瓦礫の中に埋もれてしまっている。今回は完全に意識が無いらしく、ピクリとも動かない

「全く…派手にやりましたねぇ。まぁ、自業自得ですし授業料を先払いしたと思えば安いものですね…死ねばそれまでなんですから」

桧山も自身の技を息子が知らぬ内に習得していた事実に内心喜びながらも、リンディに話す…が、当のリンディは怒りを露にする

「貴方達正気なのっ！艦内でこんな大規模攻撃をしてっ…管理局を敵に回したらどうなるか…」

『アルカンシェルでも撃つか？確かにあれなら関東地方を丸ごと消せるかもしれんな』

「そんな、リンディさんっ！」

駆け寄ろうとするフェイトの肩をプレシアが掴み、止める

「やめなさい、今の彼女の目は妄執に囚われている。前の私と同じね」

リンディは笑う

「やりたくなかったけど仕方ないわ。海鳴市を中心にアルカンシェルで闇の書を…」

その瞬間、ゼストの口元が歪んだ

「言ってしまったな、リンディ＝ハラオウン。…葎、祇鎗、ロクフェル、記録は？」

『しかと記録させていただきました』

『同じく』

『これで行動に移せますね、ゼスト隊長』

「な、何を…」

「私達もね…流石にこっちから同士討ち仕掛ける訳にもいかなかったのですよ」

メガーヌがリンディを睨む

「だからね、待ってたのよ。アンタが私達の任務の障害になるのをね」

クイントが両拳のリボルバーナックルを打ち鳴らし、鈍い音を響かせる

「貴様は今、管理外世界の惑星への大規模攻撃を宣言した。それは我々の任務への妨害行動だ。よって…」

ゼスト達三人がセットアップを行い、それぞれローズセラヴィー、バーストン、ディノディロスへと姿を変える

「我等ゼスト隊はこれよりアースラへの攻撃を開始する！」

メガーヌが魔方陣を展開する。彼ら三人だけでは無く、紅牙、桧山、プレシアの足元にも展開され、転送された

そして残された者で、その意味を理解した者達からブリッジへと駆け出した

幕間　風纏う逆十字（後書き）

２ヶ月…実は2月の半ば、バレンタイン前にはこの半分できていて、それを投稿したつもりになってました↑反映されなかったのか、寝惚けて投稿した気になっただけなのかは不明

それで反応ないのに落ち込みながら書いてて、昨日投稿されてないのに気付いて、「ならば合体させて一話＋加筆でいいや」と投稿させて貰いました

速度低下ですが、血だまりスケッチ　首みっつ改め、まどか☆マギカ見て鬱入ってました。いやね、あれ見てると如何に自分が救いの無い話をやろうとしてたのかが分かってしまいましてね…ｏｒｚ

ぶっちゃけ、初期プロットではここでクロノを惨たらしく殺す予定でした。後は、アリサは片腕落として、すずかも【水】ごと殺すつもりでしたし、「お母さんを助けてっ！」と涙ながらに懇願するフェイトの目の前でプレシアｉｎ塞臥をバラバラにする予定でした

これも、紅牙は当初ははやての為ならば他の全てを切り捨てれる人間だった為です。ですが、予想外にいい子だったので、死人が一気に減る要因になったと思われます

ちなみにまどか☆マギカですが、杏子は魔女図鑑ではボロクソ書かれていますが、ボロクソの内容は実はＯＶＡの木原マサキと似たよ

うな事が書かれています。実際は杏子ちゃんマジ聖女だった訳ですが…うちのマサキはあんな風にはなりません。紅牙のせいでツンデレくらいはするかもしれませんけどねｗ

そして、ようやく今回の中身ですが、まずは敢えてラストのアースラフルボッコの全カット
これはクロノ達はどうでも良いけど、アースラが気の毒になった為です。だってアースラにはマジで罪は無いんですもの…下手に描写したらガンダムWのリーブラみたいになりそうだし

次に紅牙の使った技ですが、これがくせ者でして…

これの元ネタにある技を多数桧山は使うのですが、昨年末に資料用に平積みにして読んで、読みかけなんでそのままバイトに行ったら、大掃除中の親が勘違いして古本屋に売りに行きましたとさｏｒｚ

そして今資格取ってバイトして給料待ち…なのですが、私用で出費が激しく再購入がかなり遅れてしまいそうです。その為、最凶親父決定戦は暫く延期させていただきます。散々放置状態になっているのに、延期も何もあったもんじゃないかもしれませんが…

次の話は数日後の話を書く予定です。アースラのその後はフルボッコからダイジェストっぽくはやるかもしれません

そして正直、まどか☆マギカ終わるまではクリスマスに行きたく無いと思う自分はマジチキン…

最後に愚痴を長々と書いてしまい、申し訳ございませんでした。では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

幕間？（前書き）

随分と間が空いてしまい、申し訳ありませんでした

詳細は本文にて

幕間？

『おいゴミ』

ん、どうしたマサキ？

『何故久し振りに投稿したかと思ったら幕間なんだ？』

…それには深い事情が…

『貴様の都合など知らん。さっさと吐け、さもなくば死ね』

うん、そうストレートに言ってくれるお前だからゲストに呼んだんだ…実はクリスマス部分だけ書き貯めしてたんだ

『…そもそも時間軸は１０月じゃ無かったか？』

当初は短編二回で一気に１２月まで時間を飛ばす予定だったんだ。ぶっちゃけ、紅牙を学校に馴染ませる為に無理矢理１０月にした訳

で、残りは各自の修行？風景のみ。…これで、タダでさえ亀になってるのに数話引き伸ばせと？

『…それは、まだいてくれるかもしれん読者には酷だな』

そういう事。割を食うのは出番激減するアリサだけだし

『…さっき、学校が舞台になるからこれから出番が増えるとはしゃいでいたぞ』

……

『……』

さて、気を取り直していこうか。

『そうだな。そもそも書き貯めする理由がわからんのだが？』

いやね…クリスマスに入ると、多分感想で批判が山程来ると思ってね、モチベーション低下や日和るのを阻止する為にどうしよう…って考えた結果が、クリスマスを駆け抜ければいいじゃないって今考えたらアホな結論だったのさ

『誤字脱字の修正すら満足にできん貴様にしては、思い切ったな』

ああ。…だが、問題が発生した

『何が起きた？また携帯がオープンゲットでもしたか？』

……携帯が火花出した

『……は？』

……携帯が急にボタン付近、５のボタン付近でバチッて弾けた音と共に軽く火花出した

『…おい、まさか…』

Ｐ９０３ｉＴＶがウンともスンとも言わなくなった。携帯屋に持っていったが、もうどうにもならんってさ

『……』

さらに、電話帳とかもバックアップが一年以上前だから実生活にも多大なダメージを受けた。派遣のバイトも連絡できないから、首切られかけたし

『……貴様、確か書きかけは全て保存メールＢＯＸにしまってなかったか？』

高い金出して、電話帳すらサルベージできんかったのに、出てくるとでも？

『確か買い換えたのが７月辺りだったか…』

サルベージは半月待ったが駄目だった。お陰でなのはｖｓリインフォース辺りから全部書き直しという現実と向き合う事ができたのがつい最近だ

『…せめて、短編だけでも投稿しておれば良かったものを…』

全くだ。まぁ悲鳴あげようがグレートアクシオン囲んでシオニーちゃんを集団でバンッ！しようが、現実は変わらんからな

『…で、今回は何でお茶を濁すんだ？』

発掘したら先々代の携帯から出てきたこの駄文の原型を出してきた。

『…これが絵なら黒歴史モノだな』

ハハッ、違いない。こっちだとより救いの無い、まどマギ９話くらい暗い話だったんだよな。それにお前もいないし

『ほう？』

ぶっちゃけるとグレアム、猫姉妹、プレシア、ゼスト、クイント、メガーヌ、ティーダ、アルフ、エィミィが紅牙に殺される

『…は？』

こっちの紅牙ははやてが助けた子猫が、ゼオライマーの力で人間になって、はやての友達になるんだ。そのせいか、はやてに危害を加える存在はガチで排除する。ヴォルケンズより数段過激

そして、桧山ってブレーキ役がいないから、アリサとすずか以外の八卦は皆殺し、アリサは車椅子生活になっている

『…おい』

で、ゼオライマーはこっちでのマサトが使うのと同じで使う度に命を削る欠陥品で、戦う度に紅牙は衰弱していく

『…おい、嫌な予感しかしないぞ』

そしてクリスマスまでにグレアム暗殺して、クリスマスにははやてを苛めた猫姉妹も始末。クロノ苛めの邪魔したエィミィをうっかり殺害、それに激昂したアルフも殺して、最期にはやてに全てを打ち明けて、闇の書の闇を潰した後に死ぬ

『間違いなくメインキャラほぼ全員がトラウマ持ちになるだろう…

ってかよくそんな鬱展開ばかり用意できたものだな』

相当何か溜め込んでたんだろうな。今見たら軽く狂気を感じたわ。ＢＵＭＰ　ＯＦ　ＣＨＩＣＫＥＮのＫをモチーフにしたのに何故こうなったのかがわからん

『…神曲をよくここまで汚せたものだな』

全くだ。ちなみに紅牙の頭文字がｋなのはここからきています

『一応、今の方がマシ…か？』

多分ね。個人的に大誤算はお前が丸くなったのと、紅牙がいい子になりすぎたことかな。冥王計画ゼオライマーらしさはあまり無くなってしまったし

『こうなってしまったものは仕方あるまい。路線変更する気も無いんだろう？』

まあね、どうせならはやてが泣くＥＤより、皆で笑えるＥＤを目指したいし…はやて苛めはやめる気無いがｗ

『まぁ、精々失踪しないようにしろ』

完結が目標だからな。では皆さん、改めてよろしくお願いいたします

幕間？（後書き）

どうも、マジでお久しぶりです

状況も少し落ち着いてきたので、またチマチマ更新させていただく予定です。

取り敢えず、もう書き貯めとかせずにやろうと思うので、批判も覚悟で書ききろうと思います。

では次回の後書きでお会いしましょう

幕間　黒髪無口な転校生（前書き）

また遅れましたよ…

幕間　黒髪無口な転校生

「（…帰りたい）」

『（今さら逃げられるか、諦めろ）』

…今、紅牙は教師に連れられて廊下を歩いている。教師は色々話しかけているが、緊張しているのに気付いたのか

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ」

と言っているが

「…ん」

くらいしか言えない。何せ紅牙は…このような学校はおろか、集団生活すら始めてなのだ。最低限の読み書きしかできない紅牙が何故私立の聖祥に通うことになったのかは数日前に遡る

「そういやこー君、月曜から学校行くって聞いたけどホンマなん？」

八神家の食卓ではやてが放った一言、それは紅牙を凍りつかせるには十分だった

「…聞いてない、誰が言ってたの？」

「桧山のおっちゃん」

「…っ！？でも、あれは適当に…」

「その適当で、合格点を取れたんですよ。紅牙君」

シャマルに出迎えられてリビングに入ってきたのは、大きめの箱を小脇に抱えた桧山だった。他の守護騎士はシグナムは蒐集の為留守にしており、他ははやての護衛に残っていた

ちなみに、はやての呼び方のおっちゃんには彼は年齢相応ですね、とニコニコ笑い、、それに対してはやては「…あれで３０半ばとか詐欺やろ」というやり取りを経た結果であったりする

「…桧山さん、その荷物何？」

と、紅牙が荷物を確認しようとする前に

「あ、これ紅牙の制服か。見せてくれよ」

ヴィータの手により箱が開けられる。そこには…聖祥の小等部の制服があった

「嘘やん、何でこー君が聖祥に受かるん？」

「…ん、はやての言葉は引っ掛かるけど、適当に埋めただけなのに合格する訳…」

『ああ、なるほどな』

「マサキ、どういうことだ？」

『聖人』

「…なるほど、納得した」

はやて、紅牙の抗議を他所にマサキとザフィーラは二人で納得している

「…ザフィーラ、どういうこと？」

「そこでマサキさん無視する辺り、ええ性格になってきたよな。こー君」

「…そう？」

「絶対にマサキさんの悪影響やから、マサキさんからすれば自業自得なんやけどな」

『……』

マサキが完全に沈黙したのにため息をつきながら、ザフィーラは説明をする

「まず、今回の件は紅牙のレアスキルである聖人の暴発だと考えられます」

「その聖人っての、何回か聞いたけど何の効果があるん？」

その言葉に、ザフィーラは一瞬桧山を見てから説明に戻る

「聖人とは…過去に偉大な事を行い、信仰の対象になった存在と同じ身体的特徴を持つものの総称です。そして、聖人となるものは生まれた瞬間に世界そのものから、ただの人間から聖人へと修正を受けます

そして聖人は、それによって人間を遥かに凌駕した身体能力と運の良さを手に入れます」

「運？紅牙君が運がいいとでも言うんですか？」

桧山の笑みが深まる

「すまない、語弊があった。正確には極端な運、だな」

「…極端？」

「ああ、例えばお前の境遇。これは不幸としか言えない」

その言葉に一気に空気は重くなるが、ザフィーラは敢えてそのまま言葉を続ける

「逆にマークシートのような、最悪運に走れるものでは適当に書い

ても片っ端から正解したりな」

「……っ！？」

「でもそれって算数は…ああ、こー君計算は得意やもんな。納得したわ」

「……理不尽」

「まぁ、どんな理由であれ合格してくれたのは幸いです。さぁ、制服を着てみましょうか」

「そやね、さぁこー君。ひんむかれる覚悟は十分か？」

「着きましたよ、では少し待っていてくださいね」

そう言い残し、これから担任になる教師は先に教室に入っていった。窓は廊下側は磨りガラスになっているようで、扉の窓から教室の壁が少し見えるが、中がどうなっているのかが分からない。少なくとも転校生の単語で中が急に騒がしくなったのは分かったが

「では、入ってきてください」

その言葉を受け、紅牙のビクッと震える

『（こうなったら諦めるしかあるまい、さっさと入らんと余計にキツくなるぞ）』

「……うー」

マサキの言葉に観念したのか、紅牙は扉を開け、教室に入り、教壇を目指す。そこで紅牙は幾つかの見知った顔を見ることになる

驚愕し、怒りと恐怖が混ざって混乱するなのは

こちらを見て微笑むフェイト

ニヤリと口の端をつり上げたアリサ

その三人を一度見てから苦笑いをするすずか

そして、男と知りあからさまに落胆する男子（フェイトの一件から期待していた）と、外見は人形のような綺麗な顔の紅牙を見て沸き立つ女子（フェイトはそこまで女子受けしなかった為）

それらを見ながら、紅牙は第一声を放つ

「…四季　紅牙。学校に通うのは初めてだから、迷惑かけるかもしれないけど…よろしく」

「彼は家庭の事情で今まで学校に通っていなかったので、色々教えてあげて欲しい。四季君の席は…窓際の、バニングスさんの隣だ」

「…はい」

教師の指示に従い、やや早足で目的の席につく。そこで溜め息をついたと同時にＨＲが始まる

「まさかアンタが同じ学校で、同じクラスになるなんてね」

「…こっちもまさか同じクラスだとは思わなかった」

「ま、覚悟しときなさい。少しは援護してあげるけど、今日は多分休憩時間無くなるわよ」

「……ん？どういうこと？」

その問いに、アリサはニヤリと笑うのみだった

幕間　黒髪無口な転校生（後書き）

すいません、遊戯王ＴＦ６への準備やってましたｏｒｚ

『…引き継ぎか』

９枚持ってるカードを一枚のみ引き継ぎとか、三枚必須のカードには集まるまでは死んでてねって言ってるようなものだよな。シューティングスターとか、シナリオで手に入る奴や、Ｓｉｎや紙…いや神みたいに本編で手に入らないのは地蔵マラソンになるし

『機皇帝も本体だけはそっちの分類だったな』

お陰で本体が除外食らえばデュエルが終了するから、本体とコアが最低二枚揃うまではサイバー流に混ぜるか最前線に組み込むか、だな

墓地落としに未来オーバーのギミックも使えるし、一旦落とせば相手ターン終了前にリミリバ、自ターンに守備表示にして自壊ｏｒハリケーンで機皇帝召喚。一族の結束でグランエル以外は４０００上がるし…今からでもＯＣＧもこっちの仕様にするべき

「作者、脱線しまくってるぞ」

ですな、次は紅牙が転校生の洗礼を受けます。では皆さん次回の後書きでお会いしましょう

幕間　冥王ｖｓ魔王（前書き）

最後に投稿してから約３ヶ月…色々ありました…ええ、本当に…

幕間　冥王ｖｓ魔王

「ねぇ、確か君って近くに住んでたよね？何度か見たことあるし」

「彼女とかいたりするの？」

「身長高いね、いくつなの？」

「バニングスさんと話してたけど、知り合いなの？」

「……」

紅牙は今、クラスの生徒（主に女子）に質問攻めにあっていた。

何度か見たことのある姿と、その人形めいた容姿と性別の為か下手したらフェイトの時より容赦の無いレベルで

当然、人に囲まれるだけでは無く、同世代の多数の人間に耐性の無い紅牙は見事に石化していた。それを見かねたフェイトが助け船を出すが…

「あの…紅牙君、びっくりして固まってるよ」

「え、フェイトちゃんも知り合いなの！？」

「え？」

気が付くと、フェイトも質問攻めの集団に囲まれていた

「さーて、いい機会だしフェイトちゃんからもたっぷりと情報貰いましょうか？」

「あーあ、だから動かなかったのに…」

フェイトが飲み込まれるのを見て、アリサは溜め息をついた

「（流石に何度も転校生関連仕切って、無駄に敵を作りたく無かったのに…）」

フェイトはまだ女だからどうにかなった。男子にはウザがられただろうが、フェイトを守る為には必要だった事だし、フェイトは下手をすれば男子のアイドルになってしまい同性に嫌われかねない。その為に保護したが…

「（アイツまで、となると…ねぇ）」

紅牙は容姿も相まってまず人気が出るだろう。対人関係は翠屋ＦＣの連中辺りとつるむようになれば、特に問題は無いだろう。難点は同じクラスにはいないという事だが、学校というのは噂が流れるのは早い。今は携帯があるから尚更だ。そうなれば、昼休みまでに

は誰かが助けに来てくれただろうに…

「フェイトちゃん、先走っちゃったみたいね」

アリサが思考を巡らせている間に、すすがが隣で苦笑いしていた。
その横でなのはは呆然としている

「全く…面倒な事になったわね…」

多少のリスクは背負うけど…と、声を張り上げようとした瞬間

『屑共が、いい加減に黙れ。死にたいか?』

どこからともなく妙にドスと殺気の効いた声が聞こえ、思わず全員が黙る。そして紅牙がその間に口を開く…声が疲れている感じではあったが

「…フェイトやアリサとは……転校してくるちょっと前に知り合った。それだけ」

一瞬、フェイトが悲しそうな顔をするが、フェイトもすぐに気付いて納得した。

魔法もそうだが、実際は親ですら無かったが、紅牙の父親（仮）に強姦され、それから助けてもらった等とは口が裂けても言えないのである。ちょっと間が空いたのは紅牙自身が咄嗟に考えたのだろうと推測する

「じゃあ、何度か見た気がするのは？」

「…それは…」

口数こそ少ないが、質問に答えていく紅牙。クラスの皆も少し落ち着いたのか、順番に質問するので紅牙も特に困る事無く答えていく。そんな中、解放されたフェイトはアリサ達と合流したが、既にぐったりとしていた…

「（……マサキ）」

『（何だ？）』

「（…最近、どんどん残念になっていってるね）」

『（なっ…！？）』

マサキに毒を吐いてから、紅牙は「…用事があるから」とコンビニ袋片手に昼休みの教室を後にし、屋上で盛大に溜め息をついた

「…こんなに疲れるんだ、学校って…」

そして、金網に背中を預けコンビニ袋から菓子パンとペットボトルを取り出す。小学生は普通は弁当なのだが、桧山は致命的な悪癖があったので台所を任せられなかった為、紅牙が作るしか無いのだが、紅牙自身にそんな余裕等ありはしなかった。前日に八神家に行っていればおそらく…いや、確実にはやてが作ってくれたはずだが、先日の制服の一件以来、紅牙ははやてに会わないようにしていたのが裏目に出てしまった

結局、気付いたのは当日の朝…その為、紅牙は桧山に貰った小遣いで生まれて始めてコンビニに立ち寄り、これ等を購入したのだが…

「…むう」

「何しかめっ面してんのよ、紅牙」

「…ん、アリサ？何でここに？」

声の方を向くと、アリサを先頭にすずか、なのは、フェイトの四人が弁当を持って立っていた。そして、彼女らが何時もここで弁当を食べていることを説明されたが…

「…そうなんだ」

「何か気が抜けるわね。まぁいいわ、時間も限られているし、アンタも一緒に食べる？」

「…そうする」

そして、紅牙はアリサ達と共に食事をする事になるのだが、なのはが無表情になっている

「…なのは、何かあったの？」

アリサの問いに、なのはは紅牙を睨み付けながら答える

「…言いたい事がありすぎて、何から言ったらいいのか、わからないよ」

「…なら、黙ってればいいよ。君が僕を恨んでも、お門違い」

紅牙は自分が中々冷たい事を言っているのに内心驚きながらも、敢えてそのままなのはを突き放しにかかる。そして

『身の程知らずに礼儀を教えた、フェイトを母親のもとに連れ去った、アースラの限りなく大破に近い中破…どれが気に入らない？』

さらにマサキが煽りにかかると、なのはの中で何かが切れた

「全部に決まっているでしょ！！」

普段のなのはを知る者なら目をむいて驚くであろう豹変を前にしても、紅牙は怯まない

「…なら聞くけど」

紅牙の表情は変わらない。だが、その目には冷たいものが宿っていた。まるでマサキが表に出ているのかと錯覚するほどに

「…あの馬鹿達皆殺し、プレシアさん見殺し、トドメにアースラも

後腐れ無く沈めておいた方がよかったの？…全部って事はそう思ったって事でいいよね？」

「ちっ、違…」

『いい加減に認めたらどうだ？貴様は単に紅牙に嫉妬しているだけだと』

なのはが答えに詰まっていると、マサキがさらに追い打ちをかける

『あの一件の間家族を取られた気がした、さらにプレシアの件もＰＴ事件に関わった貴様より上手く立ち回った…そして何より貴様の魔導士としての戦闘スタイルは紅牙の完全劣化の下位互換でしか無いからな』

当たっているだけに言い返せない…それが悔しいのか、なのはの目には涙が浮かぶ

『それに八卦相手ならいざ知らず、あのような人形騎士共に遅れを取るようでは…これからの戦い、貴様では何も守れんよ。このクズがっ！！』

「……、っ！！」

マサキの罵倒に耐えきれなくなったなのはが駆け出すと同時に紅

牙の頬から乾いた音がなる。その先には怒りを露にしたすずかが紅牙を睨み付けていた…のだが

「なのはちゃんは、私達を命懸けで守ってくれた…それを馬鹿にしないでっ！……って、あれ？」

感情に任せて全力で紅牙の頬をはたいてしまったにも関わらず、紅牙は微動だにしない。それに紅牙も特に気にした様子も無い…普通の人間ならトリプルアクセルを決めながら地面とキスする程度の威力のはずなのに

「と、取り敢えずなのはちゃんを見てくる！」

咄嗟に力をセーブできたのかな？と自分なりに結論を出しながら、すずかは慌ててなのはを追っていった

「紅牙君…いくら何でも言い過ぎだよ」

「…途中からはマサキが言ってたんだけどね。まぁいいや、ちょっとすっきりした」

「アンタ…」

なのはとは敵対して欲しくないからか、紅牙をたしなめるフェイ

トと呆れているアリサ。そして珍しく嫌悪感を露にする紅牙の姿

「…この際だから、二人には言っておくよ。…僕はあの子とは合わない。何て言うか…性格や根っこの部分でわかりあえない。だからあっちも態々突っかかって来たんだと思う」

「え…あ…その…」

「…そういうわけだから、じゃあ…また教室で」

そして紅牙は屋上を後にする。この後、紅牙が彼女達と屋上で昼食を共にするのは、数ヶ月を要する事になる

幕間　冥王ｖｓ魔王（後書き）

申し訳ありません、大変遅くなりました

…というのも再就職先が決まるまで、なろうの執筆及び閲覧を封印しよう、という馬鹿な事をやりまして…

『だが貴様、１０月下旬には働いていただろうが』

情けない事情ですが、今回の仕事、いきなり夜勤が入って前の仕事より、仕事量が半端ないんで書く時間取れなかったり、仕事の合間に見ていた他作者様の作品見て改めて文才の無さを呪っていたりしつつ、ようやく書き始めた結果がこれだったりします

『しかし、今回後半が酷いな』

なのはルートの完全消滅ですね。後ははやての為のテコ入れも入っています。多少はフェイトと距離を取らなきゃはやてに勝ち目が無いんです

『ＳＴＳ行くまでにはやてフラグが折れるとか喚いてたのはそれか。』

そういう事。現在はアリサはなのは寄りだが、一応紅牙を気にしてる。フェイトはなのはが心配だが紅牙を放り出せず宙ぶらりん。すずかはなのはサイドで紅牙に敵対意識を持っているって感じです。学校編は後は最低一話入れて、１２月までは飛ぶ予定ですね。少し日常パート入れながらアニメ本編の流れに乗る予定です

作者の豆腐メンタルが原因で放置が続いた事、こんな駄文を読んでくださっている方々には本当に申し訳なく思います。仕事のシフトも不安定で安定した更新はできませんが、完結までは書きたいと思いますので、またよろしくお願いいたします

幕間　日常風景（前書き）

何で書き始めたらこう連打できるんだろう？と思いつつ、恐らく今年初の連投です

幕間　日常風景

転校初日になのはとやらかして以降、紅牙はなのはとすずかとは一切口をきいていない。アリサは隣の席だし、何だかんだで会話もそこそこするのだが、他所のクラスの翠屋ＦＣの面子と会話する事が増え、授業時間及びその前後くらいしか話す事は無くなった

代わりにつるむようになったのは翠屋ＦＣの面子だ。運動場のサッカーができる箇所を上級生と奪い合うに当たっての最強戦力の追加に、中学年組は大いにはしゃぎ回った

そして、高学年から運動場の数ヶ所を奪うという、本来ならあり得ない構図だが、紅牙という存在のごり押しでそれを成し遂げたのだ

結果的に紅牙は僅か一週間ほどで、（聖人を封印していても元々の）圧倒的な身体能力とその容姿で同学年の男子グループでの中心人物になってしまった

だが、その浮世離れした性格と残念な成績という欠点の為、周囲から浮きはしたものの叩かれるほどでは無く、女子からの人気も日毎に増していった

「しっかし、紅牙についてりゃ女子から寄ってくるんだもんなぁ」

「…あんまり来られても、めんどくさい」

「だよなぁ。試合なんて見に来る奴なんざまずいなかったのに、お前が転校してきた次の日曜から女子が来るようになるんだもんな…」

紅牙は今、サッカーの試合からの帰りである。この日の試合も結果は勝利、かつて無い快進撃にチームメイト達の親も大いにわいている

「…じゃあ、また明日」

「おう、明日学校でな！」

新たな自宅、桧山の暮らしていたマンションの前で別れ、そしてオートロックのマンションの中に入って時計を見た瞬間、紅牙は全力で階段を駆け上がり、焦げた臭いのする自宅の扉を開けるや否や靴を脱ぎ捨て台所に駆け込む

「……桧山さんっ！」

「…おや、またやってしまいましたか」

本を読んでいた桧山の眼前にあるのは焦げ付いた片手鍋…恐らく、魚の煮物でも作っていたのだろうソレは、最早真っ黒に焦げた何かだった…

「すみませんねぇ、紅牙君」

「…何時も駄目なのに、また挑戦したの？」

「ええ、今日は何となくできるような気がしたので」

にこやかに笑い、鍋の中身ををこっそり始末する桧山を見て、紅牙は溜め息をつく

同居を始めた当初、桧山を完璧超人と思っていた紅牙も「私が夕食を作りますね」と言う言葉に何の疑いもなく頷き、調理を任せたしかし、その結果はぼや騒ぎ一歩手前の事態にまで発展した

「…だから料理する時に本読むの、やめて…」

「いやぁ、たかが二、三分なら大丈夫と思ったんですがねぇ」

桧山の料理事態は下手では無い。包丁も魚を三枚におろす程度には使える。だが彼には料理中に本を読むという悪癖があるのである結果として、水を吸ってブヨブヨになったスパゲッティ、黒い何か、天ぷらによる小火、といった事態を引き起こすので、結局は紅牙が担当する事になったのだが…

「…他の材料は？」

「漬物やつまみ程度ですね…仕方がありません、今から買い物に…」

そして、二人で買い物に行くのももう慣れたものである。しかし、紅牙がユニフォームから着替えた所でインターホンが鳴る

「…これはますますお隣さんに頭が上がらなくなりますね」

「…仕方ない。これは桧山さんが悪いよ」

そう紅牙が溜め息をつくながら扉を開けると、そこにはフェイトがいた

「紅牙君、また焦げ臭い匂いがしたから、一応来てみたんたけど…」

「…うん、お察しの通り」

がっくりと肩を落とす紅牙を見て苦笑いしながらフェイトはもう定番となりつつある言葉を口にした

「うちに、食べに来る？」

現在、紅牙の食事事情は大きく変化している。当初、桧山があんな事になると想定していなかった紅牙は、はやてに食事に来る回数が減る事を告げた。はやてもそれは理解していたのだが…

「そうやよな…家族団欒が一番やもんなー…分かってるで、私も分かってるんやで…」

いざ、紅牙にそれを告げられた時、見事に塞ぎこんでしまった。結果、シグナムやヴィータの視線が痛かったからか、より紅牙はより付かなくなりはやてはさらに塞ぎ込み、目に光が無くなりつつあった

流石にこれはまずいと判断したシャマルとザフィーラは紅牙を説得し、再び八神家に来るように仕向けたのだが…

「…はやて、そろそろ帰らないと」

「明日休みなんやろ?やったら泊まっていったらええやん」

はやては夕食後、ソファーで紅牙の腕にしがみついて離れなくなった。これにはシャマルやザフィーラも苦笑いするしか無かったがはやては本気だったのだ

はやてｓｉｄｅ

今の私には余裕なんか無い。それは石田先生の口から聞くことになるとは思わんかった。それはちょっと前のこと…

「そういや、はやてちゃんのお友達のこー君って紅牙って子のことよね？」

「そうですけど…何で先生が知ってるんですか？」

そう聞くと、石田先生は少し意地悪な笑みを浮かべながら

「聖祥の生徒の子達からね。かなり有名な転校生らしいわよ」

何でも、その圧倒的な運動能力で一躍有名になり、それをシメに来た上級生を軽くあしらってしまったという

「実際は三人がかりでかすり傷一つつけれずにいた所を教師に見つかったらしいわ」

「ははは…」

あれだけ人前で目立ちたくない言っててこれかい！とツッコまざるを得なかったが、問題はその先であった

「それでね、あの子今かなりモテてるみたいよ？同学年以外からも」

今時珍しいわよね～と笑う石田先生だけど、正直石田先生の声はもう耳に入ってなかった

「あかん…こー君取られてまう」

そう感じた時、目の前が真っ暗になったが、シャマルから金曜にこー君が来ると聞いた

「いやや…こー君は絶対に有象無象には渡さへん！」

そしてはやての決意は今の状態に至る

「…はやても恥ずかしい事、平気でする様になったね」

「…誰のせいや思ってんねん」

「…何か言った？」

「言うてへん！」

「…変なの」

幸いにも、紅牙は少し照れているだけでくっつくという行為を嫌ってはいない、のだが…

「（こー君は絶対に渡さへん、こー君を一番好きなんは…）」

そして、紅牙は八神家に行く頻度こそ減ったが、夕食後ははやてが満足するまで抱きつかれるようになった

そして時間はフェイトが誘いに来た時まで戻る

フェイトｓｉｄｅ

夕食が終わり、紅牙君達が帰ってからお風呂に入り、ベッドで横になりながら私は今までの事を振り返っていた

お母さんと私は、今は桧山さんの…そして紅牙君の隣で暮らしています。と、言うのもアースラがズタズタにされて転移魔法すら使えなくなっている間に荷物をまとめてあのマンション…ハラオウン家から出てきたものの、済む場所の無い私達に桧山さんが部屋を提供してくれたのだ。

そして、お母さんは地球の文字の勉強の傍ら、パートタイムで働いている

「これはこれで中々楽しいわね」

と、今の暮らしには不満は無いみたい。流石に桧山さんには負い目を感じているみたいだけど…

「このマンション、私の持ち物ですし、気にしないでください」

何て言われて苦笑いするしか無かった。まぁ、桧山さんが料理できないのが分かって、こうやって誘うことで少しでも恩返しができるのならいい事だと思う

…でも私は、紅牙君に全然恩を返せていない。学校ではなのは達との仲が最悪なせいで、あまり関われなかった間に人気者になっちゃったし、結局私は彼に何も返せていない…魔法の訓練とかも桧山さんやクイントさん達とやってるみたいだし…

だから、次に何かあった時は私は紅牙君の力になろう、そう考えて私は目を閉じた

幕間　日常風景（後書き）

まさか連日投稿なんてできるとは思いませんでした…まぁ、量は何時も通り５０００字未満ですが、妙な達成感がありますね…やっぱり文字数多い方はパソコン使っているのでしょうか？

「それも遅くて明後日までやろうけどなー…」

やかましい、はやて。今回は出番やったのに何やさぐれてんだ

「何でこー君とフェイトちゃんがお隣さんやねん！こんなん余計に不利になってるやないか…」

あー…プレシアって何も地球には後ろ楯が無いんだよな。リンディ達がすんなりマンションに入れたのも、グレアムのような地球出身組という後ろ楯があるからだろうし

「…で、桧山のおっちゃんが一肌脱いだ、と」

そーゆーこと。フェイトに関しては転居で済ませてる。ややこしいのは桧山が関わってるの知って黙った。学校側も進んでヤクザと関わりたくないしね

「そっか。で、実際こー君はどんな感じになってるん？」

桧山の仕事が遅い時は八神家、早かった時ややらかした時はテスタロッサ家、そのどっちでも無い時や、紅牙が帰るの早い時は自炊だね

「ふーん…そういや、シグナムが一年近く出番無いって怒ってたで？」

…マジ？

「マジ」

…これから本編まで出番無いって言ったらズンバラリンかねぇ

「適当に出したったら？」

シグナム出すならＡｓ完結以降に回されたアリサの話を先にやってやるさ。次はちょこっと出たけど、フェイト曰くズタズタになったアースラと１２月までのゼスト隊の話をやる予定

「どうせ明日モンハン出たらまともに書かなくなるやろうから、先

に書いておきや」

…了解。果たしてモンハン発売までに次話は書けるのか？書けたのなら、次回の後書きでお会いしましょう！

幕間　クロノの成長（前書き）

ゼスト隊の話書いてから１２月まで飛ばしたいので、先にアースラ側の話を書かせてもらいます

幕間　クロノの成長

クロノｓｉｄｅ

「完膚無き敗北…か」

ようやく各機能が復帰しつつあるアースラの医務室にて、クロノは一人呟いた。それは、紅牙が自分に放ったソニックトルネードで意識を失った後に起きた事を映像記録で見た事によるものだった

「母さんが、あんなに追い詰められていたなんて…」

八卦という致命的なイレギュラー。それは闇の書を遥かに上回りかねない驚異であり、それによる闇の書の完全破壊の任務の主導権を失う事。母はそれを恐れていた。しかし…

「そこまでする意味は…あるんだろうか？」

そして、今彼の手元にあるのは…レジアス准将から詫び代わりに渡された、八卦及びそれに関する資料だった。八卦と言う名も、この資料を見て知ったのだ…彼の事を

殺したいくらいに、妬み、憎んだ少年の経歴を

それを見て、クロノは自分がどうしたいのかが分からなくなりつつあった

「アイツの強さは…この生き地獄みたいな経歴の代償なのか…？」

そう考えると、アイツの行動にも納得がいく。初対面でバインドを仕掛けた僕に敵意を向けたのも、バインド自体が奴の心の傷を抉ったのだろう。…それにタイミングが悪かったのは、まぁ、その…散々言われたし、反省もした

そして、前回の結果は保護観察対象のフェイトを何か性格が丸くなってたプレシア・テスタロッサに奪われ、ゼスト隊にアースラを後一発で沈むんじゃね？ってくらいに破壊されるという、散々なものだった

そして母さんが査問で呼び出されたが、結果はお咎め無し

…僕達もゼスト隊も命令の大本がどちらも三提督から直の命令で、現場での利害関係でカチ合ってしまったのだから当然だが、アースラの修理費が辛うじて費用として認められたが、八卦に関わる事はゼスト隊に任せ要請があれば応援に向かうという結果になってしま

った

つまり、僕達はゼスト隊の下につけられてしまったのだが…

「我等はあの【冥王】が育つまで待つ。邪魔さえしなければ、勝手に行動していればいい」

…という、一方的な連絡を渡されて以降、一切の連絡は無い。それに対し母さんの持っていた湯呑みにヒビが入っていて怖かった、というのは今朝見舞いに来たエィミィの談だ。そして…

「何か、ちょっと前より話やすくなったね。クロノ」

と笑って医務室から出ていった。それ以外にも

「ようやくまともに話せるようになったな」

と小生意気な事を言うフェレットもどきもいたが…

「…そんなに僕には余裕が無かったのかな?…いや、確かに無かったな」

ふと、紅牙にもう一度負けるまでの自分を振り返り苦笑してしまう。

妬みを憎悪で塗り固めてぶつけようとしていた、あの自分では…

「勝てる勝負にも、勝てなかっただろうな」

それにアイツはプレシア・テスタロッサを救い、フェイトを…あの母娘を、過去の呪縛からも完全に救い出した。それに対して、自分は妹になるかもしれなかったあの子との距離の取り方が分からず、事務的にしか接する事ができなかった

「なのはやフェイトと同い年の子に…それも同性に、完全敗北…しちゃったんだな」

戦闘も、魔導士としても、一人の男としても…それを自覚すると目頭が熱くなってきた

「くそっ…畜生…畜生…っ！」

今、アースラの修理に人員をフル回転させていて助かった。今、医務室にいるのは僕一人。こんな悔し泣きしている所なんて…誰にも見られたくなかったから

ユーノｓｉｄｅ

「くそっ…畜生…畜生…っ！」

医務室前でクロノの悔し泣く声を聞いてしまい、無言でそこから離れた後、リンディ提督には眠っているので放っておいたと嘘報告してから、無限書庫に向かう支度をする

「僕も負けていられないな」

「何になの、ユーノ君？」

「うわっ、なのは…来てたのか」

慌てて背後を振り返ると、そこにはなのはがいた。彼女もこちらに来にくくなっており、完全に油断していた…だけど、まぁこれくらいならいいか

「僕にしかできない事をしに行くのさ」

なのはは首を傾げていたけど…まぁいいや。これは、男の意地の問題なんだから

クロノｓｉｄｅ

「クロノ、アンタ休んでないで大丈夫なの！？」

まだ痛む体を引き摺って、未だに半壊して設備も不十分な艦橋に向かうと、エィミィが慌てて駆け寄ってくる

「心配してくれたのか？大丈夫、歩き回る分には問題ない」

そう返すと、エィミィは目を見開いて固まった

「クロノ…アンタ、頭でも打ったのかい？」

「頭だけじゃなくて全身ズタボロの重傷だったな。そんな事はいい、提督…話がある」

フェイトの使い魔であるはずのアルフは何故かここにいる。自分まで付いていったら、フェイトの保護観察の言い訳がつかなくなる、とかプレシアをまだ警戒しているとかあるんだろうが、今は一人でも人員が欲しい為、敢えてみんなそこには触れていない

「クロノ…どうしたの？」

「グレアム提督…いや、リーゼ達を呼んで欲しい。暫くの間、手持ちの休暇を吐き出して自分を鍛え直す」

「ちょっとクロノ、今そんな事してる余裕は…」

「今だからこそだ。闇の書の連中も、管理局が大々的に動けばやりにくいし、何より八卦がいる。コイツ等がいる以上、表だって動く事は自殺行為だって事くらいは自覚してる」

そこまで言って周囲を見るが、ブリッジクルーで僕の気付いているのは…いないか

「四季紅牙だよ。アイツを蒐集できれば、恐らく闇の書のページは数割単位で埋まるはず。前回プレシア・テスタロッサを治療した際に魔力切れを起こした時は、唯一にして最大のチャンスだったはずだ

あの時の面子は確かにゼスト隊もいたが、重傷の四季紅牙に、負傷したゼスト少佐に桧山がいた。クイントやメガーヌの実力が不明であったとはいえ…三人で撹乱、その間になのはが蒐集された時のようにやれば、アイツやゼスト少佐のリンカーコアを狙うのは不可能では無かった。分の悪い賭けになるけどな」

そしてまた周りを見る。何人かは意図が掴めたようだ

「そして、この賭けに乗らなかった。四季紅牙以外にもゼスト少佐や桧山…最悪フェイトからでも奪えれば、御の字だ。なのに出てこなかったってことは、奴等は慎重に動くって選択肢も持ち合わせてる訳だ。なら、暫くは派手に動かないだろう…現時点の情報に、致命的なな誤りが無い限りは」

何故か周囲が無言になったが、まぁいい

「だから、アースラもこの有り様じゃ暫くは本部としての機能も無い。ならばアースラの修理の間に少しでも地力を上げておきたいんだ…八卦相手は無理でも、あの騎士達を1対1で抑えられる程度にはね」

…何故か周囲が無言だ。一部の人間は何故か怯えている

「クロノが壊れたーっ！！」

「いかん、どこか穴が空いてるのかもしれん。至急各ブロックのチェックを！！」

「レーダーには敵影無し？隠れているだけかもしれん。サーチャーを出せるだけ出せっ、今艦に取り付かれたら終わりだっ！！」

何故か艦内が阿鼻叫喚になった。これが、今まで積み重ねた日頃の行いだったのだろうか…そう考えるとまた泣きたくなってきた

幕間　クロノの成長（後書き）

モンハンには勝てませんでした、屑鉄です。そもそも仕事忙しくてモンハンもまだ村のチャナ辺りですが

「狩猟笛縛りなんぞしてるから、進まないだけじゃないか？」

やかましいクロノ。今回成長したからって生意気な

「感想の返信遅れるような作者には言われたくない」

ぐっ…それには返す言葉も無い…ホント申し訳無いです

「にしても…今回は僕が主役だったのか」

うん、しかも成長しつつある姿も見せたな

「他のＳＳでも散々な扱い受けてて、ここでもかと思ったら…」

実は後半から持ち直す系だった。まぁ持ち直せるかはお前の努力次第だが

「やるさ、やってやるさ！！…リーゼ達のしごかれるのキツいけど」

まぁ軽く解説するとアースラ組ってアースラ修理に人員が手一杯で、闇の書捜索の人員も戦力も最低限しか出せない。さらにフェイトも半ば離脱状態。ユーノは無限書庫に向かったので、実働戦力はなのはとクロノのみで守護騎士全員と戦う…前衛できるフェイトもいないから、マジでシグナム辺りが止まらず無理ゲー

「ならいっそ、最低限の捜索って牽制だけしつつ相手を泳がせながら戦力の強化をしてしまえばいい。なのはもカートリッジシステム搭載したばかりだし、フェイトもほとぼりが冷めてから説得に向かう。そしてフェレットもどきが戻ってきたら…」

カートリッジ使いこなせるようになったなのはと、説得に成功すれば心身共に充実したフェイト、デュランダル入手（予定）かつ本編より強化されたクロノ、それにアルフとユーノの布陣か。普通に守護騎士達に勝てそうだな

「そういう事だ」

紅牙とマサキの仕掛けたミスリードに気付いてこそいないが、それを除けばほぼ満点に近い回答なんだよな。なのは蒐集の段階で闇の書のページが埋まりかけている訳じゃ無いのは確認できてるはずだろうし…

「僕の次の出番は１２月入ってしばらくか…それまでに強くならなきゃな」

そうだな。頑張れ…次回はゼスト隊…というかクイントとメガーヌが１２月まで何してるのかを書く予定です。では皆さん、次回の後書きでお会いしましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9988i/

魔法少女リリカルなのは 新たなる冥王

2011年12月17日05時51分発行